

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(98)

— 農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ —

農業開発総合センター遺跡群Ⅲ

O G A H A R A

尾ヶ原遺跡

2006年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(98)

農業開発総合センター遺跡群Ⅲ  
尾ヶ原遺跡

二〇〇六年三月 鹿児島県立埋蔵文化財センター



尾ヶ原遺跡北から



尾ヶ原遺跡西から



尾ヶ原遺跡（古墳時代住居跡群）



小児用合口壺棺検出状況



合口壺棺（下壺920）



合口壺棺（上壺919）

## 序 文

この報告書は、鹿児島県農業開発総合センター建設に伴って、平成8年度から平成15年度にかけて実施した南さつま市金峰町に所在する尾ヶ原遺跡の調査の記録です。

尾ヶ原遺跡の調査では、縄文時代早期・中期・晩期、弥生時代、古墳時代、平安時代の各時代の遺構・遺物が発見されました。

特に、縄文時代早期では、集石遺構8基、縄文時代晩期では、土掘り具と思われる打製石斧や石錘がまとまって出土する集積遺構、弥生時代中期では、須玖式土器と黒髪式土器を合わせた小児用壺棺、古墳時代では、8軒の竪穴住居跡が発見されるなど貴重な資料を得ることができました。

本報告書は、農業開発総合センター建設予定地内の遺跡の一端ではありますが、県民の皆様はじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たりご協力いただいた県農政部農業開発総合センター整備事務局、南さつま市金峰町、日置市吹上町の関係部局並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 上 今 常 雄

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	のうぎょうかいはつそうごうせんたーいせきぐん（おがはらいせき）							
書名	農業開発総合センター遺跡群（尾ヶ原遺跡）							
副書名	農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	8							
編集者名	中村耕治・日高正人							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4461 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番号 0995-48-5811							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査 期間	調査 面積 ㎡	調査 原因
あがはらいせき 尾ヶ原遺跡	かごしまけん 鹿児島県 ひがしし 日置市 きんぼうちちやう 金峰町	46-220	98	31 28 56	130 20 51	2001.06 ～ 2001.10	24500㎡	農業開発 総合セン ター建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記		
尾ヶ原遺跡		縄文時代 （早期） （前期） （中期） （晩期） 弥生時代  古墳時代 平安時代	集石遺構  集積遺構・埋設土器 小児用合口壺棺	前平式土器・石坂式土器 深浦式土器 春日式土器 黒川式土器 須玖式土器・黒髪式土器 山之口式土器 成川式土器・須恵器 土師器				
要約	<p>尾ヶ原遺跡では、縄文時代の各時期、弥生時代、古墳時代、古代の長期にわたる遺構や遺物が発見されている。その中でも遺構や遺物の多かったのが、縄文時代早期・晩期、弥生時代、古墳時代である。</p> <p>縄文時代早期では集石遺構8基が検出され、早期中葉の石坂式土器が数多く出土し、中心となっている。また、格子目押型文土器と呼ばれる独特の土器も出土している。縄文時代晩期では、埋設土器2基と打製石斧や石錘の集中区が3箇所検出されていると共に、扁平打製石斧が多いという特徴がある。</p> <p>弥生時代では、遺物の出土量は少ないが、遺跡の中の高い位置において黒髪式土器と須玖式土器の小児用合口壺棺が検出され、北部九州や中九州との密接な交流があったことがうかがい知ることができる。</p> <p>古墳時代では、竪穴住居跡が8軒検出された。その中には須恵器と成川式土器が共存している住居があり、南九州に広く分布する成川式土器の年代観を考察する手掛りとなるものである。</p>							



農業開発センター遺跡群位置図 (1/50,000)

## 例 言

- 1 本報告書は、鹿児島県農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、平成10年度・12年度に確認調査、13年度に鹿児島県農政部農業開発総合センター整備事務局の依頼を受けて、鹿児島県教育委員会鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査主体となって本調査を実施した。
- 3 報告書作成事業は、平成16年度・17年度に実施した。
- 4 挿図番号・表番号・遺物番号については、通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。
- 5 遺物の縮尺は、基本的に土器は3分の1、大型石器は3分の1、小型石器は原寸とするが、縄文時代晩期と古墳時代の大型完形土器については4分の1とした。  
また、各挿図毎に縮尺を示している。
- 6 報告書中のレベル数値はすべて海拔高である。
- 7 遺跡における遺構等の実測は発掘担当者が行なったが、一部は実測委託も行なった。
- 8 遺物復元・実測・製図等の整理作業は整理担当者及び鹿児島県立埋蔵文化財センター整理作業員が携わった。また、一部の石器の実測・製図については実測委託をした。
- 9 本報告書の編集は、中村耕治・日高正人が行い、藤崎光洋・湯之前尚・山崎克之・川元禎久の協力を得た。執筆分担は以下のとおりである。また、写真撮影については西園勝彦の協力を得た。

第 章	発掘調査の経緯	中村耕治
第 章	遺跡の位置と環境	中村耕治
第 章	層位	中村耕治
第 章	発掘調査の概要	中村耕治
第 章	発掘調査の成果	中村耕治・日高正人
第 1 節	縄文時代の調査	日高正人
第 2 節	弥生時代の調査	中村耕治
第 3 節	古墳時代の調査	中村耕治
第 4 節	古代・中世の調査	中村耕治・日高正人
第 章	まとめにかえて	中村耕治・日高正人

- 10 遺物は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示活用する計画である。

## 凡 例

 : 土器に付着したススの範囲

 : 丹塗りの範囲

# 目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
報告書抄録	
第 1 章 調査の経過	1
第 1 節 調査に至るまでの経過	1
第 2 節 調査の組織	1
第 3 節 調査の経過	1
第 2 章 遺跡の位置と環境	2
第 1 節 遺跡の位置	2
第 2 節 周辺遺跡	2
第 3 章 層位	5
第 4 章 発掘調査の概要	8
第 1 節 発掘調査の方法及び概要	8
第 5 章 発掘調査の成果	8
第 1 節 縄文時代の調査	8
1 縄文時代早期の調査	8
(1) 遺構	8
(2) 遺物(土器)	10
(3) 遺物(石器)	30
2 縄文時代前期の調査	34
(1) 遺物(土器)	35
3 縄文時代中期・後期の調査	38
(1) 遺物(土器)	38
4 縄文時代晩期の調査	39
(1) 遺構	39
(2) 遺物(土器)	41
(3) 遺物(石器)	57
第 2 節 弥生時代の調査	92
1 遺構	92
2 遺物	94
第 3 節 古墳時代の調査	98
1 遺構	98
2 古墳時代の土器	124
第 4 節 古代・中世の調査	130
1 遺構	130
2 遺物	130
第 6 章 まとめにかえて	138
写真図版	
あとがき	



## 挿 図 目 次

第1図	農業開発総合センター内遺跡群位置	3	第40図	XVI 類土器(深鉢形土器) 2	45
第2図	遺跡位置図(1/25,000)	3	第41図	XVI 類土器(深鉢形土器) 胴部	46
第3図	周辺遺跡位置	4	第42図	XVI 類土器(中鉢形土器)	47
第4図	模式柱状図	5	第43図	XVI 類土器(深鉢形土器) 底部	48
第5図	土層図	6	第44図	XVI 類土器(浅鉢形土器) 1	51
第6図	地形図及びグリッド配置図	7	第45図	XVI 類土器(浅鉢形土器) 2	52
第7図	集石遺構1号~6号	9	第46図	XVI 類土器(浅鉢形土器) 1	53
第8図	集石遺構7号・8号	10	第47図	XVI 類土器(浅鉢形土器) 1	54
第9図	縄文時代早期遺物出土状況	10	第48図	XVI 類土器(浅鉢形土器) 1	55
第10図	類土器	12	第49図	XVI 類土器(浅鉢形土器) 2	56
第11図	類土器	13	第50図	縄文時代晩期石器1(石鏃)	58
第12図	類土器	14	第51図	縄文時代晩期石器2(石鏃)	59
第13図	類土器 1	15	第52図	縄文時代晩期石器3(石鏃)	60
第14図	類土器 2	16	第53図	縄文時代晩期石器4 (石ヒ・スクレイパー)	62
第15図	類土器 3	17	第54図	縄文時代晩期石器5 (スクレイパー)	63
第16図	類土器 4	18	第55図	縄文時代晩期石器出土状況 1	64
第17図	類土器 5	19	第56図	縄文時代晩期石器出土状況 2	65
第18図	類土器 6	20	第57図	縄文時代晩期石器出土状況 3	66
第19図	類土器 7	21	第58図	縄文時代晩期石器出土状況 4	67
第20図	類土器 8	22	第59図	縄文時代晩期石器出土状況 5	68
第21図	類土器・類土器	24	第60図	縄文時代晩期石器6(石鏢)	69
第22図	類土器	25	第61図	縄文時代晩期石器7(石斧)	70
第23図	類土器 1	27	第62図	縄文時代晩期石器8(石斧)	71
第24図	類土器 2	28	第63図	縄文時代晩期石器9(石斧)	72
第25図	類土器・類土器	29	第64図	縄文時代晩期石器10(石斧)	73
第26図	縄文時代早期石器 1	30	第65図	縄文時代晩期石器11(石斧)	74
第27図	縄文時代早期石器 2	32	第66図	縄文時代晩期石器12(石斧)	75
第28図	縄文時代早期石器 3	33	第67図	縄文時代晩期石器13(礫器)	77
第29図	縄文時代早期石器 4	34	第68図	縄文時代晩期石製鏃飾・土製勾玉	78
第30図	XI 類土器	35	第69図	縄文時代晩期石器14(磨石)	79
第31図	XII 類土器	37	第70図	縄文時代晩期石器15(磨石)	80
第32図	XIII 類土器・XIV 類土器	38	第71図	縄文時代晩期石器16(磨石)	81
第33図	XV 類土器	39	第72図	縄文時代晩期石器17(磨石)	82
第34図	縄文時代晩期集石遺構	39	第73図	縄文時代晩期石器18(磨石)	83
第35図	XVI 類土器埋設土器	40	第74図	縄文時代晩期石器19(磨石)	84
第36図	縄文時代晩期遺物出土状況	40	第75図	縄文時代晩期石器20(磨石)	85
第37図	XVI 類土器(深鉢形土器)	42	第76図	縄文時代晩期石器21(磨石)	86
第38図	XVI 類土器(深鉢形土器)	43	第77図	縄文時代晩期石器22(磨石)	87
第39図	XVI 類土器(深鉢形土器) 1	44	第78図	縄文時代晩期石器23(石皿) 1	88

第79図	縄文時代晚期石器24(石皿)2	89	第120図	古墳時代土器3	128
第80図	縄文時代晚期石器25(軽石製品)	90	第121図	古墳時代土器4・須惠器	129
第81図	弥生時代遺物出土状況	92	第122図	古代土師器1	131
第82図	弥生時代合口壺棺	93	第123図	古代土師器2	132
第83図	弥生時代土器1	95	第124図	古代須惠器1	133
第84図	弥生時代土器2	96	第125図	古代須惠器2	134
第85図	弥生時代土器3	97	第126図	古代須惠器3	135
第86図	弥生時代石器	98	第127図	中世陶磁器	136
第87図	古墳時代住居跡配置図	99			
第88図	1号竪穴住居跡	100			
第89図	1号竪穴住居跡内遺物1	101			
第90図	1号竪穴住居跡内遺物2	102			
第91図	1号竪穴住居跡内遺物3	102			
第92図	2号竪穴住居跡	103			
第93図	2号竪穴住居跡内遺物1	104			
第94図	2号竪穴住居跡内遺物2	105			
第95図	2号竪穴住居跡内遺物3	106			
第96図	3号竪穴住居跡	106			
第97図	3号竪穴住居跡	107			
第98図	3号竪穴住居跡内遺物1	108			
第99図	3号竪穴住居跡内遺物2	109			
第100図	3号竪穴住居跡内遺物3	110			
第101図	3号竪穴住居跡内遺物4	111			
第102図	3号竪穴住居跡内遺物5	111			
第103図	4号竪穴住居跡	112			
第104図	4号竪穴住居跡	113			
第105図	4号竪穴住居跡内遺物1	114			
第106図	4号竪穴住居跡内遺物2	114			
第107図	4号竪穴住居跡内遺物3	116			
第108図	4号竪穴住居跡内遺物4	117			
第109図	4号竪穴住居跡内遺物5	118			
第110図	4号竪穴住居跡内遺物6	119			
第111図	5号竪穴住居跡	120			
第112図	5号竪穴住居跡内遺物1	121			
第113図	6号竪穴住居跡	122			
第114図	6号竪穴住居跡内遺物1	122			
第115図	7号竪穴住居跡	123			
第116図	8号竪穴住居跡	124			
第117図	8号竪穴住居跡内遺物	125			
第118図	古墳時代土器1	126			
第119図	古墳時代土器2	127			

## 図 版 目 次

			4号住居跡土器出土状況	148	
			4号住居跡完掘状況	148	
図版 1 -	遺跡近景（東から）	143	5号住居跡土器出土状況	148	
	遺跡近景（南から）	143	5号住居跡完掘状況	148	
	1号集石遺構	143	図版 7 -	6号住居跡検出状況	149
	2号集石遺構	143		6号住居跡遺物出土状況	149
	3号集石遺構	143		6号住居跡完掘状況	149
図版 2 -	4号集石遺構	144		7号住居跡検出状況	149
	5号集石遺構	144		7号住居跡土器出土状況	149
	6号集石遺構	144		7号住居跡完掘状況	149
	7号集石遺構	144		8号住居跡土器出土状況	149
	縄文晩期集石遺構	144		8号住居跡完掘状況	149
	1号埋設土器	144	図版 8	類・類・類土器	150
	2号埋設土器（半莖）	144	図版 9	類土器	151
図版 3 -	縄文晩期土器出土状況	145	図版 10	類土器	152
	縄文晩期土器出土状況	145	図版 11	類土器	153
	縄文晩期勾玉出土状況	145	図版 12	類土器	154
	縄文晩期石斧出土状況	145	図版 13	類・類・類・類・類土器	155
	縄文晩期石斧出土状況	145			155
	縄文晩期石錘出土状況	145	図版 14	XI類土器表	156
図版 4 -	縄文晩期遺物出土状況	146	図版 15	XI類土器裏	157
	弥生土器出土状況（939）	146	図版 16	XII類土器表	158
	小児用壺棺検出状況	146	図版 17	XII類土器裏	159
	小児用壺棺検出状況（上壺）	146	図版 18	XIII類・XIV類・XV類土器	160
	小児用壺棺検出状況（下壺）	146	図版 19	XVI類土器	161
	弥生土器出土状況（946, 961）	146	図版 20	XVII類土器	162
		146	図版 21	XVIII類土器	163
	古墳蓋形土器出土状況	146	図版 22	縄文晩期石器	164
図版 5 -	1号住居跡検出状況	147	図版 23	縄文晩期石器	165
	1号住居跡遺物出土状況	147	図版 24	縄文晩期石器	166
	1号住居跡土器出土状況	147	図版 25	縄文晩期石器	167
	1号住居跡完掘状況	147	図版 26	縄文晩期石器	168
	2号住居跡検出状況	147	図版 27	縄文晩期石器	169
	2号住居跡遺物出土状況	147	図版 28	弥生土器	170
	2号住居跡完掘状況	147	図版 29	弥生土器・石器	171
	3号・4号住居跡検出状況	147	図版 30	古墳住居内出土土器	172
図版 6 -	3号・4号住居跡遺物出土状況	148	図版 31	古墳住居内出土土器	173
		148	図版 32	古墳住居内出土土器	174
	3号・4号住居跡完掘状況	148	図版 33	古代土師器	175
	3号住居跡土器出土状況	148	図版 34	古代須恵器	176
	3号住居跡完掘状況	148			

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経過

農林省農産開発総合センター整備事務局（以下農開総センター整備事務局）は、「鹿児島県総合基本計画」（平成6年）に基づく戦略プロジェクト「食の創造拠点鹿児島島の形成」の一環として、鹿児島県農産開発総合センター建設事業を日置市（吹上町大字入来・中之里・湯之浦・和田）及び南さつま市（金峰町大字大野・代表地番金峰町大野諏訪前2935-1番地）内において計画した。このため農開総センター整備事務局は、本事業に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について県教育庁文化課（平成8年から文化財課以下文化財課）に照会を行なった。これを受けた文化財課は平成6年11月に分布調査を実施した。その結果、事業区域内の対象面積1,347,900㎡に10遺跡が存在することが判明した。

分布調査の結果を受けて、農林省・文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）の三者で協議した結果、対象地内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとし、調査は埋文センターが担当した。

確認調査は、平成8年度・9年度に実施した。確認調査の結果、24遺跡（約10,000㎡）が存在することが明らかになり、建築物予定地及び圃場整備により削除される部分等について記録保存のための本調査を平成15年度まで実施した。

報告書作成のための整理作業は、平成15年度からはじめて、平成16年度に日置市（旧吹上町）に所在する7遺跡の報告書を刊行した。

### 第2節 調査の組織

平成17年度

事業主体 鹿児島県農産開発総合センター整備事務局

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査総括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所長 上今 常雄

調査企画 “ 次長兼総務課長 有川 昭人  
“ 次長兼調査第一課長 新東 晃一  
“ 主任文化財主事兼調査第一課  
“ 第一調査係長 池畑 耕一  
“ 主任文化財主事 中村 耕治  
事務担当 “ 主幹兼総務係長 平野 浩二  
“ 主事 田之畑美幸  
整理担当 “ 主任文化財主事 中村 耕治  
“ 文化財主事 藤崎 光洋  
“ 文化財主事 湯之前 尚  
“ 文化財主事 日高 正人  
“ 文化財主事 山崎 克之  
“ 文化財研究員 川元 禎久  
整理指導 鹿児島大学 助教授 橋本 達也  
鹿児島大学 助教授 中村 直子  
鹿児島国際大学 教授 中園 聡

### 第3節 調査の経過

尾ヶ原遺跡は平成6年度の分布調査により確認されたもので、平成10年度・12年度に確認調査を実施し、縄文時代早期から古代までの遺物が出土することが判明した。

本調査は、農業大学校の飼料畑予定地の内、削平される範囲について平成13年6月～10月に実施した。

尾ヶ原遺跡では、縄文時代早期の集石遺構、晩期の埋設土器、弥生時代中期の小児用合口壺棺、古墳時代の竪穴住居跡8軒など豊富な資料が得られた。

平成13年度尾ヶ原遺跡調査経過

6月 調査区の抜根・表土剥ぎ。環境整備。  
7月 層掘下げ。古墳時代竪穴住居跡検出。縄文時代晩期遺物出土。  
8月 層・層掘下げ。古墳時代竪穴住居跡検出・掘下げ。縄文時代晩期埋設土器検出。  
9月 層・層・層掘下げ。古墳時代竪穴住居跡掘下げ。弥生時代小児用合口壺棺検出・実測・掘下げ。縄文時代早期集石遺構検出。  
10月 古墳時代竪穴住居跡実測。縄文時代早期集石遺構検出・実測。  
11月 古墳時代竪穴住居跡実測。縄文時代早期集石遺構実測。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置

農業開発総合センター建設予定地は、南さつま市金峰町大野と日置市吹上町和田・中之里・入来にまたがって計画され、敷地面積180㍓と広範囲におよぶものである。

金峰町は旧日置郡の最南部を占め、北側は吹上町、東から東南部にかけては川辺町・鹿児島市、南側は万之瀬川を隔てて旧加世田市と接している。また、西側は吹上浜によって東シナ海に面する。金峰山がほぼ中央にそびえ、東から西へ山地・シラス台地・低地・海岸砂丘へと続く地勢を示す。また、万之瀬川の支流堀川・境川・岩元川・長谷川が山地や台地を縫うように西流している。これらの河川に開析された谷が発達し、谷に面した台地上に多くの遺跡が存在する。代表的な遺跡としては、縄文時代の阿多貝塚、弥生時代の高橋貝塚・松木園遺跡、古墳時代の中津野遺跡が知られているが、近年万之瀬川の河川改修に伴う調査で、持鉢松遺跡・芝原遺跡など古代から中世の重要な遺跡も見発されている。

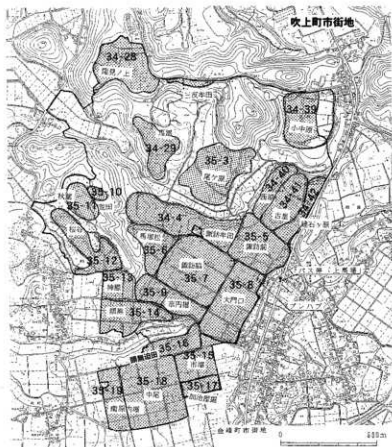
尾ヶ原遺跡は南さつま市金峰町の北端に位置し、日置市吹上町と接している。北側の標高約80mの独立丘陵から南側へと傾斜し、南側は標高約30mの平坦面が広がる。東・南・西側は谷が入り込み一種の舌状台地となっている。平坦面と谷との比高差は約5mである。谷を挟んで東側には吹上小中原遺跡、南側には諏訪牟田遺跡、西側には馬廻遺跡が存在する。

### 第2節 周辺遺跡

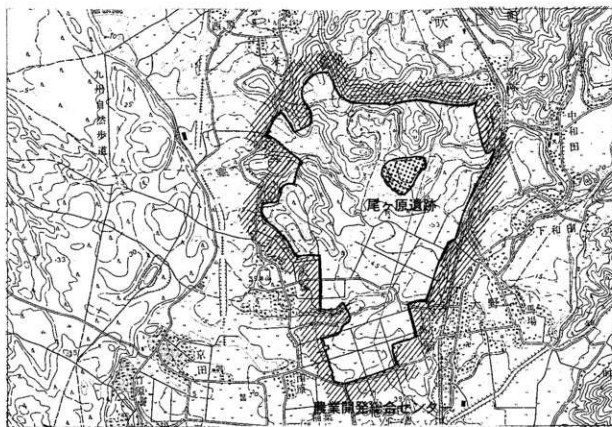
金峰町側は主に耕種試験場関連の計画地であるが、大字は大野で大野原と呼ばれている広大な台地である。遺跡は大門口遺跡・諏訪前遺跡・諏訪牟田遺跡・尾ヶ原遺跡・馬塚松遺跡・諏訪脇遺跡・宗門堀遺跡・神原遺跡・桜谷遺跡・荒田遺跡・頭無遺跡・頭無迫田遺跡・市堀遺跡・中尾遺跡・南原内堀遺跡・加治屋堀遺跡とほぼ全域にわたって遺跡が存在し、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・

古代・中世・近世と各時期の遺構・遺物が出土している。

金峰町は古くより発掘調査が行なわれ、県内外で著名な遺跡が多い。阿多貝塚は縄文時代前期を中心とした遺跡で、人骨の出土した上焼田遺跡と共に貝塚を形成する希少な遺跡である。小中原遺跡は旧石器時代・縄文時代早期・古代の遺構・遺物が多く出土した遺跡であるが、現在残っている阿多という地名と同じ「阿多」という文字が刻まれた土師器・須恵器が出土したことで注目された。上水流遺跡では、縄文時代中期・後期・晩期の珍しい遺物が出土している。その中には、南島との交流をうかがわせる遺物（南島系の土器）も見られる。弥生時代になると遺跡数も増加し内容も豊富になる。下原遺跡は縄文時代から弥生時代への移行期にあたる遺跡で、初痕の認められる土器片が出土し、早くから稲作が行なわれていたことがうかがえるものである。高橋貝塚は下原遺跡に後続するものであるが、弥生時代前期の土器（高橋式）と共に初痕のある土器片・柱状挟入石器・ノミ形石器・磨製石鏃・磨製石剣・石鏃・石包丁等が共に出土しており、稲作農耕がいち早く伝わってきたことを物語る遺跡である。また、貝塚を形成することや南海産のゴホウラ貝が出土することから、海洋性に富んでおり、南島と北部九州などの中継地としての位置付けも重要視されている。下小路遺跡では、鹿児島県では数少ない合口襷帯が発見され、弥生時代中期に北部九州との交流があったことが知られる。松木園遺跡は、限られた範囲の調査であるが、弥生時代後期の大溝（幅4～5m・深さ3mのV字状）が発見され環状集落の可能性を想定させられる。また、溝中より出土した多量の土器はそれまで希薄だった弥生時代後期の土器編年に欠かせないものである。中津野遺跡からは、弥生時代から古墳時代への移行期にあたる土器群が出土している。万之瀬川改修工事に伴う近年の調査では、持鉢松遺跡・芝原遺跡・渡畑遺跡などから古代・中世の遺構・遺物が数多く発見されている。特に中世の中国製陶磁器が大量に出土しており、南島・中国との交流が大きく取り沙汰されてきている。平成16年・17年の調査では、縄文時代後期の足形土製品が



第1図 農業開発総合センター内遺跡群位置



第2図 遺跡位置図 (1/25,000)

遺跡地名表（金峰町）

番号	遺跡名	所在地	時代	番号	遺跡名	所在地	時代
1	塚山	大野	古墳	22	寺下	大野	中世
2	大塚	〃	古墳	23	京田	〃	縄文・古墳・中世
3	尾ヶ原	〃	縄文早～晩期・弥生・古墳	24	京田原	〃	古墳
4	諏訪牟田	〃	縄文・古墳・古代・中世	25	鎮守尾	〃	古墳・中世
5	諏訪前	〃	縄文早期・晩期	26	南原A	〃	縄文中期・後期
6	馬塚松	〃	縄文晩期・中世・近世	27	砂漢	池辺	古墳
7	諏訪脇	〃	縄文早期・晩期・中世	28	小堀	〃	古墳・古代
8	大門口	〃	縄文早期・晩期	29	萩ノ上	〃	古墳
9	宗円堀	〃	旧石器・縄文早期・中世	30	地頭堀	〃	古墳・古代
10	荒田	〃	旧石器・縄文早期	31	塩屋堀	〃	古墳
11	秋場	〃	旧石器	32	玄同堀	〃	古墳・中世
12	桜谷	〃	旧石器・縄文早期・弥生	33	主水堀	〃	弥生・古墳
13	神原	〃	旧石器・縄文早期・古代	34	秋葉下	〃	古墳
14	頭無	〃	縄文早期・古代	35	島田	〃	古墳
15	市堀	〃	縄文早期・中世	36	宮園	〃	古墳・古代
16	頭無迫田	〃	旧石器・縄文早期・中世	37	牟礼ヶ城跡	〃	中世
17	加治屋堀	〃	縄文	38	小城田	〃	縄文
18	中尾	〃	旧石器・縄文草創期・早期	39	本寺	〃	古墳
19	南原内堀	〃	縄文後期・晩期	40	前平	〃	縄文・古墳
20	南原外堀	〃	古墳・古代	41	宮の前	〃	縄文・古代
21	原口	〃	古墳・古代				



第3図 周辺遺跡位置

渡畑遺跡と芝原遺跡から出土し接合している。

### 第三章 層位

農業開発総合センター予定地は、南さつま市金峰町と日置市吹上町にまたがる南北2km、東西1.5kmの広大な範囲に及ぶ。地形も標高86mから13mと高低差があり、山・台地・沖積地・開析谷と変化に富んでいる。そのために、それぞれの地点で層位が異なっている。第4図は台地部分の標準的な地層の模式図である。また、以下の各層の説明も標準的なものである。

#### 層 灰黒色土

現在の耕作土。白色の小軽石を含むことによって層との区別が可能である。地点によってはa・b・cの3層に細分できる。c層は黒色に近い色調であるが、3mm大の白色軽石が混在している。中世末から近世初めの層である。

層の平均的な厚さは20cm程度であるが、圃場整備により削除されたり、盛り土されたりしており一定ではない。

#### 層 黒色土

弥生時代・古墳時代・奈良時代～鎌倉時代の遺物包含層である。圃場整備により削除されている部分が多いが、谷の部分などを中心に良好に残存している。層厚10～30cm。

#### 層 黄褐色火山灰土

鬼界カルデラ起源のアカホ

ヤ火山灰（B P6400年）とその腐植土である。上位（a層）は層との漸位層であり、やや黒色を帯びる。縄文時代晩期及び弥生時代前期の遺物包含層である。中位（b層）は縄文時代前期から後期の遺物包含層である。下位（c層）はアカホヤ火山灰の一次堆積と考えられるが残存状況は悪く、層との境目が明瞭ではない。層厚30～40cm。

#### 層 黄褐色土

層と類似するが、より褐色味を帯び粘質である。縄文時代早期の遺物包含層で層厚20～30cm。

#### 層 黒褐色土

硬質でよくしまる。2～3cm大の黄褐色のバミスが混入する。縄文時代早期の遺物包含層で層厚30cm。

#### 層 暗黄褐色火山灰土

桜島起源の薩摩火山灰（B P11 500年）である。非常に薄くブロック状に堆積している。層厚は厚い所で15cm程度堆積している。

#### 層 明茶褐色土

粘質土であるが火山灰の混入によるザラついた感触をもつ。縄文時代草創期の遺物包含層で層厚10cm。

#### 層 茶褐色粘質土

いわゆるチョコ層である。粘質が強く含水率が高い。旧石器時代から縄文時代草創期の遺物包含層である。層厚10cm。

#### 層 暗茶褐色粘質土

層とほとんど同じ土質であるが、層に比べてやや褐色土味を帯び、シルト質化している。旧石器時代の遺物包含層である。層厚30cm。

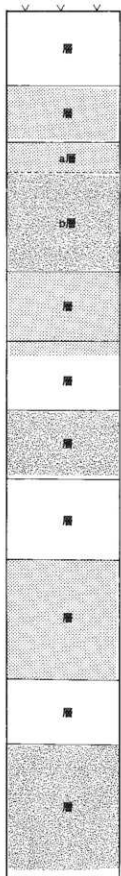
#### 層 黄褐色シルト（シラス質）

シラスの腐食したもので、5cm大の黄色軽石を含む。上位は旧石器時代（ナイフ形石器文化）の遺物包含層である。層厚80cm。

#### XI層 白色シラス

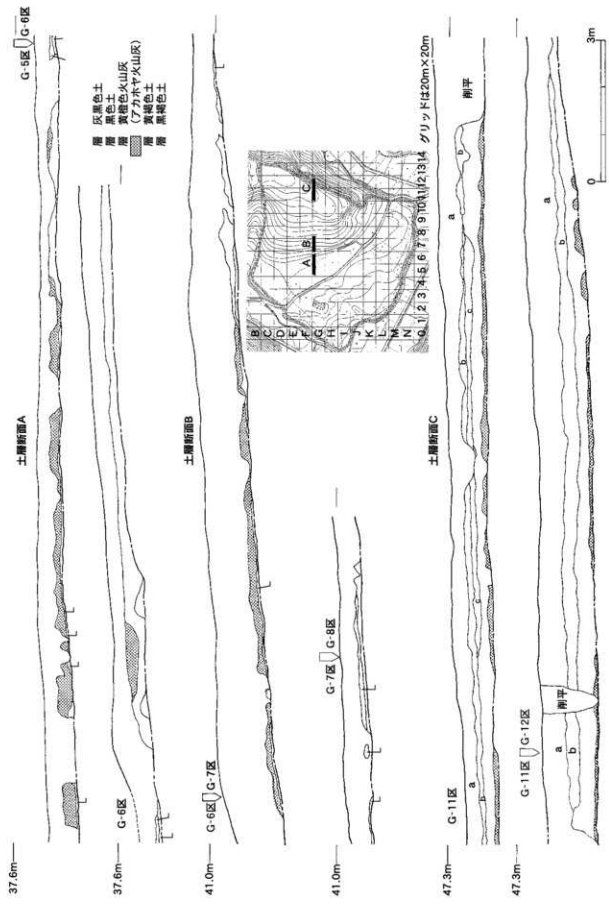
始良カルデラ起源のシラス（B P24 500年）である。近辺の露頭では十数mの堆積が見られる。

尾ヶ原遺跡も標準的な地層であるが、傾斜地及び丘陵の裾部においては層・層等の上層部が消失しており、表土を剥くと縄文時代早期の遺物包含層になる傾向がみられた。下方の平坦面においては上層からよく残り古代・古墳時代・縄文時代晩期の遺

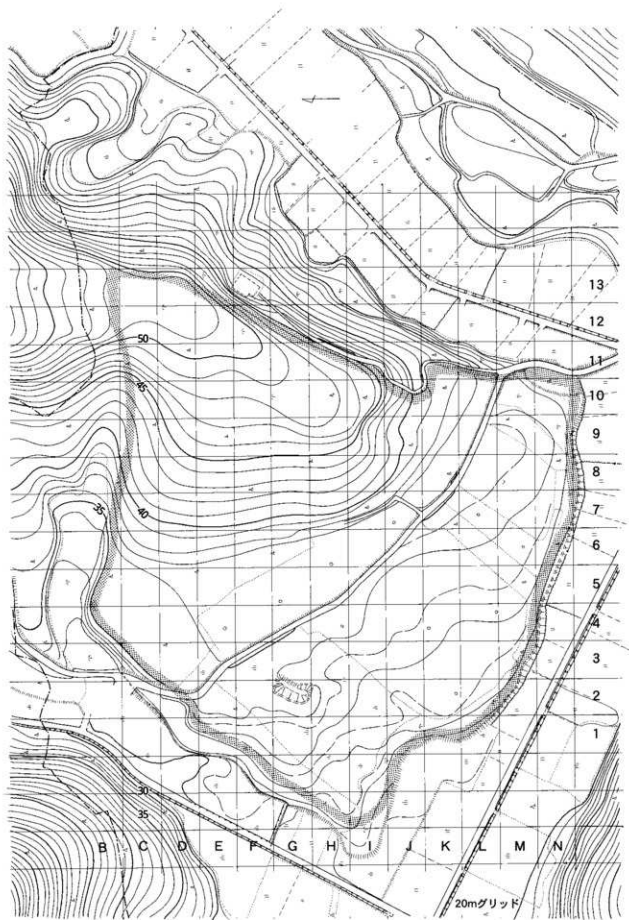


第4図 模式柱状図





第5図 土層断面



第6図 地形図及びグリッド配置図

## 第IV章 発掘調査の概要

### 第1節 発掘調査の方法及び概要

尾ヶ原遺跡では平成10年、12年に確認調査を実施し、縄文時代早期・晩期、弥生時代、古墳時代、古代の遺物が出土することが判明した。農業大学の研究飼料畑の予定地であり、大がかりな整地が必要となっている所である。ただ、南側の低い平坦面においては、削平をせず現状で保存することとなった。北側の丘陵・傾斜地については削平して畑地とせざるを得ない状況で、本調査の対象となった。

調査は国土座標にあわせた20m 20mの調査範囲(グリッド)を設定して実施し、遺跡地内の北側からA・B・C、西側から1・2・3とした。

北側は山林であったため、抜根をしてから表土剥ぎを行なった。調査は、南側から北側へと進めた。

縄文時代は早期から晩期までの各時期の遺物が出土しているが、早期と晩期が主である。早期は丘陵の裾にあたる遺跡内では高い位置から出土している。遺構は集石遺構が8基検出された。土器は石坂式が主であるが、前平式・吉田式・桑ノ丸式・下剥釜式・塞ノ神式・押型文土器等豊富である。前期は曽畑式・深浦式、中期は春日式、後期は指宿式がそれぞれ出土している。晩期は黒川式土器が出土し、埋設土器2基が検出された。また、扁平打製石斧と石鏝の出土量が多い点も注目される。

弥生時代は中期を中心に出土しているが出土量は多くはない。遺構は遺跡内の高い位置に黒髻式土器と須玖式土器を合わせた小児用合口壺棺が検出された。黒髻式土器など中九州(熊本県)に広く分布する土器が多く出土する特徴もみられた。

古墳時代は低い平坦面から多く出土し、竪穴住居跡も8軒検出された。2・3・4号住居からは須恵器と成川式土器が相伴して出土しており成川式土器の年代観を考える良好な資料である。

古代の遺構は柱穴らしきピットが検出されたが建物としてはとらえられなかった。遺物は土師器の甕・坏および須恵器が出土している。

## 第V章 発掘調査の成果

### 第1節 縄文時代の調査

縄文時代は、早期から晩期まで各時期の遺物が出土しているが、早期と晩期が主である。

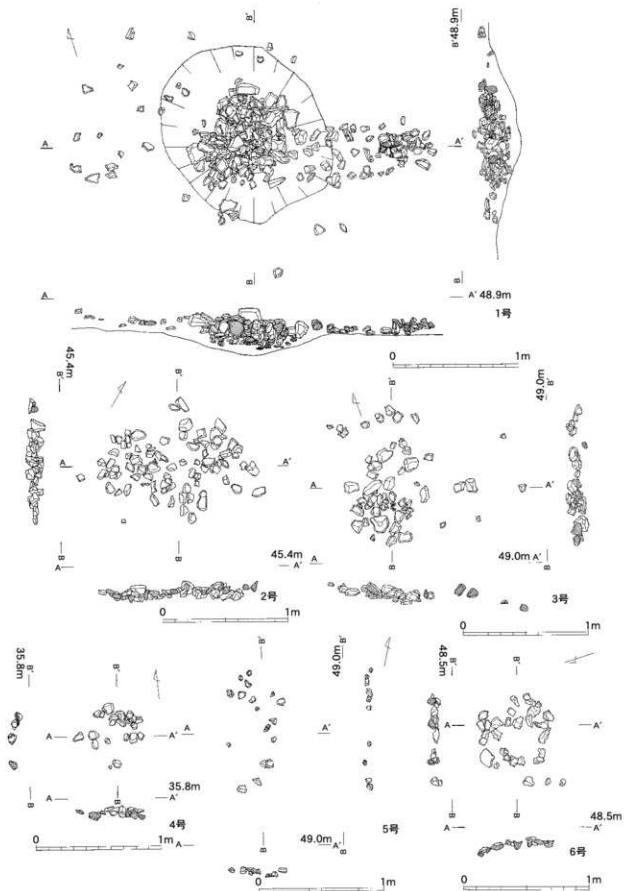
#### 1 縄文時代早期の調査

縄文時代早期は遺跡の高い位置(D・E・5・6・7区)を中心に分布し、集石遺構も集中する。

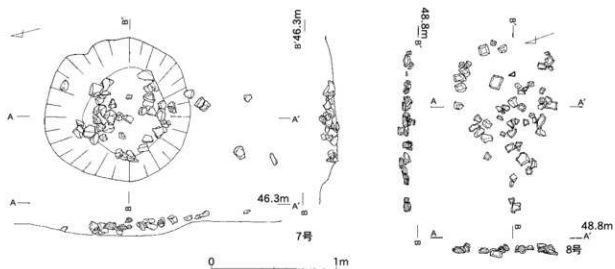
##### (1) 遺構(第7図～第9図)

集石遺構8基が検出されている。そのほとんどはC・D・12区の北側の傾斜地、南側のG・H・10区において検出されている。1号集石は石坂式土器を伴うが、その他は土器を伴うものはなかった。周辺からは石坂式土器や桑ノ丸式土器を中心に出土している。規模・石の大きさもまちまちである。また、掘り込みを有するものは2基である。

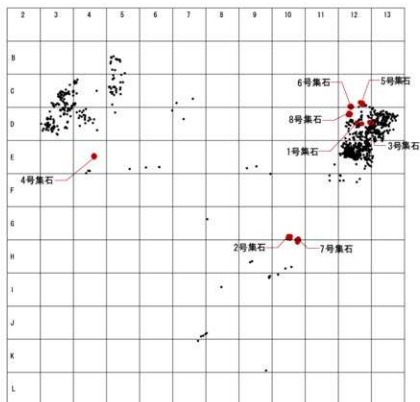
1号集石はD・12区で検出され、径1.3mの掘り込みを有する。東側90cmの範囲に礫が散乱し、掻き出しの痕跡と思われる。角張った拳大の礫225個からなるが、安山岩と凝灰岩が主である。掘り込みは層まで達している。7号集石はH・10区で、遺跡の頂上部より一段下がった南面するテラス状の緩傾斜地において検出された。径1.2mの掘り込みを有し、南側へ数個の石を掻き出した痕跡が見られる。角張った拳大の礫51個からなるが、安山岩、凝灰岩が主である。2～6号集石は掘り込みを有しないものである。石材はいずれも安山岩と凝灰岩を主とするもので、2号集石はG・9・10区で検出され、91個の角礫からなる。3号集石はD・12区で検出され、61個の角礫からなる。4号集石はE・4区で検出され、24個の礫からなる。5号集石はD・12区で検出され、19個の礫からなる。6号集石はD・12区の遺跡の最頂部の北面する緩傾斜地において検出され、30個の角礫からなる。



第7図 集石遺構1号~6号



第8図 集石遺構7号・8号



第9図 縄文時代早期遺物出土状況

(2) 遺物（土器）

土器，石器とも多種多様に出土しているが，土器は，9類に分類される。また，石器は礫器，石斧，磨石など多様である。

I類土器（第10図）

I類土器は，口縁部は緩ないし斜位の短い貝殻刺突文を施し，その下に貝殻刺突文を横位に迎らせ，胴部は，貝殻条痕文の上に沈線状の貝殻条痕文や刺突文などを重ねる土器である。器形は円筒形のもの

(1-13)と角筒(14-28)のものがある。1-5は、口唇部が平坦で、口縁部は直行する。口縁部に縦位の貝殻刺突文を施し、胴部には、横位の条痕文に斜位や縦位の直線や流水状の条痕を施している。1と3は、口縁部の縦位の間隔のあいた貝殻押印文を施している。4は、斜位の条痕文に、貝殻の肋(ろく)を使用して1.5-1.8cm間隔の貝殻刺突文を施している。6-13は胴部で、横位または斜位の条痕文に縦位の波状文、斜位の直線の条痕を施してい

る。14-28は、角筒形の口縁部をもつ土器である。14-21は口縁部に縦位の貝殻刺突文を施し、その下を1-2条の横位の貝殻刺突文で区画している。胴部は、横位の条痕文の上に縦位ないし斜位の波状もしくは直線の条痕を2重に施している。28は、縦位の条痕文のみで構成されている。

29は底部であるが、円形の形状からは、円筒、角筒のどちらの器形に属するかは不明である。

I 類土器										
種別	器名	出土	年代	口縁部			胎土	外面	内面	備考
				内	外	胎土				
10	1	D-13	Ⅱ	黒縄	黒縄	A, B, C	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	2	D-12	Ⅱ	黒縄	黒縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	3	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	4	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B, C	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	5	E-12	Ⅱ	黒縄	黒縄	A, B, C	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	6	D-13	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B, C	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	7	D-13	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B, C	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	8	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	9	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	10	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	11	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	12	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	13	D-13	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	14	D-12	Ⅱ	黒縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	15	D-12	Ⅱ	黒縄	黒縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	

I 類土器										
種別	器名	出土	年代	口縁部			胎土	外面	内面	備考
				内	外	胎土				
10	16	D-13	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B, C	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	17	D-12	Ⅱ	赤縄	黒縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	18	D-13	Ⅱ	黒縄	黒縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	19	D-13	Ⅱ	黒縄	黒縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	20	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	21	D-13	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	22	D-13	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	23	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B, C	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	24	D-8	Ⅱ	黒縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	25	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	26	K-8	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	27	E-12	Ⅱ	黒縄	黒縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	28	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	
	29	E-12	Ⅱ	黒縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	貝殻刺突文	ヘアズリ	

## II 類土器 (第11図)

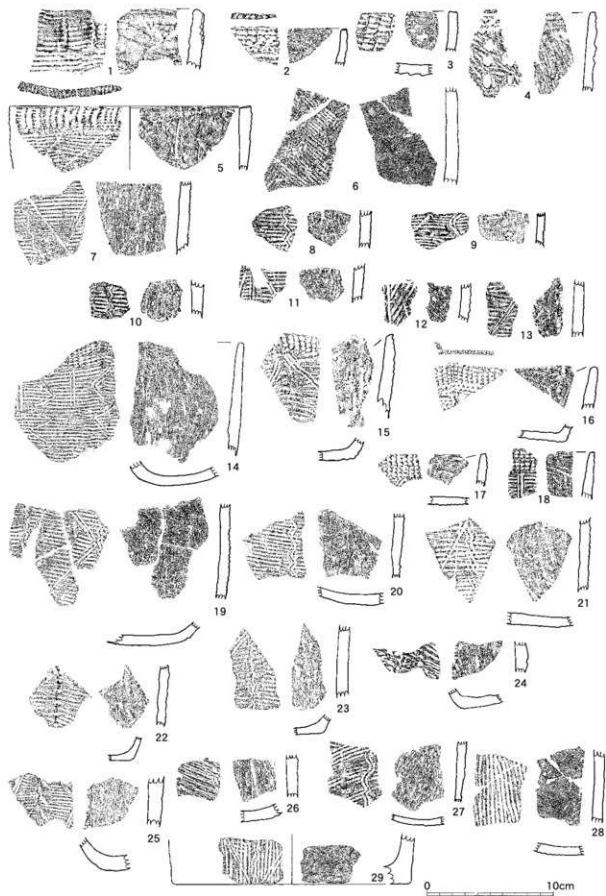
類土器は、平坦な口唇部に刻目を有し、口縁部に貝殻刺突文を横位または斜位に施すものである。個体によって楔形の貼付文の有無がある。また、胴部は貝殻刺突による施文のある土器である。

30-48は口縁部である。その内30-40は楔形の貼付文をもつ。口縁部に横位の貝殻刺突文を2-3条

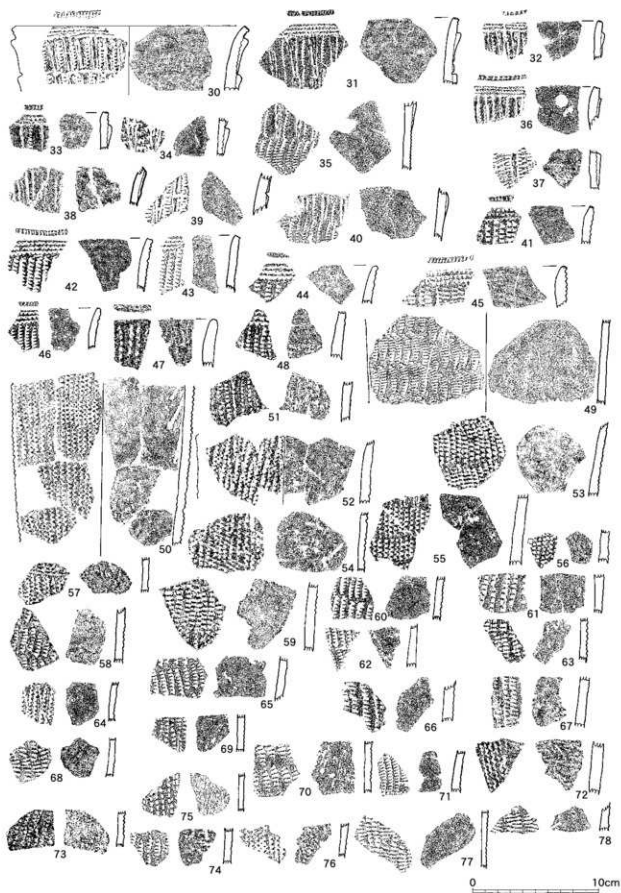
施し、下に楔形の貼付文を施している。32は、内面に補修孔の穿孔途中のものがある。41-48は、楔形の貼付文のないもので、縦位の貝殻刺突文を施している。48-77は胴部である。主に、縦位の貝殻刺突文を施す。52・64・73は、縦位の施文に斜位の刺突文を重ねている。

II 類土器										
種別	器名	出土	年代	口縁部			胎土	外面	内面	備考
				内	外	胎土				
11	30	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	31	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	32	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	33	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	34	D-13	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	35	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	36	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	37	D-13	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	38	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	39	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	40	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	41	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	42	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	43	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	44	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	45	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	46	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	47	C-7	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	48	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	49	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	50	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	51	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B, C	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	52	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	53	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	
	54	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B, C	貝殻刺突文	くさび形文	ヘアズリ	

II 類土器										
種別	器名	出土	年代	口縁部			胎土	外面	内面	備考
				内	外	胎土				
11	55	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B, C	貝殻刺突文		ヘアズリ	
	56	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B, C	貝殻刺突文		ヘアズリ	
	57	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ	
	58	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ	
	59	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ	
	60	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ	
	61	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ	
	62	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ	
	63	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ	
	64	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ	
	65	C-4	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ	
	66	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ	
	67	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ	
	68	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ	
	69	D-13	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ	
70	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ		
71	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B, C	貝殻刺突文		ヘアズリ		
72	D-3	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B, C	貝殻刺突文		ヘアズリ		
73	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ		
74	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ		
75	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ		
76	E-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ		
77	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ		
78	D-12	Ⅱ	赤縄	赤縄	A, B	貝殻刺突文		ヘアズリ		

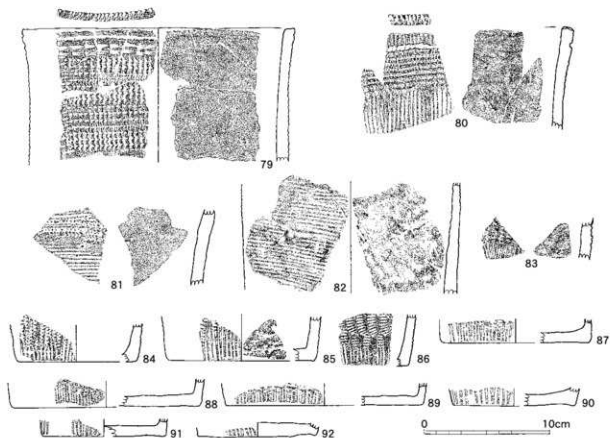


第10圖 I類土器



第11圖 II類土器





第12図 III類土器

### III類土器 (第12図)

類土器は、口縁部が円筒形で外反し、口唇部には平坦面を有する。口縁部には横位の貝殻刺突文が廻り、その下には楔形貼付文が密接に施されるものや緻密な貝殻刺突文を施すことで楔状を呈する。胴部には、横位の貝殻押し文を施している土器である。

79・80は口縁部で、80は口縁部に短い縦位の貝殻

刺突文の下位に、深い貝殻刺突文を廻らせることで太い沈線文を施しているようになっている。

81-83は胴部である。83は底部に近い胴部で、下部に沈線を廻らせている。84-92は底部である。底部は縦の条痕文だけであることから、明確に判断できないものもある。84-87は、縦位の貝殻刺突文や貝殻押し文に縦の条痕を重ねていることから類・類の底部である。

III類土器									
時代	出土区	部位	色釉		胎土	外部		内部	備考
			内	外		外	内		
12世紀	A	79	E-12/V	灰青緑	にない	A, B	貝殻刺突文, 貝殻押し文	へつり押し文	
		80	D-12/V	明赤	黒	A, B	貝殻刺突文, 貝殻押し文, 貝殻貼付文	へつり押し文	
		81	D-12/V	にない	黒	A, B, C	貝殻刺突文, 貝殻押し文	へつり押し文	
		82	E-12/V	にない	黒	A, B, C	貝殻刺突文	へつり押し文	
		83	E-12/V	赤	赤	A, B	貝殻刺突文, 貝殻押し文	へつり押し文	
12世紀	A	84	D-12/V	赤	赤	A, B	貝殻刺突文, 貝殻押し文	へつり押し文	
		85	D-12/V	赤	赤	A, B	貝殻刺突文, 貝殻押し文	へつり押し文	
		86	D-12/V	赤	赤	A, B	貝殻刺突文, 貝殻押し文	へつり押し文	

### IV類土器 (第13図～21図)

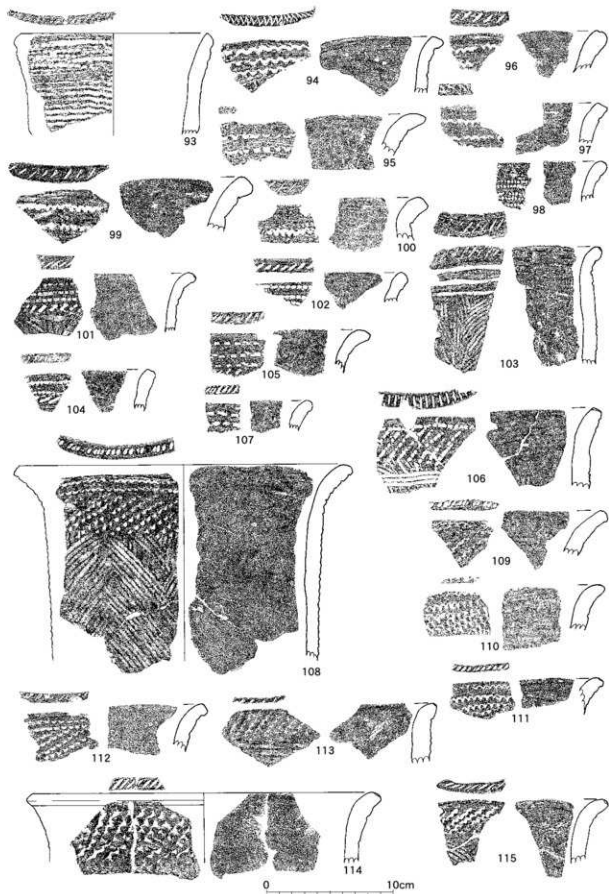
類土器は口縁部が外反し、口唇部に刻目を有する。口縁部に貝殻刺突文が廻り、胴部には貝殻条痕文が綾形状に施されている土器である。

93は胴部の調整が綾形状の調整ではなく、貝殻条痕文を横位に廻らしている。また、口唇部の形状も内面に稜を有することから、類土器よりも古い時

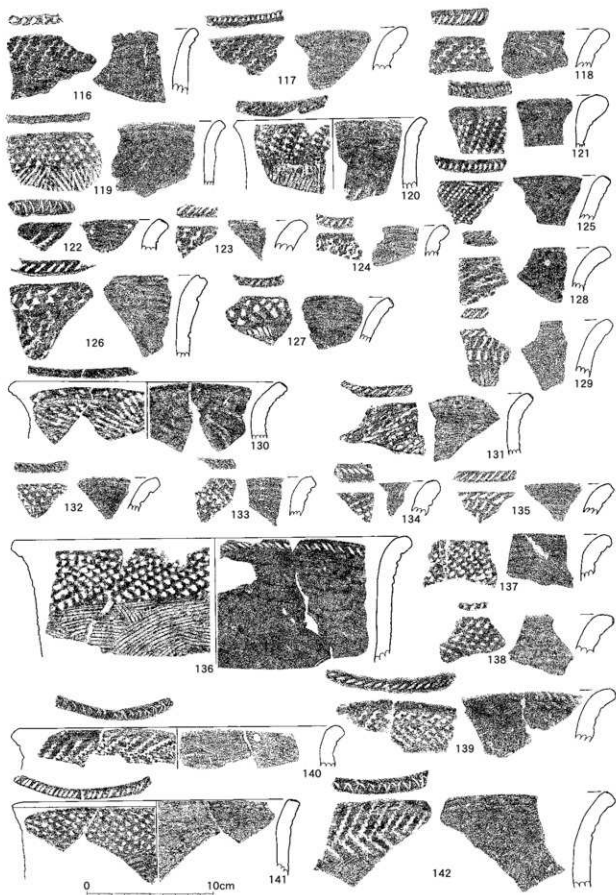
III類土器									
時代	出土区	部位	色釉		胎土	外部		内部	備考
			内	外		外	内		
12世紀	A	87	E-12/V	明赤	黒	A, B	貝殻刺突文, 貝殻押し文, ナシ	へつり押し文	
		88	D-12/V	明赤	黒	A, B	貝殻刺突文	へつり押し文	
		89	D-12/V	にない	黒	A, B	貝殻刺突文	へつり押し文	
		90	D-12/V	にない	赤	A, B, C	貝殻刺突文	へつり押し文	
		91	D-12/V	明赤	明赤	A, B	貝殻刺突文	へつり押し文	
12世紀	A	92	D-12/V	明赤	明赤	A, B, C	貝殻刺突文	へつり押し文	
		92	D-12/V	明赤	明赤	A, B, C	貝殻刺突文	へつり押し文	

期の可能性が高い。

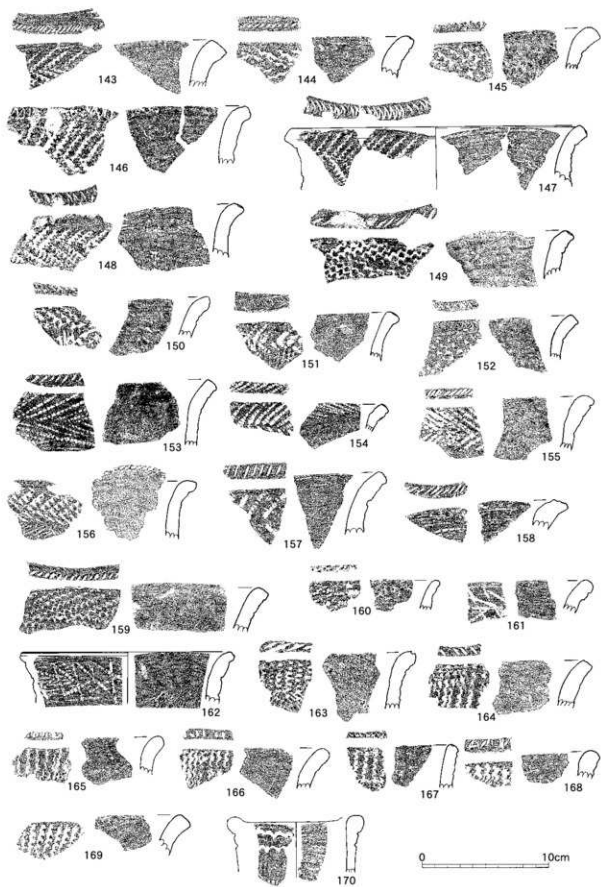
94-181は口縁部である。94-102は口縁部に横位の刺突文を廻らしている。口唇部は平坦で刻目がみられる。94の刻目は鋸歯状に施されている。98には刻目がみられない。胴部には綾形状の条痕文が施されている。102-106は口縁部に横位の貝殻刺突文が施され、その直下に二枚貝の肋を用いて、貝殻刺突



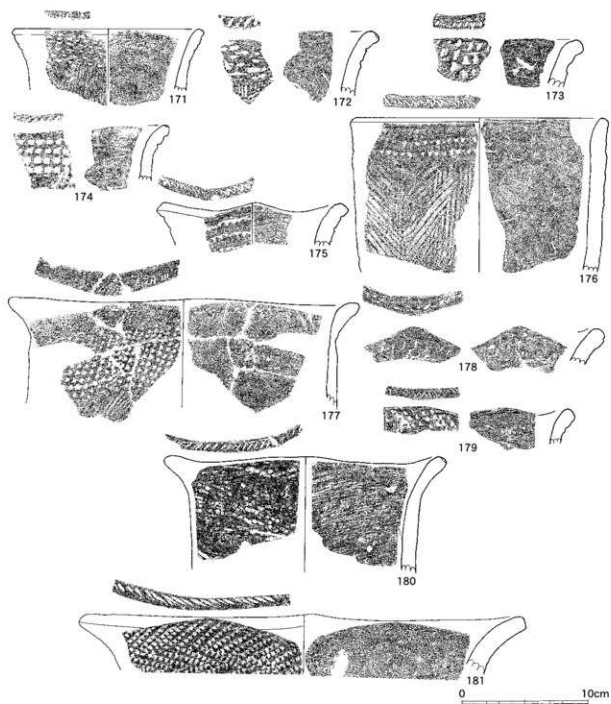
第13圖 IV類土器 1



第14圖 IV類土器 2



第15圖 IV類土器 3



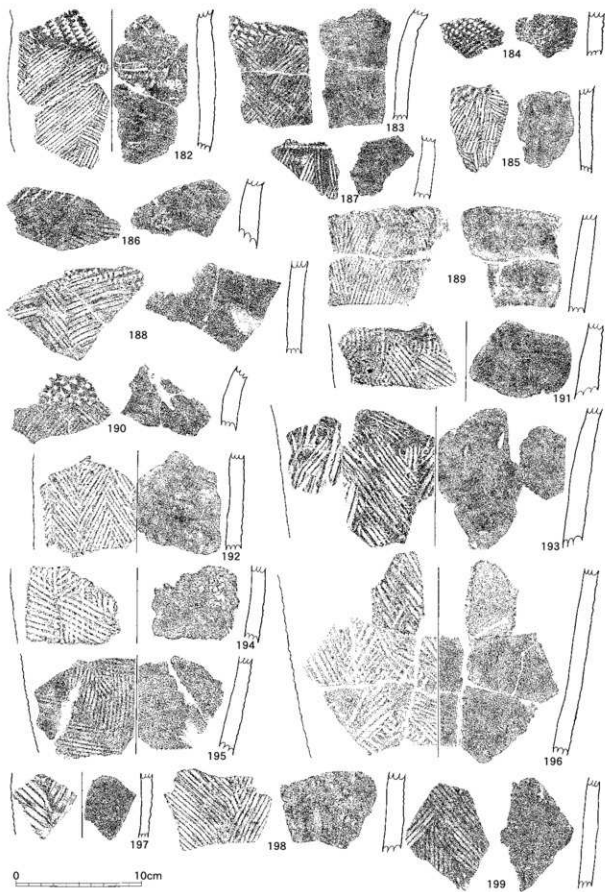
第16図 IV類土器 4

状の方形刺突文を施している。105は貝殻刺突文の下部の刻目がはっきりしないが、107と同一個体の可能性がある。

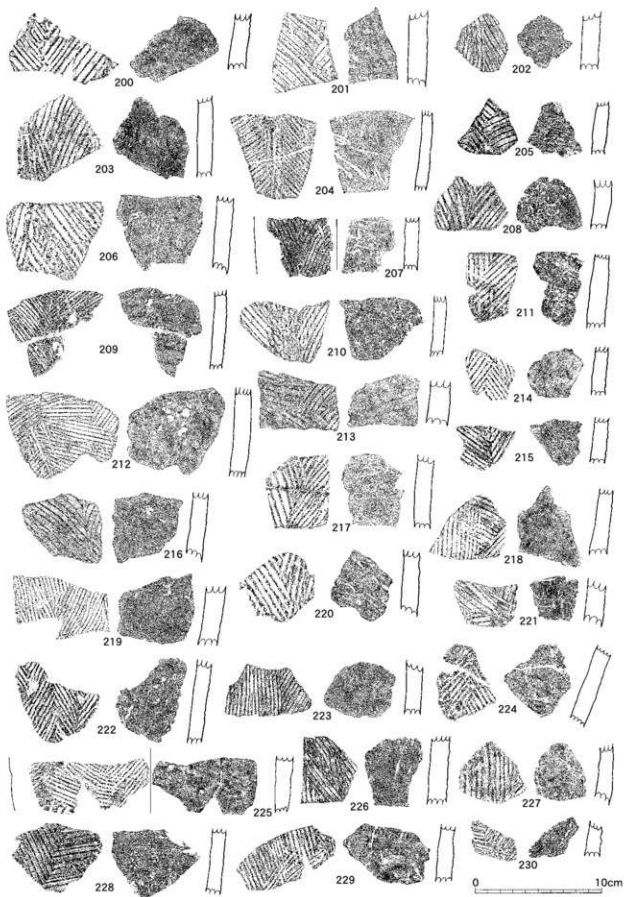
107～112は横位の貝殻刺突文の下に斜位の貝殻刺突文を施している。胴部が残存しているものは貝殻

条痕文により器面調整している。113～135は口縁部に斜位の貝殻刺突文を施している。132・133は口唇部に鋸歯状の刻目がみられる。

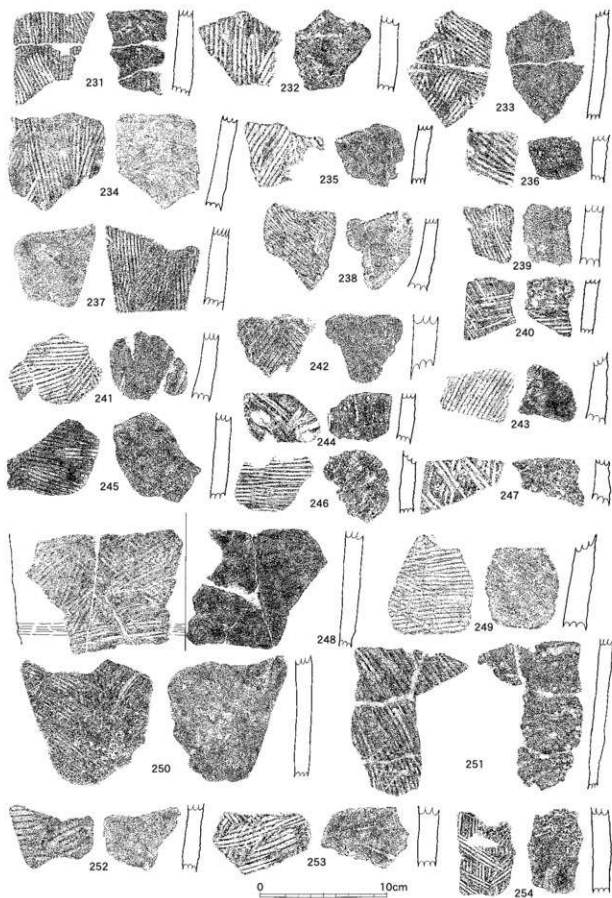
136～160は口縁部に羽状の貝殻刺突文を施している。146～148・151・152の口唇部は鋸歯状の刻目を



第17圖 IV類土器 5

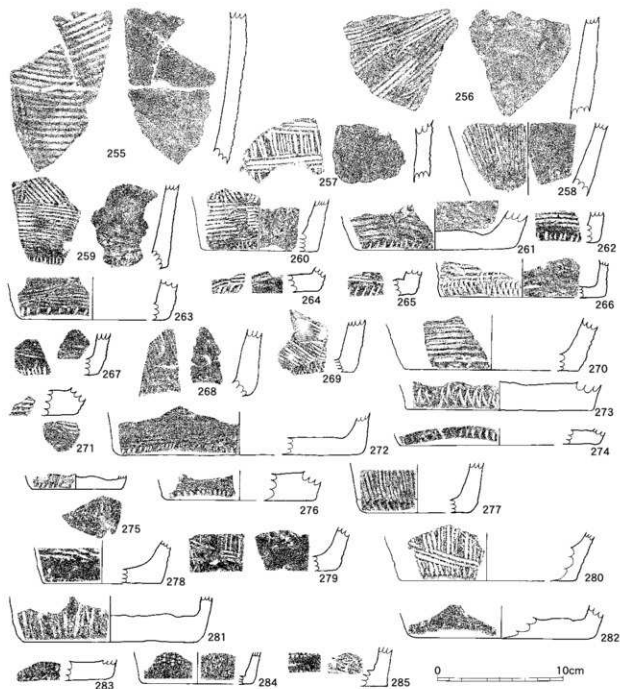


第18圖 IV類土器6



第19圖 IV類土器 7





第20図 IV類土器 8

施している。154は、口縁部内側に貝殻刺突文を施している。161・162は斜位と縦位の貝殻刺突文を鋸齒状に施している。口縁部への施文はみられない。163～169は口縁部が縦位の貝殻刺突文を施している。167は口唇部に貝殻刺突文を廻らせている。170は横位の貝殻刺突文の下部に貝殻条痕文等の調整がみられない。171は貝殻刺突状の方形刺突文の下に縦位の条痕が施されている。172～174は貝殻刺突状の方

形刺突文を施している。177～181は、口縁部が山形になる。176は横位の貝殻刺突文を施し、胴部は綾杉状の条痕文が施される。口縁は外反せず、ほぼ直行する。

182～258は胴部である。ほとんどが綾杉状の貝殻条痕文が施される。258は底部付近であるが、縦位の貝殻条痕文が施される。

259～285は底部である。259・260は綾杉状の貝殻

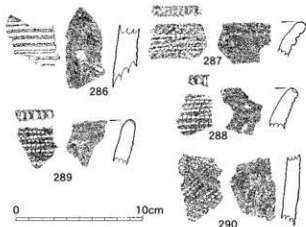


IV類土器		A: 長石 B: 石英 C: 角閃石							
発掘調査年度	出土区	層位	色調		胎土	外面		内面	備考
			内	外					
233	D-12	IV	横灰	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
232	D-3	IV	にぶい焼	にぶい焼	A, B, C	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
233	E-12	IV	にぶい焼	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
234	E-9	IV	にぶい焼	灰緑	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
235	D-13	IV	灰黄緑	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
236	D-13	IV	にぶい焼	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
237	D-13	IV	にぶい焼	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
238	D-13	IV	にぶい焼	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
239	E-12	IV	浅黄緑	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
240	C-11	II	にぶい焼	焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
241	D-13	IV	横灰	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
242	D-13	IV	横灰	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
243	E-12	IV	横灰	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
244	E-3	IV	黄灰	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
245	E-12	IV	にぶい焼	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
246	E-12	IV	にぶい焼	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
247	E-12	IV	黄灰	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
248	D-3	IV	にぶい焼	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
249	D-13	IV	にぶい焼	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
250	H-5	II	にぶい焼	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
251	E-12	IV	にぶい焼	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
252	D-12	IV	にぶい焼	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
253	D-12	IV	にぶい焼	にぶい焼	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
254	D-12	IV	にぶい焼	灰黄	A, B	線形貝殻条痕文	ヘラウズリ		
255	E-3	IV	黒緑	にぶい焼	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
256	C-4	V	横赤緑	にぶい焼	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
257	E-12	V	にぶい焼	にぶい焼	A, B, C	ヘラミガキ			
258	C-4	V	横灰	横赤	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
259	D-12	IV	黒緑	横赤緑	A, B, C	線形貝殻条痕文	ヘラミガキ		
260	G-5	II	黒緑	黄灰	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
261	D-5	II	赤緑	赤黒	A, B, C	貝殻条痕文	ナデ		
262	E-12	IV	にぶい焼	焼	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
263	D-12	IV	にぶい焼	焼	A, B, C	線形貝殻条痕文	ナデ		

V・VI類土器		A: 長石 B: 石英 C: 角閃石							
発掘調査年度	出土区	層位	色調		胎土	外面		内面	備考
			内	外					
264	D-3	IV	にぶい焼	横赤緑	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
265	D-3	IV	にぶい焼	にぶい焼	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
266	C-6	II	横灰	焼	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
267	E-12	IV	横灰	焼	A, B, C	貝殻条痕文	ナデ		
268	D-13	IV	横灰	横赤緑	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
269	E-12	IV	灰	横赤緑	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
270	D-3	IV	黒緑	にぶい焼	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
271	E-4	IV	にぶい焼	焼	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
272	C-3	IV	横赤緑	焼	A, B, C	貝殻条痕文	ナデ		
273	C-4	IV	横灰	横赤	A, B, C	貝殻条痕文	ナデ		
274	D-13	IV	にぶい焼	横赤緑	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
275	C-6	II	にぶい焼	にぶい焼	A, B, C	羽状文	ヘラウズリ		
276	D-3	IV	焼	焼	A, B, C	ヘラウズリ	ヘラウズリ		
277	E-12	IV	焼	灰	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
278	E-4	IV	焼	焼	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
279	E-12	IV	焼	横赤緑	A, B, C	貝殻条痕文	ナデ		
280	E-12	IV	黒緑	横赤	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
281	D-3	IV	横赤緑	横赤緑	A, B, C	貝殻条痕文	ヘラウズリ		
282	D-13	IV	にぶい焼	にぶい焼	A, B, C	ヘラミガキ			
283	E-12	IV	にぶい焼	横赤緑	A, B	ヘラウズリ	ヘラウズリ		
284	D-12	IV	焼	焼	A, B, C	ヘラウズリ	ヘラウズリ		
285	E-12	IV	焼	焼	A, B, C	ヘラウズリ	ヘラウズリ		

V・VI類土器		A: 長石 B: 石英 C: 角閃石							
発掘調査年度	出土区	層位	色調		胎土	外面		内面	備考
			内	外					
286	E-12	IV	にぶい焼	黄緑	A, B, C	条痕文	ヘラウズリ		口縁部は外傾あるいは直行する器形をもち、器面に貝殻刺突文による施文をもつ土器である。
287	E-12	IV	横赤緑	焼	A, B	貝殻刺突文(横位)	ヘラウズリ		形状が小片のため細部が判明しないが、口縁部の外反が顕著でないため、類土器とは分類した。口唇部への刻目も観察される。
288	E-12	IV	横赤緑	にぶい焼	A, B	貝殻刺突文(横位)	ヘラウズリ		
289	E-12	IV	横赤緑	にぶい焼	A, B	貝殻刺突文(横位)	ヘラウズリ		
290	D-3	IV	灰黄緑	にぶい焼	A, B, C	線状文	ヘラウズリ		

条痕の調整の下位に横位の貝殻条痕文、その下部は刻目が施される。261～266は横位の貝殻条痕文で調整され、刻目が施される。266の刻目は鋸歯状である。267～269は斜位の貝殻条痕文に刻目が施されている。



第24図 V類土器・VI類土器

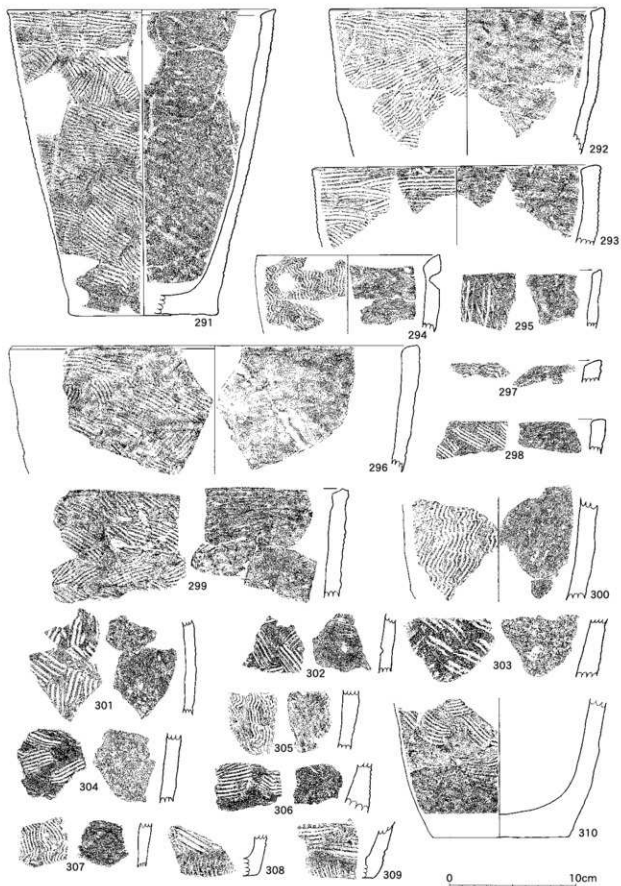
270・271は横位の貝殻条痕文のみの調整である。272～276は刻目のみが施されているものである。273は鋸歯状の刻目が施される。274は縦位の貝殻条痕文の下部に刻目がみられる。278は斜位の貝殻刺突文が施される。279～281は縦位と斜位の貝殻条痕文が施されている。282～285は剥落などにより調整がはっきりしない。

#### V・VI類土器(第21図)

類土器は、286の1点のみの出土である。口縁部に沈線を廻らし、胴部への施文は特ない。類土器は、口縁部が外傾あるいは直行する器形をもち、器面に貝殻刺突文による施文をもつ土器である。

287～289は口縁部である。形状が小片のため細部が判明しないが、口縁部の外反が顕著でないため、類土器とは分類した。口唇部への刻目も観察される。

290は胴部である。貝殻刺突文が、羽状に施されている。



第22圖 VII類土器

## Ⅶ類土器（第22図）

類土器はバケツ形の形状をなし、櫛状の工具により流水状・羽状に施文する土器である。

291は完形復元できた土器である。口縁部径21.2cm、器高24.2cmを測る。口縁部は横位の施文がされ、以下は羽状に近い施文が施される。

292～299は口縁部である。295は縦位の条痕文で

ある。他の土器は羽状及び流水状の施文である。

294は、穿孔途中の土器で補修の痕跡をもつ。

300～307は胴部である。流水状・羽状に篋状工具により施文が施されている。

308～310は底部である。308・309は斜位や横位の条痕文の下部に篋歯状の刻目が施されているが、310には刻目はみられない。

Ⅶ類土器		A：長石 B：石英 C：角閃石								
押図番号	報告番号	出土区	層位	色調		胎土	外面	内面	備考	
				内	外					
22 図	291	E-12	Ⅳ	明赤褐	明赤褐	A、B	縷杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ		
	292	E-12	Ⅳ	にぶい赤褐	黒褐	A、B、C	縷杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ		
	293	D-12	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい褐	A、B、C	縷杉状貝殻条痕文	ヘラミガキ		
	294	D-13	Ⅳ	褐灰	にぶい黄橙	A、B	流水文	ヘラミガキ		補修孔
	295	D-3	Ⅳ	黄褐	にぶい褐	A、B、C	縷杉状貝殻条痕文	ヘラミガキ		
	296	C-3	Ⅳ	黒	明褐	A、B、C	羽状文	ヘラミガキ		
	297	C-6	Ⅲ	にぶい赤褐	褐灰	A、B	貝殻条痕文	ヘラミガキ		
	298	C-3	Ⅳ	にぶい赤褐	黒褐	A、B、C	羽状文	ヘラミガキ		
	299	C-3	Ⅳ	にぶい褐	褐灰	A、B、C	羽状文	ヘラケズリ		
	300	C-6	Ⅲ	黒褐	灰褐	A、B	流水文	ヘラケズリ		
	301	F-4	Ⅲ	黒褐	にぶい褐	A、B	羽状文	ヘラケズリ		
	302	C-3	Ⅳ	黒褐	にぶい赤褐	A、B	羽状文	ヘラミガキ		
	303	G-11	Ⅱ	黄褐	にぶい褐	A、B	羽状文	ヘラケズリ		
	304	C-3	Ⅳ	にぶい褐	明赤褐	A、B、C	羽状文	ヘラケズリ		
	305	D-13	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A、B	流水文	ヘラケズリ		
	306	E-12	Ⅳ	黒褐	赤褐	A、B、C	羽状文	ヘラケズリ		
	307	D-12	Ⅳ	褐灰	にぶい黄橙	A、B、C	流水文	ヘラミガキ		
	308	D-3	Ⅳ	にぶい褐	明赤褐	A、B	羽状文、ヘラケズリ、貝殻条痕文	ヘラミガキ		
	309	E-7	Ⅲ	黒褐	赤褐	A、B、C	貝殻条痕文、ヘラケズリ	ヘラケズリ		
	310	C-3	Ⅳ	褐	赤褐	A、B	羽状文、ヘラケズリ	ヘラケズリ		

## Ⅶ類土器（第23図・24図）

類土器は器面に山形・楕円・格子目の押型文を施文するものである。

311～321は山形の押型文土器である。311～314は口縁部である。311～313の口縁部は、内湾もしくは直行し器壁が厚い。314は口縁部が外反することからこれ以前の土器とは時間差があるものと考えられる。315～320は胴部である。縦方向の施文が多い。

321は底部である。縦方向の施文が施してある。

322～332は細かい楕円の押型文土器である。

323・324は口縁部で、緩やかに外反する。

325～329は胴部である。326は補修孔がある。

329～331は口縁部内面に櫛状の施文を施し、外面は内面部分の文様が施された部分で稜を作り、その下に細かい楕円の文様を施している。口縁部は緩やかに外反する。

332～335は格子目押型文土器で、同一個体と思わ

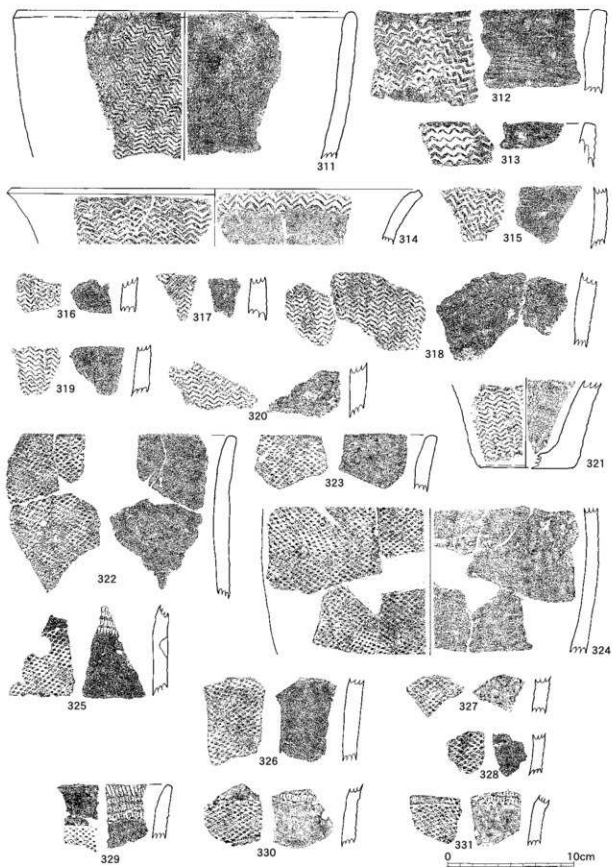
れる。332は口縁部で緩やかに外反する。333～335は胴部である。

## Ⅷ・Ⅹ類土器（第25図）

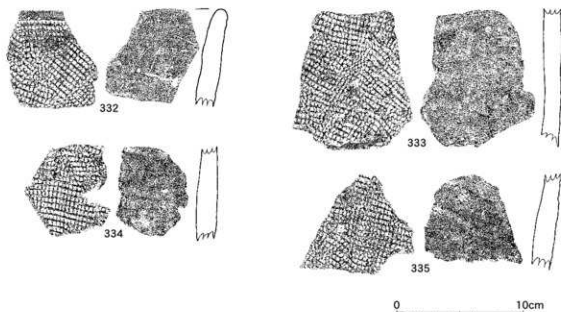
類土器は、口縁部が外反するもので、変形燃糸文を施す土器である。336～338は口縁部が緩やかに外に開き、下から上に燃糸文が施されている。339～342は胴部である。

類土器は、口縁がラッパ状に開き、胴部は垂直に伸びる形態をする。胴部に沈線で区画しその間に網目燃糸文を施す土器である。

343は屈曲する口縁部である。内外面を横ナデ調整後に、貝殻の肋による押引文を2条、貝殻腹縁部の刺突文を横位に施す。345は口縁部の屈曲部分である。隆帯部分に貝殻の肋による縦位の刺突文を施す。344・346は篋描き沈線により区画された範囲に網目燃糸文を回転挿入している。347は刺突連点文を廻らし、篋描き沈線文を施している。

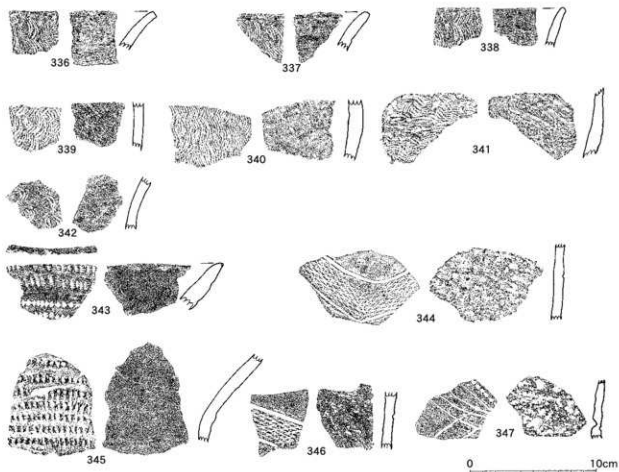


第23圖 埴類土器 1



第24図 甗類土器 2

甗類土器				A : 長石 B : 石英 C : 角閃石						
押図 番号	報告 番号	出土区	層位	色調		胎土	外面	内面	備考	
				内	外					
23 図	311	G-11	Ⅱ	明黄褐	明褐	A, B	山形押型文	ヘラケズリ		
	312	G-11	Ⅱ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A, B, 金剛	山形押型文	ヘラミガキ		
	313	G-11	Ⅱ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A, B	山形押型文	ヘラケズリ		
	314	L-10	Ⅲ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A, B	山形押型文	山形押型文, ヘラケズリ		
	315	L-10	Ⅲ	にぶい黄褐	にぶい橙	A, B	山形押型文	ヘラミガキ		
	316	C-4	Ⅳ	暗褐	橙	A, B	山形押型文	ヘラミガキ		
	317	C-4	Ⅳ	黒	橙	A, B	山形押型文	ヘラケズリ		
	318	C-4	Ⅳ	黄褐	明褐	A, B, C	山形押型文	ヘラケズリ		
	319	C-4	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	A, B, C	山形押型文	ヘラケズリ		
	320	C-3	Ⅳ	黒褐	橙	A, B, C	山形押型文	ヘラケズリ		
	321	C-3	Ⅳ	黒	橙	A, B, C	山形押型文	ヘラケズリ		
	322	C-3	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A, B, C	楕円押型文	ヘラケズリ		
	323	C-3	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A, B, C	楕円押型文	ヘラミガキ		
	324	D-3	Ⅳ	黄褐	明黄褐	A, B, C	楕円押型文	ヘラケズリ		
	325	C-3	Ⅳ	灰黄褐	にぶい黄褐	A, B	楕円押型文	貝殻押型文, ヘラケズリ	補修孔	
	326	C-3	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A, B, C	楕円押型文	ヘラケズリ		
	327	C-3	Ⅳ	にぶい黄橙	橙	A, B, C	楕円押型文	ヘラケズリ		
	328	D-3	Ⅳ	にぶい黄橙	橙	A, B, C	楕円押型文	ヘラケズリ		
	329	C-3	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A, B, C	楕円押型文	貝殻押型文, ヘラケズリ		
	330	C-3	Ⅳ	褐灰	灰黄褐	A, B, C	楕円押型文	連続貝殻刺突文		
	331	C-3	Ⅳ	黒褐	にぶい黄褐	A, B	楕円押型文	連続貝殻刺突文		
	24 図	332	D-4	Ⅱ	にぶい黄	にぶい黄橙	A, B	格子目押型文	ヘラミガキ	
		333	D-4	Ⅱ	にぶい黄	明黄褐	A, B	格子目押型文	ヘラケズリ	
334		D-4	Ⅱ	にぶい黄	にぶい黄橙	A, B	格子目押型文	ヘラミガキ		
335		D-4	Ⅱ	にぶい黄	にぶい黄橙	A, B	格子目押型文	ヘラミガキ		



第25図 IX類土器・X類土器

IX・X類土器				A:長石 B:石英 C:角閃石					
採回 番号	報告 番号	出土区	層位	色調		胎土	外面	内面	備考
				内	外				
25 図	336	D-4	IV	にぶい橙	橙	A, B, C	変形燃糸文	ヘラケズリ, ナデ	
	337	B-4	III	橙	黒褐	A, B, C	変形燃糸文	ヘラケズリ, ナデ	
	338	D-5	IV	橙	橙	A, B, C	変形燃糸文	ヘラケズリ, ナデ	
	339	D-5	IV	にぶい褐	にぶい橙	A, B, C	変形燃糸文	ヘラケズリ	
	340	D-5	IV	にぶい赤褐	橙	A, B, C	変形燃糸文	ヘラケズリ	
	341	D-4	IV	にぶい褐	にぶい褐	A, B, C	変形燃糸文	ヘラケズリ	
	342	E-4	III	暗灰黄	にぶい黄橙	A, B, C	変形燃糸文	ヘラケズリ	
	343	C-5	IV	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A, B, C	貝殻押し文, 貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	344	B-5	III	橙	にぶい褐	A, B, C	沈線文, 燃糸文	ヘラケズリ	
	345	D-4	IV	明黄褐	黒褐	A, B, C	連続貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	346	C-5	IV	褐	にぶい褐	A, B, C	沈線文, 燃糸文	ヘラケズリ	
	347	E-3	III	赤褐	赤褐	A, B, C	貝殻刺突文, 沈線文	ヘラケズリ	



(3) 遺物(石器)

叩石・打製石斧・磨製石斧・石錘(第26図)

348は、頁岩製の叩石である。大部分に自然面を残し、先端部が使用のため欠損している。

349と351は打製石斧である。351は刃部欠損し、表面に装着ずれと思われる摩滅痕が見られる。351は大型の剥片の下縁に表裏両面に簡易な二次加工を施しており、擦痕も観察できる。側縁部から上部にかけては表裏とも微細な二次加工が施されている。

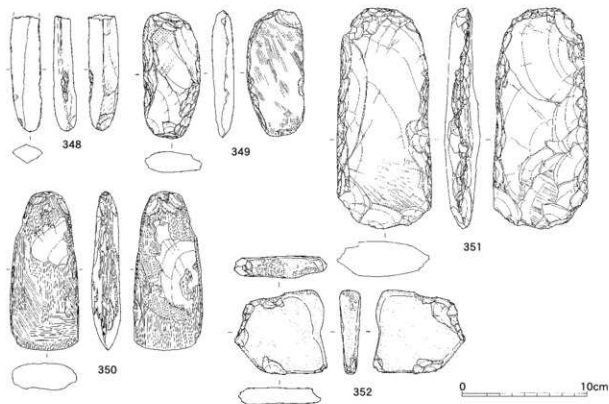
350は蛇紋岩製の磨製石斧である。短冊形で全体に研磨痕が見られ、側縁部・刃部ともに研磨による明瞭な稜の形成が見られる。刃部左側に顕著な使用痕(微小剥離痕)が観察でき、左側縁部にかけて欠損が見られる。

352は石錘である。右側縁部の自然面の抉りを利用し、左側縁部に剥離を施している。敲石としても使用しており、上部に敲打痕が観察できる。

礫器、石ヒ(第27図)

353は礫器である。最大長15.7cm,最大幅21.3cm,厚さ3.5cm,重さ1.05kgの大型の素材剥片の下縁に表裏両面への簡易な二次加工を施し、刃部を形成する。両側縁には裏面への二次加工が認められる。

354は頁岩製の石ヒである。横形で素材剥片の剥離面を表裏面ともに残す。右側縁部の二次加工はつまみ部を形成する意図が見られる。刃部が下部に形成され、上部の一部は欠損している。



第26図 縄文時代早期石器 1

磨石 (第28図・29図 355~366)

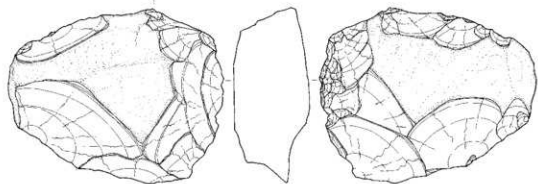
縄文時代早期の磨石は、12点を図化した。6cm未満を小型、6~11cmを中型、11cm以上を大型とした場合、縄文時代早期の特徴として同遺跡晩期に比べると中~大型の磨石が比較的多い点が注目できる。石材は安山岩、砂岩である。355と364は火熱を受けている。また、敲打痕や研磨痕から分類すると以下のような用途が考えられる。

- ・ 敲打痕が観察できないもの (355・357・363)

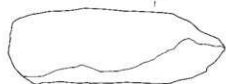
- ・ 敲打痕が1~3カ所に集中したり (356・358・362・364) 側縁部全体に敲打痕が分散したり (359・360・366) 敲石としての用途が考えられるもの
- ・ 表裏面及び側縁部全体に敲打痕が見られ (361・364・359)、凹石としての用途が考えられるもの
- ・ 全体的に研磨痕が明瞭 (357・358・359・362) で磨石としての用途が主体であったもの

押図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
26 図	348	IV	叩石	D-13	頁岩	9.3	2.4	1.8	49.63	
	349	IV	打製石斧	C-3	頁岩	10.2	4.5	1.6	115.58	
	350	IV	磨製石斧	F-11	蛇紋岩	12.7	5.5	2.3	700	
	351	IV	打製石斧	D-12	砂岩	17.7	7.7	2.9	510	
	352	IV	石錘	D-12	安山岩	6.8	7.1	1.7	80	

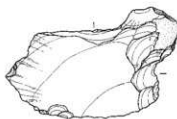
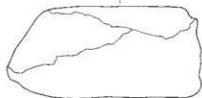
押図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
27 図	353	IV	磯器	D-3	頁岩					
	354	IV	石匙	D-3	頁岩					
	355	IV	磨石	D-3	頁岩	5.4		8	1.2	500
28 図	356	IV	磨石	B-5	安山岩	8.3	7.6	5.9	500	
	357	IV	磨石	B-5	砂岩	10.9	8.5	5.5	665	
	358	IV	磨石	E-12	安山岩	10.5	7.3	4.4	500	
	359	IV	磨石	D-3	砂岩	11.6	8.8	4.8	510	
	360	IV	磨石	B-5	砂岩	9.8	8.5	6.8	770	
	361	IV	磨石	E-12	安山岩	9.7	8.8	5.2	650	
	362	IV	磨石	E-12	安山岩	12	8.9	5.7	870	
	363	IV	磨石	I-6	安山岩	4.8	4.8	4	150	
	364	IV	磨石	C-4	砂岩	7.3	6.2	4.2	270	
29 図	365	IV	磨石	D-12	砂岩	5.6	4.8	2.5	83.76	
	366	IV	磨石	D-12	安山岩	6.9	6.4	4.3	280	



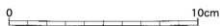
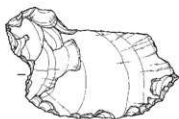
353



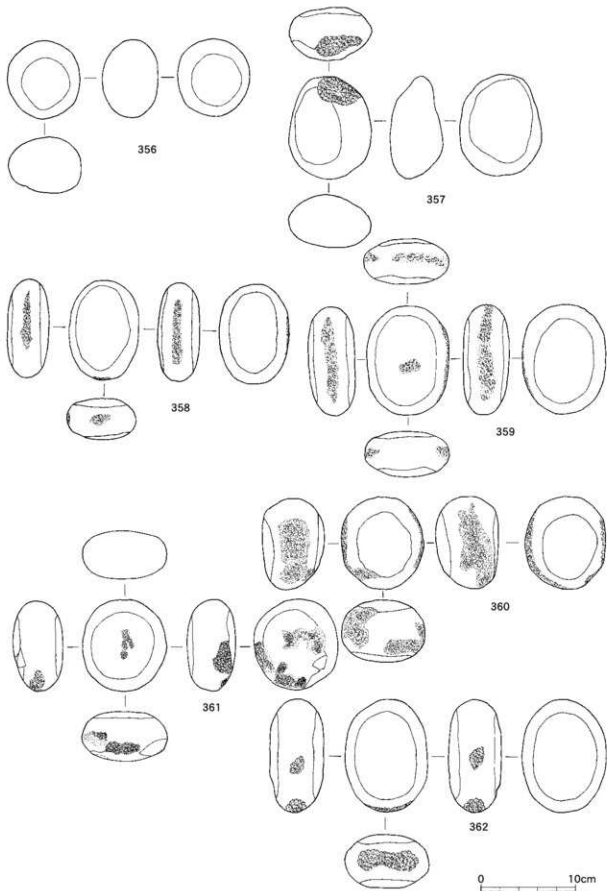
354



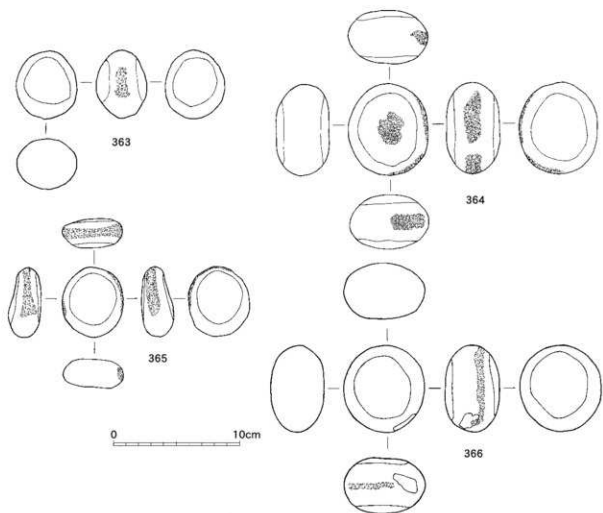
355



第27図 縄文時代早期石器 2



第28回 縄文時代早期石器 3



第29図 縄文時代早期石器 4

## 2 縄文時代前期の調査

遺構は検出されなかった。

### (1) 遺物（土器）

層の中間から出土するものである。土器は、

XI, XII類に分類される。

### XI類土器（第30図）

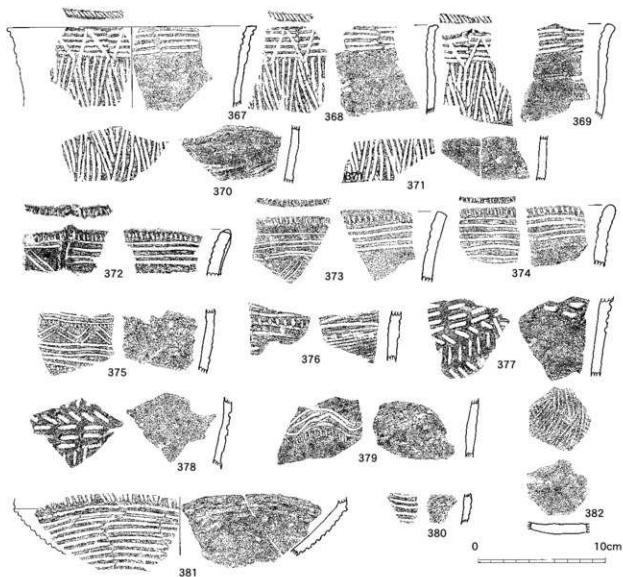
XI類土器は、口縁部は直行または、外反し口縁部から底部にかけて、横位、斜位、縦位の短沈線文を棒状の工具を使用して施する土器である。

367～369, 372～374, 381は口縁部である。369は波状を呈する。口唇部には、刻目を持つ。口縁部は篋状工具を用いて横位に縦列横線文を施した後に鋸齒文を施している。その下部には、数条をまとまりとする沈線を縦位に交互に施している。口縁部内面には横位に4条の縦列横線文を施している。器面は調整後に横撫でしている。373は4条の沈線文の下部に折帯文が施される。374は貝殻条痕による器面

調整後に横撫でしている。内外面には篋状工具による刺突文を廻らし、下部内外面には4条の沈線を横位に施している。381は、屈曲部分の上部を篋状工具による縦位の沈線、屈曲部を刺突列点文、下部を縦列横線文で施している。

370・371・375～380は胴部である。370・371は数条をまとまりとする沈線を縦位に交互に施している。375は上部から順に、篋状工具による沈線文、刺突列点文1条、鋸齒文、沈線文5条、刺突列点文を施している。376は内面に貝殻条痕による器面調整後に刺突列点文を施している。377・378は、上部に篋状工具による短い縦列横線と端沈線を羽状に施している。379は篋状工具による沈線文と刺突列点文を波状に施している。

382は底部である。篋状工具により器面調整されている。



第30図 XI類土器

XI類土器		A:長石 B:石英 C:角閃石			①左斜→右斜	②右斜→左斜			
押回 番号	報告 番号	出土区	層位	色調		胎土	外面	内面	備考
				内	外				
30 図	367	D-3	Ⅲ	褐灰	にぶい赤褐	A, B	縦列横線文, 鋸歯文①, 沈線文	ヘラケズリ, 縦列横線文, 帯ナデ	
	368	D-3	Ⅲ	灰褐	にぶい橙	A, B, C	縦列横線文, 鋸歯文①, 沈線文	ヘラケズリ, 縦列横線文, 帯ナデ	
	369	D-3	Ⅲ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A, B, C	縦列横線文, 鋸歯文②, 沈線文	ヘラケズリ, 縦列横線文, 帯ナデ	波状口縁
	370	D-3	Ⅲ	にぶい黄褐	褐	A, B, C	沈線文	ヘラケズリ後ナデ	胴部
	371	D-3	Ⅲ	にぶい黄褐	にぶい褐	A, B	沈線文	ヘラケズリ後ナデ	
	372	C-4	一括	暗褐	にぶい黄褐	A, B, C	刺突列点文, 沈線文		貼付突帯
	373	E-4	Ⅲ	明赤褐	にぶい褐	A, B, C	条痕文, 刺突文, 鋸歯文	条痕文, 刺突文, 沈線文	
	374	E-4	Ⅲ	にぶい褐	にぶい褐	A, B, C	条痕文, 刺突文, 沈線文	条痕文, 刺突文, 沈線文	
	375	E-5	Ⅲ	灰褐	にぶい褐	A, B	刺突列点文, 沈線文, 鋸歯文	ヘラケズリ	
	376	E-4	Ⅲ	にぶい褐	にぶい橙	A, B	刺突列点文, 沈線文	刺突列点文, 沈線文, 条痕文	
	377	C-5	Ⅲ	にぶい黄褐	暗赤褐	A, B	縦列横線文, 沈線文	縦列横線文, ヘラケズリ	
	378	C-5	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい赤褐	A, B, C	縦列横線文, 沈線文	ヘラケズリ	
	379	E-4	Ⅲ	灰褐	灰黄褐	A, B, C	刺突列点文, 沈線文(波状)	ヘラケズリ	
	380	D-3	Ⅳ	にぶい赤褐	赤褐	A, B	条痕文	ヘラケズリ	
	381	D-3	Ⅲ	にぶい赤褐	暗赤褐	A, B	刺突列点文, 沈線文, 縦列横線文	ヘラケズリ後ナデ	
	382	H-5	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい赤褐	A, B, C	条痕文	ヘラケズリ	

## XII類土器 (第31図)

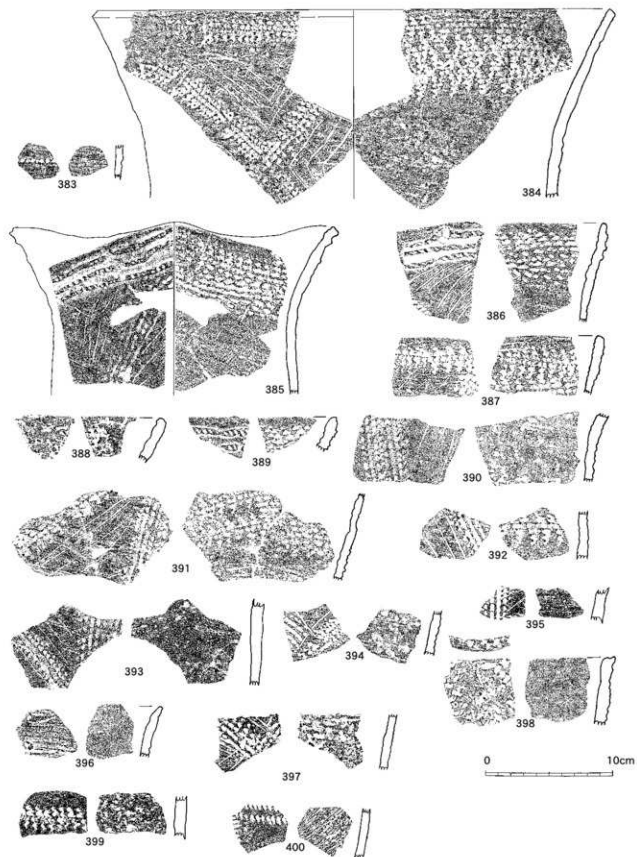
XII類土器は、口縁部が直行ないし外反し、山形の器形を持つものもある。口縁部内面に貝殻刺突や貝殻連点文を施し、沈線、貝殻刺突文で横位または斜位の施文を施す土器である。

384～389、396～398は口縁部である。384は口縁部に縦位の貝殻刺突文を緻密に施している。その下部には、三角形に区画した中に折帯文を施し、内面は貝殻の肋をロッキングして施文しており端面内外面とも撫で消している。385は刻目突帯文を廻らせ、胴部には斜位と縦位に貝殻連点文で区画し、V字、斜位の沈線文を施している。口縁内面には口縁に沿って貝殻刺突文と貝殻連点文を施している。386

は刻目突帯文を廻らし、下部に斜位の沈線文を施している。内面は貝殻連点文を施した後、撫でている。389は刻目突帯文を廻らし、内面に貝殻連点文を施している。387・388は内外面に貝殻刺突文を施している。388は384と同一個体の可能性がある。397は貝殻条痕文を施している。398は口唇部、口縁部に貝殻連点文を施している。397・396は貝殻条痕文が施され、内面は丁寧に横撫でされている。

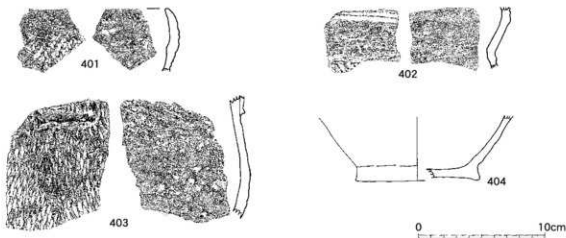
384、390～395、399・400は胴部である。貝殻刺突文、貝殻連点文、沈線文を斜位あるいは縦位に施す。391・392は内面にも貝殻連点文を施している。400は篋状工具による刺突文を施している。

XII類土器				A : 長石 B : 石英 C : 角閃石					
採回 番号	報告 番号	出土区	層位	色調		胎土	外面	内面	備考
				内	外				
	383	E-12	IV	褐灰	にぶい赤褐	A, B	刺突列点文	ヘラケズリ	
	384	E-4	III	灰褐	黒褐	A, B, C	貝殻刺突文, 折帯文, ナデ	貝殻刺突文, ヘラケズリ, ナデ	
	385	E-3	III	にぶい黄褐	にぶい赤褐	A, B, C	刻目突帯, 貝殻連点文, 沈線, ナデ	ヘラケズリ, 貝殻連点文後ナデ	
	386	E-3	III	黒褐	黒褐	A, B	刻目突帯, 貝殻連点文, 沈線	貝殻連点文後ナデ	
	387	E-3	III	にぶい赤褐	黒褐	A, B, C	刻目突帯, 貝殻連点文, ヘラケズリ	貝殻連点文後ナデ	
	388	F-4	III	にぶい赤褐	黒褐	A, B	貝殻連点文後ナデ	貝殻連点文後ナデ	384と異体か
	389	E-3	III	褐灰	黒褐	A, B, C	刻目突帯	貝殻連点文	386と異体か
	390	E-3	III	にぶい赤褐	暗赤褐	A, B, C	貝殻連点文, 沈線文	ヘラケズリ	
	391	D-3	III	にぶい赤褐	赤褐	A, B, C	貝殻連点文, 沈線文	貝殻連点文, ヘラケズリ後ナデ	
	392	E-3	III	にぶい赤褐	黒褐	A, B, C	貝殻連点文, 沈線文	貝殻連点文後ナデ	
	393	E-3	III	赤褐	黒褐	A, B, C	貝殻連点文, 沈線文	ヘラケズリ後ナデ	
	394	D-3	III	灰褐	黒褐	A, B, C	貝殻連点文, 沈線文	ヘラケズリ後ナデ	
	395	D-3	III	にぶい赤褐	黒褐	A, B, C	貝殻連点文, 沈線文	ヘラケズリ	
	396	I-8	III	にぶい褐	赤褐	A, B, C	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	397	I-6	III	黄褐	黒褐	A, B, C	貝殻連点文, 沈線文	貝殻連点文, ナデ	
	398	C-10	一括	灰褐	明赤褐	A, B, C	粗い貝殻連点文	ヘラケズリ後ナデ	
	399	E-3	III	にぶい赤褐	にぶい赤褐	A, B, C	貝殻連点文	ヘラケズリ	
	400	B-5	IV	にぶい褐	にぶい赤褐	A, B, C	刺突列点文	ヘラケズリ後ナデ	



第31图 Ⅺ类土器





第32図 XII類土器・XV類土器

### 3 縄文時代中期・後期の調査

縄文時代中期・後期は、層下部において出土するものである。遺構は検出されず、遺物は出土量が少なく、小破片が多い。

#### (1) 遺物（土器）

#### XII類, XV類土器（第32図）

XII類土器は、口縁部が内反し、キャリバー状の器形をしている。平底の底部からいったん垂直に立ち上がり、その後外側に開き胴部に至る。402は頸部から口縁部下部に当たり横位の沈線文がみられる。404は器壁が薄く、滑石を混ぜた胎土である。

XV類土器は胴部に縄文を施文する土器である。401は内湾する口縁部、403は胴部で地紋に縄文（401はRL、403はLR）が施文される。403は胴部の頸部に貼付突帯文を有する。

#### XV類土器（第33図）

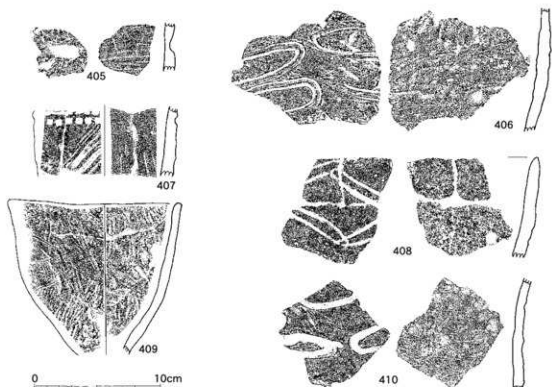
XV類土器は、胴部に2重沈線や太い凹線状の沈線を施文したり荒い糸痕を施したりする土器である。

405は棒状施文具により凹線文を施している。2は、撫てによる器面調整後に、凹線文を曲線状に施文している。406は2重沈線で曲線文様を上下に並べて施文している。407は欠損した波状口縁を含む胴部である。撫てによる器面調整後に凹線文を曲線状に施文している。刺突による連点文を廻らし、下部に篋状工具による凹線を羽状に施文する。408は口縁部である。口唇部は丸く、平行沈線による菱形文を施文している。

410は胴部であり、凹線文による円形の文様を施している。

409は底部から外開きに立ち上がり、途中で内傾し、そのまま直行して口縁部に至る。器面は内外面共貝殻糸痕により調整している。

XII・XV類土器				A:長石 B:石英 C:角閃石					
押図番号	報告番号	出土区	層位	色調		胎土	外面	内面	備考
				内	外				
32 図	401	L-10	Ⅲ	黄褐	黄褐	A, B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	402	G-11	Ⅱ	褐	黒褐	A, B	糸痕文	ヘラケズリ	
	403	H-0	Ⅲ	橙	黄褐	A, B	短沈線	ヘラケズリ	砂粒
	404	D-4	Ⅲ	にぶい黄	にぶい橙	A, B	ミガキ	ミガキ	底部



第33図 XV類土器

XV類土器		A:長石 B:石英 C:角閃石							
押図番号	報告番号	出土区	層位	色調		胎土	外面	内面	備考
				内	外				
33 図	405	E-4	Ⅲ	黄褐	にぶい橙	A, B	沈線文	ヘラケズリ	
	406	L-9	Ⅲ	橙	にぶい黄橙	A, B	二重沈線	ナデ	
	407	D-3	Ⅳ	暗赤褐	黒褐	A, B	方形刺突, 条痕文	ヘラミガキ	
	408	ナシ		明赤褐	橙	A, B	沈線文	ヘラケズリ	
	409	ナシ		灰黄褐	明赤褐	A, B, C	薄い貝殻条痕	ヘラケズリ	
	410	E-4	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A, B	沈線文	ヘラケズリ後ナデ	

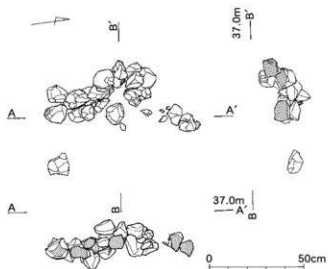
#### 4 縄文時代晩期の調査

縄文時代晩期は、層上部において出土するものである。遺物・遺構は土器、石器ともに数多く出土している。

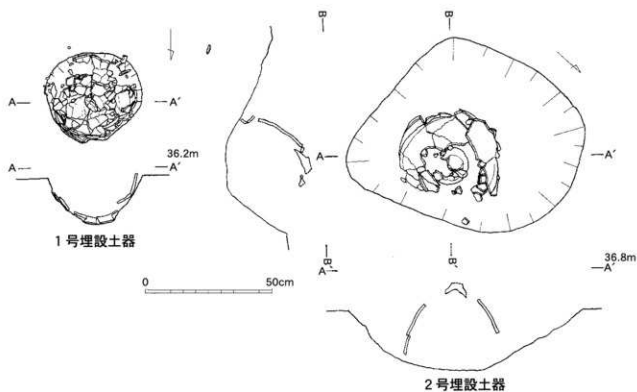
##### (1) 遺構

##### 集石 (第35図)

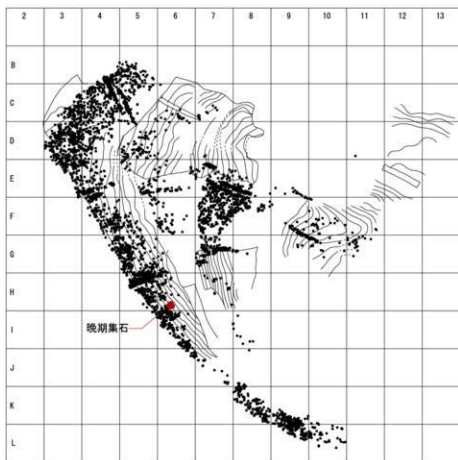
集石がH-10区から1基検出されている。拳大の約33個の石で構成され、傾斜に沿って石が数点積んである。赤色に変色した石が一点確認できたが、その他の石には、焼成の痕跡がみられず、掘込みや供伴する土器は検出されなかった。



第34図 縄文時代晩期集石遺構



第35图 刈類土器埋設土器



第36图 縄文時代晚期遺物出土状況

## 埋設土器 (第34図)

縄文時代晩期の粗製深鉢形土器が、2基検出された。1号埋設土器は、G・6区から口縁部を上にして埋設されていたが、当時の掘込み面は確認できなかった。2号埋設土器は、直径約80cmの円形の土坑に口縁部を下にして埋設されていた。いずれの土器も小破片で損傷が激しく、復元するまでに至らなかったが、残存部位から黒川式土器の新しい段階のものと思われる。

## 遺物出土状況 (第35図)

遺跡の低地部分の西側に集中しているが、稜線部に集中しているのは、石鏃など狩猟具である。土器は、粗製深鉢形土器、精製浅鉢形土器などが出土し、石器は、石鏃、打製石斧、叩石などを主として多数出土している。

### (2) 遺物 (土器)

#### Ⅷ類土器 (第37図～48図)

深鉢形土器、浅鉢形土器など様々な器形の土器が出土している。そこで、深鉢形土器、浅鉢形土器、またそのどれにも当てはまらない小鉢形土器、そのほかの土器など、器形によって口縁部の外反、あるいは外への傾き、直行、内湾など口縁部の長短などによって分類を行った。

#### 深鉢形土器

##### 口縁部

#### ア Ⅷa類土器 (第37図)

414～426のⅧa類土器は、口縁部が直行もしくは外に開き、口縁部の幅は広く、数条の沈線や条痕を持つ粗製土器である。412～414は口縁部に丸い棒状工具を使って、3～4条の条痕を施している。415～424は口縁部に明瞭な横位の条痕を施している。425・426は条痕が不明瞭で横位に薄く施してある。口縁部は外への開きが大きくなってきている。

#### イ Ⅷb類土器 (第38・39図)

427～441のⅧb類土器は肩部を持ち、口縁部が緩やかに外反し、頸部に至る部分に段の付く器形がみられ、器壁もa類に比べて薄い。口縁部の広い文様帯には沈線が消失し、貝殻条痕が施されるものもある粗製土器である。また、口縁部や頸部にリボン状

の突起を持つものがある。

428と431は口縁部が狭いことからa類からの移行期に相当すると考えられる。428～430は頸部と胴部を分ける段が付く。432は口縁部に段が付くが、頸部との境に付く段とは異なる。

436～441は口縁部にリボン状の突起を持つものである。

#### ウ Ⅷc類土器 (第39・40図)

442～451のⅧc類土器は、口縁部が厚く盛り上がり、器形も立ち気味になる。口縁部や頸部に無刻目の突帯が付くものもある粗製土器である。442は口縁部と頸部が肥厚し、口縁部にはリボン状の突起が付く。443は補修孔を穿ち、頸部が肥厚する。446は口縁部が緩やかに外に開き三角形に無刻目の突帯が付く。447は口縁部が直行し、肥厚した口縁部から頸部に細い突帯が付く。450は口縁部が内反し、器面全体に条痕が施される。451は肥厚した頸部から口縁部が内傾している。

#### 胴部 (第41図)

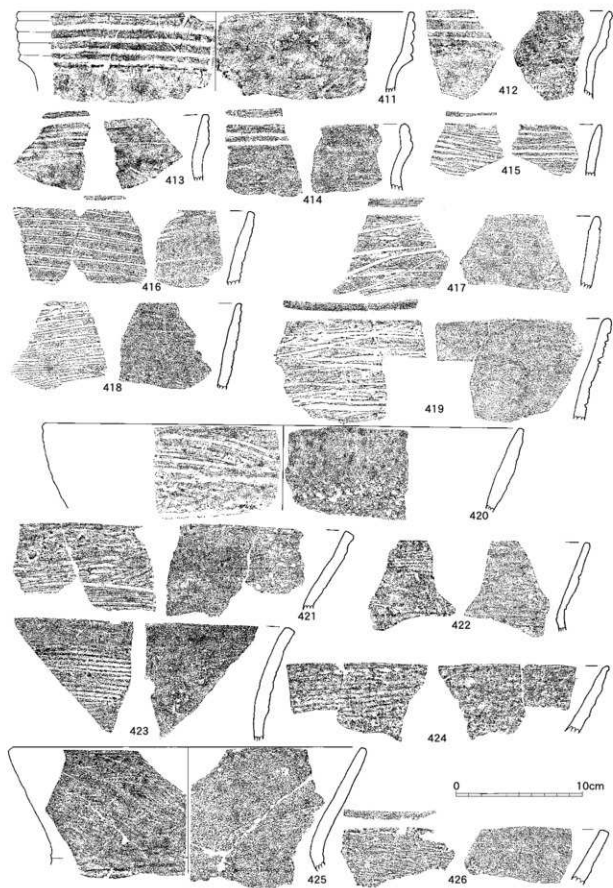
452～459は緩やかな「く」の字の屈曲やリボン状の突起をもつ胴部の破片である。454は頸部に大きなリボン状の突起が付く。459・460は胴部の屈曲部のやや上に、あまりはつきりしない形のリボン状の突起が付く。

#### 中鉢形土器 (第42図)

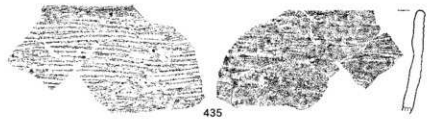
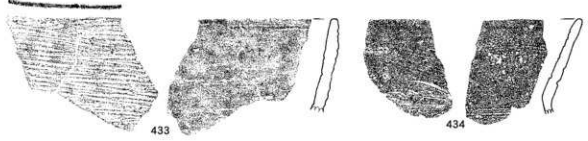
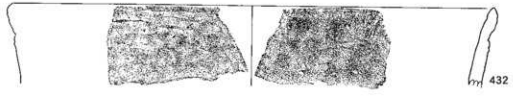
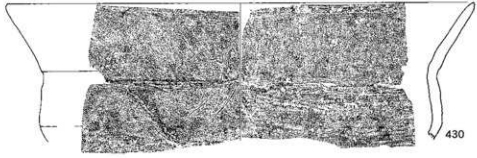
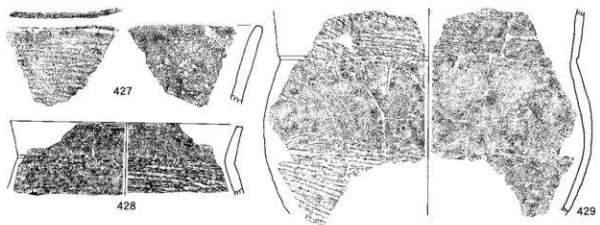
小径であったり器壁が薄かったり、精製土器であったりする土器の一群を深鉢形土器と浅鉢形土器のどちらにも当てはまらないものを中鉢形土器として分類した。

460～466は緩やかに外反し、外傾する精製土器である。460・463は口縁部が緩やかに外反し、内側に沈線が入る。467～472は口縁部に直交する。467は貝殻条痕を施された口縁部に穿孔された補修孔を持つ。472は穿孔途中の凹みを持つ。469～471は口縁部が肥厚する。

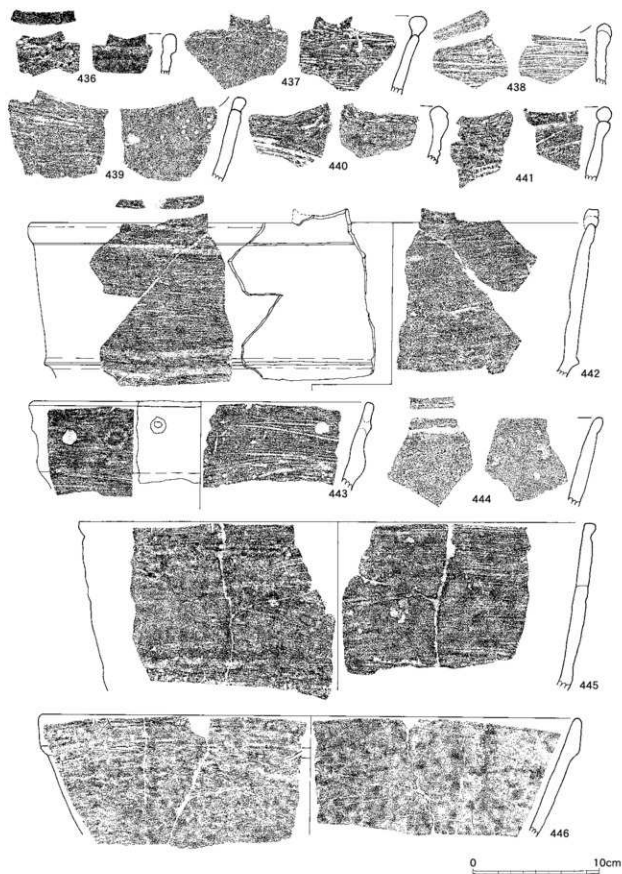
473・474は口縁部が内傾する。473は口縁部が肥厚し段を持つ。



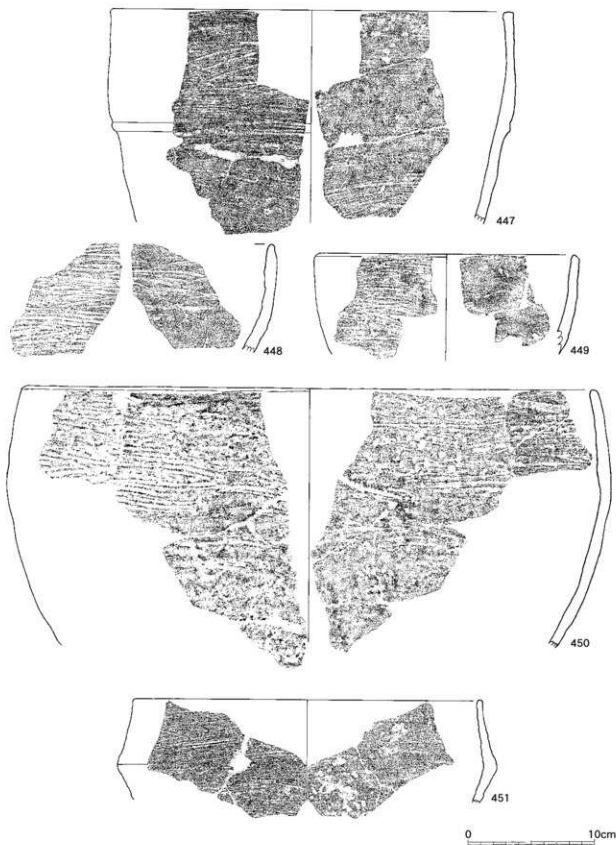
第37图 瓦類土器（深鉢形土器）



第38图 泥類土器 (深鉢形土器)

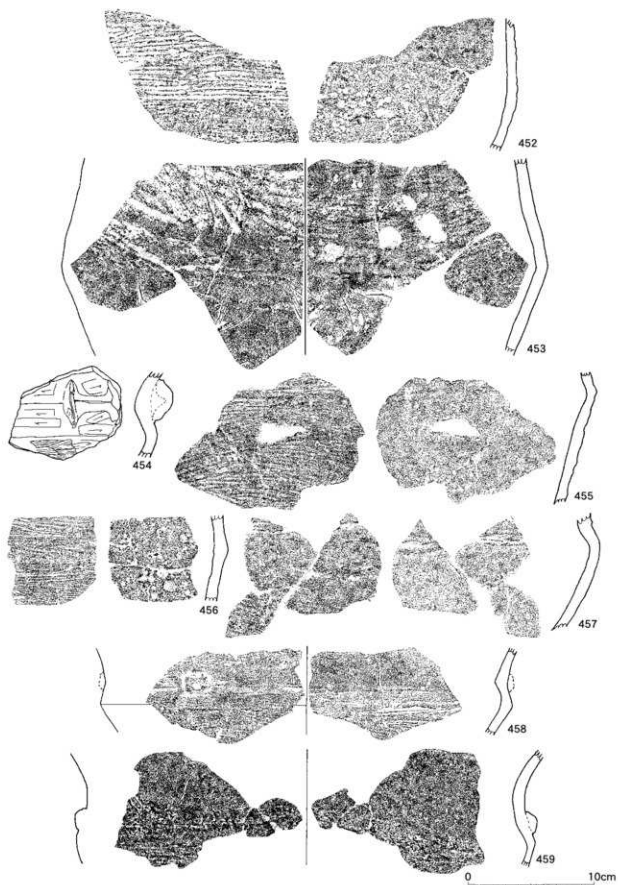


第39图 皿類土器（深鉢形土器）1

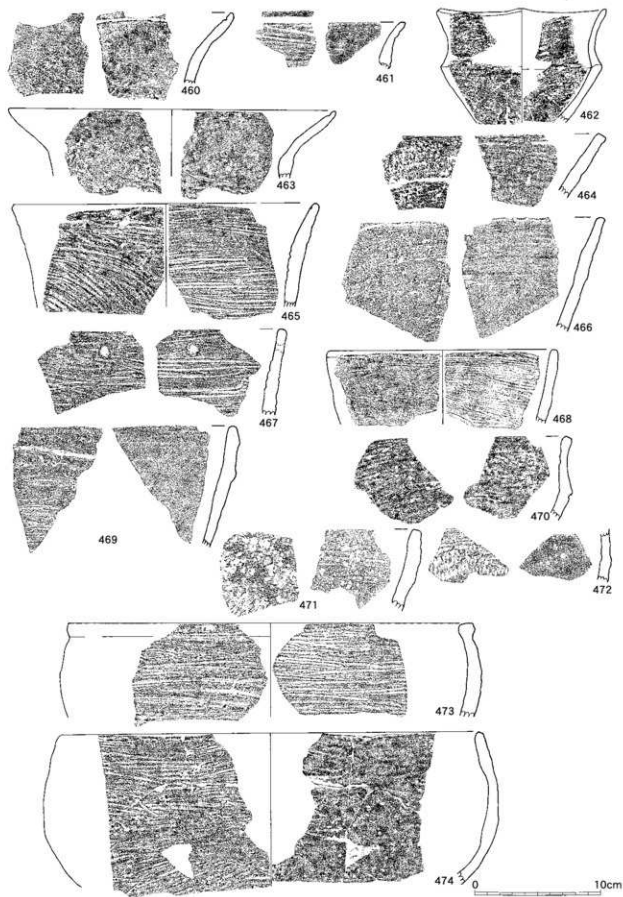


第40図 皿類土器（深鉢形土器）2

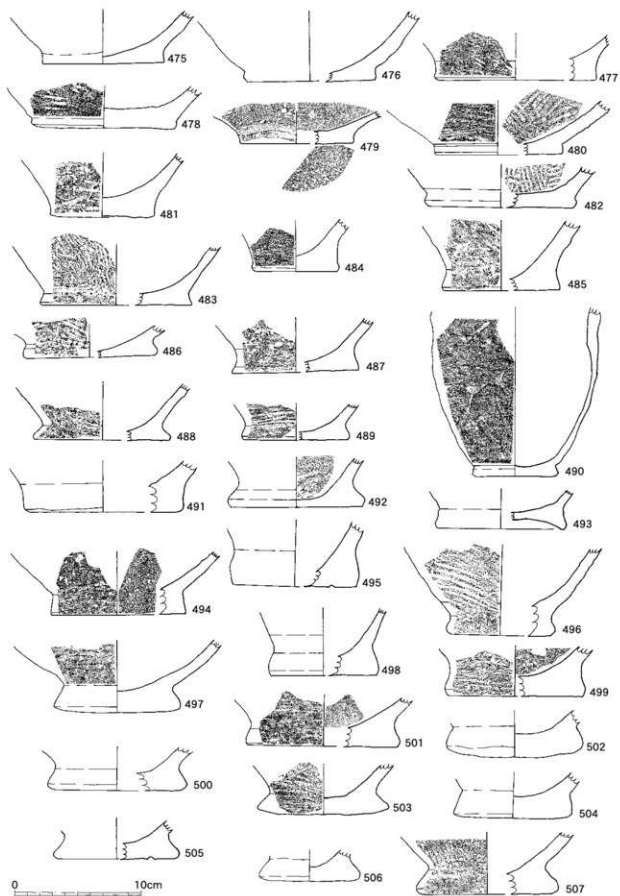




第41圖 Ⅹ類土器（深鉢形土器）胴部



第42图 XI类土器 (中鉢形土器)



第43圖 X類土器（深鉢形土器）底部



### 浅鉢形土器 (第44回～第48回)

口縁部から頸部の長さや沈線、玉縁の有無、口縁部の形状や全体の器形など長さや形状、形態を加味しながら分類を試みた。

508～544のⅢ類土器は、肩部が「く」の字に内側へ屈曲する精製土器である。511は口縁部が短いながら、大きく外に反する。531は補修孔を持つ。542～544は口縁部が広く、肩部の屈曲の短い精製土器である。543は補修孔を持つ。

545～563, 580のⅣ類土器は、肩部が丸みをおびる精製土器である。口縁部が、頸部から肩部までの長さより短く、沈線や玉縁、リボン状の突起を口縁部に持つものもある。553・554・556はリボン状の突起を口縁部に持つ。562は頸部と胴部に沈線を持つ。

564～577のⅤ類土器は、口縁部が平坦、あるいは山形の器形を持ち、胴部に沈線あるいは丹塗りを伴う精製土器である。565・566・568は口縁部だが、

小破片のため平坦な口縁として図化した。山形口縁の可能性が高い。573～576は沈線の中に丹が残る。

579, 581～595は椀型の浅鉢形土器である。581は口縁部に沈線を持つ。585は口縁部が内湾する。588・593は補修孔を持つ。

596～604はどの分類にも当てはめることのできなかった精製浅鉢である。596は棒状の工具で器面に縦横の細い沈線が刻まれている。598は口縁部に斜位の貼付刻目突帯文が施されている。597は長方形の小さな突帯が付くが、部位は不明である。

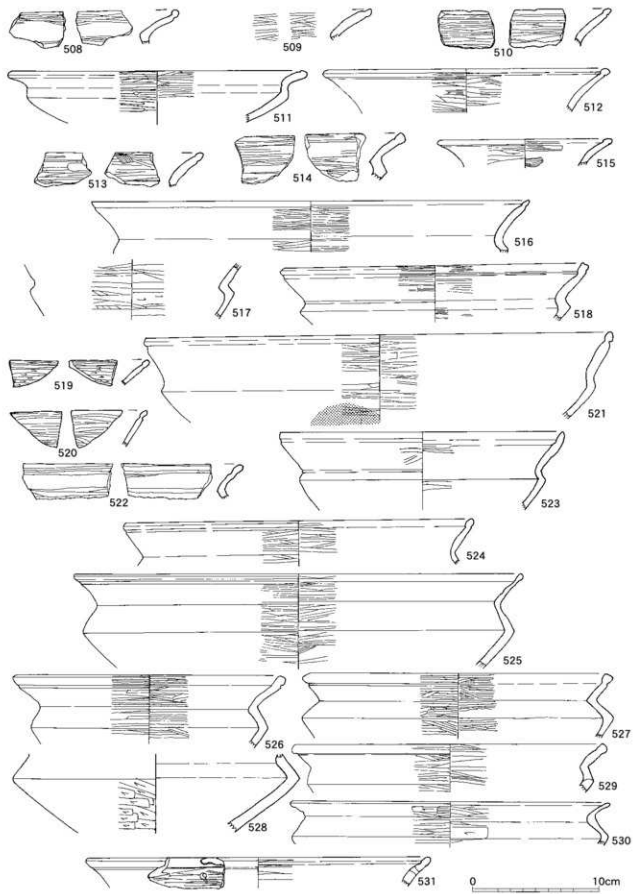
600はリボン状の突起を口縁部に、601は口縁部と頸部の間に持つ。599は玉縁の山形口縁で丸底の土器である。602は大きなラッパ状の突帯を口縁部に持つ。603は棒状の突帯を口縁部に持ち内湾する。604は大型の器形の胴部で、精製の鉢形土器である。

器形番号	出土層	出土位置	内面		胎土	胎色	外面		内面	備考
			内	外			胎土	胎色		
508	F-9	Ⅱ	透灰	明黄緑	A, B	沈線, 玉縁	玉縁	玉縁		玉縁
509	G-7	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	沈線, 玉縁	玉縁	玉縁		
510	C-3	Ⅱ	灰黄	にぶい黄褐色	A, B	沈線, 玉縁	玉縁	玉縁		
511	C-3	Ⅱ	透灰	にぶい黄褐色	A, B	ヘラツズリ, 玉縁	玉縁	玉縁		
512	G-7	Ⅱ	灰	透灰	A, B	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	玉縁		玉縁
513	C-4	Ⅱ	透灰	透灰	A, B	沈線, ヘラツズリ, 玉縁	沈線, ヘラツズリ	ヘラツズリ		
514	H-10	Ⅱ	にぶい黄褐色	透灰	A, B	沈線, ヘラツズリ, 玉縁	沈線, 玉縁	玉縁		
515	H-6	Ⅱ	黄灰	透灰	A, B	沈線, ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ	ヘラツズリ		
516	H-6	Ⅱ	黄灰	透灰	A, B	沈線, 玉縁	沈線, 玉縁	ヘラツズリ		玉縁
517	H-6	Ⅱ	黄灰	にぶい黄褐色	A, B	沈線, 玉縁	沈線, 玉縁	玉縁		
518	F-7	Ⅱ	灰	灰	A, B	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	玉縁		
519	J-8	Ⅱ	透灰	透灰	A, B	沈線, 玉縁	沈線, 玉縁	玉縁		
520	G-7	Ⅱ	透灰	透灰	A, B	沈線, 玉縁	沈線, 玉縁	玉縁		
521	G-7	Ⅱ	黄灰	透灰	A, B	沈線, ヘラツズリ	沈線, ヘラツズリ	ヘラツズリ		
522	C-3	Ⅱ	黄灰	にぶい黄褐色	A, B	沈線, ヘラツズリ	ヘラツズリ	ヘラツズリ		玉縁
523	H-10	Ⅱ	透灰	にぶい黄褐色	A, B	ヘラツズリ, 玉縁	沈線, 玉縁	ヘラツズリ		
524	C-3	Ⅱ	黄灰	にぶい黄褐色	A, B	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁		
525	H-10	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	玉縁	玉縁	玉縁		
526	D	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B, C	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁		
527	F-7	Ⅱ	黄灰	透灰	A, B	沈線, 玉縁	玉縁	玉縁		
528	F-6	Ⅱ	黄灰	透灰	A, B	沈線, 玉縁	玉縁	玉縁		
529	C-4	Ⅱ	黄灰	明黄緑	A, B, C	ヘラツズリ	ヘラツズリ	ヘラツズリ		
530	C-4	Ⅱ	にぶい黄褐色	透灰	A, B	ヘラツズリ	ヘラツズリ	ヘラツズリ		
531	H-10	Ⅱ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	A, B	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁		
532	H-9	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁		
533	H-6	Ⅱ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	A, B, C	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁		
534	H-4	Ⅱ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	A, B	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁		
535	C-4	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	玉縁	玉縁	玉縁		
536	C-4	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	玉縁	玉縁	玉縁		
537	C-4	Ⅱ	にぶい黄褐色	透灰	A, B	沈線, ヘラツズリ, 玉縁	玉縁	玉縁		
538	H-7	Ⅱ	にぶい黄褐色	透灰	A, B	玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁		
539	H-3	Ⅱ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	A, B	沈線, 玉縁	玉縁	玉縁		
540	F-7	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	玉縁, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁		
541	H-8	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	沈線, ヘラツズリ, 玉縁	玉縁	玉縁		
542	H-8	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁		
543	C-5	Ⅱ	黄灰	にぶい黄褐色	A, B	ヘラツズリ	玉縁	玉縁		
544	F-8	Ⅱ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	A, B	ヘラツズリ	ヘラツズリ	ヘラツズリ		補修孔

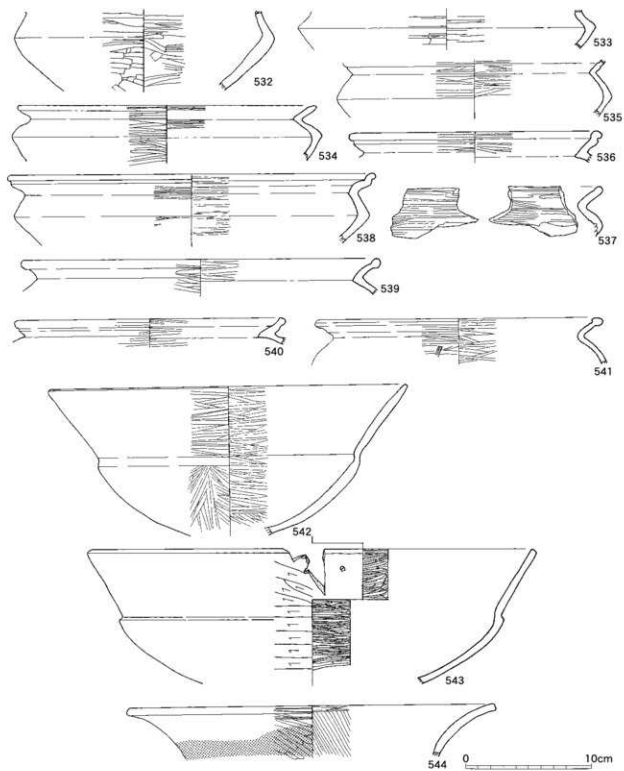
器形番号	出土層	出土位置	内面		胎土	胎色	外面	内面	備考
			内	外					
545	I-6	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	玉縁	玉縁	玉縁	
546	G-11	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	沈線, 玉縁	玉縁	玉縁	
547	F-11	Ⅱ	にぶい黄褐色	透黄緑	A, B	沈線, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	玉縁	
548	K-9	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	沈線, 玉縁	玉縁	玉縁	
549	G-11	Ⅱ	黄灰	にぶい黄褐色	A, B	沈線, 玉縁	玉縁	玉縁	
550	G-11	Ⅱ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	A, B	沈線, 玉縁	玉縁	玉縁	
551	H-9	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	
552	H-8	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	沈線, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	
553	E-6	Ⅱ	黄灰	にぶい黄褐色	A, B	ヘラツズリ, 玉縁	玉縁	玉縁	
554	E-6	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	ヘラツズリ, 玉縁	
555	L-10	Ⅱ	灰黄	黄灰	A, B	玉縁	沈線, 玉縁	玉縁	
556	F-7	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	玉縁	玉縁	玉縁	
557	F-7	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	玉縁	玉縁	ヘラツズリ	
558	C-5	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	玉縁	玉縁	玉縁	
559	F-7	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	玉縁	玉縁	玉縁	
560	C-5	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	沈線, 玉縁	沈線, 玉縁	玉縁	
561	F-7	Ⅱ	にぶい黄褐色	黄灰	A, B	玉縁	玉縁	玉縁	
562	C-4	Ⅱ	にぶい黄褐色	黄灰	A, B	ヘラツズリ, 玉縁	沈線, 玉縁	玉縁	
563	H-5	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	玉縁	玉縁	玉縁	
564	E-7	Ⅱ	透灰	透灰	A, B	沈線, ヘラツズリ, 玉縁	沈線, 玉縁	玉縁	

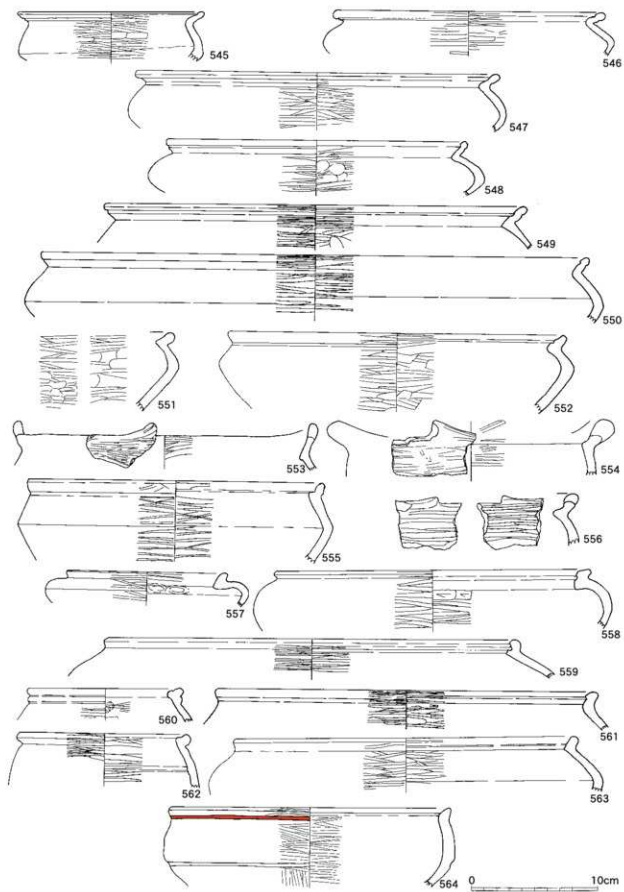
器形番号	出土層	出土位置	内面		胎土	胎色	外面	内面	備考
			内	外					
565	O-4	Ⅱ	灰黄	黄灰	A, B	沈線, 玉縁	玉縁	玉縁	
566	C-4	Ⅱ	灰白	灰白	A, B	玉縁	玉縁	ヘラツズリ	
567	H-9	Ⅱ	透灰	明黄緑	A, B	沈線, 玉縁	玉縁	玉縁	
568	H-9	Ⅱ	透灰	黄灰	A	玉縁	玉縁	玉縁	
569	C-4	Ⅱ	透灰	透灰	A, B	ヘラツズリ, 玉縁	沈線, 玉縁	玉縁	
570	C-3	Ⅱ	黄灰	灰	A, B	ヘラツズリ	玉縁	玉縁	
571	K-8	Ⅱ	灰白	灰	A, B, C	玉縁	玉縁	玉縁	
572	F-10	Ⅱ	灰	灰白	A, B	ヘラツズリ	ヘラツズリ	ヘラツズリ	
573	C-3	Ⅱ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	A, B	沈線, ヘラツズリ	ヘラツズリ	ヘラツズリ	
574	K-9	Ⅱ	明黄緑	透灰	A, B	沈線, 玉縁	玉縁	玉縁	
575	H-9	Ⅱ	黄灰	黄灰	A	玉縁	玉縁	ヘラツズリ	
576	H-6	Ⅱ	黄灰	黄灰	A, B	沈線, 玉縁	玉縁	ヘラツズリ	
577	C-4	Ⅱ	黄灰	黄灰	A	ヘラツズリ	玉縁	玉縁	
578	G-10	Ⅱ	黄灰	透黄緑	A, B	ヘラツズリ	ヘラツズリ, 玉縁	玉縁	
579	K-8	Ⅱ	明赤褐色	明赤褐色	A, B, C	沈線, ヘラツズリ	沈線, 玉縁	玉縁	
580	H-4	Ⅱ	灰黄	にぶい黄褐色	A, B, C	玉縁	玉縁	玉縁	



第44図 皿類土器（浅鉢形土器）1

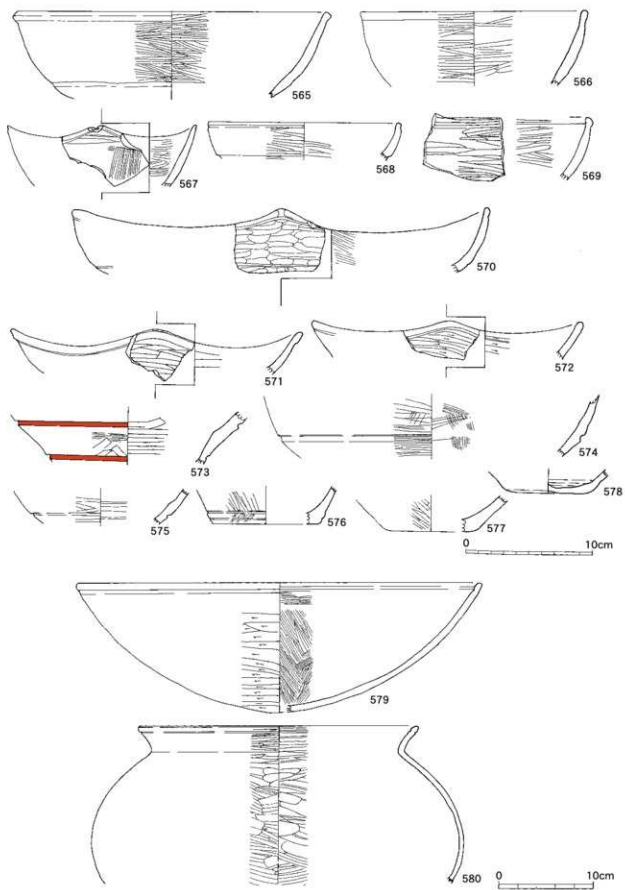


第45図 皿類土器（浅鉢形土器）2

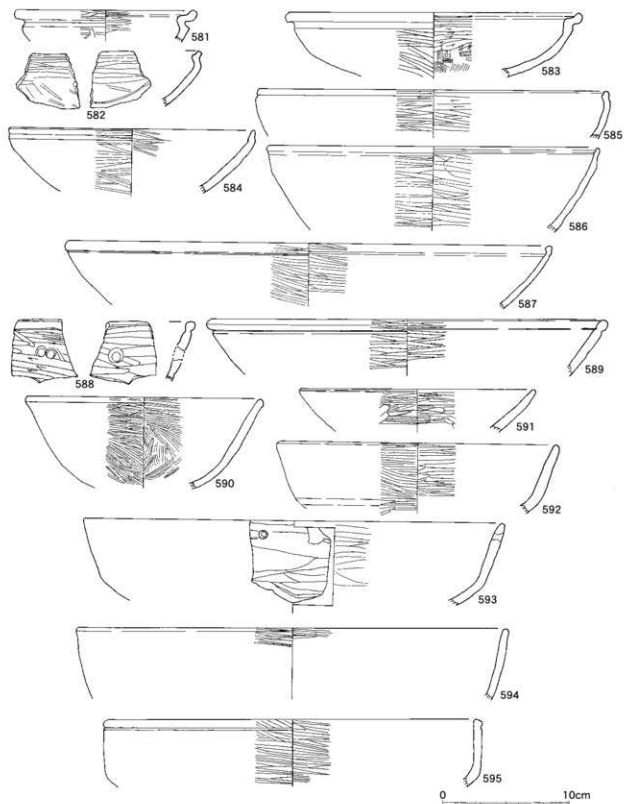


第46図 皿類土器（浅鉢形土器）1

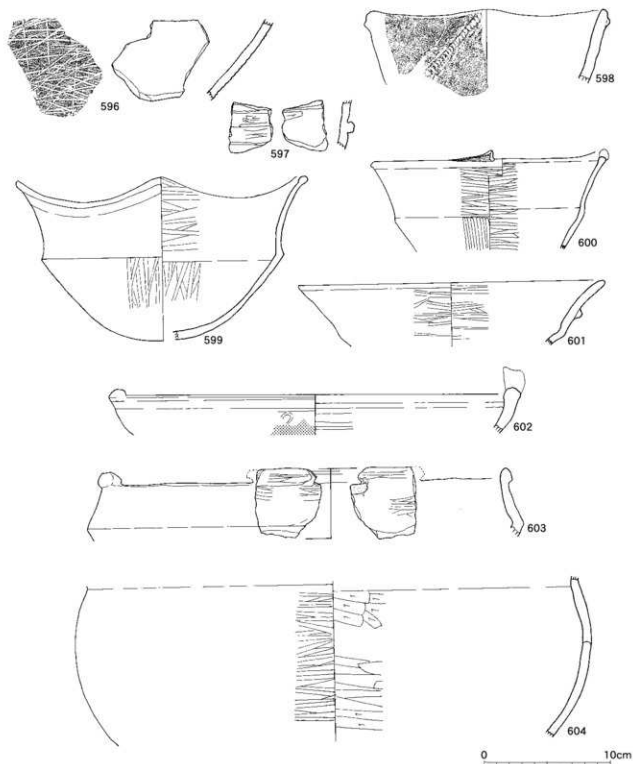




第47图 皿類土器（浅鉢形土器）1



第48図 XII類土器（浅鉢形土器）1



第49図 XI類土器（浅鉢形土器）2

(3) 遺物 (石器)

石鏃 (第50~52図)

石鏃は、遺跡の北側斜面から平坦地に掛けて、C-3~5区から11点、D-3~5区から9点、E-7・8区から2点、F-4・6~8区から17点、G-4・5区から5点、H~K-5~9区から各1点ずつ5点、L-9区から4点、トレンチD(G-7・8区)から4点、その他15点の合計72点が出土している。

形態	A 三角形	B 五角形	C 丸形	
長幅比 (縦長/幅)	a 正三角形 (a<1.5)	b 二等辺三角形 (1.5<b<2)	c 縦長な三角形 (c<=2)	
基部形状	a (平坦)	b (浅い)	c (深い)	d (U字状)

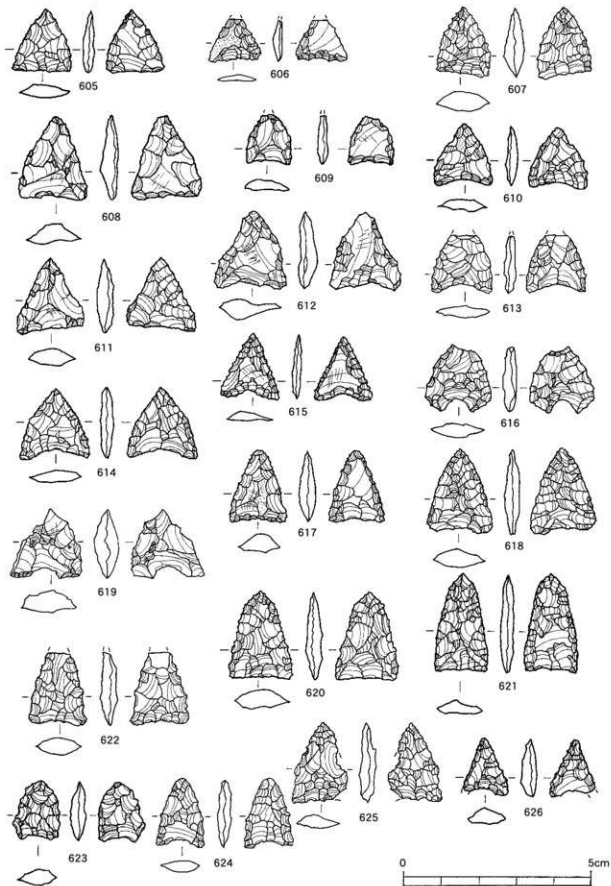
素材は黒曜石、安山岩、頁岩、チャート、蛋白石、鉄石英など豊富である。その内、黒曜石は、肉眼観察によると上牛鼻産に類似するものが3点、三船産に類似するものが1点、北西九州系(椎葉川産系2点、針尾、淀姫産系11点、腰岳産系18点)に類似するものが31点、合計35点が出土している。

分類は、左記の表のとおり、形態、長幅比率(縦身/幅)、基部形状によって行った。形態を胴部と基部の比率で、ほぼ三角形をA、ほぼ五角形をB、ほぼ丸形をCの3類に分けた。長幅比は、1以上1.5未満のほぼ正三角形のもの(正三角形)をa、1.5以上2未満のほぼ二等辺三角形のもの(二等辺三角形)をb、2以上の縦長の三角形のもの(縦長の三角形)をcの3類に分けた。基部形状は、決りの深さによって、平坦なものをa、浅いものをb、深いもの(決りが深く形態がV字になるもの)をc、決りが丸くU字状になるものをd、の4類に分類した。

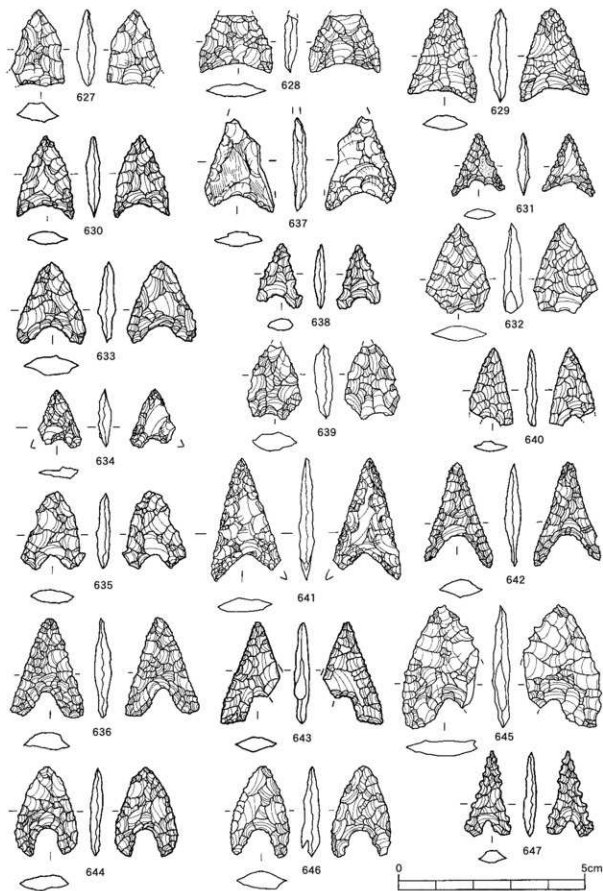
石鏃は打製で、ほとんどのものが入念な交互剥離により調整されている。72点中28点が破損しており、先端部が破損しているものは10点、基端の片方が破損しているものは9点、基端の両方が破損しているものは1点、形状が不明なものが8点である。なお、形状が不明な8点は、掲載していない。

XVI類土器

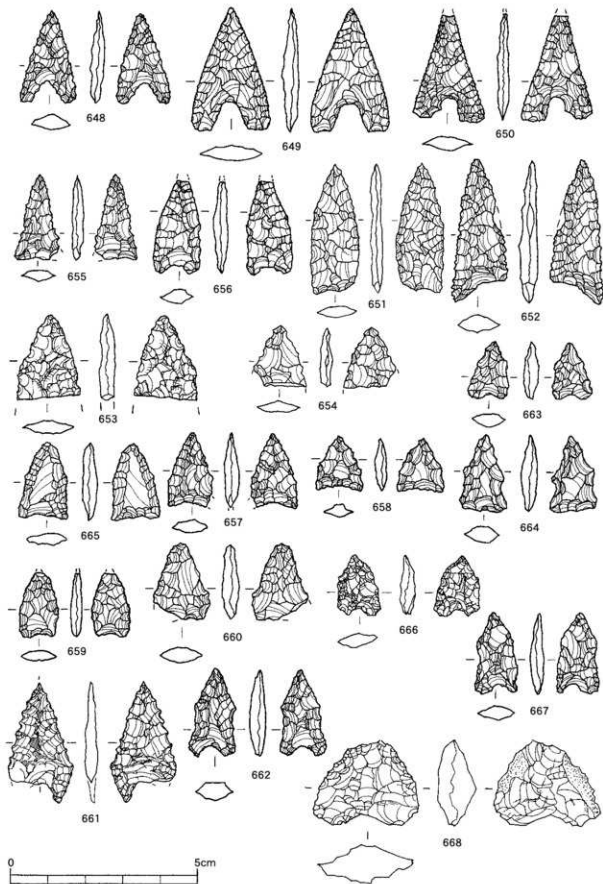
押回番号	報告番号	出土区	層位	色調		胎土	外面	内面	備考
				内	外				
48 図	581	B-5	Ⅲ	褐灰	褐灰	A, B	沈線, ミガキ	ミガキ	
	582	E-7	Ⅲ	灰黄褐	褐灰	A, B	ミガキ	ミガキ	
	583	B-5	Ⅲ	にぶい黄橙	褐灰	A, B	沈線, ヘラケズリ, ミガキ	ヘラケズリ, ミガキ	
	584	C-4	Ⅳ	灰黄褐	灰黄褐	A, B	沈線, ミガキ	ミガキ	
	585	C-5	Ⅲ	褐灰	にぶい黄橙	A, B	沈線, ヘラケズリ, ミガキ	ミガキ	
	586	E-7	Ⅲ	褐灰	黒褐	A, B	沈線, ミガキ	ミガキ	
	587	H-6	Ⅲ	にぶい褐	にぶい褐	A, B	沈線, ミガキ	ミガキ	
	588	I-6	Ⅲ	にぶい褐	にぶい橙	A, B, C	沈線, ヘラケズリ, ミガキ	ヘラケズリ	穿孔, 補修孔
	589	I-6	Ⅲ	黒褐	にぶい橙	A, B	沈線, ヘラケズリ, ミガキ	ヘラケズリ, ミガキ	
	590	I-2	Ⅲ	黒褐	黒褐	A, B	ヘラケズリ, ミガキ	ヘラケズリ, ミガキ	
	591	E-5	Ⅲ	褐灰	灰黄	A, B	ヘラケズリ後ミガキ	ヘラケズリ後ミガキ	
	592	K-9	Ⅱ	にぶい黄橙	浅黄橙	A, B, C	ヘラケズリ, ミガキ	ヘラケズリ, ミガキ	
	593	L-10	Ⅱ	にぶい黄橙	灰黄	A, B	ヘラケズリ, ミガキ	ヘラケズリ, ミガキ	補修孔なし
	594	L-9	Ⅲ	黄灰	黄灰	A, B	ミガキ	ミガキ	
	595	L-10	Ⅲ	黒褐	黒褐	A, B	沈線, ミガキ	ミガキ	
	596	ナシ			黄	A, B	沈線(縦・横・斜), ヘラケズリ	ミガキ	
	49 図	597	E-7	Ⅲ	明黄褐	にぶい黄橙	A, B, C	ヘラケズリ	ヘラケズリ
598		C-4	Ⅲ	黄灰	にぶい黄	A, B, C, 砂粒	ミガキ	ミガキ	断面粘付突筈
599		G-6	Ⅲ	灰	橙	A, B, C	ミガキ	ミガキ	
600		I-6	Ⅲ	灰	灰	A, B	ミガキ	ミガキ	
601		G-5	Ⅲ	灰	灰黄	A, B	ヘラケズリ, ミガキ	ミガキ	リボン状突起
602		E-7	Ⅲ	灰	灰	A, B	ミガキ	ヘラケズリ	ラッパ状突起
603		E-7	Ⅲ	橙	橙	A, B	ヘラケズリ, ミガキ	ミガキ	棒状突起
604	B-4	Ⅲ	灰白	灰	A, B	ヘラミガキ	ヘラケズリ		



第50図 縄文時代晩期石器1 (石鏃)



第51圖 繩文時代晚期石器2 (石鏃)

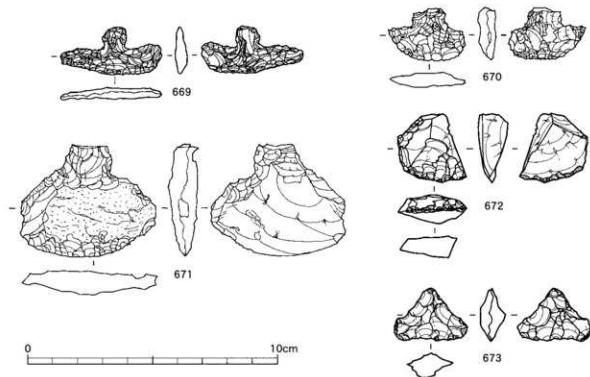


第52図 縄文時代晩期石器3 (石鏃)

## 縄文時代晩期石器 1~3

押図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	鎌身 cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
50 図	605	Ⅲ	石鎌	F-4	安山岩	1.66	1.6	0.3	0.64	A a a
	606	Ⅲ	石鎌	D-3	珉質頁岩	1.12	1.47	0.2	0.32	A a a
	607	Ⅲ	石鎌	T r - D	安山岩	1.9	1.45	0.5	1.05	A a a
	608	Ⅲ	石鎌	D-3	無珉島安山岩	2.25	1.85	0.48	1.56	A a a
	609	Ⅲ	石鎌	D-3	無珉島安山岩	1.35	1.2	0.3	0.46	A a a
	610	Ⅲ	石鎌	F-10	安山岩	1.65	1.55	0.3	1.01	A a a
	611	Ⅲ	石鎌	D-3	安山岩	2.02	1.82	0.45	1.14	A a a
	612	Ⅲ	石鎌	C-4	安山岩	2.1	1.9	0.5	1.41	A a b
	613	Ⅲ	石鎌	E-3	安山岩	1.55	1.6	0.25	0.66	A a b
	614	Ⅲ	石鎌	F-7	安山岩	1.9	1.9	0.35	0.96	A a b
	615	Ⅲ	石鎌	G-10	黒曜石 (上牛鼻)	1.7	1.55	2	0.45	A a b
	616	Ⅲ	石鎌	T r - D	黒曜石 (腰岳)	1.8	1.73	0.35	0.93	A a b
	617	Ⅲ	石鎌	F-7	安山岩	1.9	1.5	0.45	1.04	A a b
	618	Ⅲ	石鎌	C-4	安山岩	2.3	1.75	0.4	1.26	A a b
	619	Ⅲ	石鎌	T r - D	黒色安山岩	1.85	1.95	0.65	1.61	A a b
	620	Ⅲ	石鎌	F-7	安山岩	2.35	1.7	0.45	1.41	A a b
	621	Ⅲ	石鎌	F-8	黒曜石 (腰岳)	2.65	1.45	0.35	1.13	A a b
	622	Ⅲ	石鎌	F-8	安山岩	1.95	1.55	0.5	1.28	A b b
	623	Ⅲ	石鎌	F-7	黒曜石 (腰岳)	1.6	1.3	0.4	0.66	B a b
	624	Ⅲ	石鎌	E-7	黒曜石 (針尾・定姥)	1.85	1.3	0.35	0.71	B a b
	625	Ⅲ	石鎌	G-5	黒曜石 (腰岳)	1.15	1.5	0.4	0.77	B a b
	626	Ⅲ	石鎌	C-3	黒曜石 (針尾・定姥)	1.55	1.2	0.4	0.46	B a b
	627	Ⅲ	石鎌	L-9	安山岩	2.03	1.4	0.5	1.01	C a b
	628	Ⅲ	石鎌	攪乱	黒曜石 (腰岳)	1.51	1.9	0.35	0.81	A a b
	629	Ⅲ	石鎌	C-3	黒曜石 (針尾・定姥)	1.5	1.85	0.45	1.5	A a b
	630	Ⅲ	石鎌	C-3	黒曜石 (針尾・定姥)	2.19	1.48	0.35	0.85	A a c
	631	Ⅲ	石鎌	D-4	珉質安山岩	1.68	1.4	0.35	0.31	A a c
	632	Ⅲ	石鎌	C-5	黒曜石 (針尾・定姥)	2.4	1.75	0.45	1.43	A a c
633	Ⅲ	石鎌	F-6	安山岩	2.15	1.8	0.5	1.16	A a c	
634	Ⅲ	石鎌	G-5	黒曜石 (上牛鼻)	1.55	1.15	3	0.46	A a c	
635	Ⅲ	石鎌	表採	黒曜石 (腰岳)	2.1	1.7	0.35	0.85	A a c	
636	Ⅲ	石鎌	C-5	黒曜石 (腰岳)	2.65	1.95	0.45	1.31	A a c	
637	Ⅲ	石鎌	L-9	安山岩	2.5	1.8	0.4	0.4	A b c	
638	Ⅲ	石鎌	J-7	黒曜石 (腰岳)	1.71	1.13	0.4	0.38	A b c	
639	Ⅲ	石鎌	T r - A	チャート	2.01	1.48	0.5	1.16	A b c	
640	Ⅲ	石鎌	F-4	頁岩	2.1	1.23	0.3	0.58	A b c	
641	Ⅲ	石鎌	表採	黒曜石 (腰岳)	3.25	1.8	0.35	0.92	A b c	
642	Ⅲ	石鎌	D-4	黒曜石 (針尾・定姥)	2.8	1.8	0.45	0.92	A b c	
643	Ⅲ	石鎌	C-4	鉄石英	2.72	1.58	0.4	1.1	A b c	
644	Ⅲ	石鎌	K-9	珉質頁岩	2.4	1.7	0.4	0.98	A a d	
645	Ⅲ	石鎌	D-3	黒曜石 (針尾・定姥)	3.27	1.97	0.45	2.29	A b d	
646	Ⅲ	石鎌	F-7	安山岩	2.45	1.55	0.35	1.01	A b d	
647	Ⅲ	石鎌	G-5	黒曜石 (権葉川)	2.3	1.3	0.3	0.44	A b d	
648	Ⅲ	石鎌	F区	黒曜石 (針尾・定姥)	2.5	1.5	0.4	0.8	A b d	
649	Ⅲ	石鎌	F-7	安山岩	3.31	2.1	0.5	2.07	A b d	
650	Ⅲ	石鎌	C-4	チャート	2.8	1.9	0.3	1.32	A b d	
651	Ⅲ	石鎌	F-10	安山岩	3.5	1.3	0.3	1.49	A c b	
652	Ⅲ	石鎌	I-6	黒曜石 (腰岳)	3.82	1.5	0.45	1.85	A c b	
653	Ⅲ	石鎌	表採	チャート	2.3	1.2	0.4	0.84	A c b	
654	Ⅲ	石鎌	F-6	チャート	1.59	1.4	0.3	0.59	A c b	
655	Ⅲ	石鎌	F-7	チャート	2.3	1.2	0.3	0.71	A b b	
656	Ⅲ	石鎌	F-4	チャート	2.5	1.3	0.35	1.02	A b b	
657	Ⅲ	石鎌	L-9	漂白石	2	1.2	0.4	0.82	A b b	
658	Ⅲ	石鎌	C-4	安山岩	1.5	1.25	0.3	0.52	A b b	
659	Ⅲ	石鎌	H-5	漂白石	1.7	1.05	0.3	0.61	A b b	
660	Ⅲ	石鎌	F-8	漂白石	2.03	1.45	0.4	1.1	A b b	
661	Ⅲ	石鎌	T r - D	珉質頁岩	3.15	1.85	0.4	1.3	A b b	
662	Ⅲ	石鎌	F-7	黒曜石 (腰岳)	2.3	1.3	0.45	1.03	A b b	
663	Ⅲ	石鎌	F-7	黒曜石 (腰岳)	1.53	1.1	0.4	0.42	A a b	
664	Ⅲ	石鎌	G-5	頁岩	2.1	1.3	0.45	0.86	A a b	
665	Ⅲ	石鎌	F-7	チャート	2.05	1.34	0.4	1.09	A a b	
666	Ⅲ	石鎌	D-3	黒曜石 (腰岳)	1.6	1.7	0.4	0.66	A a b	
667	Ⅲ	石鎌	表採	黒曜石 (腰岳)	2.17	1.15	0.3	0.72	A a b	
668	Ⅲ	石鎌	L-9	黒曜石 (上牛鼻)	2.45	2.75	1.1	5.3	A a b	





第53図 縄文時代晩期石器4（石ヒ・スクレイパー）

石ヒ・スクレイパー（第53図）

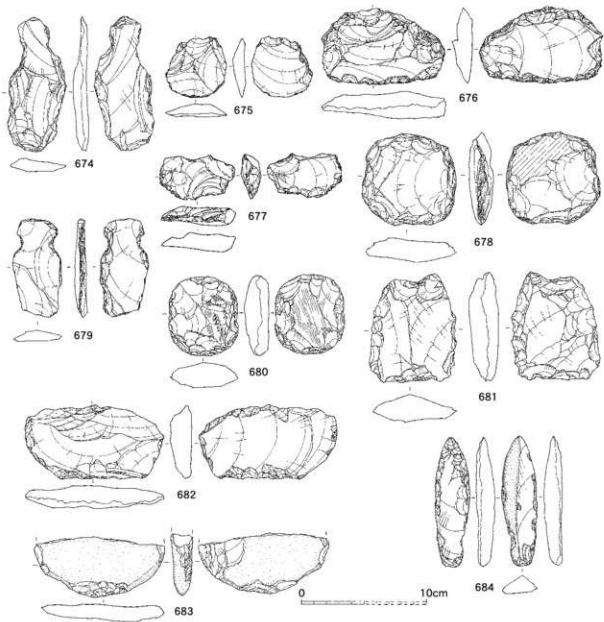
669・670は小型の石ヒで、石材は669がチャート、670は黒曜石である。横型で全体に両面からの細かな交互剥離が施される。両側縁には、使用による微細な剥離が観られる。671は54×43mmの横型の石ヒで、石材は黒曜石である。自然面を残し、片面を剥離調整している。

672・673はスクレイパーである。672は下部に押圧剥離による加工を施し、刃部形成が行われている。673は硬質頁岩製で、背部に瘤状の突起を形成し、突起と左刃部背面に摩耗がみられる。

上記の黒曜石の原産地は、肉眼観察によると、上牛鼻産系のものである。

年代	種別	種名	出土区	石材	長さ		幅	厚さ	重さ	備考
					cm	mm				
53 図	669	石ヒ	C-3	チャート	1.9	4.1	0.4	2.5		
	670	石ヒ	C-3	黒曜石(上牛鼻)	2.1	3.1	0.6	3.62		
	671	石ヒ	C-3	黒曜石(上牛鼻)	4.5	5.4	1.1	22.63		
	672	スクレイパー	D-3	黒曜石(上牛鼻)	2.8	2.3	1.2	6.81		
	673	スクレイパー	G-5	頁岩	2.9	2	1	3.12		
	674	スクレイパー	H-5	頁岩	10.8	4.8	1.1	51.72		
	675	スクレイパー	H-5	頁岩	4.7	4.7	0.96	23.96		
	676	スクレイパー	H-5	頁岩	9.9	6	2.1	135		
	677	スクレイパー	H-5	黒曜石(厚巻)	5.9	3.3	1.6	32.16		
	678	スクレイパー	F-4	頁岩	6.5	7.4	1.8	135		
54 図	679	スクレイパー	K-8	ホルンフェルス	7.7	3.9	0.85	30.54		
	680	スクレイパー	H-5	頁岩	6.45	5.95	2	92.44		
	681	スクレイパー	H-5	頁岩	8.7	7.1	2.25	193		
	682	スクレイパー	E-6	頁岩	5.8	11.1	1.7	90		
	683	スクレイパー	L-10	安山岩	4.8	10.5	1.5	107.82		
	684	スクレイパー	K-8	頁岩	10.4	2.9	1.45	40.98		

年代	種別	種名	出土区	石材	長さ		幅	厚さ	重さ	備考
					cm	mm				
55 図	685	石鏃	F-6	綠泥岩	2.85	1.8	1.7	7.7		
	686	石鏃	G-5	砂岩	4.2	2.3	2.65	32.87		
	687	石鏃	D-3	燧石	3	2.1	0.9	7.88		
	688	石鏃	H-5	安山岩	5.25	6.1	1.96	97.72		
	689	石鏃	C-4	安山岩	6.1	6.8	1.55	92.95		
	690	石鏃	I-6	安山岩	4.7	8.1	1.4	82.94		
	691	石鏃	H-5	安山岩	5.5	6.8	1.56	82.89		
	692	石鏃	D-3	安山岩	6.2	7.2	2	112.93		
	693	石鏃	H-5	安山岩	6.95	7.9	2.25	195		
	694	石鏃	D-5	安山岩	7.2	7	2.1	190		
	695	石鏃	I-6	安山岩	9.15	8.3	2.3	190		



第54図 縄文時代晩期石器5（スクレイパー）

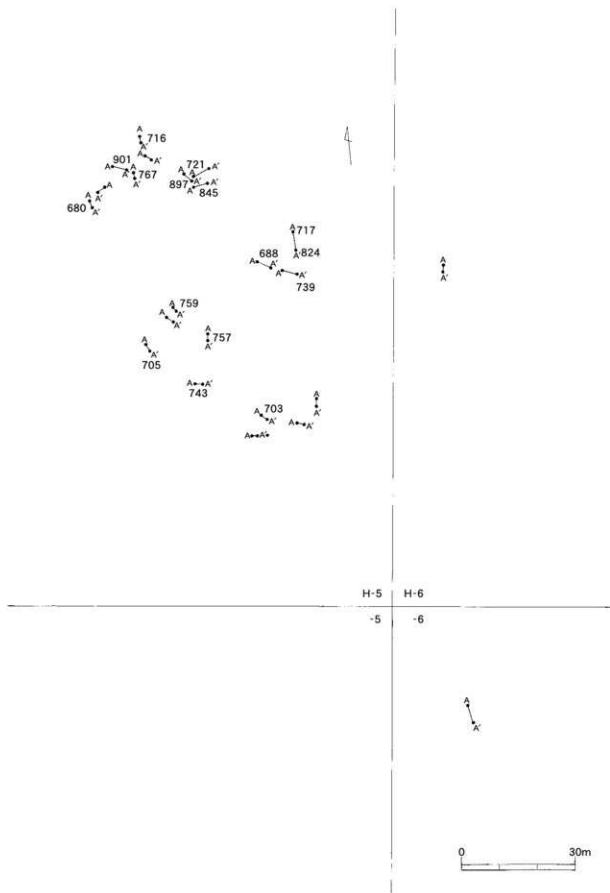
#### スクレイパー（第54図）

674・679は縦型のスクレイパーである。674は両面から細かな交互剥離が施され、細かな段をつけて刃部を形成している。側縁部に、使用痕によると思われる刃部の摩耗が見られる。679は袈りを形成し、両面から細かく微細な剥離を行い側縁部を形成している。679を除く675～682は、横型のスクレイパーである。小さく浅い角度で段を付け、刃部を形成している。676は横長の剥片を使用している。683は自然のデイサイトの円礫を用いて、側縁部に細かな形

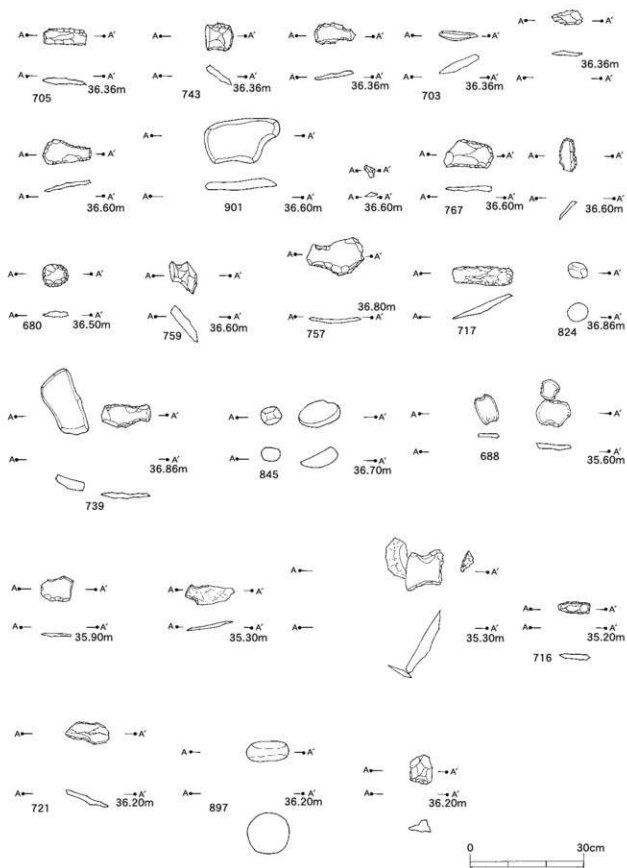
成を行っているが、半分が欠損している。684は左背面に自然の節理面を残し、側縁部及び先端部に掛けて細かな交互剥離を行い刃部を形成している。先端部の刃部には摩耗が見られる。形状や摩耗から石槌の可能性もある。

#### 晩期石器の出土状況（第55図～59図）

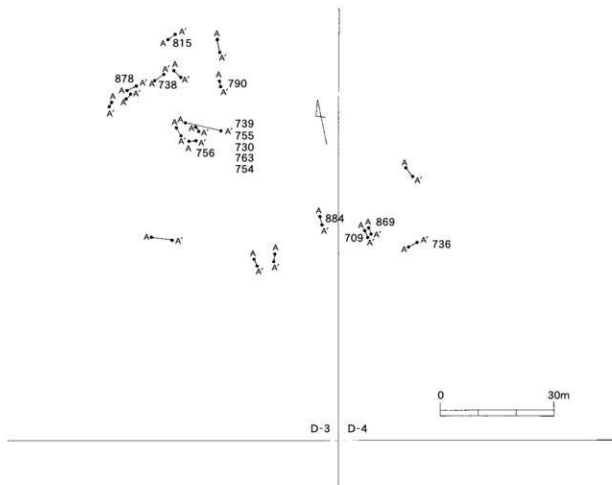
HI・5・6区、CD・4・5区と大量に石器が包含層内から出土した。石斧や石錘のデゴが2カ所見つかっているが、これも包含層内の出土である。



第55図 縄文時代晩期石器出土状況 1



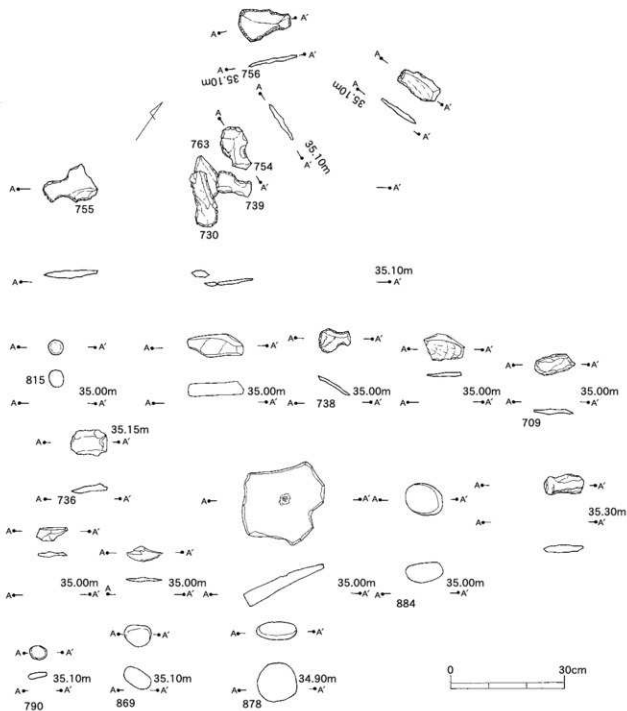
第56図 縄文時代晩期石器出土状況 2



第57図 縄文時代晩期石器出土状況 3

縄文時代晩期石器 7							
器具番号	層位	器種	出土区	石材	長さ		備考
					cm	mm	
698	Ⅱ	磨製石斧	L-9	黄岩	5.9	2.1	0.65 14.63
699	Ⅱ	磨製石斧	L-9	黄岩	7.5	2.1	1.75 36.53
700	Ⅱ	磨製石斧	G-5	黄岩	7.85	1.65	1.2 19.54
701	Ⅱ	磨製石斧	E-3	黄岩	8.9	1.9	0.8 30.22
702	Ⅱ	磨製石斧	H-5	黄岩	11.55	2.7	1.7 32.63
703	Ⅱ	磨製石斧	H-6	黄岩	12.9	4.75	1.95 160
704	Ⅱ	磨製石斧	H-5	黄岩	11.7	4.2	1 95.2
705	Ⅱ	磨製石斧	G-5	黄岩	10.1	3.25	1.3 65.37
706	Ⅱ	磨製石斧	H-6	黄岩	12.5	5.4	1.8 175
707	Ⅱ	磨製石斧	F-7	花崗岩	11.6	5.9	3.1 297.5
708	Ⅱ	磨製石斧	D-4	黄岩	11.3	5.25	1.4 91.43
709	Ⅱ	磨製石斧	D-4	黄岩	4.7	3.7	1.3 40.65
710	Ⅱ	磨製石斧	G-6	緑閃片岩	14.7	6.9	3.7 546
711	Ⅱ	磨製石斧	B-5	砂岩	7.7	7.5	3.3 250
712	Ⅱ	磨製石斧	F-7	砂岩	6.2	5.35	2.4 140
713	Ⅱ	磨製石斧	F-7	砂岩	7.9	4.5	3.0 107.57

縄文時代晩期石器 8							
器具番号	層位	器種	出土区	石材	長さ		備考
					cm	mm	
714	Ⅱ	打製石斧	H-5	黄岩	30.2	-4.1	1.5 89.77
715	Ⅱ	打製石斧	H-5	黄岩	8.9	3	1.4 50.18
716	Ⅱ	打製石斧	H-5	黄岩	36.6	4.55	1.65 170
717	Ⅱ	打製石斧	B-4	泥岩	14.75	5.75	1.4 165
718	Ⅱ	打製石斧	G-7	黄岩	14.3	3.85	2.45 160
719	Ⅱ	打製石斧	G-7	黄岩	15.4	8.35	4.95 650
720	Ⅱ	打製石斧	H-5	黄岩	12.6	5.5	1.5 130
721	Ⅱ	打製石斧	H-5	泥岩	12.15	4.45	1.15 78.15
722	Ⅱ	打製石斧	L-9	黄岩	30.4	-4.8	1.9 130
723	Ⅱ	打製石斧	G-4	砂岩	12.3	4.1	1.7 100.06
724	Ⅱ	打製石斧	F-10	ホルンフェルス	14.5	6.2	1.8 140
725	Ⅱ	打製石斧	K-9	黄岩	11.4	4.7	2.1 130
726	Ⅱ	打製石斧	L-9	黄岩	13.4	4	1.3 63.53



第58図 縄文時代晩期石器出土状況4

#### 石錘 (第60図)

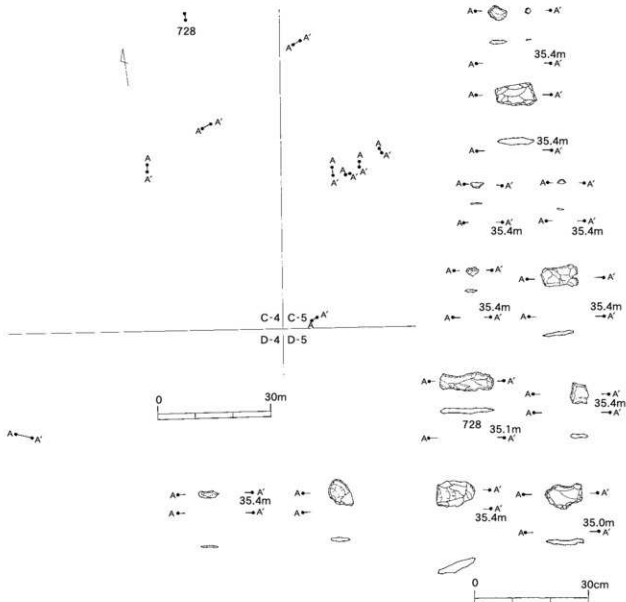
石錘は13点出土している。685～687は小型の石錘である。685は加工のしやすい珪藻岩を楕円球体に磨き調整した上に、溝を縦横に刻み込んでいる。686は上下部の形状を平坦に研磨調整している。687は滑石製品で、穿孔した部分から縦に欠損したものである。688～697は両面に自然面を残す扁平な方形、楕円形の礫を素材とし両側縁に両面から剥離し、抉

りを調整している。

#### 石斧 (第61図～第66図)

石斧は磨製石斧・局部磨製石斧・打製石斧があり、破損品を含めて69点出土している。加工方法や刃部の形状、肩部の有無によって分類を行った。

698～713は磨製石斧である。698～700は磨製製品を再加工し刃部形成したものである。形状から698～701は石のみである可能性もある。707は蛇紋岩製



第59図 縄文時代晩期石器出土状況 5

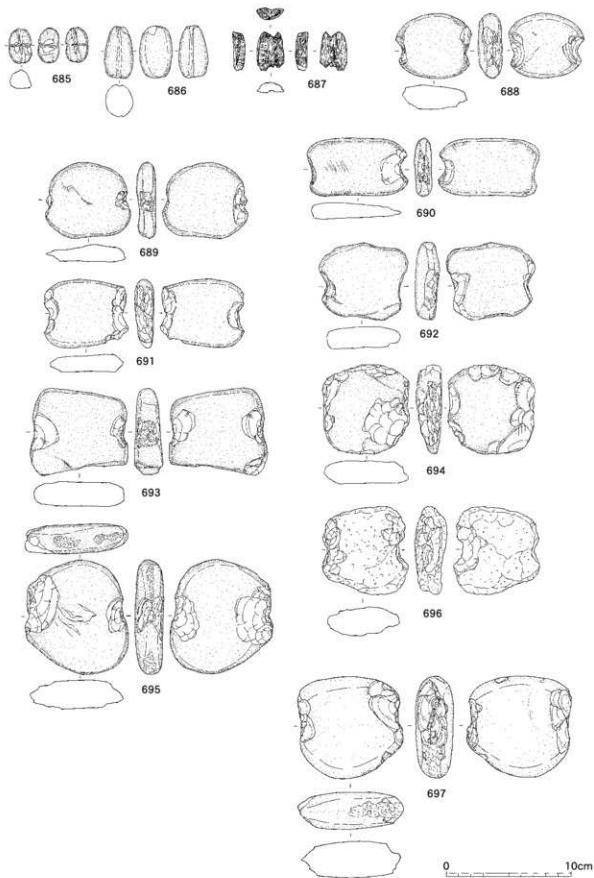
のばち型をした磨製石斧である。708は磨製石斧を横長剥片を使用し、極部的に摩耗痕がある。711～713は欠損した刃部である。713は刃部欠損後、基部を使って再加工し、刃部を形成している。

714～767は打製石斧で、714～720は短冊形の石斧である。716は頸部に、723は背面に装着痕がみられる。718は刃部、側縁部を使用により摩耗している。721～767は有肩石斧である。721は肩部から側縁部にかけて、723は背面に、725は肩部に、726は右側面にそれぞれ使用による摩耗がある。また、714と726は磨製石斧を再加工して刃部を形成して使用している。

727～737は有肩の打製石斧で刃部と基部の差が不

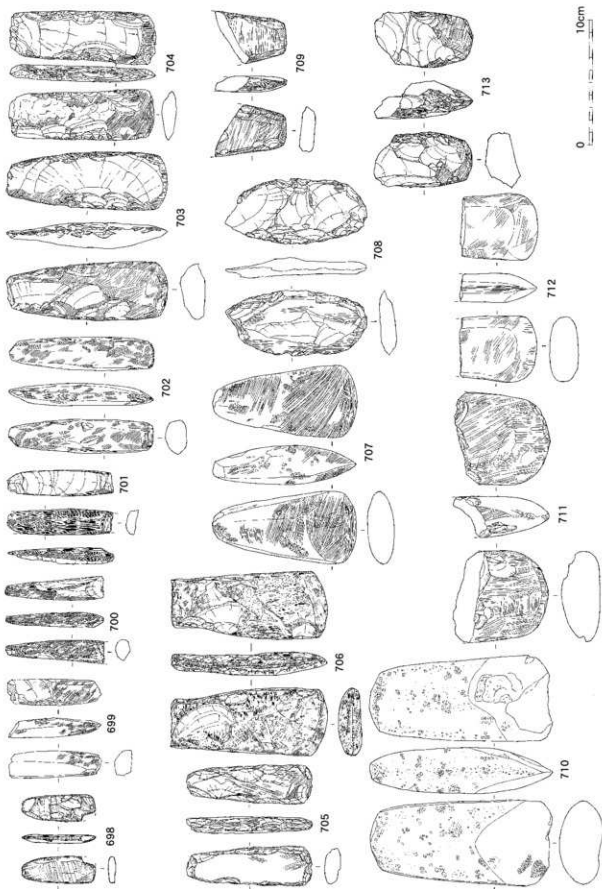
明瞭なものである。728・729・731・732・735・737は、刃部に使用による摩耗がみられる。特に731は刃部、側縁部に、733は背面部全面に及ぶ。

738～748は有肩の打製石斧で、刃部と基部の長さが、同じかあるいはやや刃部の長いものである。ほとんどの刃部、側縁部に使用による摩耗がみられるが、740・741・744には摩耗がみられない。738・741には頸部に装着痕が残る。746は刃部に再加工を施している。744は自然の節理面を有し、刃部が欠損しているが、使用の痕跡がみられない石斧である。

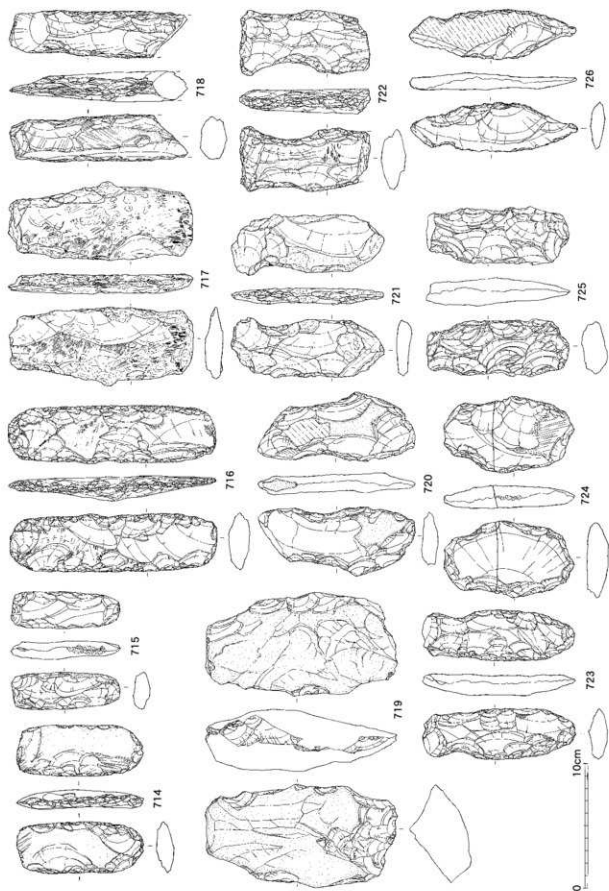


第60図 縄文時代晩期石器6 (石錘)

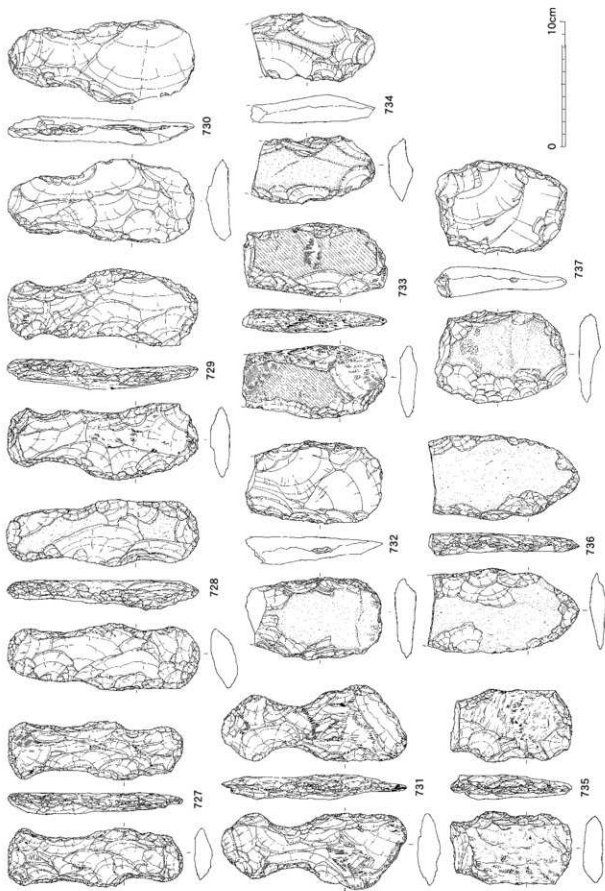




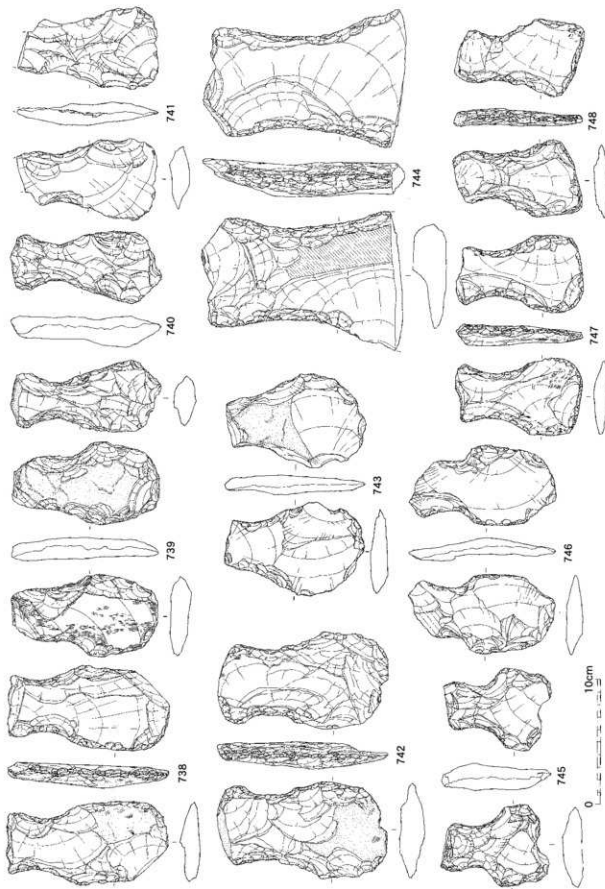
第61圖 縄文時代晚期石器7（石斧）



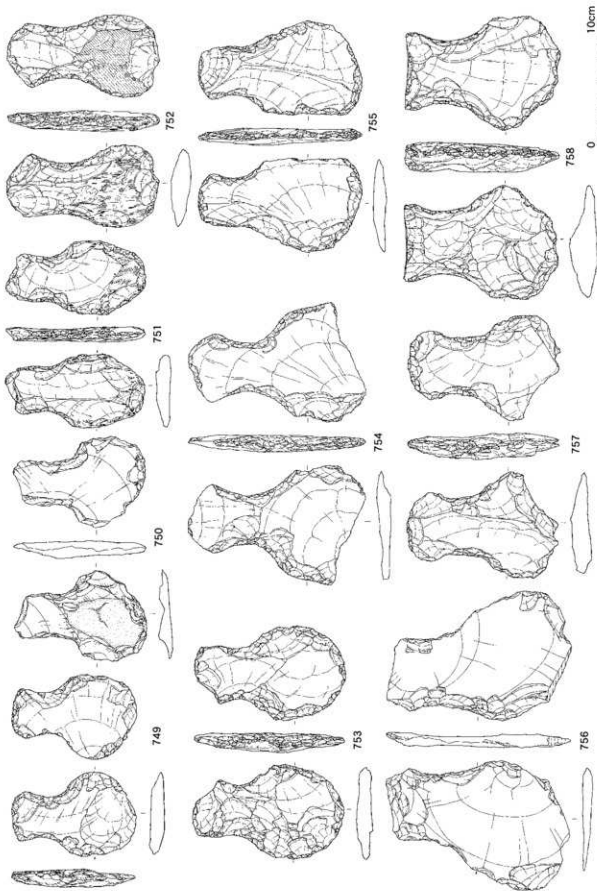
第62圖 縄文時代晩期石器8 (石斧)



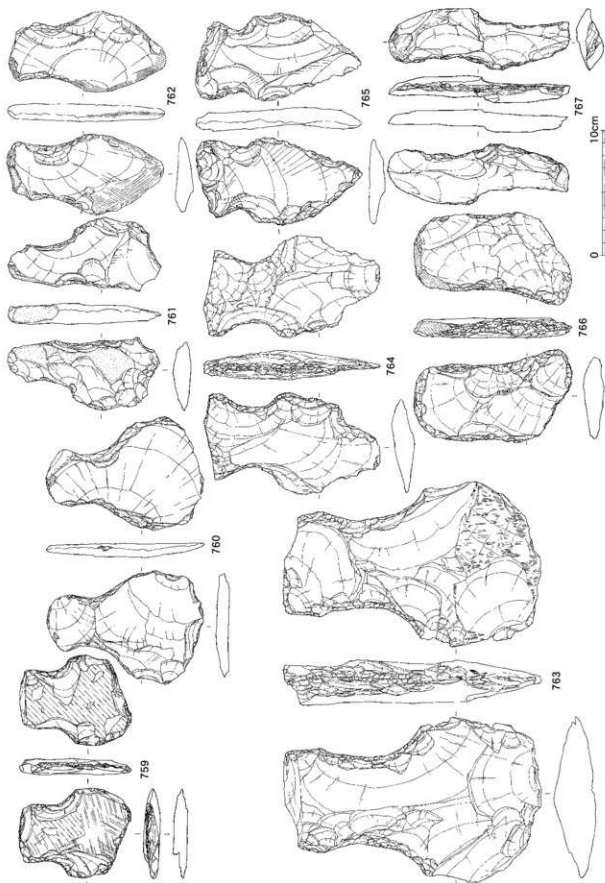
第63圖 縄文時代晩期石器9 (石斧)



第64圖 縄文時代晩期石器10（石斧）



第65圖 縄文時代晩期石斧11 (石斧)



第66圖 縄文時代晩期石器12 (石斧)

749～753は有肩の打製石斧で、ラケット形をしたものである。749を除くほとんどの石斧の刃部に使用による摩耗がみられる。750は厚さが0.8cmと薄いことから他とは別目的の使用が考えられる。

754～760・763は、有肩の打製石斧ではち形をしたものである。ほとんどの刃部には使用による摩耗がみられる。757は肩部下の側縁部に摩耗がみられる。756～758・760には頸部に装着痕が残る。

763は斧長20.7cm、最大幅12.9cm、厚さ3.3cm、基部8.4cmと本遺跡最大の石斧である。刃部に使用による摩耗がみられるが、再加工による刃部の形成は

みられない。

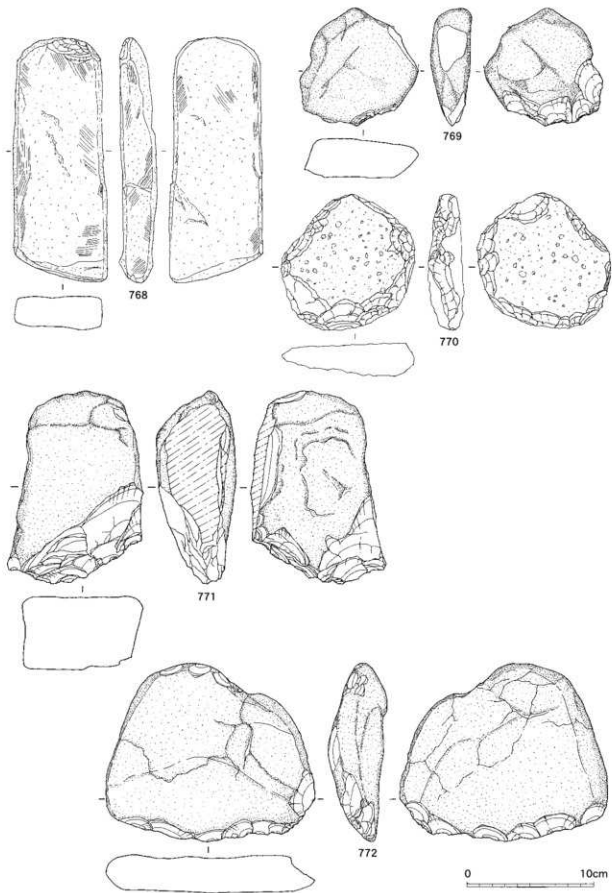
761・762・764・765は有肩の打製石斧で、側縁部が刃部となる靴形をしたものである。761・762は、使用による摩耗によって刃部がつぶれている。761・765の頸部には装着痕がみられる。

766・767は前述のどの形にも当てはまらないものである。766は基部に自然の節理面を残し、摩耗はみられない。側縁から刃部に掛けて刃部形成の調整痕がみられる。767は磨製石斧を再加工して、基部を再加工して、刃部を形成している。

縄文時代晩期石器 9

年代	種別	種名	出土区	石材	長さ				備考	
					cm	cm	cm	g		
63 段	727	Ⅱ	打製石斧	C-5	頁岩	34	4.8	1.8	130	
	728	Ⅱ	打製石斧	H-5	安山岩	35.3	5.3	2.4	195	
	729	Ⅱ	打製石斧	D-3	頁岩	35.2	6.2	2.4	185	
	730	Ⅱ	打製石斧	I-6	頁岩	34.9	6.7	2.2	215	
	731	Ⅱ	打製石斧	I-6	頁岩	34.9	6.2	2.1	170	
	732	Ⅱ	打製石斧	H-4	頁岩	31	6.7	2.2	180	
	733	Ⅱ	打製石斧	C-4	頁岩	31.6	5.9	1.9	150	
	734	Ⅱ	打製石斧	I-6	燧石頁岩	30	5.5	2	130	
	735	Ⅱ	打製石斧	D-4	頁岩	30.7	5.8	2.1	125	
	736	Ⅱ	打製石斧	H-5	安山岩	32.1	6.9	1.8	180	
	737	I	打製石斧	H-5	安山岩	30.55	7.5	2.4	190	
	738	Ⅱ	打製石斧	H-5	頁岩	32.9	6.4	1.55	170	
	739	Ⅱ	打製石斧	H-5	頁岩	31.8	6.7	1.65	160	
	740	Ⅱ	打製石斧	H-5	頁岩	32.1	5.8	2.5	150	
64 段	761	Ⅱ	打製石斧	K-9	頁岩	31.3	6.6	1.7	114.73	
	762	Ⅱ	打製石斧	H-5	頁岩	33.25	7.6	1.9	240	
	763	Ⅱ	打製石斧	H-5	頁岩	31.3	7.6	1.5	114.98	
	764	Ⅱ	打製石斧	I-6	頁岩	35.2	8.3	2.65	480	
	765	Ⅱ	打製石斧	K-9	頁岩	6.75	6.65	1.75	105.11	
	766	Ⅱ	打製石斧	C-4	頁岩	31.7	6.4	1.8	105.02	
	767	Ⅱ	打製石斧	D-3	頁岩	30.1	5.9	1	84.32	
	768	Ⅱ	打製石斧	D-3	頁岩	30.25	5.9	1	84.48	

年代	種別	種名	出土区	石材	長さ				備考	
					cm	cm	cm	g		
65 段	749	Ⅱ	打製石斧	K-9	頁岩	9.95	6.55	1.15	88.73	
	750	Ⅱ	打製石斧	E-7	頁岩	30.6	7.3	0.8	84.27	
	751	Ⅱ	打製石斧	D-3	頁岩	31	5.75	1.2	92.08	
	752	Ⅱ	打製石斧	D-3	頁岩	32.15	6.1	1.6	140	
	753	Ⅱ	打製石斧	D-3	頁岩	32.05	7.4	1.3	145	
	754	Ⅱ	打製石斧	D-3	頁岩	34.15	9.6	1.1	160	
	755	Ⅱ	打製石斧	D-3	頁岩	33.1	7.4	1.05	125	
	756	Ⅱ	打製石斧	H-5	頁岩	34.8	10.45	1.15	130	
	757	Ⅱ	打製石斧	H-5	頁岩	32.1	8.1	1.55	160	
	758	Ⅱ	打製石斧	H-5	頁岩	32.3	8.9	2.15	250	
	759	Ⅱ	打製石斧	E-7	頁岩	7.9	7.55	1.3	105.61	
	760	Ⅱ	打製石斧	D-3	頁岩	32.6	9.2	1.05	130	
	761	Ⅱ	打製石斧	C-5	頁岩	32.2	5.9	1.7	113.32	
	762	Ⅱ	打製石斧	D-3	頁岩	32.55	6.5	1.4	130	
66 段	763	Ⅱ	打製石斧	F-6	頁岩	20.7	12.85	3.3	970	
	764	Ⅱ	打製石斧	H-5	頁岩	34.15	7.5	1.65	220	
	765	Ⅱ	打製石斧	K-8	頁岩	13.2	7.1	1.5	165	
	766	Ⅱ	打製石斧	H-5	頁岩	32.6	6.6	1.65	190	
767	Ⅱ	打製石斧	F-9	頁岩	14.6	4.3	1.6	108.93		

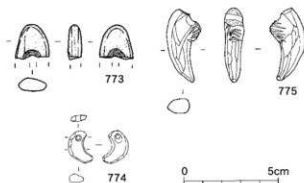


第67図 縄文時代晩期石器13 (礫器)



### 礫器 (第67図)

768～772の5点である。768は側縁部を平面に磨き、基部や刃部に調整敲打痕がみられる。769～772は敲打や押し剥離による刃部調整を両面から行っている。



### 錘飾・土製勾玉 (第68図)

773は安山岩の自然礫に穿孔を施した錘飾である。穿孔部から欠損している。

774は緑色をした石の勾玉である。出土状況は、F-5区の包含層出土である。

775は土製の勾玉である。焼成は良好で黒色を呈し、丁寧なヘラミガキが施される。穿孔付近に沈線文が施してある。

第68図 縄文時代晩期石製錘飾・土製勾玉

図番	種別	出土区	石材	長さ				備考
				mm	mm	mm	mm	
768	礫器	L-10	頁岩	19.4	7.4	2.4	775	
769	礫器	B-5	砂岩	9.35	9.4	3.3	340	
770	礫器	C-5	安山岩	10.7	10.6	2.8	360	
771	礫器	L-9	頁岩	15	10.8	6.25	1300	
772	礫器	E-4	砂岩	14.1	16.5	4.25	1150	

図番	種別	出土区	石材	長さ				備考
				mm	mm	mm	mm	
773	錘飾	G-7	頁岩	1.8	1.8	0.7	2.96	
774	勾玉	F-5	土製	1.7	0.8	0.4	1.05	
775	勾玉		土製	(6)	(1.8)	(1)	5.0	

### 磨石 (第69図～第77図)

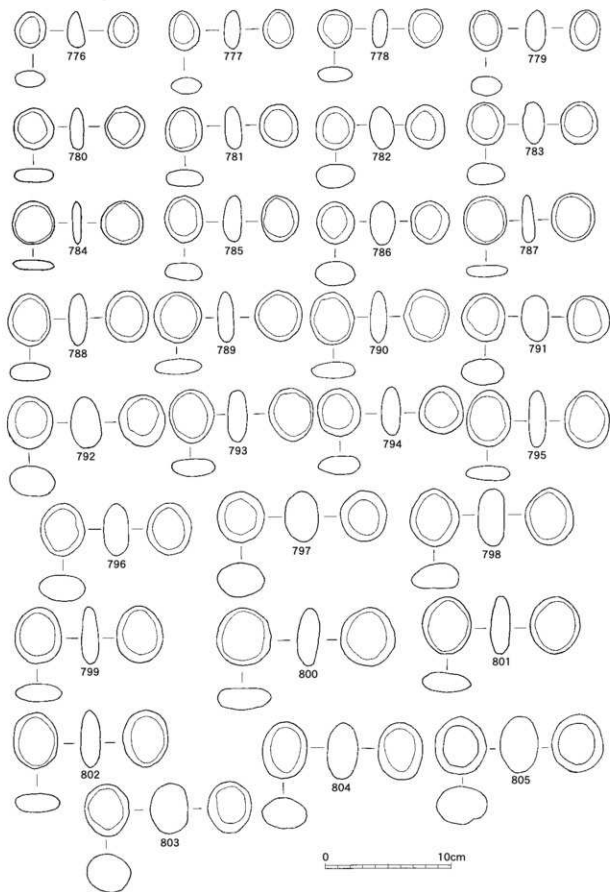
円礫を用いた磨石で、磨石のみの機能を持ったもの、磨石と敲石の機能を持ったもの、磨石、敲石、凹石の機能を持ったものがみられる。776～826、870～881は磨石の機能のみ持つものである。石材は砂岩や安山岩のものが多く、827～897は磨石と敲石の機能を持ったものである。834・844・852・859・

891・893・894・896は、凹石の機能を兼ね備えたものである。878の石材は、鉱物の組み合わせは花崗岩に類似しているが、粒子は、花崗岩より小粒であり断定できなかった。

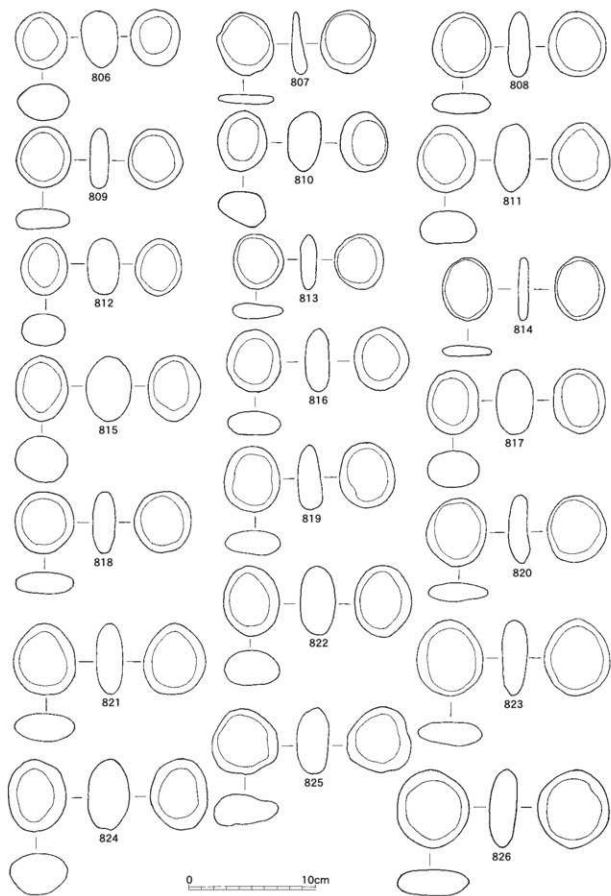
899は敲石である。短長のばち状で、全体を磨いて整形している。底部に敲打による剥離がみられる。

図番	種別	出土区	石材	長さ				備考
				mm	mm	mm	mm	
776	磨石	H-5	砂岩	2.9	2.3	1.3	11.23	
777	磨石	I-6	砂岩	3.1	2.4	1.3	13.04	
778	磨石	E-6	砂岩	3	2.7	1.2	13.93	
779	磨石	I-10	砂岩	3.3	2.4	1.5	17.85	
780	磨石	I-2	砂岩	3.3	3.1	1.1	15.09	
781	磨石	I-6	砂岩	3.4	3	1.3	18.77	
782	磨石	F-4	安山岩	3.4	3.1	2	23.02	
783	磨石	E	安山岩	3.3	2.9	1.6	30.65	
784	磨石	F-5	砂岩	3.4	3.3	0.8	14.15	
785	磨石	F-9	砂岩	3.7	2.9	1.5	21.87	
786	磨石	F-9	砂岩	3.4	3	1.9	25.78	
787	磨石	D-3	砂岩	3.6	3.4	1	18.04	
788	磨石	D-3	砂岩	4.1	3.4	1.4	25.16	
789	磨石	I-2	砂岩	4	3.7	1.2	26.01	
790	磨石	D-3	砂岩	4.1	3.6	1.3	27.04	

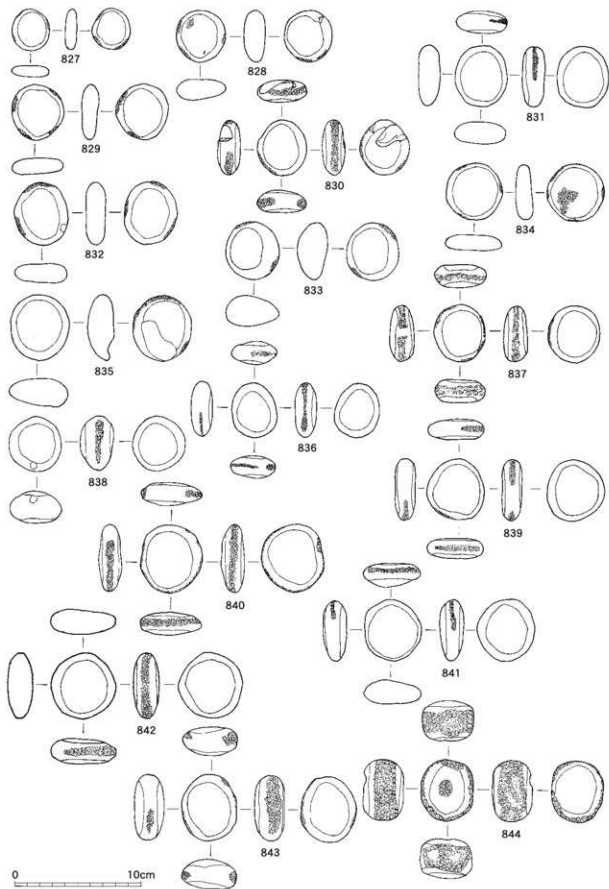
図番	種別	出土区	石材	長さ				備考
				mm	mm	mm	mm	
791	磨石	I-6	安山岩	3.7	3.3	2.1	24.81	
792	磨石	H-5	安山岩	4.1	3.6	2.3	47.71	
793	磨石	G-7	砂岩	4.2	3.5	1.5	28.56	
794	磨石	H-5	砂岩	3.9	3.5	1.4	27.66	
795	磨石	E-4	砂岩	4.5	3.5	1.3	29.66	
796	磨石	C-3	砂岩	4.2	3.5	2	43.34	
797	磨石	C-4	砂岩	4	3.7	2.7	54.06	
798	磨石	H-5	砂岩	4.6	3.8	2	53.48	
799	磨石	F-4	砂岩	4.5	3.7	1.3	30.49	
800	磨石	I-6	砂岩	4.6	4.2	1.6	44.57	
801	磨石	H-5	砂岩	4.6	4	1.5	37.79	
802	磨石	F-7	砂岩	4.5	3.6	1.5	39.94	
803	磨石	D-13	砂岩	4.1	3.5	3	52.11	
804	磨石	G-11	砂岩	4.5	3.5	2.4	54.26	
805	磨石	E-5	安山岩	4.5	4	3	80.47	



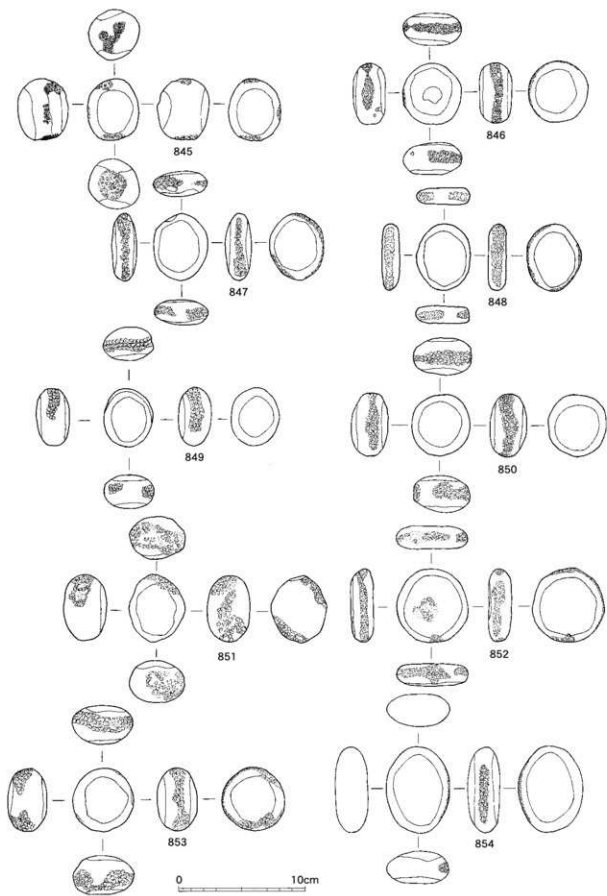
第69図 縄文時代晩期石器14(磨石)



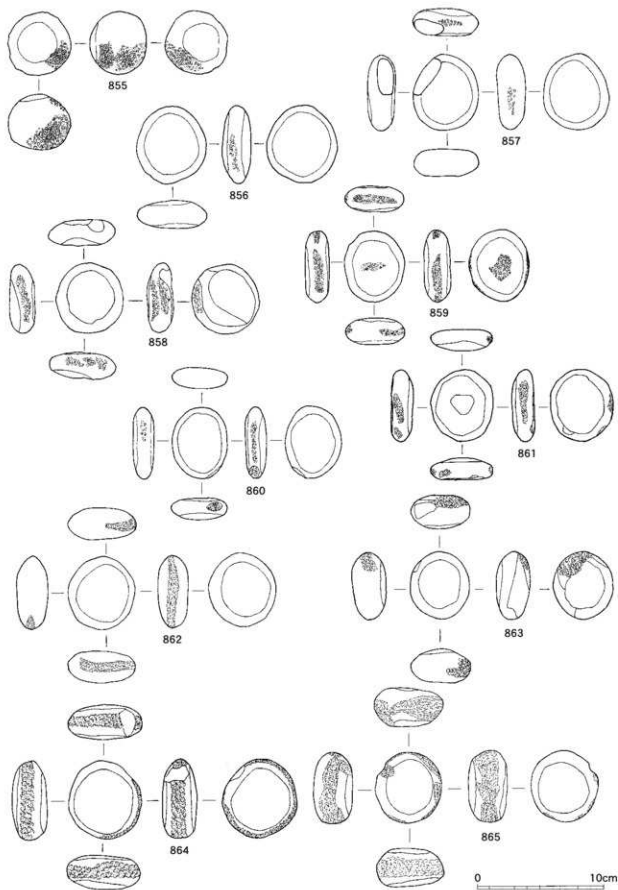
第70図 縄文時代晩期石器15(磨石)



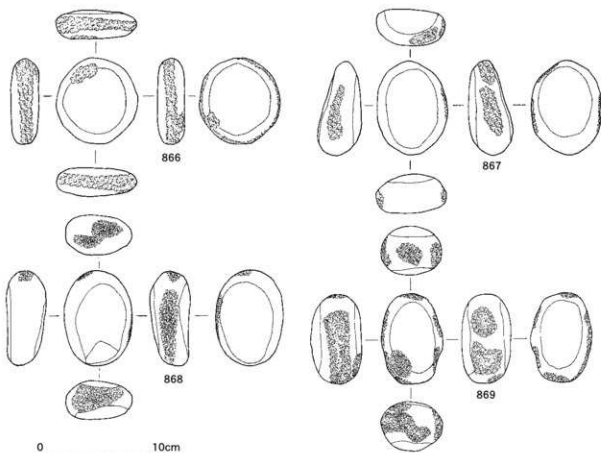
第71図 縄文時代晩期石器16(磨石)



第72図 縄文時代晩期石器17(磨石)



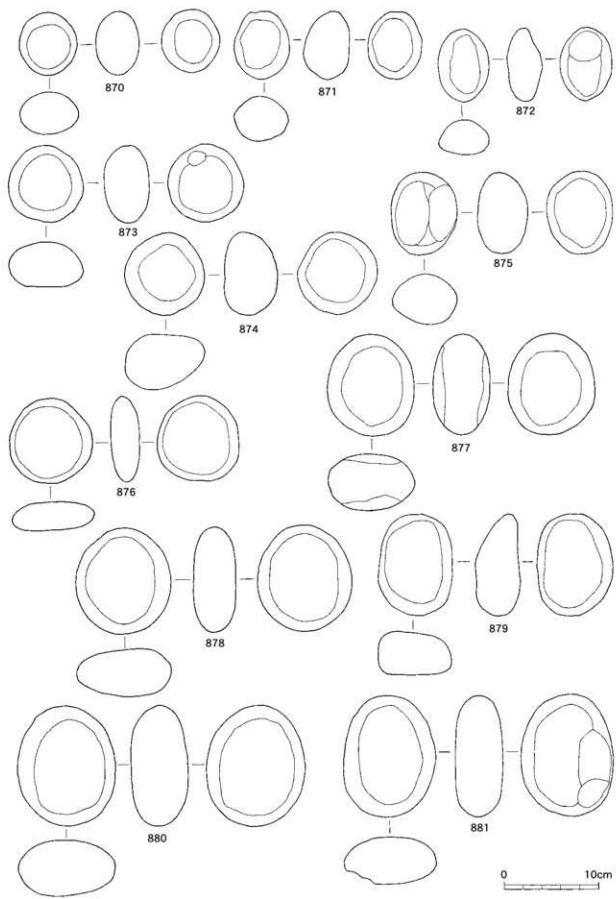
第73図 縄文時代晩期石器18(磨石)



第74図 縄文時代晩期石器19 (磨石)

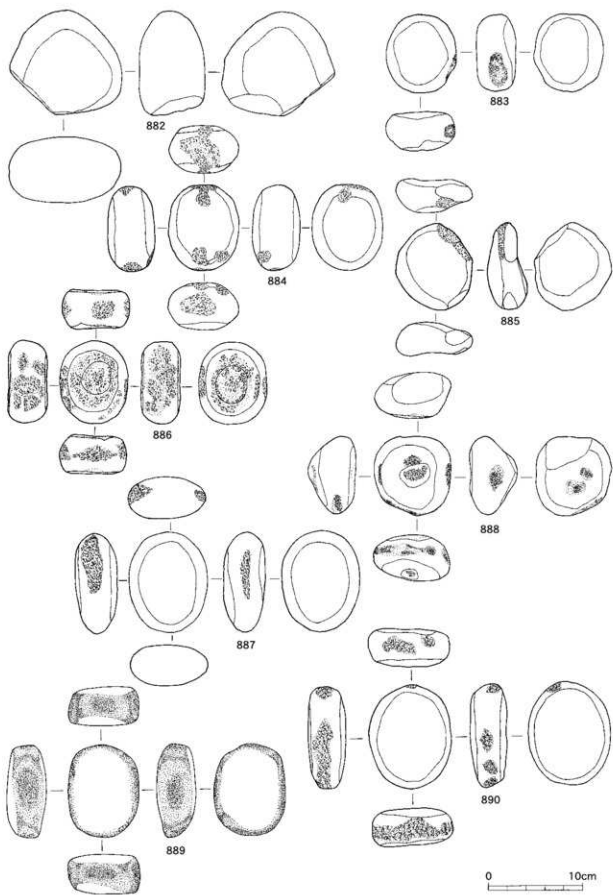
縄文時代晩期石器15										
器種	部位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考	
					cm	cm	cm			g
70 区	806	Ⅱ	磨石	D-3	砂岩	4.5	4	2.9	69.63	
	807	Ⅱ	磨石	A	砂岩	4.3	5	1.1	26.99	
	808	Ⅱ	磨石	D-4	砂岩	5.2	4.6	1.7	63.41	
	809	Ⅱ	磨石	G-9	砂岩	4.7	4.3	1.4	49.67	
	810	Ⅱ	磨石	F-9	砂岩	4.8	3.8	2.6	65.41	
	811	Ⅱ	磨石	E	砂岩	5.3	4.6	2.7	90.62	
	812	Ⅱ	磨石	I-7	砂岩	4.6	3.6	2.5	57.93	
	813	Ⅱ	磨石	G-7	砂岩	4.3	3.8	1.2	31.26	
	814	Ⅱ	磨石	H-5	安山岩	5	4	0.8	23.43	
	815	Ⅱ	磨石	D-3	砂岩	5.2	4.1	3.6	103.22	
816	Ⅱ	磨石	G-4	砂岩	4.9	4.2	1.8	58.26		

器種	部位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考	
					cm	cm	cm			g
70 区	817	Ⅱ	磨石	A	砂岩	5.2	4.1	2.9	66.31	
	818	Ⅱ	磨石	B-5	砂岩	4.9	4.5	1.8	59.02	
	819	Ⅱ	磨石	I-2	砂岩	5.2	4.3	1.8	64.41	
	820	Ⅱ	磨石		砂岩	5.4	4.7	1.5	54.42	
	821	Ⅱ	磨石	E-4	砂岩	5.6	4.8	2.1	65.19	
	822	Ⅱ	磨石	C-4	砂岩	5.5	4.5	2.6	92.89	
	823	Ⅱ	磨石	I-6	安山岩	6	5.2	1.9	87.17	
	824	Ⅱ	磨石	H-5	砂岩	5.7	4.5	3.3	107.22	
	825	Ⅱ	磨石	D-3	安山岩	5.2	5.1	2.4	91.12	
	826	Ⅱ	磨石	B-4	砂岩	6.2	5.8	2.1	112.94	

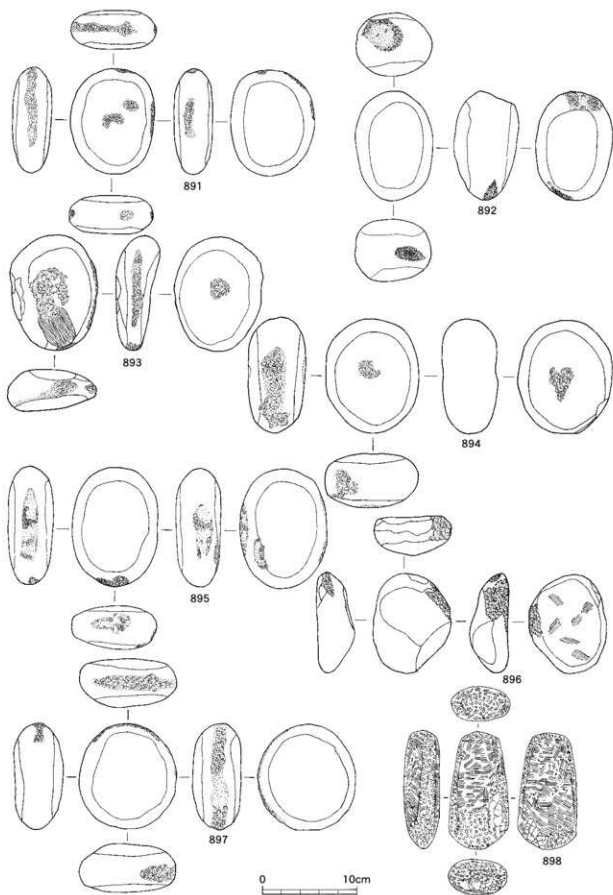


第75図 縄文時代晩期石器20(磨石)

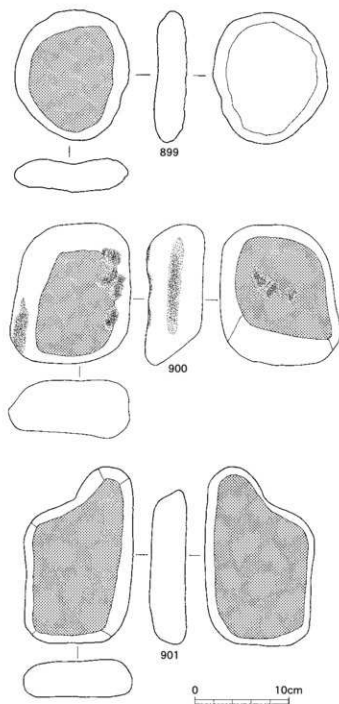




第76図 縄文時代晩期石器21(磨石)



第77図 縄文時代晩期石器22(磨石)



第78図 縄文時代晩期石器23(石皿) 1

#### 石皿 (第78図・第79図)

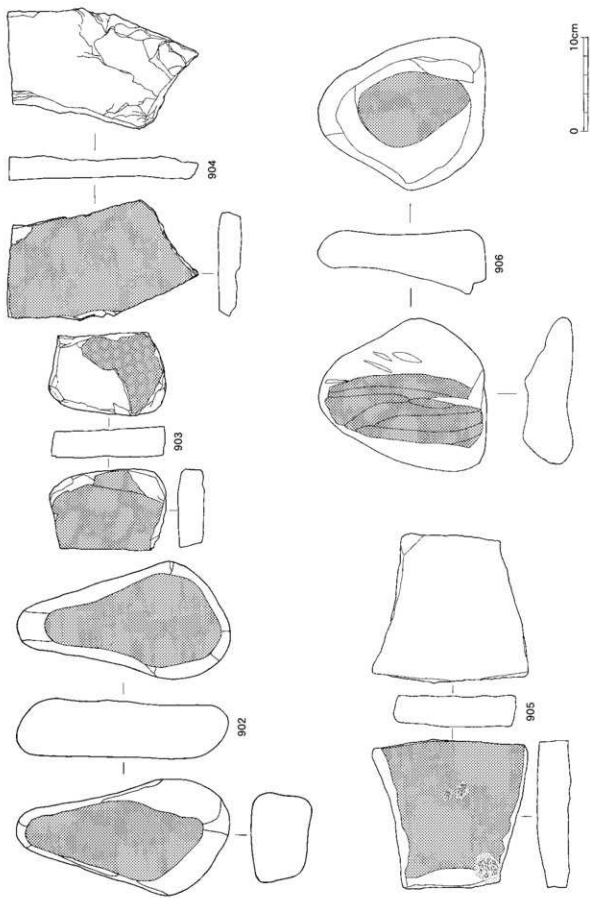
石皿は8点を図化した。主に安山岩，砂岩を石材に用いたもので，ほとんどが自然礫を利用したものである。903・904は砂岩の節理面を利用して形を整えて使用している。906は使用面に溝が走っていることから攻玉砥石の可能性ある。900・905は作業面に敲打痕がみられる。

#### 軽石製品 (第80図)

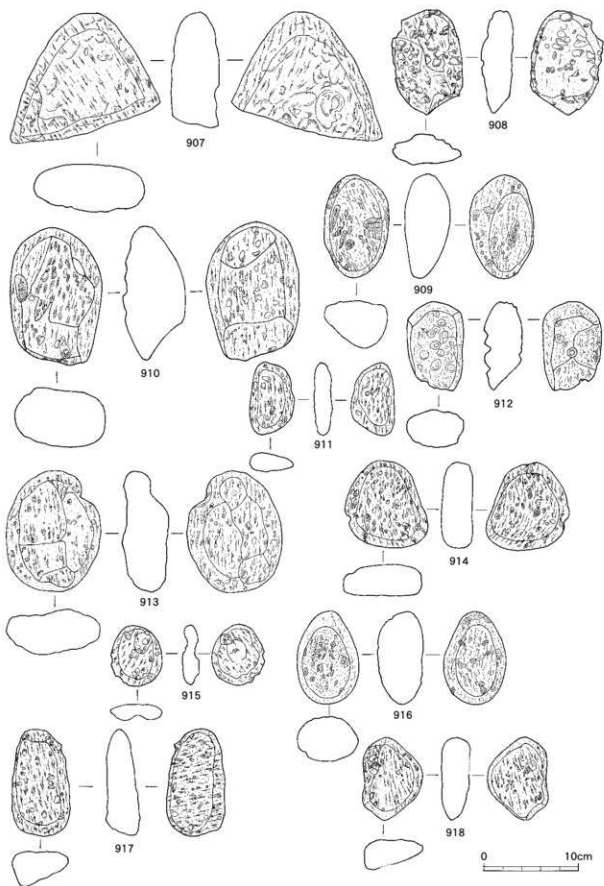
軽石製品は12点出土している。円形もしくはそれを加工したもので，気泡の大きなものと小さなものがある。915は片面の中央部に途中まで穿孔又は窪みを付けている。また，その窪みの端部に，両面から穿孔し貫通している。913は橙色をした軽石で角を削っている。908は正面下部に，角のあるもので筋を付けた痕跡がある。

縄文時代晩期石器16								
71 図	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
				cm	cm	cm	g	
827	Ⅱ 磨石	G-5	砂岩	2.2	3	0.9	13.13	
828	Ⅱ 磨石	C-4	砂岩	4.1	3.9	1.7	36.43	
829	Ⅱ 磨石	G-7	砂岩	3.9	4.1	1.3	34.41	
830	Ⅱ 磨石	F-4	砂岩	4.3	4.9	1.8	41.36	

71 図	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
				cm	cm	cm	g	
831	Ⅱ 磨石	K-9	砂岩	4.8	4.1	1.8	52.57	
832	Ⅱ 磨石	K-9	砂岩	4.9	4.2	1.5	46.49	
833	Ⅱ 磨石	F-10	砂岩	4.5	4.2	2.4	64.84	
834	Ⅱ 磨石	F-9	砂岩	4.5	4.4	1.4	36.36	



第79図 縄文時代晩期石器24 (石皿) 2



第80図 縄文時代晩期石器25 (軽石製品)

## 縄文時代晩期石器16~20

71 器	器種	出土区	石材	長さ		幅	厚さ	重さ	備考
				cm	mm				
825	Ⅱ	磨石	C-4	砂岩	5.2	4.7	2.1	74.25	
826	Ⅱ	磨石	H-6	砂岩	4.4	3.6	1.6	40.64	
827	Ⅱ	磨石	H-5	砂岩	4.5	4.1	1.9	66.19	
828	Ⅱ	磨石	F-7	安山岩	4.4	4.2	2.6	66.13	
829	Ⅱ	磨石	G-6	砂岩	4.9	4.5	1.6	53.2	
830	Ⅱ	磨石	I-5	安山岩	5.4	4.9	1.6	69.36	
841	Ⅱ	磨石	H-5	砂岩	4.9	4.5	1.6	54.29	
842	Ⅱ	磨石	E-7	砂岩	5.2	5.2	2	76.62	
843	Ⅱ	磨石	I-7	砂岩	5.2	4.3	2.3	73.79	
844	Ⅱ	磨石	K-8	安山岩	4.8	4.2	3.2	101.37	
845	Ⅱ	磨石	H-5	砂岩	4.8	4.1	4	101.96	
846	Ⅱ	磨石	F-7	安山岩	4.8	4.6	2.5	86.94	
847	Ⅱ	磨石	I-6	砂岩	5.3	4.3	2	65.62	
848	Ⅱ	磨石	I-6	安山岩	5.3	4.3	1.4	52.6	
849	Ⅱ	磨石	H-5	砂岩	4.7	3.8	2.7	72.1	
850	Ⅱ	磨石	F-12	砂岩	4.9	4.6	2.9	97.29	
851	Ⅱ	磨石	K-8	安山岩	5.3	4.4	3.4	100.7	
852	Ⅱ	磨石	J-8	砂岩	5.8	5.6	1.8	97.69	
853	Ⅱ	磨石	F-7	安山岩	5.1	4.9	3.1	106.87	
854	Ⅱ	磨石	B-5	安山岩	6.8	5	2.5	125	
855	Ⅱ	磨石	C-5	安山岩	9	7	5.4	160	
856	Ⅱ	磨石	L-10	砂岩	6.1	5.5	2.2	107.72	
857	Ⅱ	磨石	H-10	砂岩	6	5.2	2.2	99.08	
858	Ⅱ	磨石	D-4	安山岩	5.6	5.3	2.1	98.71	
859	Ⅱ	磨石	C-4	安山岩	5.7	4.8	2.1	89.17	
860	Ⅱ	磨石	C-4	砂岩	5.7	4.4	1.7	56.16	
861	Ⅱ	磨石	B-4	砂岩	5.7	5	1.8	69.72	
862	Ⅱ	磨石	E-5	砂岩	5.9	5.4	2.4	110.06	
863	Ⅱ	磨石	F-7	砂岩	5.4	4.7	2.7	97.11	
864	Ⅱ	磨石	D-5	砂岩	6.2	5.8	2.7	140	
865	Ⅱ	磨石	E-5	砂岩	5.7	5.4	3	130	
866	Ⅱ	磨石	C-4	砂岩	6.8	6.5	2.1	135	
867	Ⅱ	磨石	E-4	砂岩	7.5	5.4	3.5	165	
868	Ⅱ	磨石	G-7	砂岩	7.6	5.3	3.2	180	
869	Ⅱ	磨石	D-3	安山岩	7.1	4.9	3.9	170	
870	Ⅱ	磨石	E-4	砂岩	6.7	6.2	4.5	200	
871	Ⅱ	磨石	C-5	砂岩	7.2	5.6	4.8	200	
872	Ⅱ	磨石	C-4	砂岩	7.8	5.4	3.7	180	
873	Ⅱ	磨石	C-3	砂岩	8.2	7.9	4.8	420	
874	Ⅱ	磨石	C-4	砂岩	8.8	8.4	5.7	525	
875	Ⅱ	磨石	C-4	安山岩	8.7	7	5.3	445	
876	Ⅱ	磨石	G-6	砂岩	9	8.7	3.1	360	
877	Ⅱ	磨石	J-7	安山岩	10.7	9.2	6	880	
878	Ⅱ	磨石	D-3	火成岩系	11.2	10	4.6	680	300g
879	Ⅱ	磨石	C-6	砂岩	10.8	7.7	4.6	590	
880	Ⅱ	磨石	B-5	安山岩	13.8	10.4	6.1	1110	
881	Ⅱ	磨石	C-5	安山岩	12.9	9.8	5	900	

## 縄文時代晩期石器21~25

72 器	器種	出土区	石材	長さ		幅	厚さ	重さ	備考
				cm	mm				
882	Ⅱ	磨石	D-3	砂岩	11.1	11.9	7	1340	
883	Ⅱ	磨石	C-3	砂岩	8.2	7.3	4.1	370	
884	Ⅱ	磨石	D-4	安山岩	9.1	7.5	5	535	
885	Ⅱ	磨石	E-3	砂岩	9.3	8.2	3.5	330	
886	Ⅱ	磨石	E-7	安山岩	8.8	7.3	4.1	400	
887	Ⅱ	磨石	E-5	砂岩	10.7	8.3	4.9	580	
888	Ⅱ	磨石	D-3	砂岩	8.4	8.2	4.8	415	
889	Ⅱ	磨石	G-11	砂岩	9.8	7.6	4.1	480	
890	Ⅱ	磨石	C-5	砂岩	10.9	8.7	3.9	565	
891	Ⅱ	磨石	C-5	安山岩	11.2	8.9	4.1	660	
892	Ⅱ	磨石	D-3	安山岩	11.5	8.2	6.5	880	
893	Ⅱ	磨石	H-7	砂岩	12.2	9.4	4.4	615	
894	Ⅱ	磨石	ナシ	安山岩	12.2	9.9	5.8	1056	
895	Ⅱ	磨石	G-11	砂岩	12.6	9	4.6	865	
896	Ⅱ	磨石	F-11	砂岩	10.4	8.2	4.4	405	
897	Ⅱ	磨石	H-5	安山岩	11.3	10.4	5.2	895	
898	Ⅱ	卵石	F-9	頁岩	12.6	6.3	3.9	485	
899	Ⅱ	石皿	L-10	アイサイト	13.8	12.2	3.1	630	
900	Ⅱ	石皿	D-4	砂岩	14.8	12.4	6.2	1835	
901	Ⅱ	石皿	H-5	砂岩	18.8	11.6	3.9	1485	
902	Ⅱ	石皿	G-11	砂岩	29.5	12.5	5.9	2170	
903	Ⅱ	石皿	G-11	砂岩	12.3	8.7	3.2	530	
904	Ⅱ	石皿	H-10	シルト岩	30.2	12.8	2.8	830	
905	Ⅱ	石皿	F-4	シルト岩	16.5	15.7	3.6	1475	
906	Ⅱ	石皿	G-7	砂岩	17.8	15.5	6.8	2120	
907	Ⅱ	加工品	G-7	砂岩	12.2	14.9	5	295	
908	Ⅱ	加工品	F-10	磨石	11	7.1	3.2	56.44	
909	Ⅱ	加工品	K-8	磨石	10.9	6.8	4.8	65.68	
910	Ⅱ	加工品	F-4	磨石	14.4	9.8	6.7	240	
911	Ⅱ	加工品	G-5	磨石	7.7	4.7	1.8	18.33	
912	Ⅳ	加工品	G-5	磨石	9.2	6.2	4.1	130.62	
913	Ⅱ	加工品	ナシ	磨石	13.8	10	4.7	130	
914	Ⅱ	加工品	K-9	磨石	9.1	8.2	3.3	115	
915	Ⅱ	加工品	ナシ	磨石	6.4	5.5	1.8	16.3	
916	Ⅱ	加工品	G-11	磨石	9.8	6.5	4.7	70.47	
917	Ⅱ	加工品	ナシ	磨石	11.2	6.1	3.6	46.96	
918	Ⅱ	加工品	H-6	磨石	8.8	6.1	3	49.97	

## 第2節 弥生時代の調査

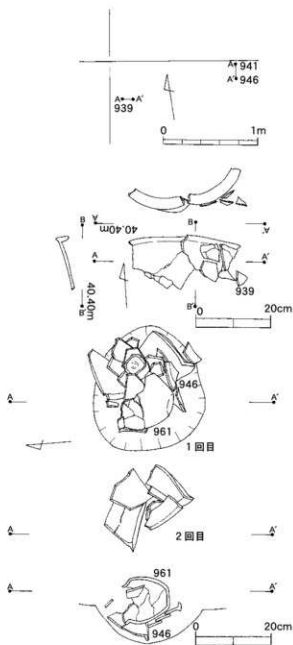
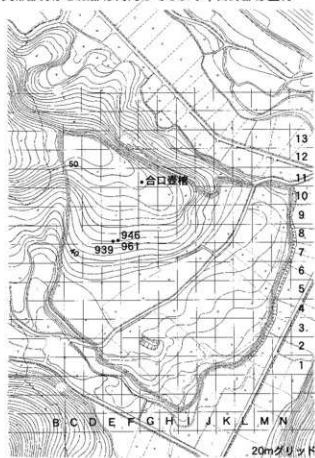
弥生時代の遺構・遺物は多くはないが中期を中心に出土している。また、遺構も小児用合口壺棺が検出されるなど貴重な資料が得られた。

### 1 遺構（第81図・第82図）

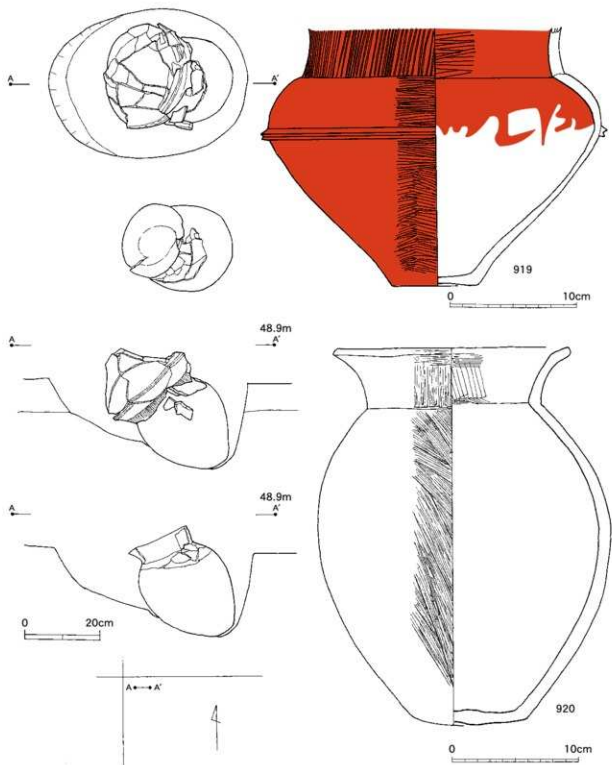
遺構は、G・11区 層上面において小児用合口壺棺1基が検出された。

長軸53cm、短軸40cm、深さ23cmの楕円形の土坑内に変形土器2個体が合わさった状態で検出された。西側に約50度傾いた状態で安置されている。蓋になる壺は、全面丹塗りの広口壺で須玖式土器と思われるものである。身になる壺は黒髪式土器と思われるものである。土坑内及び壺棺内からは副葬品などは検出されなかった。また、蓋になる壺の口縁部は意識的に欠いてある。上の壺(919)は口縁部を欠損するものである。底部は径7.2cmのわずかなあげで、胴部の最大径は器高の半分よりやや上位にあるものと思われる、その部分にM字状の突帯を廻らす。突帯部分から頸部は内湾してしまり、口縁部は直行

気味に立ち上がった後反するものと思われる。口縁部は欠損するものの、単純口縁部の可能性が高いものである。頸部から口縁部へかけて縦方向の暗文が施され、全面に丹塗りてへら磨きがなされている。へら磨きは4分割磨きである。下の壺(920)は口縁部径19.2cm、器高30.3cmを測るもので、底部は凸レンズ状を呈する。胴部はあまり張らずに頸部へ至るもので、口縁部は頸部からゆるやかに反するものであるが、口縁端部近くで屈曲するものである。外面は板ナデ、内面はハケ目調整が認められる。



第81図弥生時代遺物出土状況



第82圖 弥生時代合口壺棺



2 遺物 (第82図～第86図)

弥生時代の遺物は多くはないものの、前期から後期までの土器がみられる。また、石器については4点が出土している。921～923は胴部に刻目突帯を廻らすものである。924～931は口縁部が短く逆L字状に外反するもので、胴部に三角突帯を廻らすもの(924～925)、沈線文を廻らすもの(927)がある。929は口縁部に焼成前の穿孔がみられるものである。933・935は口縁端部を分厚く仕上げて外反状にするものである。935は口縁内面に突起を有する。934は口縁部が内湾し内面に突出するもので、口縁部直下に三角突帯を廻らす。937は高環ではないかと思われるものである。口縁部は平坦に仕上げ、T字状口縁を呈する。口縁内面に突起を有し、口縁部平坦面には分割暗文がみられる。938は壺の口縁部である。939～942・951～957はく字状口縁の甕形土器である。939はやや張った胴部からわずかに内湾し口縁部へ至る。口縁部は分厚くく字状に外反し内面に突出部を有する。胴部上位に細い沈線文を廻らす。

940～946は口縁内面に突起を有するものである。

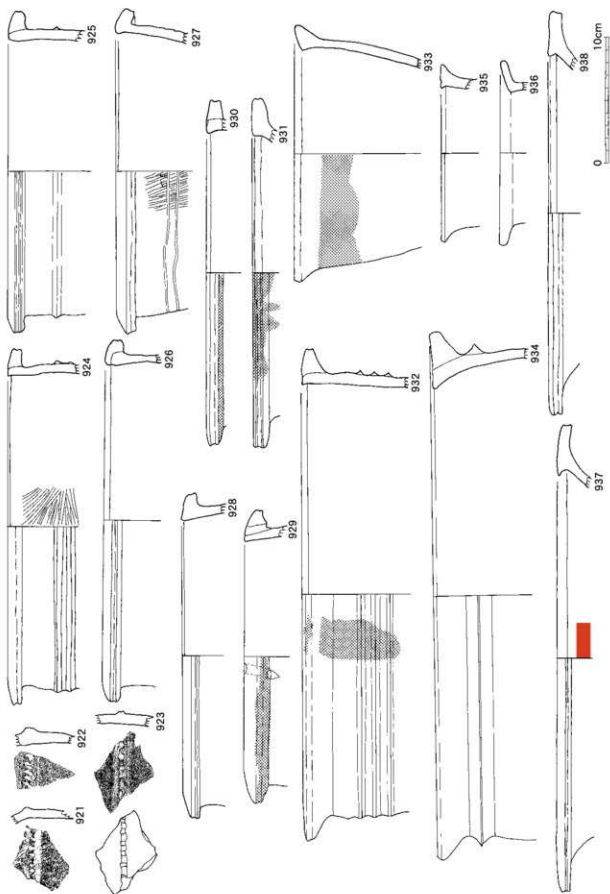
940・943はしゃくれ気味の口縁部である。946は口縁部径23cm、器高25.7cmを測るもので、中空の脚台からあまり開かず立ち上がる。胴部上位がわずかに張った後内湾し、口縁部へ至る。口縁部はく字状に外反し、内面に突起を有する。外面はハゲ目調整である。947～957は内面に突起を有しないものである。960は口縁部がなだらかに外反し、内面の稜線が明瞭ではない。943～949は三角突帯を廻らすものである。958・959は底部でわずかに凹みをもつ脚台である。961は口縁部径15cm、器高13.4cmを測る鉢である。平底の底部から胴部は膨らみ、口縁部はく字状に外反する。

962～969は変形土器。962～964は口縁部で963・964は二又状口縁である。966～969は三角突帯を廻らすものであるが、966はやや広い突帯を1条廻らす。967～969はシャープな三角突帯を廻らす。

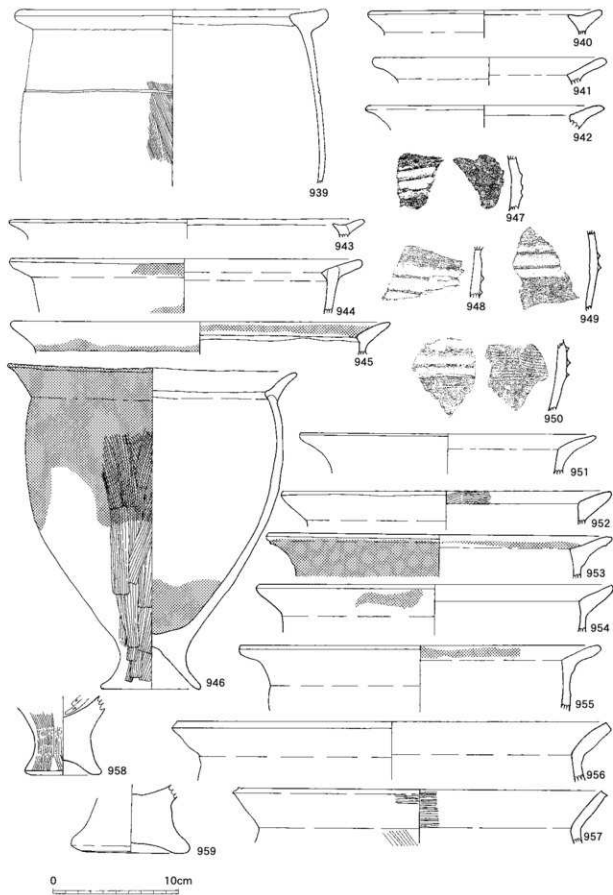
970は平底の底部である。

弥生時代合口壺棺												
年代	品名	器種	部位	出土状況	色別			調整			備考	
					内面	外面	胎土	内面	外面	胎土		
前期	929	壺	底面	G-11	並	内面	外面	胎土	内面	外面	丹塗り	
	930	壺	底面	G-11	並	内面	外面	胎土	内面	外面	丹塗り	
	930	壺	底面	G-11	並	内面	外面	胎土	内面	外面	丹塗り	
弥生時代土器												
年代	品名	器種	部位	出土状況	色別			調整			備考	
					内面	外面	胎土	内面	外面	胎土		
前期	921	壺	胴部	E-7	並	内面	外面	胎土	内面	外面	948年	
	922	壺	胴部	E-12	並	内面	外面	胎土	内面	外面	948年	
	923	壺	胴部	B-5	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
	924	壺	口縁部	B-5	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
	925	壺	口縁部	B-5	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
	926	壺	口縁部	E-7	並	内面	外面	胎土	内面	外面	948年	
	927	壺	口縁部	E-8	並	黒褐色	黒褐色	A, B, C	ナデ	ナデ	948年	
	928	壺	口縁部	D-1	並	黒褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
	929	壺	口縁部	B-5	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
	930	壺	口縁部	B-5	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
	931	壺	口縁部	B-5	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
	932	壺	口縁部	F-8	並	赤褐色	内面	外面	A, B, C	ナデ	ナデ	948年
	933	壺	口縁部	E-7	並	内面	外面	胎土	内面	外面	948年	
	934	壺	口縁部	F-11	並	赤褐色	黒褐色	A, B, C	ナデ	ナデ	948年	
	935	壺	口縁部	G-6	並	内面	外面	胎土	内面	外面	948年	
	936	壺	口縁部	F-11	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
	937	壺	口縁部	F-11	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
	938	壺	口縁部	E-7	並	内面	外面	胎土	内面	外面	丹塗り	
	939	壺	口縁部	F-4	並	内面	外面	胎土	内面	外面	948年	
	後期	940	壺	口縁部	F-8	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年
941		壺	口縁部	G-5	並	内面	外面	胎土	内面	外面	948年	
942		壺	口縁部	F-7	並	赤褐色	黒褐色	A, B, C	ナデ	ナデ	948年	
942		壺	口縁部	E-7	並	赤褐色	黒褐色	A, B, C	ナデ	ナデ	948年	

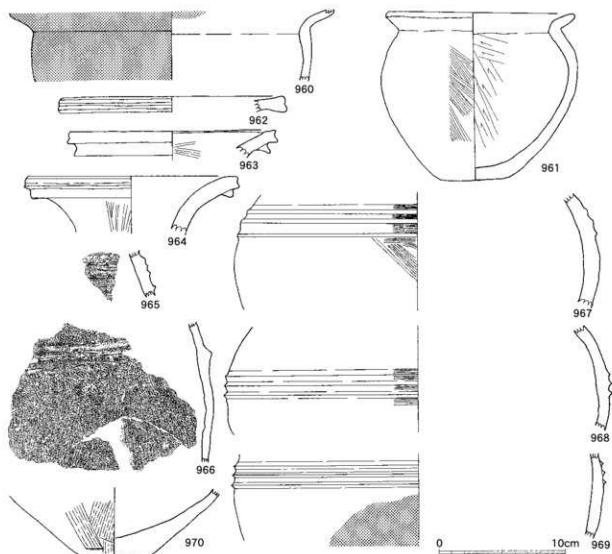
弥生時代合口壺棺												
年代	品名	器種	部位	出土状況	色別			調整			備考	
					内面	外面	胎土	内面	外面	胎土		
前期	963	壺	口縁部	G-5	並	内面	外面	胎土	内面	外面	ナデ	
	964	壺	口縁部	ナン	焼成前	赤褐色	黒褐色	A, B, C	ナデ	ナデ	948年	
	965	壺	口縁部	F-6	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
	966	壺	底面	F-8	並	赤褐色	黒褐色	A, B, C	ナデ	ハゲ目	948年	
	967	壺	胴部	C-4	並	内面	外面	胎土	内面	外面	948年	
	968	壺	胴部	B-5	並	赤褐色	黒褐色	A, B, C	ナデ	ナデ	948年	
	969	壺	胴部	B-5	並	赤褐色	黒褐色	A, B, C	ナデ	ナデ	948年	
	970	壺	胴部	G-11	並	内面	外面	胎土	内面	外面	948年	
	971	壺	口縁部	G-4	並	内面	外面	胎土	内面	外面	948年	
	972	壺	口縁部	H-6	並	内面	外面	胎土	内面	外面	948年	
	973	壺	口縁部	ナン	焼成前	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
	974	壺	口縁部	F-7	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
	975	壺	口縁部	ナン	焼成前	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
	976	壺	口縁部	F-8	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
	977	壺	口縁部	G-5	並	赤褐色	黒褐色	A, B, C	ナデ	ナデ	948年	
	978	壺	底面	F-8	並	赤褐色	黒褐色	A, B, C	ナデ	ハゲ目	948年	
	979	壺	底面	K-9	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
	後期	980	壺	胴部	D-3	並	赤褐色	黒褐色	A, B, C	ナデ	ナデ	948年
		981	壺	口縁部	D-7	並	赤褐色	黒褐色	A, B, C	ナデ	ナデ	948年
		982	壺	口縁部	G-7	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ハゲ目	948年
983		壺	口縁部	F-7	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ハゲ目	948年	
984		壺	口縁部	F-7	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ハゲ目	948年	
985		壺	口縁部	F-7	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
986		壺	胴部	D-3	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ハゲ目	948年	
987		壺	胴部	F-7	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ハゲ目	948年	
988		壺	胴部	C-4	並	内面	外面	胎土	内面	外面	948年	
989		壺	胴部	C-4	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年	
990	壺	底面	F-4	並	赤褐色	黒褐色	A, B	ナデ	ナデ	948年		



第83圖 弥生時代土器 1



第84図 弥生時代土器 2



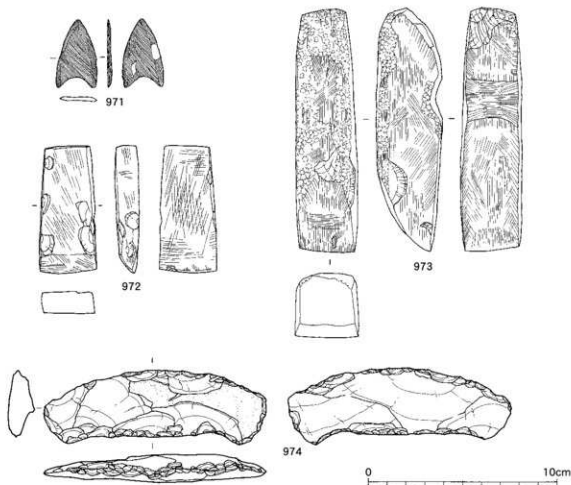
第85図 弥生時代土器 3

971は磨製石鏃。長さ3.65cm、幅2.15cmで全面に擦痕が明瞭にみられる。973は長さ13cm、幅3.2cm、厚さ3.5cmの柱状挟入片刃石器。断面はほぼ方形である。基部よりやや下位にヒモ掛けと思われる挟りを有する。刃部は挟り部へ向う片刃である。

972は片刃の磨製石斧。刃部がわずかに広いが

ほぼ長方形である。刃部は片刃で全面に擦痕が認められる。974は石鏃と思われる。幅3.5cm、長さ11.8cm、厚さ1.5cmの横長剥片を素材としたものでわずかに湾曲するものである。両端にわずかな挟りが認められ、内湾する範囲に交互剥離による刃部を形成するものである。

弥生時代石器										
押回番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
86 図	971	Ⅲ	磨製石鏃	G-5	頁岩	3.65	2.15	0.25	1.9	
	972	Ⅲ	磨製石斧	F-7	シルト岩	6.8	3.05	1.3	58.6	
	973	Ⅲ	柱状挟入片刃石器	G-5	頁岩	12.9	3.25	3.5	250.0	
	974	Ⅲ	石鏃	G-5	頁岩	11.8	3.5	1.5	67.5	



第86図 弥生時代石器

### 第3節 古墳時代の調査

古墳時代の遺構は竪穴住居跡8軒が検出されているが、遺物包含層が削除されている部分が多く出土量は多くはない。

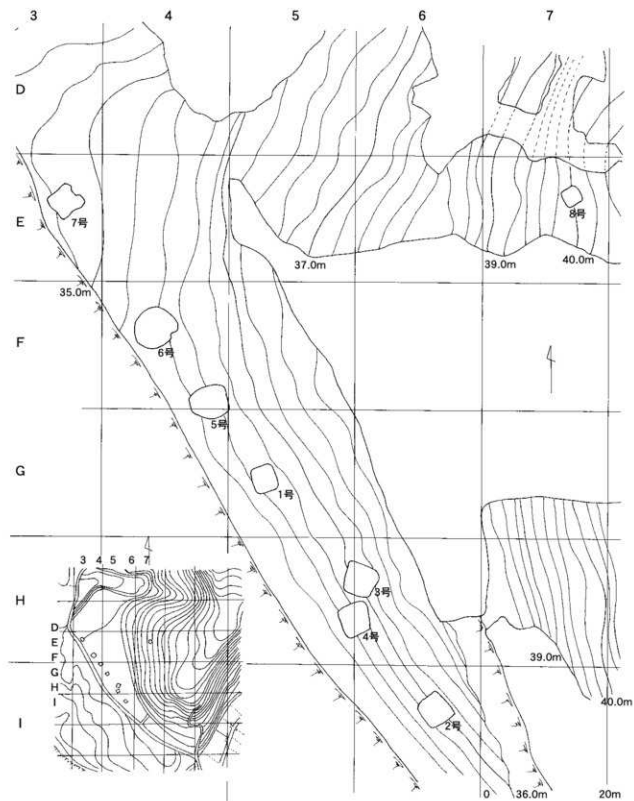
#### 1 遺構(第87図)

遺構は竪穴住居跡が8軒検出された。1号住居跡～7号住居跡は調査区の南西側の標高約35mの部分に集中しているが、8号住居跡については標高40mの一段高い部分に単独で検出された。1～7号より南西側には平坦面がのびるが、現状保存の処置が取られたため未調査である。竪穴住居跡の広がりには未調査部分へものびると思われる。

#### 1号住居跡(第88図～第91図)

1号住居跡はG・5区において検出された。長軸はほぼ南北で、南側と西側にベッド状に一段高くなった部分がある。規模は4.04 3.34m、深さ50cm

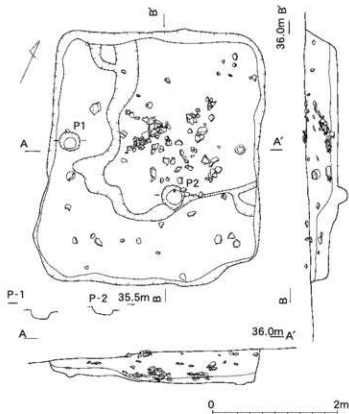
であるが、ベッド状の部分は25cmである。明瞭な柱穴は検出されなかったが、ビット1及び2の2箇所が可能性がある。遺物は土器片がまんべんなく出土し、まとまったものはない。975は口縁部径29.5cm、器高8.2cmを測る蓋形土器。丸みを帯びた天井部から口縁部は大きく外反し口縁端部はわずかに凹むものである。976～980は甕形土器。976は頸部に三角突帯を廻らし口縁部は外反する。口縁内面にはかすかに稜線が残る。977・978は口縁内面に稜を有せずゆるやかに外反するものである。980は胴部に刻目突帯を廻らすものである。981～983は中空の脚台である。984～988は鉢形土器。986は口縁部径17cm、器高11.3cmを測る。やや厚手のもので、平底から直線的に立ち上がり口縁部へ至るものである。985・988は底部を欠損するものの脚台を有するものと思われる。989～997は壺形土器。989・990は胴部が張



第87図 古墳時代住居跡配置図

らず口縁部はゆるやかに外反する。いずれも胴部最大径よりやや上位に刻目突帯を廻らす。991も胴部は張らず胴部上位に突帯を廻らす。992は胴部が球形形状に膨らみ、胴部最大径の部分に刻目突帯を廻ら

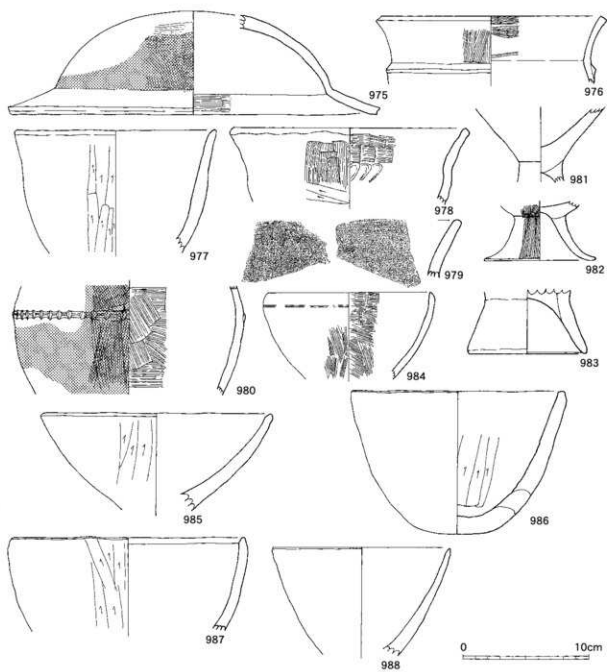
す。993は口縁部径10.1cm、器高21.9cm、胴部最大径14cmを測る細長い形状のものである。口縁部は頸部から直行してから外反するものである。



第88図 1号竪穴住居跡

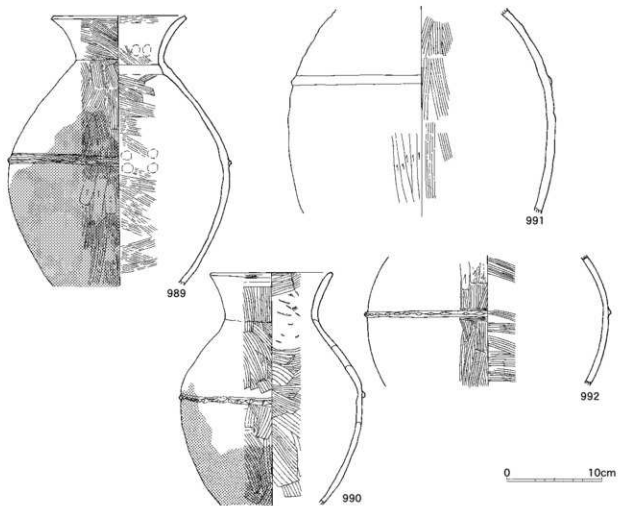
1号竪穴住居跡内遺物										
遺物番号	種類	部位	出土区	色澤			形状			備考
				A	B	C	内面	外面	底	
975	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
976	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
977	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
978	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
979	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
980	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
981	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
982	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
983	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
984	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
985	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
986	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
987	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
988	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
989	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
990	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
991	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
992	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
993	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
994	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
995	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
996	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
997	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区

2号竪穴住居跡内遺物										
遺物番号	種類	部位	出土区	色澤			形状			備考
				A	B	C	内面	外面	底	
1000	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1001	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1002	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1003	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1004	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1005	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1006	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1007	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1008	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1009	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1010	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1011	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1012	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1013	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1014	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1015	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1016	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1017	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1018	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1019	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1020	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1021	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1022	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1023	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1024	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1025	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区
1026	土器	口縁部	区	区	区	区	区	区	区	区

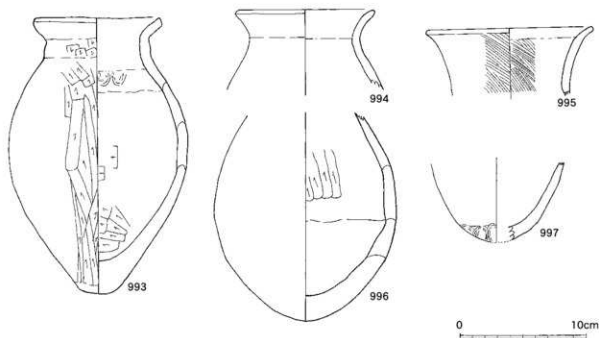


第89圖 1号竖穴住居跡内遺物1





第90圖 1号竪穴住居跡内遺物2

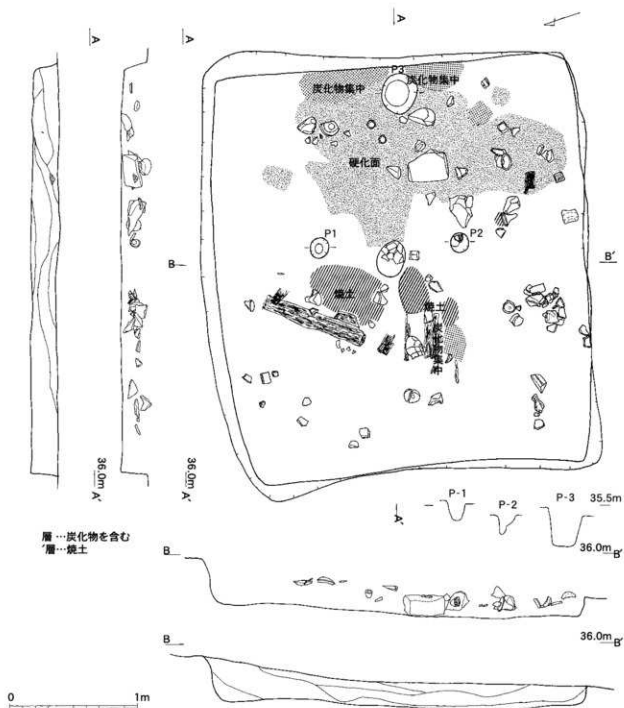


第91圖 1号竪穴住居跡内遺物3

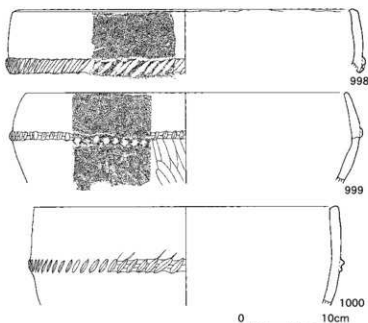
2号住居跡（第92図～第95図）

2号住居跡はⅠ・6区において検出された。長軸はほぼ南北で、規模は3.23×3mと方形に近い。深さは20cmである。遺物は大型破片が多く、須恵器もみられる。床面には炭化物・炭化木が多く、焼土もみられる。また、南側には硬化面も認められる。柱

穴と思われるものは少ないが、ピット1・2の2箇所が柱穴と考えられる。998～1013は椀形土器である。998～1000は口縁部径30cm以上の大型のもので、胴部上位に刻目突帯を廻らし、口縁部は突帯部分から内湾する。1002・1003は突帯を廻らすもの。1005～1013は中空の脚台である。1014～1016は鉢形土器



第92図 2号竪穴住居跡



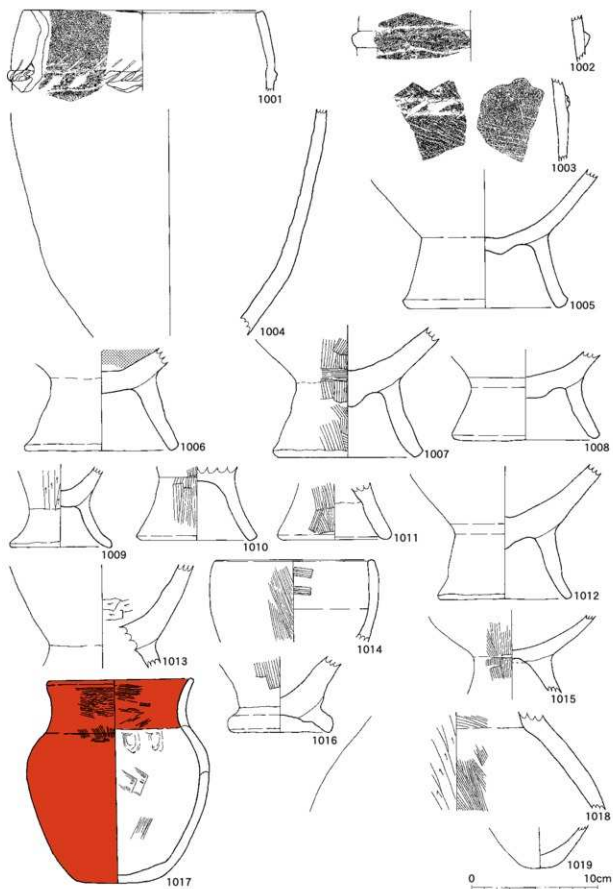
第93図 2号竪穴住居跡内遺物1

と思われる。1014は口縁部が内湾する。1017～1019は壺形土器。1017は丹塗りの広口壺。口縁部径11.7cm, 器高16.2cmを測る。平底の底部から胴部はあまり張らず口縁部は直行気味に外反する。1020～1022は高杯の脚部。やや細目の脚柱部から裾部へと広がるものである。1023・1024は手捏ねの小型土器である。いずれも指頭押圧が明確に認められる。1024は刻目突帯を廻らす、双方から斜めにせり上がっているものである。1025・1026は須恵器。1025は口縁部径11.2cm, 器高4.9cmを測る杯である。立ち上がりは内傾し口縁端部と受部は丸くおさめる。底部のヘラ削りの方向は逆時計まわりである。1026は椀。外面は平行叩き、内面は同心円叩きであるが、弧状を呈するものである。

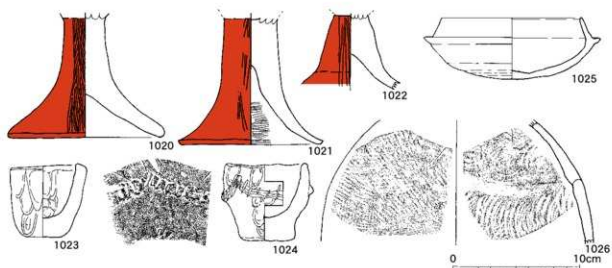
### 3号住居跡（第96図～第102図）

3号住居跡はH・5・6区において検出された。長軸はほぼ東西で、4.5×4.4mの方形である。深さは40cmである。住居内からは夥しい量の遺物が出土し完形土器も多い。また、須恵器も出土している。柱穴はビット1～4の4箇所と思われる。1027は口縁部径21.2cm, 器高9.6cmを測る蓋形土器。天井部は分厚く不整形である。口縁部の外反は弱くやや深いものである。口縁内面にはススが附着する。1028～1043は椀形土器で、1028～1034は中空の脚台を有するものと思われる。1028・1032・1033は内湾口縁

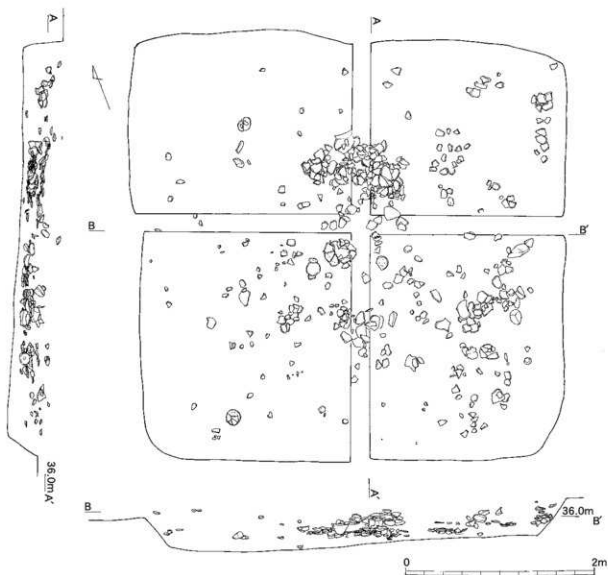
で胴部上位に刻目突帯を廻らす。1034は口縁部径24.3cm, 器高26.8cmを測る。やや深めの脚台から直線的に立ち上がり、口縁端部近くでわずかに内湾するもので、刻目突帯を廻らす。1035は脚台を有しない平底の椀形土器である。口縁部径23.3cm, 器高24.9cmを測る。口縁部は突帯部分より屈曲気味に内湾する。1036～1043は丸底椀形土器である。底部は丸底もしくは丸に近い平底で、胴部は大きく膨らむものである。頸部のくびれは壺形土器に比して弱く、口径も大きい。口縁部は直行気味に外反するものである。1040は補修した痕跡が認められる。1041は頸部のくびれが無く、なだらかに口縁部へ至るものである。1044は口縁部径13.2cm, 器高6.1cmを測る杯で全面丹塗りである。1047・1048は脚台を有する鉢形土器である。1047～1053は壺形土器。1050・1051は頸部に刻目突帯を廻らし口縁部は直行気味に外反する。1047は外面にススが附着する。1054～1061は高杯。1054は口縁部径19.4cmを測るもので、碗状の深い杯部である。1055～1061は脚部で裾部が広がるものである。1062・1063は須恵器の杯。1062は口縁部径11.8cm, 器高5.6cm, 1063は口縁部径10.2cm, 器高4.5cmを測るものである。いずれも立ち上がりはわずかに内傾し端面は内側へ傾斜し、浅い凹みを有する。受部は外上方へのびる。底部はヘラ削りによりほぼ平坦に仕上げる。



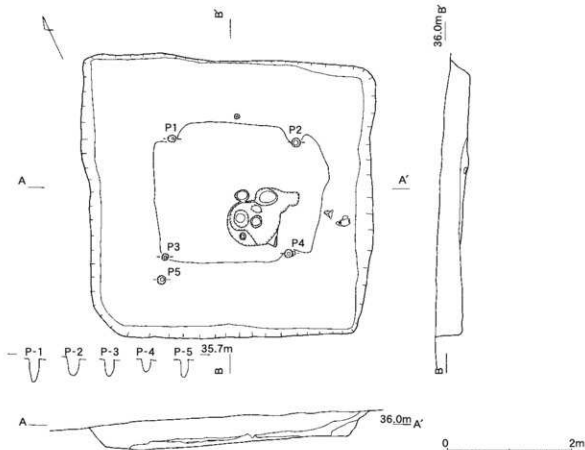
第94圖 2号竖穴住居跡内遺物2



第95图 2号竖穴住居跡内遺物3



第96图 3号竖穴住居跡



第97図 3号竪穴住居跡

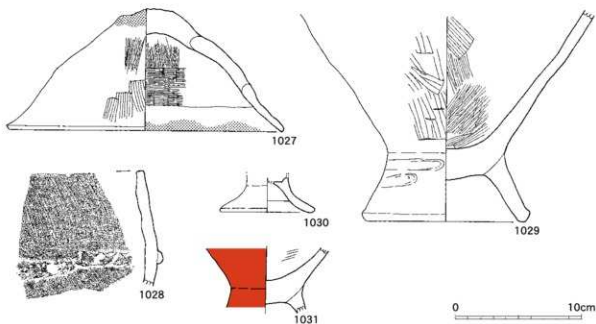
3号竪穴住居跡内遺物										
発見層	遺物番号	種類	部位	出土区	色土		陶器		備考	
					内面	外面	内面	外面		
5000	10217	土	完形	層	層	A, B, C	瓶ナデ	ハケ目	2316	
	10218	土	口縁部	層	浅黄緑	A, B, C	瓶ナデ	瓶ナデ	2316	
	10219	土	胴部・底部	層	層	A, B, C	ハケ目, 瓶ナデ	ハケ目		
	10220	土	底部	黄緑	黄緑	A, B	ナデ	ナデ		
	10221	土	底部	紅い黄緑	赤	A, B	ナデ	ナデ	内面V	
	10222	土	口縁部	層	層	A, B, C	瓶ナデ	瓶ナデ	2316	
	10223	土	口縁部	紅い黄緑	紅い黄緑	A, B, C	ナデ	ハケ目, ハケ目	2316	
	10224	土	完形	赤	赤	A, B	ハケ目, 瓶ナデ	瓶ナデ		
	10225	土	完形	赤緑	赤	A, B, C	瓶ナデ, 瓶ナデ	瓶ナデ	2316	
	10226	丸蓋	完形	層	層	A, B	ハケ目	ハケ目		
5000	10227	丸蓋	完形	層	層	A, B	ハケ目, 瓶ナデ	ナデ, ハケ目	2316	
	10228	丸蓋	完形	層	層	A, B	ナデ	ナデ	2316	
	10229	丸蓋	完形	層	層	A, B, C	ナデ	ナデ, ハケ目	2316	
	10230	丸蓋	完形	層	層	A, B, C	ナデ	ナデ	2316	
	10231	丸蓋	完形	層	層	A, B, C	ナデ	ナデ	2316	
	10232	丸蓋	完形	層	層	A, B, C	ナデ	ナデ	2316	
	10233	丸蓋	完形	層	層	A, B, C	ナデ	ナデ	2316	
	10234	丸蓋	完形	層	層	A, B, C	ナデ	ナデ	2316	
	10235	丸蓋	完形	層	層	A, B, C	ナデ	ナデ	2316	
	10236	丸蓋	完形	層	層	A, B, C	ナデ	ナデ	2316	
5000	10237	丸蓋	完形	層	層	A, B	ハケ目, 瓶ナデ	ナデ, ハケ目	2316	
	10238	丸蓋	完形	層	層	A, B	ナデ	ナデ	2316	
	10239	丸蓋	完形	層	層	A, B, C	ナデ	ナデ	2316	
	10240	丸蓋	完形	層	層	A, B, C	ナデ	ナデ	2316	
	10241	丸蓋	完形	層	層	A, B, C	ナデ	ナデ	2316	
	10242	丸蓋	完形	層	層	A, B, C	ナデ	ナデ	2316	
	10243	丸蓋	完形	層	層	A, B, C	ナデ	ナデ	2316	
	10244	坪	完形	赤	赤	A, B, C	ハケ目	ハケ目		
	10245	坪	完形	層	紅い黄緑	A, B, C	ナデ	瓶ナデ		
	10246	坪	口縁部	明赤緑	明赤緑	A, B, C	瓶ナデ	ハケ目	内面V	

発見層	遺物番号	種類	部位	出土区	色土		陶器		備考
					内面	外面	内面	外面	
5000	10247	土	胴部	層	層	A, C	ナデ	ハケ目	内面V
	10248	土	胴部	紅い黄緑	紅い黄緑	A	ナデ	ハケ目	
	10249	土	胴部	紅い黄緑	紅い黄緑	A, B, C	ナデ	ナデ	
	10250	土	口縁部	赤緑	明赤緑	A, B, C	ナデ	ナデ	2316
	10251	土	口縁部	浅緑	層	A, B	ナデ	ハケ目	2316
	10252	土	胴部	黄	明赤緑	A, B, C	ハケ目	ナデ	2316
	10253	土	胴部	黄緑	層	A, B, C	瓶ナデ	瓶ナデ	
	10254	高坪	坪部	浅黄緑	黄緑	A, B, C	ナデ	ナデ, ハケ目	
	10255	高坪	胴部	灰	紅い黄緑	B	ナデ	ナデ, ハケ目	内面V
	10256	高坪	坪部	明黄緑	明赤緑	A, B	ナデ	ナデ	内面V
5000	10257	高坪	坪部	層	赤	A, B, C	ナデ, ハケ目	ハケ目	内面V
	10258	高坪	坪部	明黄緑	明赤緑	A, B	ナデ, ハケ目	ハケ目	内面V
	10259	高坪	胴部	明黄緑	明赤緑	A, B	ナデ, ハケ目	ハケ目	内面V
	10260	高坪	胴部	明黄緑	明赤緑	B	ナデ	ナデ, ハケ目	内面V
	10261	高坪	胴部	黄緑	赤緑	B	ナデ	ナデ, ハケ目	内面V
	10262	坪	完形	灰	赤	B	ナデ	ナデ, ハケ目	内面V
	10263	坪	完形	灰白	オリーブ灰	B	ナデ	ナデ, ハケ目	
	10264	坪	完形	灰白	オリーブ灰	B	ナデ	ナデ, ハケ目	

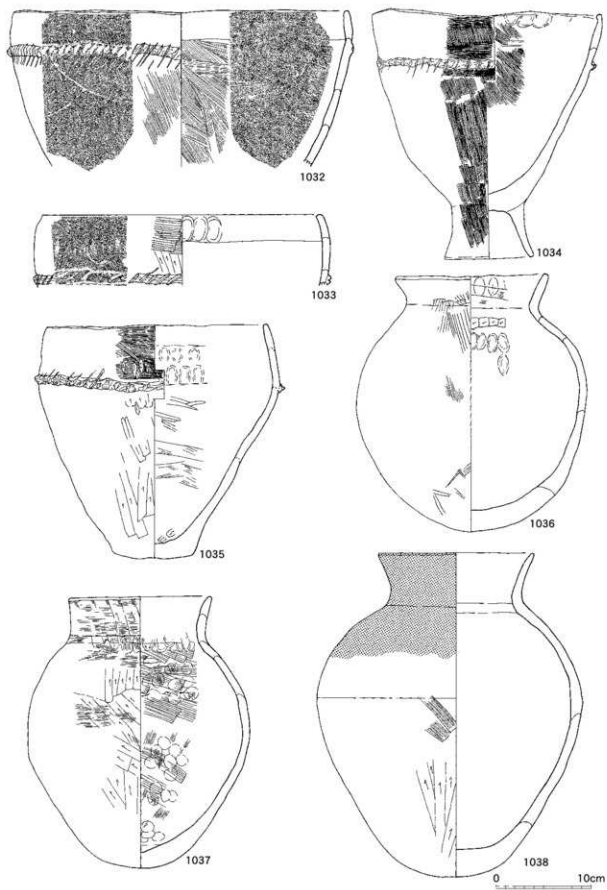
#### 4号住居跡(第103図～第110図)

4号住居跡はH・5・6区の3号住居跡と相接して検出された。長軸はほぼ南北で4.8×4.4mの方形で、深さは60cmである。柱穴はピット1～4の4箇所と思われるが、ピット5～8も補助的な役割を果たしていたものと思われる。住居の中央部は硬化面が認められ、直径44cmの浅い掘り込みもみられる。遺物は3号住居跡と同様に夥しい量で、須恵器もみられる。1064～1069・1075～1098は中空の脚台を有する甕形土器で、1070～1074・1099～1103は丸底の甕形土器である。その内1064～1074は大型である。1064は口縁部径34.2cm、器高35.5cmを測る。胴部は直線的に開き、口縁部は突帯部分からわずかに内湾するものである。刻目突帯は鋸歯状である。1065は口縁部径31.6cm、器高35cmを測る。胴部は丸みを帯び口縁部は直行する。突帯は指でつまみ三角形を呈する。また、右側からのびた突帯は左上方へはねあがるものである。1166は口縁部径35.8cm、器高43.1cmを測る。胴部は直線的で口縁部は直行する。刻目突帯は1065と同様である。1067は口縁部径28.8cm、器高36.1cmを測る。胴部は丸く膨らみ、頸部でいったんしまった後で口縁部は外反する。突帯は鋸歯状を呈する。1068・1069は底部を欠損するものの1067と同様の器形と思われる。1070は胴部が球形に膨ら

らみ口縁部は直行気味である。1071～1074は口縁部が外反するもので、外面にスガが付着するものもある。1072は内面にもコゲ状のスガが付着する。1075～1082は刻目突帯を廻らすものである。1075～1077は口縁部が直行するもの、1078～1080は口縁部が内湾するものである。1083～1098は中空の脚台部分である。1099～1101は底部を欠損するが丸底甕と思われる。1102は口縁部径12.8cm、器高19.8cmを測る。丸底の底部から胴部の張りはなく頸部のしまりも弱いもので、口縁部は外反する。1103は口縁部径12.4cm、器高15.5cmを測るもので、胴部は球形に膨らみ頸部はくびれ、内面には稜を有する。口縁部は直行気味であるが端部で外反する。1104～1106は鉢形土器。1104は口縁部径21cm、器高11.4cmを測る。高台状の底部から胴部は、大きく開いて立ち上がり口縁部へ至るものである。1105・1106は脚台を有するものである。1107～1113は壘形土器。1107は口縁部径15.2cmを測るもので頸部に鋸歯状の刻目突帯を廻らす。丹塗り土器であるが胴部にスガが付着している。1108は頸部に刻目突帯を廻らす。1108～1113は底部である。1109・1111は平底で他は丸底である。1114・1115は埴形土器。1114は口縁部径14cm、器高18cmを測る。底部は平底で体部は球形を呈す。口縁部は頸部から細長くのびるものである。全面が丹

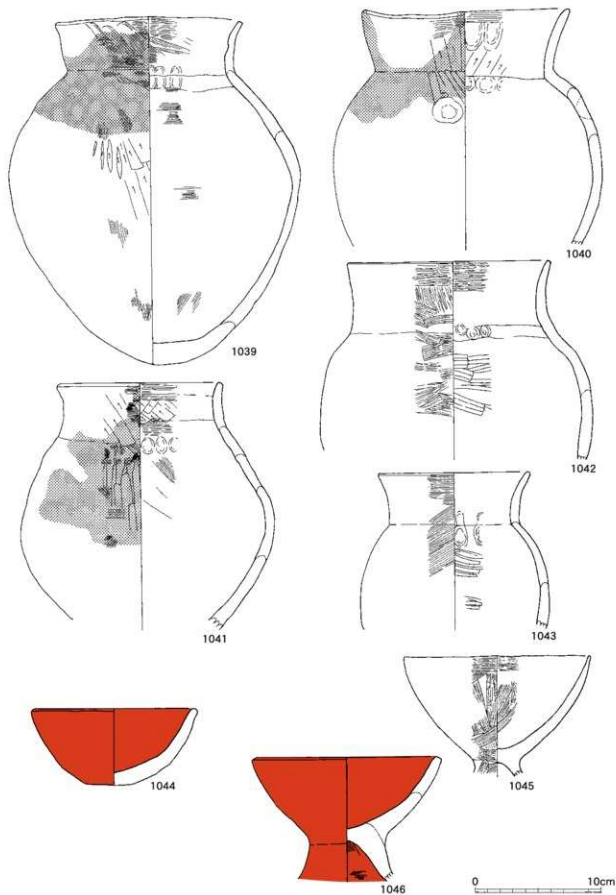


第98図 3号竪穴住居跡内遺物1



第99図 3号竪穴住居跡内遺物2

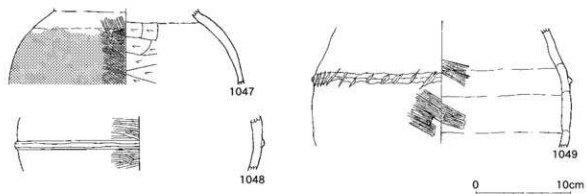




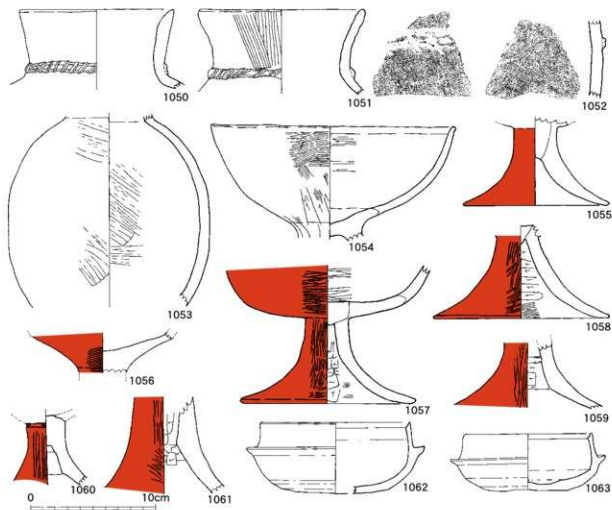
第100図 3号竪穴住居跡内遺物3

塗りできめ細かなヘラマガキが施される。1115は体部である。1116～1124は高坏。1116は口縁部径14.6cm, 器高13.1cmを測る。筒状の脚柱部から裾部はゆ

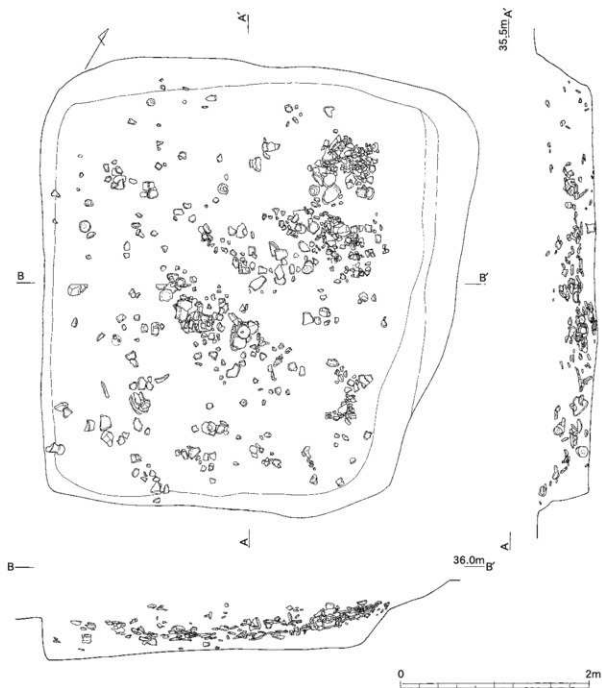
るやかに外反する。坏部はわずかに内湾し口縁部へ至る。1117・1118は坏部で直線的に外反する。1119～1124は脚部である。



第101図 3号竪穴住居跡内遺物4



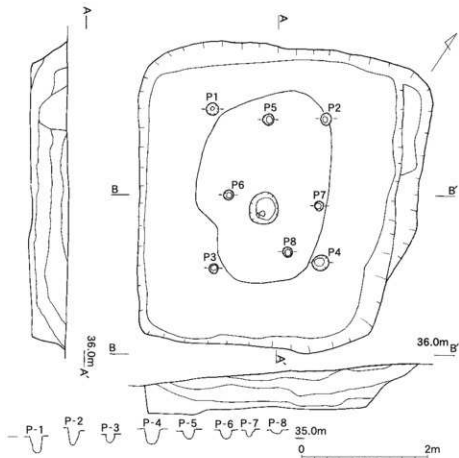
第102図 3号竪穴住居跡内遺物5



第103図 4号竪穴住居跡

1125は口縁部径7.1cm, 器高3.9cmを測る手捏ね土器。底部は尖底で外面に指頭押圧の痕跡が残る。1126～1135は須恵器。1126～1131は坏蓋。1126は口縁部径12.8cm, 器高3.9cm。1127は口縁部径15.7cm, 器高4.7cm。1128は口縁部径16.6cm, 器高4.8cmを測る。いずれも天井部はあまり膨らまないものである。1126・1127は天井部と口縁部をわける突出部は明瞭ではない。1128は天井部と口縁部の境には凹線を連らす。1129は天井部と口縁部の境に突出部が認めら

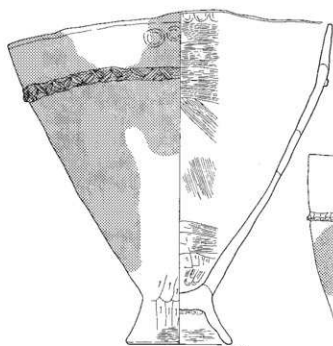
れ稜線が明瞭である。1132～1134は坏。1132は口縁部径11.2cm, 器高4.4cm。1133は口縁部径11.7cm, 器高5cm。1134は口縁部径14.7cm, 器高5.2cmを測る。いずれも立ち上がりは内傾し, 口縁端部には面を有せず丸くおさめる。受部はほぼ水平に伸び端部は丸くおさめる。底部はヘラケズリにより平坦に仕上げたものである。1135は甕の口縁部と思われる。



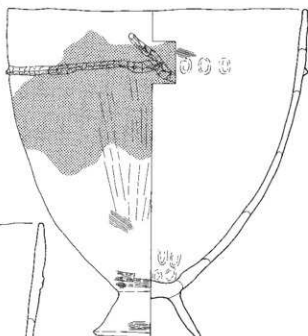
第104図 4号竪穴住居跡

4号竪穴住居跡内遺物				A: 瓦名	B: 瓦名	C: 瓦名	調査	備考	
探検年次	探検	探位	出土区	内面	外面	瓦名			
1924	遺	瓦形				赤	内面 外面	遺	
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ナデ	瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
1925	遺	瓦形				赤	A, B	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B	瓶ナデ	ヘラケズリ
1926	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
1927	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
1928	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
1929	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
1930	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
1931	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	瓶ナデ	ヘラケズリ

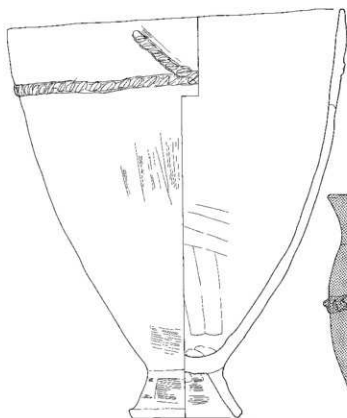
4号竪穴住居跡内遺物				A: 瓦名	B: 瓦名	C: 瓦名	調査	備考	
探検年次	探検	探位	出土区	内面	外面	瓦名			
1932	遺	瓦形				赤	内面 外面	遺	
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ナデ	瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
1933	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
1934	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
1935	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
1936	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
1937	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ
	遺	瓦形				赤	A, B, C	ヘラケズリ	ナデ, 瓶ノリ



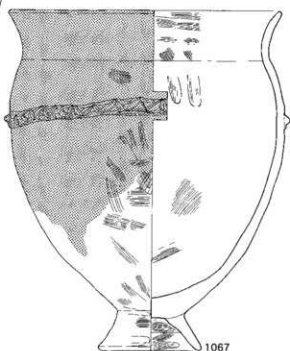
1064



1065



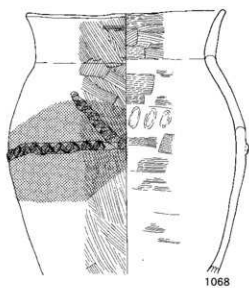
1066



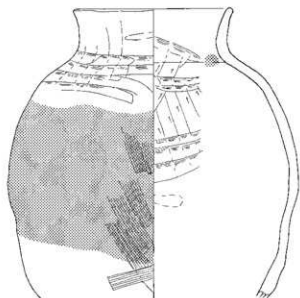
1067



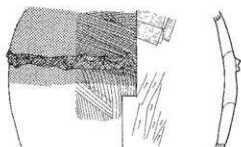
第105図 4号竪穴住居跡内遺物1



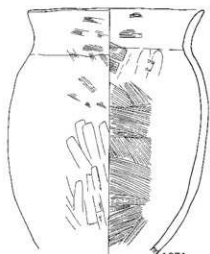
1068



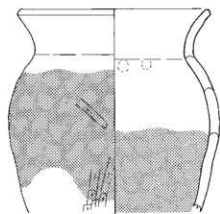
1070



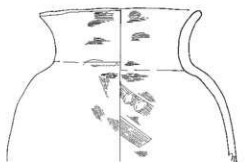
1069



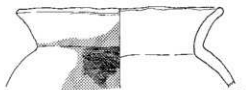
1071



1072



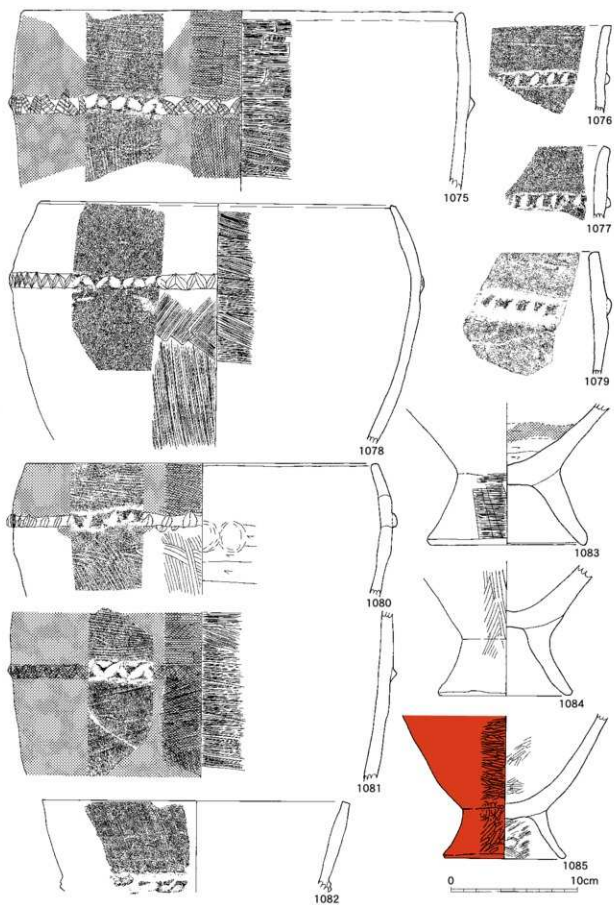
1074



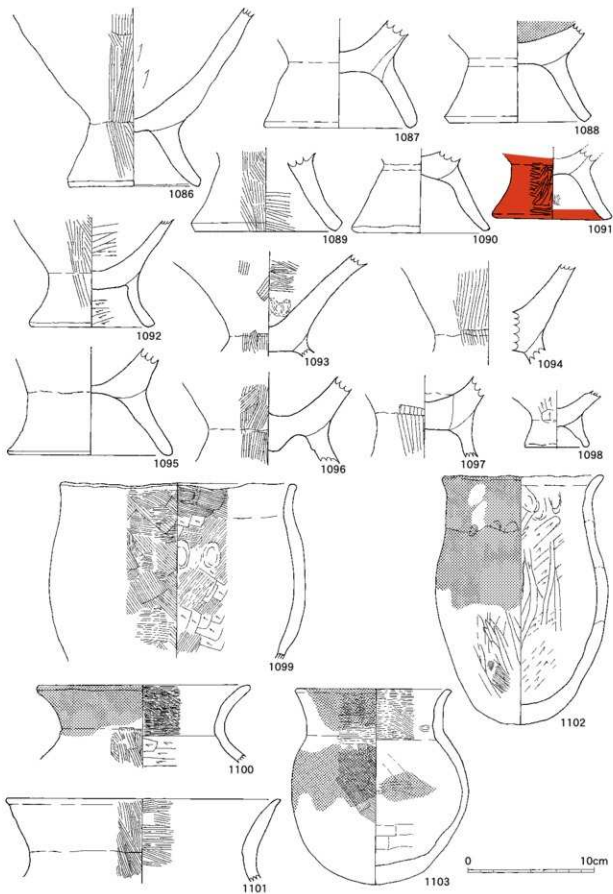
1073

0 10cm

第106図 4号竪穴住居跡内遺物2

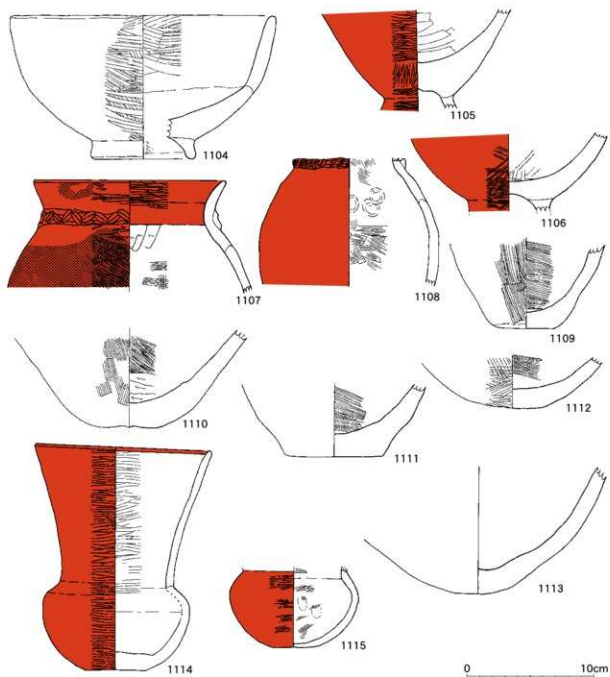


第107图 4号竖穴住居跡内遺物 3

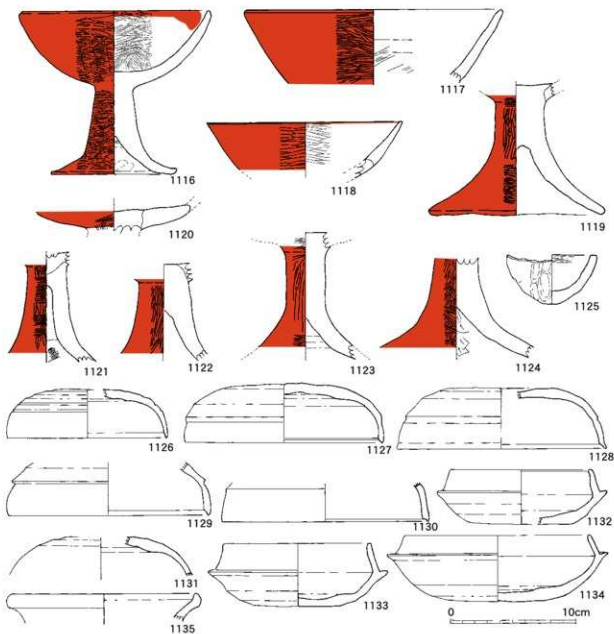


第108图 4号竖穴住居跡内遺物4





第109図 4号竪穴住居跡内遺物5



第110図 4号竪穴住居跡内遺物6

5号住居跡（第111図・第112図）

5号住居跡はF・G・4区において検出された。長軸はほぼ東西で6.48mの不整形な形をしている。深さは44cmである。柱穴は、ピット1～4の4箇所と思われる。北側の壁に近い部分に径1.2m、深さ20cmの浅い掘り込みを有する。遺物は少ないものである。1136は口縁部径31.4cm、器高10cmを測る蓋形土器。丸みを帯びた天井部から口縁部は大きく外反するもので、口縁内面にはスガが付着する。1138～1142は楕形土器。1138・1140は口縁部が外反するものである。1143は平底であるが、壺形土器か

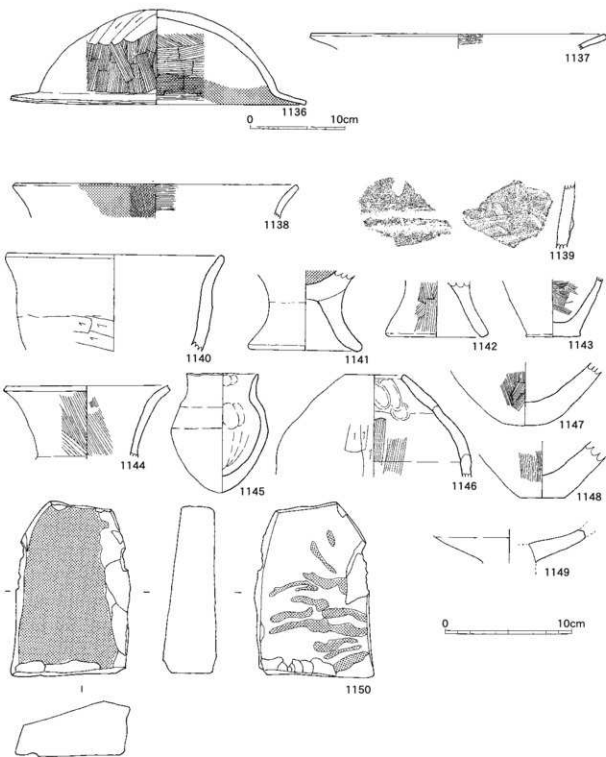
楕形土器が判断できないものである。1144～1148は壺形土器。1144は口縁部径13.0cmを測る。頸部から直線的に外反するものである。1145は口縁部径5.8cm、器高9.5cmを測る小型のものである。尖底の底部から胴部は張らず、口縁部は頸部から直行気味に外反するものである。1146は口縁部径4.7cmを測る無頸壺である。1149は高坏の坏部。1150は表面の全面と裏面の一部に磨耗痕が認められるものである。砥石の可能性が高いものであるが、磨耗が著しく他の用途も考える必要がある。



第111図 5号竪穴住居跡

5号竪穴住居跡内遺物		A: 灰石 B: 石炭 C: 角閃石		色層		階土		調査		備考	
調査番号	種類	部位	出土区	内面	外面	内面	外面	内面	外面	備考	
11336	壺	底部		C: 灰い層	C: 灰い層	A, B		ナデ	ナデ	ハケ目	ハケ目
11337	壺	口縁部		C: 灰い層	焼灰層	A, B		ナデ	ナデ	ハケ目	ナデ
11338	壺	口縁部		層	層	B		焼ナデ	ナデ	ハケ目	
11339	壺	胴部		C: 灰い層	層	A, B		ハケ目	ナデ	ナデ	ハケ目
11340	壺	口縁部		層	オリーブ黒	A, B, C		ナデ	ナデ	ハケ目	ナデ
11341	壺	底部		C: 灰い層	層	A, B		ナデ	ナデ	ハケ目	
11342	壺	底部		焼灰層	C: 灰い層	A, B		ナデ	ナデ	ハケ目	
11343	壺	口縁部		層	層	B, C		焼ナデ	ナデ	ナデ	ハケ目
11344	壺	底部		層	C: 灰い層	B, C		ハケ目	ハケ目		

5号竪穴住居跡内遺物		A: 灰石 B: 石炭 C: 角閃石		色層		階土		調査		備考	
調査番号	種類	部位	出土区	内面	外面	内面	外面	長さ	幅	厚さ	重量
11345	壺	口縁部		焼灰層	焼灰層	B, C		cm	cm	cm	g
11346	壺	底部		黒	C: 灰い層	A, B		cm	cm	cm	g
11347	壺	底部		黒	C: 灰い層	A, B		cm	cm	cm	g
11348	壺	底部		焼灰層	焼灰層	A, B		cm	cm	cm	g
11349	高坪	坪部		層	C: 灰い層	B		cm	cm	cm	g
11350	磁石	磁石						cm	cm	cm	g



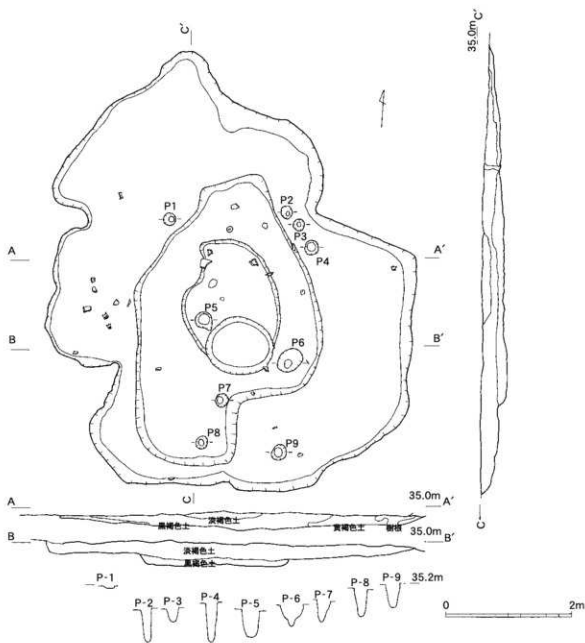
第112図 5号竪穴住居跡内遺物1

6号住居跡（第113図～第114図）

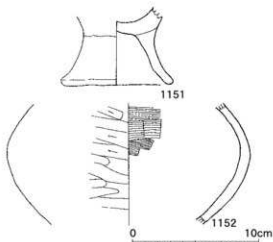
6号住居跡はF・4区において検出された。長軸はほぼ南北で最大長3.3m、最大幅2.9mの不整形な住居である。ほぼ中央に2.15mの一段低い部分があり深さ20cmであるが、周辺は深さ10cm程度の浅

い張り出し状の施設をもつものである。ピットは9個と多いが柱穴として並ぶものはない。

遺物は多くはなく図化出来たものも2点しかない。1151は椀形土器の底部で中空の脚台である。1152は壺形土器。胴部が球形に膨らむものである。



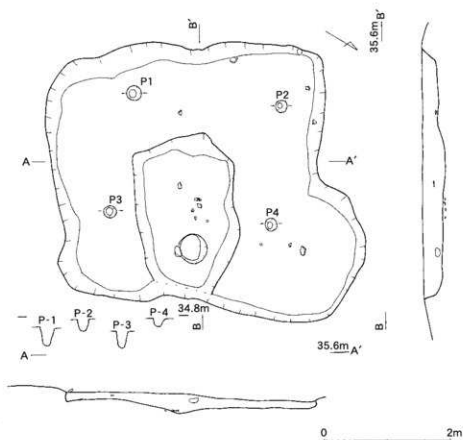
第113図 6号竪穴住居跡



第114図 6号竪穴住居跡内遺物1

7号住居跡 (第115図)

7号住居跡はE-3区において検出された。長軸はほぼ東西で4.24mの方形であるが、北西側に2.08mの突出部を有する。深さは40cmで柱穴はビット1〜4の4箇所と思われる。北側の壁寄りに幅1.6m、長さ2.4mの掘り込みを有する。遺物は少なく小さいもので図化できるものはなかった。



第115図 7号竪穴住居跡

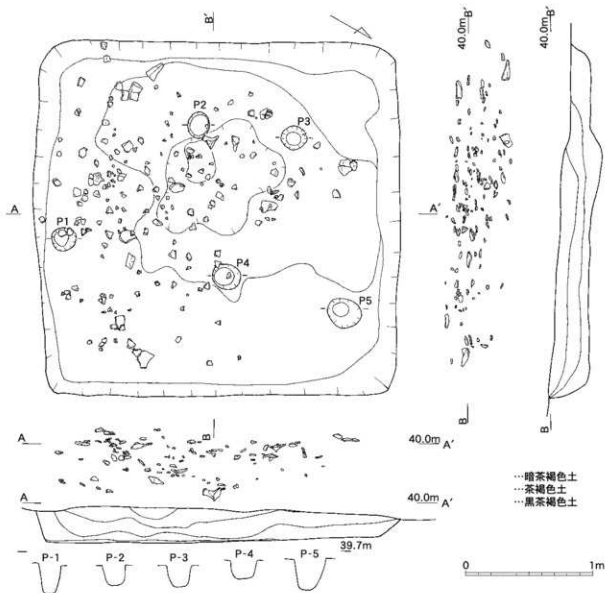
8号住居跡 (第116図・第117図)

8号住居跡はE-7区において検出された。1〜7号住居跡とは1軒だけ離れた標高約40mの緩傾斜地に建てられているのが特徴である。長軸はほぼ南北で29.28mの方形である。ピット5箇所が検出されているが柱穴はピット2・4の2箇所が想定される。遺物は小破片が多くみられる。1153〜1162は椀形土器。1153は口縁径19.5cmを測る。胴部はあまり張らず口縁部は内湾する。胴部上位にすれ違いの刻目突帯を廻らす。1155〜1157は中空の脚台である。

1158〜1162は胴部に刻目突帯を廻らすものである。1163・1164は菱形土器の底部。1165は埴形土器の体部。1166は口縁径7.2cm、器高7.9cmを測る手捏ね土器。内外面に指頭押圧が明瞭に認められるものである。1167〜1176は高坏。1167〜1173は坏部である。1167〜1170は接合部に稜を有し、口縁部は直線的に外反するものである。1169は接合部に稜を有して立ち上がり、口縁部近くでさらに外反するものである。1174〜1176は脚部。脚柱部から裾部へなだらかに広がるものである。

6号竪穴住居跡内遺物											
発掘層別 層別	遺物 番号	種類	部位	出土区 層	色調			形状			備考
					内面	外面	底土	内面	外面	底土	
114区	1151	壺	胴部								3311E
	1152	壺	胴部								3311E
	1153	壺	口縁部								3311E
8号竪穴住居跡内遺物											
発掘層別 層別	遺物 番号	種類	部位	出土区 層	色調			形状			備考
					内面	外面	底土	内面	外面	底土	
117区	1154	壺	胴部								3311E
	1155	壺	胴部								3311E
	1156	壺	胴部								3311E
	1157	壺	胴部								3311E
	1158	壺	胴部								3311E
	1159	壺	胴部								3311E
	1160	壺	胴部								3311E
	1161	壺	胴部								3311E
	1162	壺	胴部								3311E
	1163	壺	胴部								3311E

6号竪穴住居跡内遺物											
発掘層別 層別	遺物 番号	種類	部位	出土区 層	色調			形状			備考
					内面	外面	底土	内面	外面	底土	
115区	1164	壺	胴部								3311E
	1165	壺	胴部								3311E
	1166	壺	胴部								3311E
	1167	壺	胴部								3311E
	1168	壺	胴部								3311E
	1169	壺	胴部								3311E
	1170	壺	胴部								3311E
	1171	壺	胴部								3311E
	1172	壺	胴部								3311E
	1173	壺	胴部								3311E
116区	1174	壺	胴部								3311E
	1175	壺	胴部								3311E
	1176	壺	胴部								3311E
	1177	壺	胴部								3311E

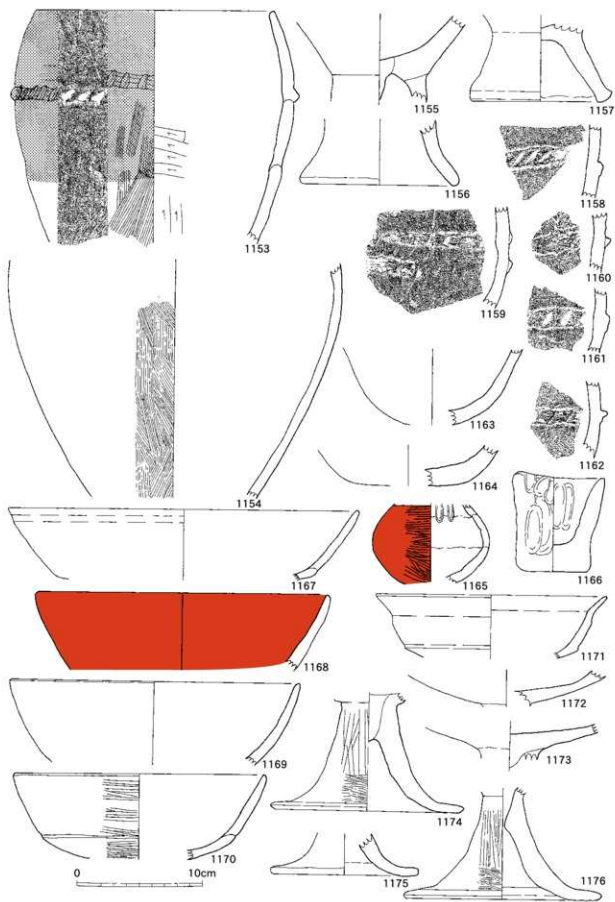


第116図 8号竪穴住居跡

## 2 古墳時代の土器（第118図～第121図）

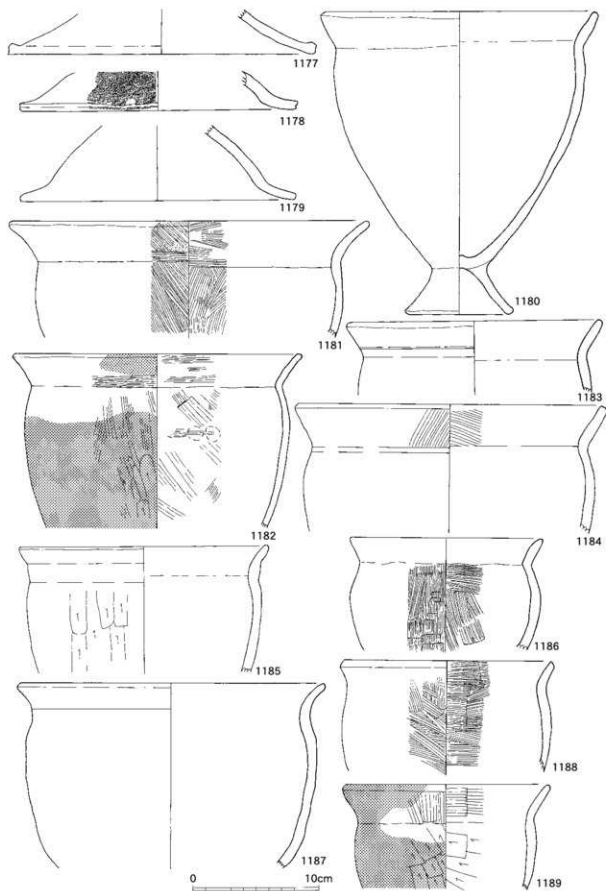
古墳時代で遺構に伴わない土器も、層・層から出土している。1177～1179は蓋形土器。いずれも天井部を欠損するものである。1180～1200は壺形土器。1180は口縁部径22cm、器高24cmを測る。中空の脚台から胴部はやや丸みを帯び、口縁部はややしまった頸部から外反する。口縁内面には稜線がかすかに残るものである。1181～1186は口縁部が外反し、内面に稜線を有するものである。1187～1190は口縁部が外反するが、内面に稜線が残らないものである。1191は頸部に突帯を廻らし、口縁部は内面に稜線を有せず外反するものである。1193～1195は刻目突帯を廻らすものである。1197～1200は中空の脚台である。1201～1212は壺形土器。1201～1204はしまった

頸部から口縁部が外反するものである。1205は頸部に刻目突帯を廻らす。1206～1209は胴部で突帯を廻らすものである。1210は胴部が細長いものである。1211・1212は底部である。1213・1214は埴形土器。1213は平底の底部から胴部は球形に膨らみ頸部へ至るものである。胴部最大径の位置に稜が認められる。1215は口縁部が短く外反するものであるが、無頸壺の範疇に入れたい。1216～1220は鉢形土器。1216は口縁部径10.7cm、器高7.5cmを測るもので、手捏ね土器に近い。1217は分厚い底部で、口縁部はくの字状に外反する。1219は短い脚台から直線的に立ち上がるもので、細身に仕上げ。1220は胴部が丸みを帯びるものである。1221～1224は高坏。1222は穿孔を有する脚部である。1225～1233は須恵器。

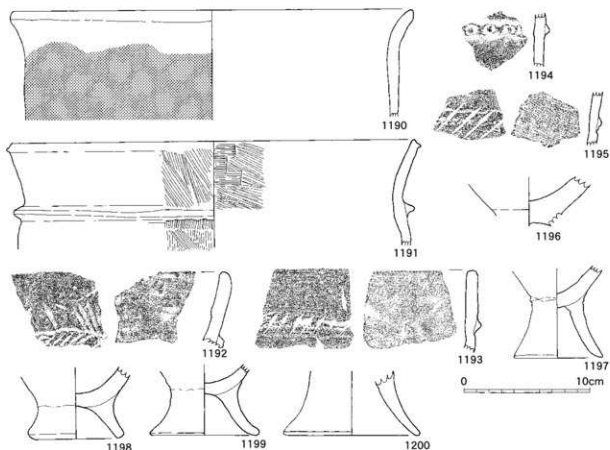


第117图 8号竖穴住居跡内遺物





第118図 古墳時代土器 1

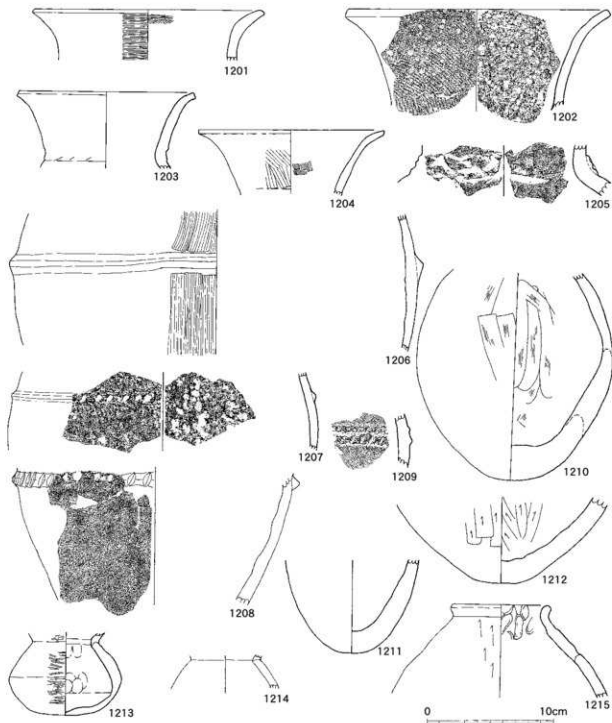


第119図 古墳時代土器 2

古墳時代土器										
器種	器名	部位	土器	色		胎土	胎質		備考	
				内面	外面		内面	外面		
119 器	1197	蓋	口縁部	G-5	紅い黄褐色	A, B, C	ハケ目	ハケ目	内面3	
	1198	蓋	口縁部	B-5	黒	紅い黄褐色	A, C	ナデ	ナデ	
	1199	蓋	口縁部	C-5	黒	紅い黄褐色	A	ナデ	ナデ	
	1190	蓋	底面	B-4	紅い黄褐色	紅い黄褐色	A, B, C	ナデ	ナデ, ヘラケズリ	
	1191	蓋	D縁部	F-10	明赤褐色	紅い黄褐色	A, B	ハケ目	ハケ目 3,20	
	1192	蓋	D縁部	F-10	黒	黒	A	ハケ目	ナデ, ヘラケズリ, 3,20	
	1193	蓋	D縁部	B-4	紅い黄褐色	紅い黄褐色	A, C	ナデ	ナデ	
	1194	蓋	D縁部	F-4	灰黄褐色	黒	A, B, C	ナデ, ハケ目	ナデ, ハケ目 3,20	
	1195	蓋	D縁部	E-4	紅い黄褐色	紅い黄褐色	A, B, C	ナデ	ヘラケズリ	
	1196	蓋	D縁部	F-4	紅い黄褐色	黒	B	粗ナデ	ハケ目 3,20	
	1197	蓋	D縁部	D-3	紅い黄褐色	紅い黄褐色	A, B, C, D, F, ヘラケズリ	ナデ, ハケ目		
	1198	蓋	D縁部	F-10	紅い黄褐色	紅い黄褐色	A, C	ハケ目	ハケ目	
120 器	1199	蓋	D縁部	B-4	紅い黄褐色	紅い黄褐色	A, B, C	ナデ, ヘラケズリ	ナデ, ヘラケズリ, 3,20	
	1200	蓋	口縁部	H-5	黄褐色	紅い黄褐色	A, B, C	ナデ	ナデ, ハケ目 3,20	
	1191	蓋	口縁部	G-11	透黄	紅い黄褐色	A, B, C	ハケ目	ハケ目	
	1192	蓋	口縁部	G-5	紅い黄褐色	黒	A, B, C	粗ナデ	ヘラケズリ	
	1193	蓋	口縁部	G-5	紅い黄褐色	紅い黄褐色	A, B, C	ナデ	ナデ	
	1194	蓋	縁部	I-6	紅い黄褐色	紅い黄褐色	A, B, C	ナデ	ナデ	
	1195	蓋	縁部	C-4	紅い黄褐色	紅い黄褐色	A, B, C	ハケ目	ハケ目	
	1196	蓋	底面	G-5	紅い黄褐色	紅い黄褐色	A, B, C	ナデ	ナデ	
	1197	蓋	底面	G-10	黄褐色	紅い黄褐色	A, B, C	ハケ目	ナデ	
	1198	蓋	底面	G-11	黒	黄褐色	A, B, C	ナデ	粗ナデ	
	1199	蓋	底面	F-10	黒	明赤褐色	A, B, C	ナデ	ナデ, ハケ目	
	1200	蓋	底面	G-7	黒	紅い黄褐色	A, B	ナデ	ハケ目	
121 器	1201	蓋	口縁部	F-5	黒	紅い黄褐色	A, B, C	ナデ	ナデ	
	1202	蓋	口縁部	C-5	紅い黄褐色	紅い黄褐色	A, B, C	ナデ	ナデ	
	1203	蓋	口縁部	F-4	紅い黄褐色	紅い黄褐色	A, B, C	ナデ	ハケ目	
	122 器	1204	蓋	口縁部	G-4	紅い黄褐色	紅い黄褐色	A, B, C	ナデ, ハケ目	ナデ
		1205	蓋	縁部	H-6	灰黄褐色	紅い黄褐色	A, B, C	ナデ	ナデ
		1206	蓋	縁部	D-3	紅い黄褐色	黒	A, B	ナデ	ハケ目
		1207	蓋	縁部	B-4	灰黄褐色	紅い黄褐色	A, B, C	ナデ	ナデ
		1208	蓋	縁部	E-4	明赤褐色	黒	A, B	ナデ	ナデ
		1209	蓋	縁部	H-6	紅い黄褐色	紅い黄褐色	A, B	ナデ	ハケ目
		1210	蓋	縁部	H-6	明赤褐色	紅い黄褐色	A, B	粗ナデ	粗ナデ
		1211	蓋	底面	G-6	明赤褐色	明赤褐色	A, B, C	ナデ	ナデ
		1212	蓋	底面	G-3	赤褐色	紅い黄褐色	A, B, C	ヘラケズリ	ヘラケズリ
1213		埴	体部	F-7	黒	明赤褐色	A, B	ナデ, 粗ナデ	ヘラケズリ	
1214		埴	体部	F-11	明赤褐色	明赤褐色	A	ヘラケズリ	ナデ	
1215		蓋	口縁部	D-3	黒	黒	A, B, C	ナデ	ナデ	
123 器	1216	鉢	底面	E-4	黄褐色	明赤褐色	A, B	ヘラケズリ	ナデ	
	1217	鉢	底面	I-8	明赤褐色	明赤褐色	A, B, C	ナデ	ナデ	
	1218	鉢	縁部	D-4	紅い黄褐色	黒	A, B	粗ナデ	粗ナデ	
	1219	鉢	底面	D-4	紅い黄褐色	黒	A, B, C	粗ナデ	ナデ	
	1220	鉢	底面	E-11	黒	明赤褐色	A, B	ナデ	粗ナデ	
	1221	高杯	口縁部	F-7	黒	黒	B	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	1222	高杯	縁部	F-10	黒	明赤褐色	A, B	ナデ	ハケ目	
	1223	高杯	縁部	H-5	透黄褐色	赤褐色	A, B	ナデ	ヘラケズリ	
	1224	高杯	縁部	F-7	透黄褐色	黒	A, B	ナデ	ヘラケズリ	
	1225	蓋	口縁部	F-7	黒	黒	B	ナデ	ナデ, ヘラケズリ	
	1226	蓋	口縁部	G-10	灰	灰	B	ナデ	ナデ, ヘラケズリ	
	1227	蓋	口縁部	G-10	オリーブ灰	オリーブ灰	B	ナデ	ヘラケズリ	
1228	蓋	口縁部	F-11	灰	粗黄褐色	B	ナデ	平形粗ナデ		
1229	蓋	口縁部	C-3	粗黄褐色	粗黄褐色	B	ナデ	ナデ		
1230	はちそう	口縁部	H-5	黄褐色	灰褐色	B	ナデ	ナデ		
1231	はちそう	口縁部	F-5	オリーブ灰	粗黄褐色	B	ナデ	ナデ		
1232	はちそう	縁部	G-5	粗黄褐色	黒	B	ナデ	粗黄褐色状		
1233	はちそう	縁部	H-6	黄褐色	粗黄褐色	B	ナデ	粗黄褐色状		
1234	洋	口縁部	F-4	透黄褐色	透黄褐色	B	ナデ	ナデ		

1225-1227は蓋。1225は口縁径12.2cmを測る。天井部を欠損するものであるが器高は高いものと思われる。天井部と口縁部をわける稜は短い。口縁端部は内傾し内面に稜を有する。1226は口縁径16.6cmを測る。天井部と口縁部をわける稜線は認められな

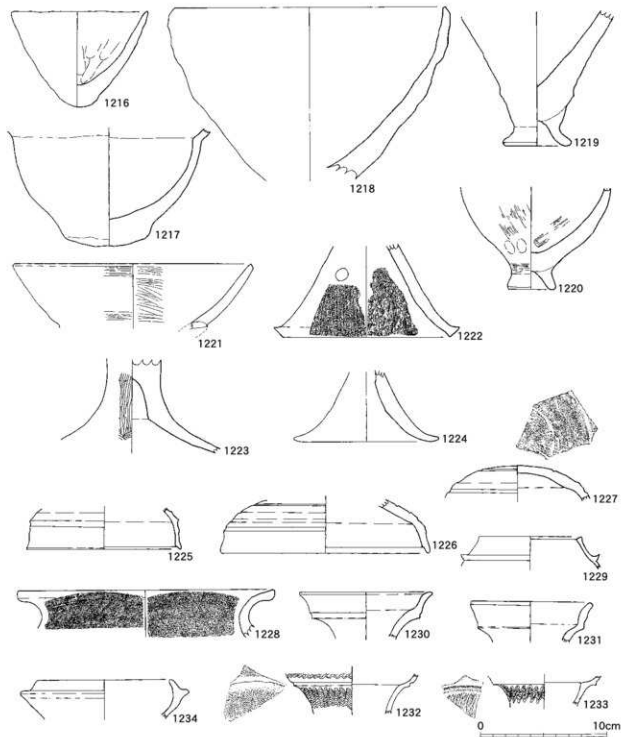
いものである。1228は口縁部が短く外反する甕。口縁径20.3cmを測るもので端部は丸みを帯びる。1229は口縁部が内傾し端部を平坦におさめるものである。口縁部下に鋭い突出部を有するが、全体器形の判明しないものである。1230-1233は小型の壺



第120図 古墳時代土器3

もしくは逆の口縁部である。1230・1231はやや太めの頸部で口縁部との境には稜を有する。1232・1233は頸部と口縁部の境の稜がシャープなものである。1232は口縁部と頸部、1233は頸部に櫛描波状文を施

す。1234は須恵器の模倣土師器である。口縁部径10.6cmを測るもので、口縁部は短く内傾し端部は丸くおさめる。受部は水平にのび端部は丸くおさめる。全体に厚手である。



第121図 古墳時代土器4・須恵器

#### 第4節 古代・中世の調査

古代及び中世の時期ではJ・K・6・7区を中心に遺物が出土している。ピットも数少ないが検出されている。

##### 1 遺構

古代・中世の遺構はピットが検出されたが建物になるような状況ではなかった。

##### 2 遺物（第122図・第127図）

遺物は古代の土師器・須恵器、中世の磁器などが出土している。

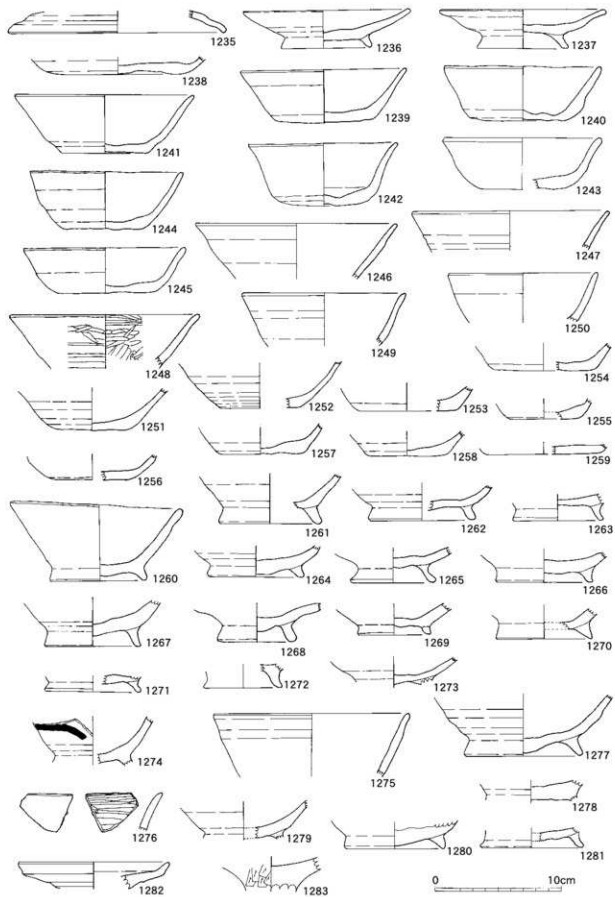
##### 土師器（第122図・第123図）

1235は口縁部径17.3cmを測る蓋。天井部は欠損するが、やや深めの蓋と思われる。天井部から開いた体部は口縁部でやや内湾するものである。1236～1238は皿。1236・1237は口縁部径13.3cm、器高3.0cmを測るもので高台を有するものである。高台は外方へふんばり端部は丸くおさめる。1237はいったん屈曲してから口縁部が外反するものである。1238は口縁部を欠損するものであるが、浅めの皿と思われる。1239～1259は坏。平底の底部から直線的に立ち上がり口縁部へ至るもの（1239～1241・1244）と丸みを帯び口縁部がやや外反するもの（1242・1243・1245）とがある。1240は底部からの立ち上がり部分が分厚くなる。1242・1243は底部が丸みを帯び、体部から口縁部へと外反するものである。口縁部径は11cm～13cmのもの（1239・1240・1242～1244・1250）13cm～16cmのもの（1241・1245～1249）に大別できる。1260～1282は高台を有するもので椀と思われる。1260は口縁部径13.7cm、器高6.4cmを測る。外方にふんばった高台から直線的に立ち上がるもので、口縁部近くでわずかに凹み口縁部は外反状に見える。端部は丸くおさめる。1274は内黒土師器。外面に墨書が認められるが破片のため判読は不可能である。1275～1281は内面に丹が塗布してある内赤土師器である。1275は口縁部端部から外面上位にかけて丹塗りである。1276は外面の一部にも丹がみられる。1278は丹が一部しか残っていないものである。1282・1283は高坏と思われる。1282は直線的に開いた体部から口縁部は逆くの字状に屈曲する。1284～1298は内面をヘラケズリ整形する椀である。底部は

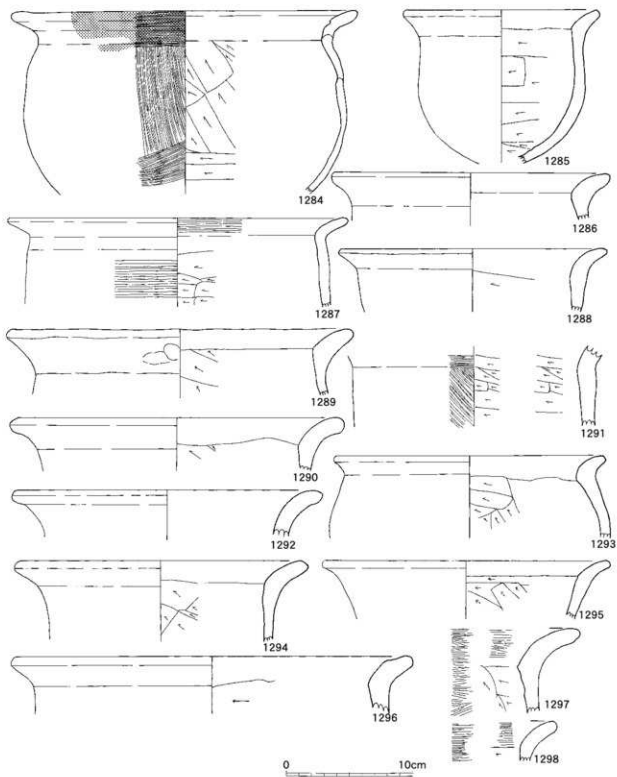
欠損するものの丸底になるものと思われる。1284は口縁部径27.4cmを測る。胴部が張り、ややしまった頸部から口縁部が外反するものである。1285は口縁部径15.5cmを測る小型のものである。わずかに張った胴部から頸部はあまりしまらず、口縁部は外反する。1286～1292・1294～1298は胴部以下が欠損するが、胴部のあまり張らないものと思われる。

##### 須恵器（第124図～第126図）

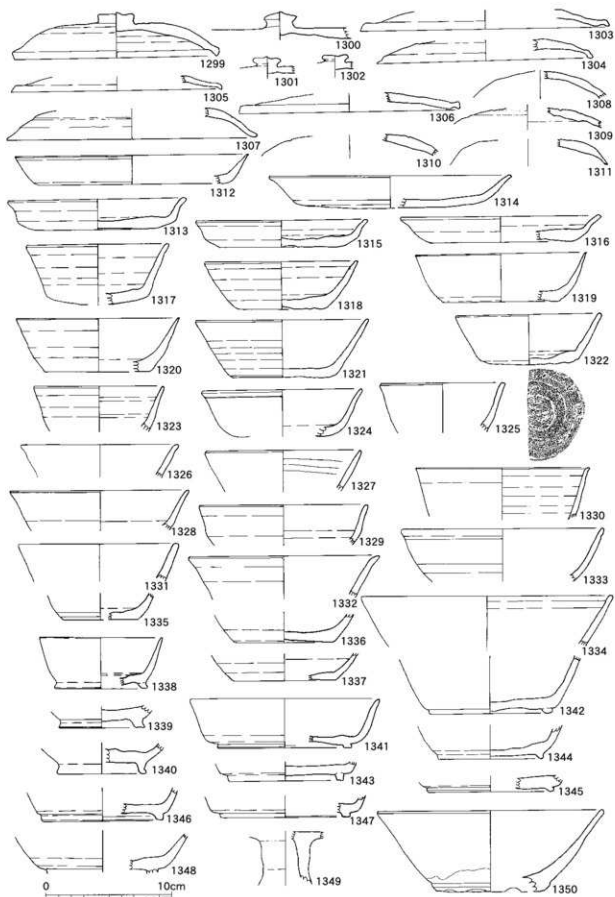
1299～1311は蓋。1299～1302は扁平な宝珠形つまみを有するもので、天井部はヘラケズリで平坦に仕上げるものである。1299は口縁部径16.3cm、器高3.5cmを測るやや深めの蓋である。口縁端部は下方へ短く屈曲し、先端にはふい稜をなす。1312～1316は皿。口縁部径が13～15cm程度のもの（1313・1315・1316）と19cm程度のもの（1312・1314）がある。いずれも体部・口縁部が低いものである。1313～1315は底部がやや分厚い。1316～1337は坏。口縁部が9～12cm程度のもの（1317・1322～1327・1331）と13～14cm程度のもの（1319～1321・1328～1330・1332・1333）に分けられる。口縁部が直線的に外反し、端部は丸くおさめるものがほとんどであるが、口縁部がわずかに外反するもの（1324～1326・1328・1332）や端部を鋭くおさめるもの（1320）もある。1317は底部が膨らむものである。1338～1347は高台をもつ坏。1327は口縁部径12.4cmを測る。高台は高くなくわずかに外方へふんばる。体部は直線的に立ち上がり口縁端部は鋭くおさめるものである。1341は口縁部径15cm、器高3.9cmを測る。口縁部径に比して器高が低いものである。体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。いずれも高台はやや外方にふんばるもので、脚端面が水平なものと丸みを帯びるものがある。1349は高坏の脚部である。1351～1377は椀。1351は口縁部径20cmを測る。頸部は短く口縁部は大きく外反する。口縁端部は屈曲して短く立ち上がるものである。外面は格子目吹き、内面は同心円吹きである。1352は頸部。1354は胴部である。外面は平行吹きと格子目吹きがみられ、内面は平行吹きと同心円吹きと平行吹きがみられる。1378～1393は壺。1378は細い頸部から口縁部は外反し端部は外方へ屈曲するもので



第122図 古代土師器 1

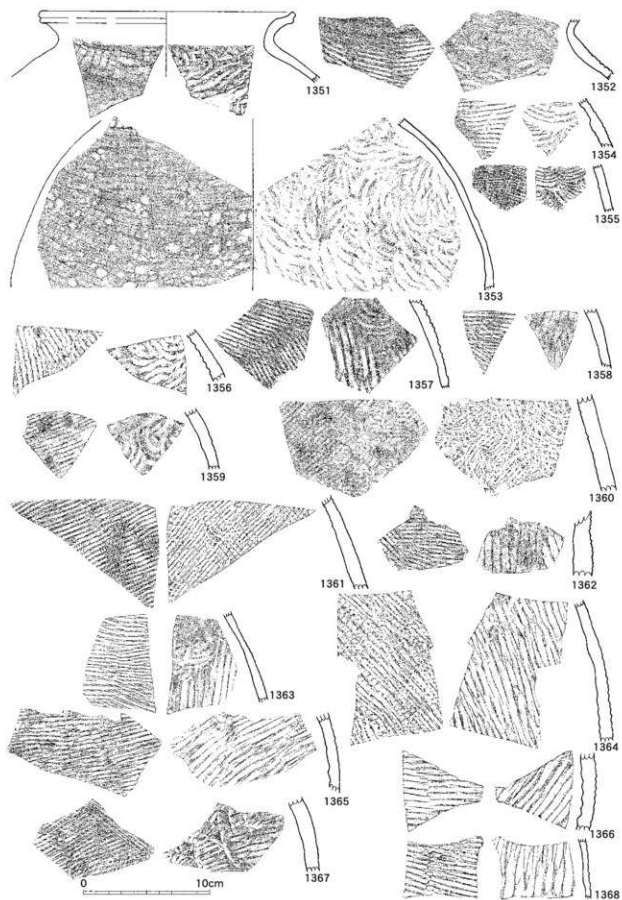


第123図 古代土師器 2

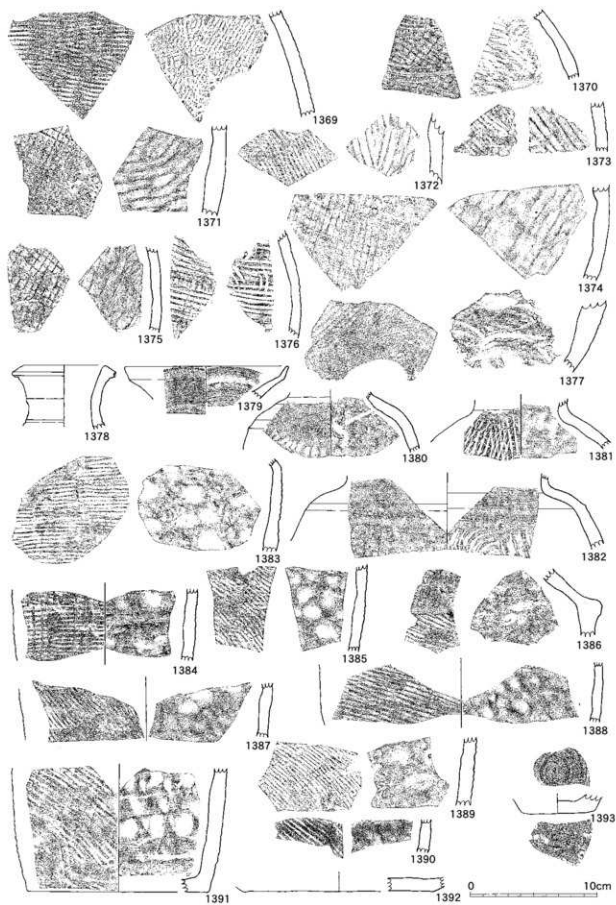


第124图 古代须惠器 1





第125图 古代须惠器 2



第126图 古代须惠器 3

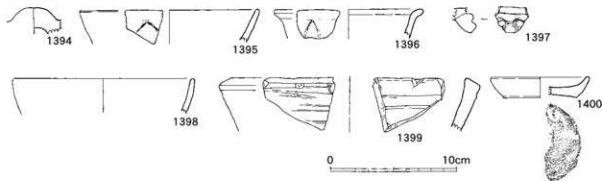
ある。1379は口縁部径13cmを測る。頸部から大きく外反した口縁部は端部で上方へ屈曲するものである。1380～1382は肩部がナゲ肩を呈するものである。1383～1391は平底の底部から胴部は直行気味に立ち上がり、肩部で内側に屈曲して口縁部へ至るものである。口縁部は欠損している。1386は肩部に幅1.5cm、長さ約5cmの楕型の突起を有する。外面は平行叩きである。内面は当て具に布で包んだ小石を使ったと思われる痕跡が認められる。また、仕上げは横方向のナデによる。1392・1393は底部である。青磁(第124図)

1350は越州窯系の青磁碗と思われる。口縁部径18cm、器高6.4cmを測る。体部は大きく開いて立ち上がり口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸みを

帯びる。見込み及び底部外面に目跡の痕跡が認められる。内外面にオリープ色の釉薬がかかり、外面下位から底部にかけては霏胎である。

### 中世の陶磁器(第127図)

1394～1398は青磁。1394は蓋のつまみと思われる。水注等の蓋ではないかと思われる。1395・1396は蓮弁文の碗。1395は幅広の蓮弁, 1396は口縁部が外反する蓮弁文碗である。1397は短い獣足状の足の部分である。足の部分だけのため全体形状は把握出来ないが、三足盤等の足ではないかと推測される。1398は緑書き蓮弁の碗。1399は陶器のこね鉢と思われる。1400は土師器の皿で口縁部径7.8cm、器高1.6cmを測る。底部の糸切りの痕跡が明瞭な浅い皿である。



第127図 中世陶磁器

古代土師器								
時代	器種	口径	法量 (cm)			胎土	色澤 (外)	備考
			底径	器高	高台高			
1200	K-9 Ⅱ	蓋	17.2			赤胎	黒胎ナデ	
1226	K-9 Ⅱ	高台付鉢	13.2	7	6	赤胎	赤胎	黒胎ナデ
1227	K-9 Ⅱ	高台付鉢	13.2	7.2	3.1	赤胎	赤胎	黒胎ナデ
1228	H-5 Ⅲ	蓋	11.6			赤色緑料付	にぶい噴	黒胎ナデ
1229	H-5 Ⅲ	鉢	13.2	7.6	4.2	赤胎	赤	ヘア切り
1230	K-10 Ⅱ	鉢	12.0	7.9	4.4	赤胎	赤	ヘア切り
1241	H-9 Ⅲ	鉢	14.2	7	4.0	赤胎	赤	ヘア切り
1242	H-5 Ⅲ	鉢	11.9	7.2	4.9	赤胎	赤	ヘア切り
1243	G-11 Ⅱ	鉢	12.6	6	4.1	赤胎	赤	洗裏焼
1244	G-11 Ⅱ	鉢	12.2	6.4	4.9	赤胎	明赤焼	丹塗り
1245	H-5 Ⅲ	鉢	12.9	7.5	3.6		赤	ヘア切り
1246	G-11 Ⅱ	鉢	16				赤色胎	赤
1247	K-9 Ⅲ	蓋	16.9				赤色胎	赤
1248	K-9 Ⅲ	蓋	15.2				赤胎	洗裏焼
1249	G-11 Ⅱ	鉢	13.1				赤胎	洗裏焼
1250	H-5 Ⅲ	鉢	12				灰白	洗裏焼
1251	F-11 Ⅱ	鉢	5.6				赤胎	赤色あり
1252	G-11 Ⅱ	鉢	6.2				赤胎	洗裏焼
1253	D-3 Ⅲ	鉢	6					洗裏焼
1254	G-9 Ⅱ	鉢	8.2					にぶい裏焼
1255	H-9 Ⅲ	蓋	6			赤胎	洗裏	赤色あり
1256	F-10 Ⅱ	鉢	5.6				赤胎	洗裏焼
1257	L-9 Ⅲ	蓋	6.2					洗裏焼
1258	F-11 Ⅱ	鉢	6.9					洗裏焼
1259	G-9 Ⅲ	蓋	9					赤
1260	E-11 Ⅲ	蓋	13.7	7.7	5.4	赤胎	洗裏焼	
1261	F-10 Ⅱ	高台付鉢	8				洗裏焼	
1262	L-9 Ⅲ	高台付鉢	8				洗裏	
1263	L-9 Ⅲ	高台付鉢	6.8			赤胎	洗裏	
1264	L-9 Ⅲ	高台付鉢	7.3				洗裏焼	
1265	K-9 Ⅲ	高台付鉢	6.6				赤	
1266	F-11 Ⅱ	高台付鉢	7.4				洗裏焼	赤色緑料

古代土師器								
時代	器種	口径	法量 (cm)			胎土	色澤 (外)	備考
			底径	器高	高台高			
1267	F-11 Ⅱ	高台付鉢	7.6				洗裏焼	
1268	L-10 Ⅱ	蓋	5.8				明赤焼	
1269	G-6 Ⅱ	高台付鉢	5.8				赤胎	赤
1270	F-11 Ⅱ	高台付鉢	6.4				洗裏焼	
1271	F-10 Ⅱ	高台付鉢	7.2				洗裏焼	
1272	G-11 Ⅱ	鉢	6				にぶい裏焼	
1273	F-10 Ⅱ	高台付鉢	7.2				明赤焼	
1274	F-10 Ⅱ	高台付鉢	7.2				明赤焼	
1275	G-11 Ⅱ	鉢	17.2				赤	丹塗り
1276	G-11 Ⅱ	鉢					赤	内丹塗り
1277	L-9 Ⅲ	高台付鉢	9				赤	丹塗り
1278	L-9 Ⅲ	鉢					赤	丹塗り
1279	L-9 Ⅲ	赤					にぶい裏焼	丹塗り
1280	F-10 Ⅱ	高台付鉢	7.8				にぶい裏焼	丹塗り
1281	L-9 Ⅲ	高台付鉢	8				赤	にぶい裏焼 丹塗り
1282	L-6 Ⅱ	蓋	12				洗裏焼	
1283	F-6 Ⅱ	高台付鉢					赤	
1284	K-9 Ⅲ	洗裏焼	27.4				赤	
1285	K-9 Ⅲ	蓋	15.5				赤	にぶい噴
1286	F-10 Ⅱ	鉢	21.5				赤胎	裏焼
1287	L-9 Ⅲ	鉢	27				赤胎	にぶい裏焼
1288	J-7 Ⅱ	鉢	21.2				赤胎	赤、赤、赤、洗裏
1289	D-3 Ⅲ	鉢	27.4				赤胎	にぶい裏焼
1290	J-7 Ⅱ	鉢	26.5				赤胎	赤
1291	J-7 Ⅱ	鉢	24				赤胎	赤
1292	J-7 Ⅱ	鉢	24				赤胎	赤
1293	J-7 Ⅱ	鉢	25.5				赤胎、石黄	明赤焼
1294	J-7 Ⅱ	鉢	23.2				赤胎	赤
1295	G-10 Ⅲ	鉢	22.9				赤胎	赤
1296	B-5 Ⅲ	鉢	31.8				赤胎	石黄
1297	F-10 Ⅱ	鉢					赤胎	赤
1298	F-10 Ⅱ	鉢					赤胎	赤

古代須恵器 1

年代 番号	器種	部位	A : 左右 B : 底裏 C : 胎内口			胎裏			備考
			色別		胎土	内裏		外裏	
			内底	外底		内裏	外裏		
1299	甕	天舟部	H-5	白	灰白	A, B	ナテ	ナテ	ハタケズリ 39-14
1300	甕	天舟部	H-5	白	灰	A, B, C	ナテ	ナテ	39-14
1301	甕	天舟部	H-5	白	灰	ア, B	ナテ	ナテ	ヘラケズリ 39-14
1302	甕	天舟部	H-5	白	灰	A, B	ナテ	ナテ	39-14
1303	甕	口縁部	H-5	灰	灰白	B	ナテ	ナテ	
1304	甕	口縁部	H-5	青灰	青灰	A, B	ナテ	ナテ	
1305	甕	口縁部	H-5	緑灰	灰	B	ナテ	ナテ	
1306	甕	口縁部	H-5	浅黄	浅黄	B	ナテ	ナテ	ナテ
1307	甕	口縁部	F-10	灰	灰	A, B	ナテ	ナテ	ナテ
1308	甕	口縁部	H-5	白	灰白	B	ナテ	ヘラケズリ	
1309	甕	口縁部	G-5	灰	灰	B	ナテ	ヘラケズリ	
1310	甕	口縁部	G-10	白	灰白	A, B	ナテ	ヘラケズリ	
1311	甕	口縁部	G-5	白	灰白	A, B, C	ナテ	ナテ	
1312	甕	口縁部	G-5	白	灰白	A, B, C	ナテ	ナテ	
1313	甕	口縁部	H-5	白	灰白	A, B, C	ナテ	ナテ	
1314	甕	口縁部	H-5	白	灰白	A, B, C	ナテ	ナテ	
1315	甕	口縁部	G-5	白	灰白	A, B, C	ナテ	ナテ	
1316	甕	口縁部	G-5	白	灰白	A, B, C	ナテ	ナテ	
1317	甕	口縁部	H-5	白	灰白	B	ナテ	ナテ	
1318	甕	口縁部	H-5	白	灰白	B	ナテ	ナテ	
1319	甕	口縁部	H-5	灰	灰白	A, B, C	ナテ	ナテ	
1320	甕	口縁部	H-5	灰	灰白	A, B, C	ナテ	ナテ	
1321	甕	口縁部	H-5	白	灰白	A, B	ナテ	ナテ	
1322	甕	口縁部	H-5	灰	灰	B	ナテ	ナテ	
1323	甕	口縁部	H-5	灰	灰白	B	ナテ	ナテ	
1324	甕	口縁部	H-5	灰	灰	B	ナテ	ナテ	
1325	甕	口縁部	H-5	白	灰白	B	ナテ	ナテ	
1326	甕	口縁部	ナシ	灰黄緑	灰黄緑	B	ナテ	ナテ	
1327	甕	口縁部	G-11	灰黄	灰黄	B	ナテ	ナテ	
1328	甕	口縁部	H-5	灰	灰黄	B	ナテ	ナテ	
1329	甕	口縁部	G-7	緑灰黄	灰白	B	ナテ	ナテ	
1330	甕	口縁部	H-5	灰	灰白	B	ナテ	ナテ	
1331	甕	口縁部	H-5	灰	灰黄	B	ナテ	ナテ	
1332	甕	口縁部	H-5	灰	灰黄	B	ナテ	ナテ	
1333	甕	口縁部	H-5	灰	灰	B	ナテ	ナテ	
1334	甕	口縁部	H-5	浅黄	浅黄	B	ナテ	ナテ	
1335	甕	口縁部	H-5	黄灰	灰白	B	ナテ	ナテ	
1336	甕	口縁部	H-5	浅黄	灰白	B	ナテ	ナテ	
1337	甕	口縁部	H-5	灰黄	灰黄	B	ナテ	ナテ	
1338	高台付 甕	口縁部	H-5	灰黄	灰黄	B	ナテ	ナテ	
1339	高台付 甕	口縁部	G-7	灰	灰	B	ナテ	ナテ	
1340	高台付 甕	口縁部	H-5	浅黄	灰	B	ナテ	ナテ	
1341	高台付 甕	口縁部	K-9	灰	灰黄緑	B	ナテ	ナテ	
1342	高台付 甕	口縁部	ナシ	灰	灰黄緑	B	ナテ	ナテ	
1343	高台付 甕	口縁部	H-5	浅黄	浅黄	B	ナテ	ナテ	
1344	高台付 甕	口縁部	G-5	浅黄	浅黄	B	ナテ	ナテ	
1345	高台付 甕	口縁部	J-7	白	灰	B	ナテ	ナテ	
1346	高台付 甕	口縁部	I-2	灰黄	灰黄	B	ナテ	ナテ	

年代 番号	器種	部位	A : 左右 B : 底裏 C : 胎内口			胎裏			備考
			色別		胎土	内裏		外裏	
			内底	外底		内裏	外裏		
1347	高台付 甕	口縁部	D-1	白	灰	B	ナテ	ナテ	
1348	高台付 甕	口縁部	G-5	白	灰白	B	ナテ	ナテ	
1349	高台 甕	口縁部	H-5	白	浅黄	B	ナテ	ナテ	
1350	甕	口縁部	H-5	白	灰	A, B	ナテ	ナテ	
1351	甕	口縁部	H-5	白	灰	B	ナテ	ナテ	
1352	甕	口縁部	G-10	白	浅黄	浅黄	A, B	胎心内	胎子目
1353	甕	口縁部	I-1	灰	灰	B	胎心内	胎子目	
1354	甕	口縁部	H-5	白	灰白	黄	C	胎心内	胎子目
1355	甕	口縁部	G-5	灰	灰	B	胎心内	胎子目	
1356	甕	口縁部	G-11	灰	灰黄	B	胎心内	胎子目	
1357	甕	口縁部	F-11	浅黄	浅黄	A, B	胎心内	胎子目	
1358	甕	口縁部	G-11	灰	灰	B	胎心内	胎子目	
1359	甕	口縁部	F-10	白	灰黄緑	灰黄緑	B	胎心内	胎子目
1360	甕	口縁部	H-5	白	灰	胎心内	胎子目		
1361	甕	口縁部	L-9	灰	灰黄	B	胎心内	胎子目	
1362	甕	口縁部	L-9	白	灰白	黄	B	胎心内	胎子目
1363	甕	口縁部	F-10	灰	灰黄	B	胎心内	胎子目	
1364	甕	口縁部	F-10	灰	灰黄	B	胎心内	胎子目	
1365	甕	口縁部	G-11	灰	灰	B	胎心内	胎子目	
1366	甕	口縁部	G-11	白	灰白	B	胎心内	胎子目	
1367	甕	口縁部	K-8	白	灰白	B	胎心内	胎子目	
1368	甕	口縁部	K-8	白	灰白	B	胎心内	胎子目	
1369	甕	口縁部	G-5	白	灰白	B	胎心内	胎子目	
1370	甕	口縁部	G-5	灰	灰黄	B	胎心内	胎子目	
1371	甕	口縁部	G-5	白	青灰	灰	B	胎心内	胎子目
1372	甕	口縁部	G-5	白	灰白	胎心内	胎子目		
1373	甕	口縁部	K-8	白	灰	灰白	B	胎心内	胎子目
1374	甕	口縁部	H-5	白	薄ナテ	胎心内	胎子目		
1375	甕	口縁部	H-5	白	薄ナテ	胎心内	胎子目		
1376	甕	口縁部	K-8	白	灰白	B	胎心内	胎子目	
1377	甕	口縁部	I-8	灰	灰	B	胎心内	胎子目	
1378	甕	口縁部	ナシ	黄黄緑	浅黄	B	ナテ	ナテ	
1379	甕	口縁部	G-5	灰	灰	A, B, C	ナテ	ナテ	
1380	甕	口縁部	G-11	白	黄黄緑	浅黄	A, B	ナテ	ヘラケズリ
1381	甕	口縁部	G-11	灰	灰	B	胎心内	胎子目	
1382	甕	口縁部	G-4	灰	黄黄緑	胎心内	胎子目		
1383	甕	口縁部	G-11	浅黄	灰白	B	胎心内	胎子目	
1384	甕	口縁部	G-11	白	灰白	浅黄	A, B	ナテ	胎子目
1385	甕	口縁部	L-9	白	黄黄緑	灰白	B	胎心内	胎子目
1386	甕	口縁部	K-8	白	黄黄緑	灰白	B	胎心内	胎子目
1387	甕	口縁部	F-10	白	灰	灰白	B	胎心内	胎子目
1388	甕	口縁部	K-8	白	灰	灰黄緑	B	胎心内	胎子目
1389	甕	口縁部	F-11	白	黄黄緑	胎心内	胎子目		
1390	甕	口縁部	K-8	白	灰	灰黄緑	B	胎心内	胎子目
1391	甕	口縁部	G-11	白	灰白	黄	B, C	胎心内	胎子目
1392	甕	口縁部	K-9	白	灰黄緑	灰白	B	胎心内	胎子目
1393	甕	口縁部	ナシ	灰	灰	B	胎心内	胎子目	

## 第VII章 まとめにかえて

### 1 縄文時代

縄文時代早期から晩期に至るまで、長期間に渡っている。遺跡の山頂部は縄文時代早期、尾根部から谷部に掛けては縄文時代晩期まで生活が営まれていたことが分かった。特に縄文時代早期の遺構、遺物量と縄文時代晩期の遺物量は顕著である。

#### (1) 縄文時代早期

遺跡の山稜部の山頂付近を中心に、遺構・遺物が広がりをみせる。

##### ア 遺構

遺構は、集石が8基検出されたが、遺跡の小高い山稜の山頂部に集中しており、山頂部の西側に5基、南側に2基、遺跡西側の谷部に1基ずつ検出された。南側から検出された集石遺構は、いずれも周辺には石坂式土器などの縄文時代早期の土器を多数伴っている。

##### イ 遺物

早期の土器は、Ⅰ類からⅩ類まで10類に分類されたが、Ⅰ類土器の出土量は顕著である。

Ⅰ類は、志風頭タイプといわれる土器に類するものである。南さつま市志風頭遺跡を標識遺跡として志風頭式土器とする意見<sup>31</sup>もあるが、鹿児島市松元町前原遺跡においてこのタイプの土器が数多く出土しており、今後の類例資料の増加と研究を待ちたい。Ⅱ類は、指宿市小牧3A遺跡を標識とする小牧3A式土器に類する土器である<sup>32</sup>。Ⅲ類は、吉田式土器に類する土器である。胴部に貝殻押し文を施すものをこれに分類した。Ⅳ類は、石坂式土器に類する土器である。193点を掲載したが、本遺跡において最大の出土量である。Ⅴ類は、中原式土器、Ⅵ類は、下剝牽式土器に類する土器である。Ⅶ類は、桑ノ丸式土器に類する土器である。Ⅷ類は、押型文土器。Ⅷ類は、変形惣糸文土器。Ⅸ類は、塞ノ神A b式土器に類する土器である。

#### (2) 縄文時代前期・中期・後期

前期から後期にかけての遺構は検出できな

かったが、土器は、Ⅺ・Ⅻ類を縄文時代前期、Ⅼ・Ⅽ類は縄文時代中期、Ⅾ類は縄文時代後期のⅪ類からⅫ類の5類に分類された。

Ⅺ類は曾畑式土器。Ⅻ類は深溝式土器。Ⅼ類土器は船元式土器、Ⅽ類土器は春日式土器に類する土器である。Ⅾ類は指宿式土器に類する。

#### (3) 縄文時代晩期

遺跡の山頂部から下った尾根部から谷部にかけてその遺構や遺物の広がりがみられる。

##### ア 遺構

遺構は、集石遺構が1基、集積遺構が2基、埋設土器が2基検出されている。土器や石器の出土量からすると、遺構の検出量は少ない。

##### イ 遺物

土器は、粗製深鉢・粗製浅鉢・精製浅鉢をまとめてⅮ類土器とした。これをa・b・cに小分類し、ⅰ類土器は、ⅱ類を入笠式土器、ⅲ類を黒川式土器、ⅳ類を南さつま市の干河原遺跡を標識とする干河原(ひこばる)段階の土器に分類される。ⅳ類の土器は、東和幸氏が、黒川式土器の最終段階に位置付けられる鹿児島島の無刻目突帯文土器を「干河原段階」と設定したものである<sup>33</sup>。

石器は、打製石斧の検出量が顕著である。打製石斧は、掘り具としての使用が知られている<sup>34</sup>が、首都大学東京、都市教育学部助教授山田昌久氏の指摘によると、頁岩製打製石斧の石鏃としての使用痕や磨滅の過程から、当時の製作直後から破棄までが分かることを指摘された。しかし、今回は時間的に他遺跡との比較を含めて検証はできなかった。また、その出土量や製作跡のないことや遺構の検出がないことから、想像をたくましくすると本遺跡が畠地を中心として活用されていたのではないかという示唆をいたした。

石鏃は、検出地点が全て遺跡の山稜部の尾根部分に集中していることから、尾根部を狩猟場としていたことが推測できる。

このことから、縄文時代晩期は谷部は畠として利用したり、山の尾根部を狩猟場として利用

したりして生活していたのではないかと推測される。

## 2 弥生時代

弥生時代は、遺物の量は多くはないが中期を中心に遺構・遺物が出土している。遺構では小児用合口壺棺が検出された。壺棺の上壺が北部九州系の須玖式の全面丹塗りの広口壺で、下壺が中部九州系の黒甕式の壺という組合せである。須玖式土器は、須玖式特有の「分割ミガキ」が施されている。このミガキは真下から見ると四角形状を呈するものである。また、頸部に施されている暗文の幅・傾き・揃い方も須玖式の典型的な特徴である。胴部の器壁の厚さが極めて薄く、胎土も精製土器である点なども南九州ではみられないものであることから北部九州からの搬入品の可能性が高いものである<sup>215</sup>。下壺の黒甕式土器は、やや長胴ではあるが、きめの細かいハケ目調整・底部がやや凸レンズ状に膨らむ点など黒甕式の特徴を備えているものである。南九州で作られた可能性もあるが搬入品と考えられるものである。中期後半に北部九州と中九州からの搬入土器で、北部九州的な埋葬である襦棺（壺棺）葬が行なわれている点に注目したい。遺物は弥生時代前期の突帯文系の襦形土器（921～923）、中期前半の incoming 式土器（924～931）、黒甕式（939～943）、中期中葉の吉ヶ崎式（932）、中期後半では山ノ口式（948～950・963～969）、黒甕式（944～955・961）、須玖式（937・938）等がみられる。当地域は、黒甕式系の土器が多くみられる傾向にあり、西海岸添いの交流が頻繁にあったことが考えられているが、本遺跡でもそのことを裏付ける資料が多く出土している。石器も柱状片刃石器や片刃の磨製石斧及び打製石鎌が出土し、稲作農耕を裏付けるものである。

## 3 古墳時代

古墳時代では、竪穴住居跡 8軒が検出されている。1～7号住居跡は傾斜面から西側へのびた平坦面に並ぶように検出されたが、8号住居跡だけは1軒だけ離れた緩傾斜地において検出されている。住居の形態をみると1号～4号・8号はほぼ方形であるが、

5号・6号は不整形なもので、7号は張り出しをもつものである。

1号住居跡は、ベッド状の施設を有するもので形態的にはやや古いものと思われる。住居内土器についても、中津野式土器の新しいタイプとするか、中津野式の特徴を有したものとするかであるが、時期としては古墳時代前期前半の範囲で捉えられよう。

2号住居跡は、炭化材による<sup>14</sup>C年代測定では、1510 40年（補正<sup>14</sup>C年代1480 40）という数値が出ている。土器は笹貫式土器の範疇である。また、須恵器（須恵式）を伴っており6世紀代と思われる。

3号住居跡は、炭化材による<sup>14</sup>C年代測定では、1430 40（補正<sup>14</sup>C年代1420 40）、1580 40（補正<sup>14</sup>C年代1560 40）という数値が出ている。土器は2号住居跡同様笹貫式の範疇である。また、須恵器（須恵式）を伴っており6世紀代と思われる。

4号住居跡からは、多くの土器が出土している。土器は2・3号住居跡と同様笹貫式の範疇である。須恵器も坏・坏蓋等多く出土している。これらの須恵器は陶邑古窯跡のMT15型式（-1）～TK10型式（-2）の特徴を有しており、6世紀前半代と思われる。

5号住居跡は、蓋や襦形土器の形状から1号住居跡と近い時期にあるものと思われる。

6号住居跡は、遺物が少なく時期判定が困難であるが、住居の形態から5号住居と近いものと思われる。

7号住居跡は、遺物が少なく形式判定ができる状況ではなかった。

8号住居跡は、須恵器は出土しないものの、土器は4号住居跡出土の襦形土器と似ており笹貫式である。

尾ヶ原遺跡の住居跡についてみると、1号・5号・6号の中津野式の新段階の時期と思われる<sup>216</sup>一群と、2号・3号・4号・8号の笹貫式の時期と思われる一群に大きく2分される傾向がみられる。ただし3号と4号は同時に存在することはないと思われるほど近接しており、笹貫式の段階でも時間差はあるものと考えられる。2号・3号・4号の須恵

器についてみると、3号の環がMT15型式、2号・4号の環・蓋はTK10型式と思われるもので、3号が2号・4号よりやや古い段階のものと考えられる。全体的には中津野式と笹貫式との間にかなりの時間差がある点が問題ではあるが、隣接する吹上小中原遺跡の古墳時代の住居跡にTK208型式(須恵)を伴う東原式段階の住居があり、今後両遺跡の関連について検討する必要がある。また、須恵器の供給元についてみると、大阪府陶邑と考えるのが妥当であるが、近年九州内や四国等でも古墳時代の窯跡が発見されているため、その辺りも視野に入れておく必要がある。特に熊本県植木町宇城産須恵器はTK47型式(5世紀)にさかのぼる可能性があることや6世紀をととして陶邑とは異なり大型化しない等の特徴があることがわかりはじめているということである。本遺跡の須恵器が宇城産である可能性は十分に考えられる<sup>37</sup>。また、三辻一による蛍光X線分析においても、陶邑の範疇のものと宇城東・宇城西の範疇のものがみられるということである。今後の検討課題として残される。

また、尾ヶ原遺跡においても、吹上小中原遺跡と同様広口口縁の丸底の椀形土器が多い特徴があるが、従来成川式にある脚台を有する椀形土器も存在する。このことは、肝属郡肝付町東田遺跡、後山山下遺跡および南さつま市金峰町上水流遺跡でも同様の状況がみられる。古墳時代の土器器様式が拠点的に導入された結果ではないかと考えられる。また、吹上小中原遺跡の4号住居跡(東原式)出土の甕は、内面ヘラケズリが顕著なものと、ヘラケズリが無いものとが存在するが、本遺跡では内面ヘラケズリの無いものばかりである。このことは、土器器様式の情報が時間と共に欠落していったことの現れではないだろうか。

#### 4 古代・中世

古代・中世では、ピットが若干検出されたが建物としてとらえることは出来なかった。遺物は、古代の土師器・須恵器が多く出土している。土師器・須恵器は9世紀から10世紀を中心にしたものと思われる。また、1点ではあるが、越州窯の青磁碗が出土

している点が注目される。農業開発総合センター遺跡群内で古代の遺構・遺物が出土しているのは、諏訪牟田遺跡の掘立柱建物跡、神原遺跡のV字溝等があげられるだけで意外と少ないようである。本遺跡では、遺構は無いものの遺物が多く、越州窯青磁碗が出土するなど貴重な資料が得られた。今後、諏訪牟田遺跡等の整理作業が進むことにより、本遺跡の性格も明らかにしたいものである。中世では、青磁等が数点出土したのみである。しかしながら、青磁の中には破片ではあるが、水注などの蓋と思われるものや、三足盤ではないかと思われる獣足部分が出土するなど、他ではみられない貴重な資料がある。獣足をもつ三足盤は、薩摩川内市の大鳥遺跡で出土しているくらいである<sup>38</sup>。農業開発総合センター遺跡群内での中世の集落は、吹上小中原遺跡・諏訪牟田遺跡・馬塚松遺跡・宗円堀遺跡・市堀遺跡など少なからず存在するが、整理作業が進む段階で何らかの方向性を見い出したいものである。

#### 参考文献

- 註1 上杉彰紀、2000年「調整方法から見た縄文早期貝殻文土器」南九州縄文通信 14(南九州縄文研究会)
- 註2 大根町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)「大中原遺跡」2000年3月 鹿児島県肝属郡根占町教育委員会
- 註3 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(38)「計志加里遺跡」2002年3月 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 註4 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(79)「大坪遺跡」2005年3月 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 註5 中園聡(鹿児島国際大学教授)による教示
- 註6 中村直子(鹿児島大学助教授)による教示
- 註7 橋本達也(鹿児島大学助教授)による教示
- 註8 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(80)「大鳥遺跡」2005年3月 鹿児島県立埋蔵文化財センター

## 1 放射性炭素年代測定

### (1) 試料と方法

試料は、1が2号住居跡の炭化材、2及び3が3号住居跡の炭化材である。酸-アルカリ-酸洗浄で前処理を行い、調整は石墨調整である。加速器質量分析(AMS)法で測定する。

### (2) 測定結果は下表のとおりである。

試料名	<sup>14</sup> C年代 (年BP)	<sup>13</sup> C (‰)	補正 <sup>14</sup> C年代 (年BP)	暦年代
1	1510 ± 40	-26.8	1480 ± 40	交点: CalAD 600
				1 : CalAD 550-630
				2 : CalAD 530-650
2	1430 ± 40	-25.4	1420 ± 40	交点: CalAD 640
				1 : CalAD 620-660
				2 : CalAD 570-670
3	1580 ± 40	-26.5	1560 ± 40	交点: CalAD 530
				1 : CalAD 430-550
				2 : CalAD 410-600

### (3) 考察

今試料の分析の結果、2号住居跡(1)では、1480 ± 40y B P (2の暦年代でA D 530-650年)、3号住居跡(2)では、1420 ± 40y B P (同じくA D 570-670年) 3号住居跡(3)では1560 ± 40y B P (同じくA D 410-600年)の年代値が得られた。3号住居跡(3)では暦年代の年代幅が大きくなっているが、これは該当期の暦年代較正曲線が長期間にわたって停滞しているためである。

文献 Stüiver M et al (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration Radiocarbon, 40 (3)

中村俊夫(1999)放射性炭素法、考古学のための年代測定学入門、古今書院、p. 1-36

## 2 樹種同定

試料は、2号・3号住居跡から出土した3点の炭化材である。試料を割削して新鮮な基本的断面(横断面、放射断面、接線断面)を作製し、落射顕微鏡によって75-750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行なった。その結果、2号住居跡(1)はヤマツバキ(Camelia Japonica Linn.ツバキ科)、3号住居跡(2・3)はクリ(Castanea crenata Sieb. et Zucc. ブナ科)である。

文献 佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p. 20-48

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p. 49-100

島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土製品総覧、雄山閣、296p

## 3 植物珪酸体分析

試料は2号住居跡と8号住居跡、及び弥生時代の合口壺棺から採取された13点である。

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、試料を105°Cで24時間乾燥 試料約1gに直径40µm以下のガラスビーズを約0.02g添加 電気炉灰化法による脱有機物処理 超音波水中照射による分散 沈定法による20µm以下の微粒子除去 封入材(オキット)中に分散してプレバート作成。

### 分析結果

- 2号住居跡の埋土・床面直上・床面及び埋土中の焼土について分析した。その結果、床面では樹木のクスノキ科が多量検出され、ススキ属型・ウシクサ族A・メダケ節型・ミヤコザサ節型及びブナ科(シイ属)なども検出された。床面直上でも、おおむね同様の結果であるが、ススキ属型が増加しており、ヨシ属・ネザサ節型・マンサク科(イスノキ属)も出現している。埋土では、ススキ属型がさらに増加しており、ブナ科(アカガシ垂属)やアワブキ科も出現している。埋土中の焼土では、ススキ属型・ウシクサ族A・クスノキ科が多量に検出され、キビ族型・ネザサ節型・クマザサ属型・ミヤコザサ節型・ブナ科(シイ属)なども検出された。これは、埋土の分析結果と類似している。樹木はイネ科と比較して一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でも過大に評価する必要がある。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い。
- 8号住居跡の埋土・床面直上・床面について分析を行なった。その結果、床面では樹木のブナ科(シイ属)やクスノキ科が比較的少量に検出され、キビ族型・ススキ属型・ウシクサ族A・メダケ節型・ネザサ節型・クマザサ属型・ミヤコザサ節型及びマンサク科(イスノキ属)なども検出された。



床面直上及び埋土でも、おおむね同様の結果であるが、埋土ではヨシ属やアワブキ科も出現している。

- (3) 合口壺棺の上壺内部の土壌・下壺内の土壌・土器外の土壌について分析を行なった。その結果、ほとんどの試料から樹木のブナ科(シイ属)・クスノキ科・マンサク科(イスノキ属)が多量に検出された。また、イネ科ではススキ属型やウシクサ族Aが比較的多く検出され、キビ族型・メダケ節型・ネザサ節型なども検出された。土器外の土壌でも同様の結果であり、植物珪酸体の組成や密度に特に大きな差異は認められなかった。

植物珪酸体分析から推定される植生と環境

- (1) 2号住居跡の埋没当時はススキ属やチガヤ属を主体としたメダケ属(メダケ節やネザサ節)なども生育する比較的乾燥した開かれた環境であったと考えられ、周辺にはクスノキ科やブナ科(シイ属)など生育する照葉樹林が分布していたと推定される。2号住居跡の床面直上では少量ながらヨシ属が認められた。遺跡の立地から住居付近に湿地性のヨシ属が生育していたことは考えにくいことから、このヨシ属については住居の屋根材や敷物などに利用されていたものに由来する可能性も考えられる。今回の分析では、イネ科栽培植物(イネ・ムギ類・ヒエ・アワ・キビ等)に由来する植物珪酸体の検出が期待されたが、これらの植物珪酸体はいずれの試料からも検出されなかった。
- (2) 8号住居跡の埋没時でも2号住居跡とおおむね同様であったと考えられるが、ススキ属やチガヤ属の分布は比較的小さかったと推定される。なお、ここでも少量ながらヨシ属が認められている。
- (3) 合口壺棺の内部土壌の分析結果は、土器外の土壌分析と同様であり、特に特徴は認められなかった。当時の調査区周辺は、ススキ属やチガヤ属・キビ族・メダケ属(メダケ節やネザサ節)などが生育する比較的乾燥した開かれた環境であったと考えられ、遺跡周辺にはブナ科(シイ属)・クスノキ科・マンサク科(イスノキ科)等が生育する照葉樹林が分布していたことが推定される。

文献 杉山真二(1987)タケ亜科植物の機動細胞珪酸体, 富

土竹類植物園報告第31号

杉山真二(1999)植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史第四紀研究3&2)

杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)考古学と植物学 同成社

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究

(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-考古学と自然科学9

室井紳(1969)竹・笹の話-よみもの植物記-北隆館

#### 4 リン・カルシウム分析

壺棺の上壺および下壺内部の土壌と土器外の土壌について分析を行なった。分析方法はエネルギー分散型蛍光X線分析システムを用いて、元素の同定及びフェンダメンタルパラメータ法による定量分析を行なった。試料の処理法は 試料を絶乾 メノウ製乳鉢を用いて試料を粉碎 試料をビニール製リング枠に入れ、圧力15 t/cm<sup>2</sup>でプレスして錠剤試料を作成 測定時間300秒、照射径20mm、電圧30KeV、試料室内真空の条件で測定。

一般に、未耕地の土壌中におけるリン酸含量は0.1~0.5%程度、耕地土壌でリン酸肥料が投入された場合は1.0%程度である。農耕地では施肥による影響が大きく、目的とする試料の分析結果のみから遺構・遺物内における生物遺体の存在を確認するのは困難である。このため、比較試料(遺構・遺物外の試料)との対比を行なう必要がある。

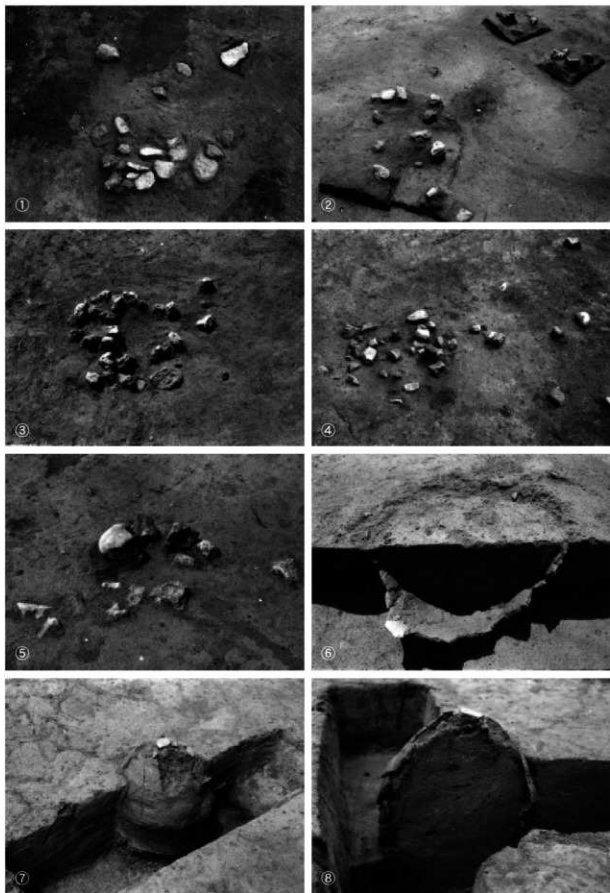
土器内の土壌におけるリン酸含量は、1.11~1.25%(平均1.16%)と高い値である。ただし、土器外の土壌でも1.06~1.16%(平均1.11%)と高い値であり、両者の間に明瞭な差異は認められない。また、カルシウム含量も土器内では2.72~3.11%(平均2.98%)であり、土器外の2.43~3.15%(平均2.79%)と比較して明瞭な差異は認められない。

以上のことから合口壺棺の内部には、リン酸やカルシウムを多く含む何らかの生物遺体が存在していた可能性が考えられるが、土器外の比較試料との間に明瞭な差異が認められないことや、地表面から比較的浅いことから、後代の農耕に伴う施肥などの影響も否定できない。

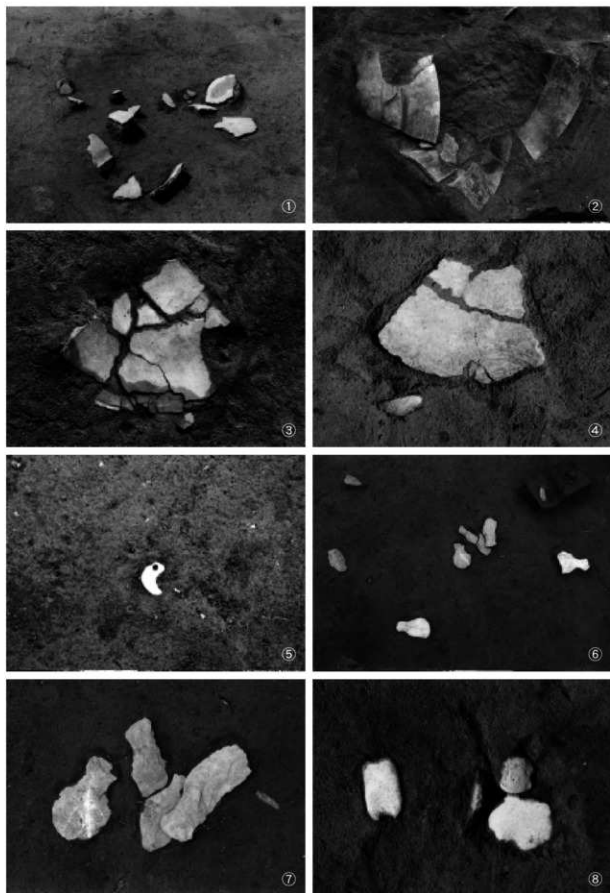
文献 竹迫絃(1993)リン分析法, 日本第四紀研究会編, 四紀試料科学分析法2, 研究対象別分析法, 東京大学出版会, p38-45



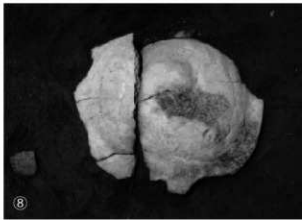
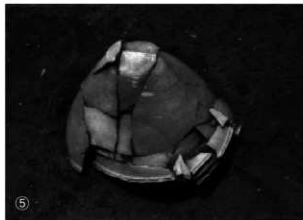
①遺跡近景(東から) ②遺跡近景(南から) ③～⑤1～3号集石遺構



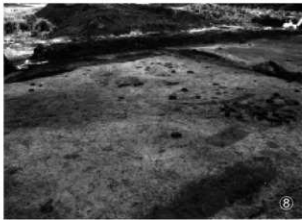
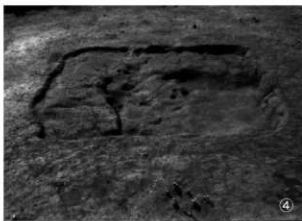
①～④ 4～7号集石遺構 ⑤ 縄文時代晩期集石遺構 ⑥ 1号埋没土器 ⑦・⑧ 2号埋没土器



①～④縄文晩期土器出土状況 ⑤縄文晩期勾玉出土状況  
⑥～⑦縄文晩期石斧出土状況 ⑧縄文晩期石錘出土状況



①・②縄文時代晩期遺物出土状況 ③弥生土器出土状況 ④小児用壺棺検出状況 ⑤小児用壺棺検出状況(上壺)  
⑥小児用壺棺検出状況(下壺) ⑦弥生土器出土状況 ⑧古墳時代蓋形土器出土状況



① 1号住居跡検出状況 ② 1号住居跡遺物出土状況 ③ 1号住居跡土器出土状況 ④ 1号住居跡完掘状況  
⑤ 2号住居跡検出状況 ⑥ 2号住居跡遺物出土状況 ⑦ 2号住居跡完掘状況 ⑧ 3号・4号住居跡検出状況



①



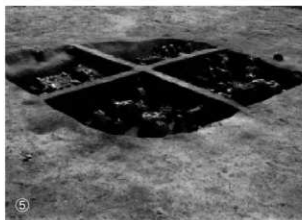
②



③



④



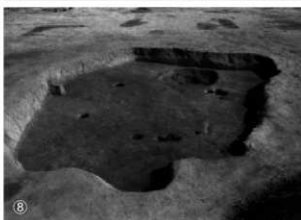
⑤



⑥

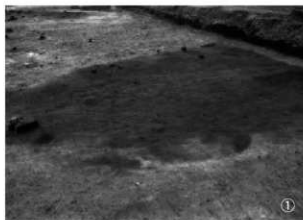


⑦



⑧

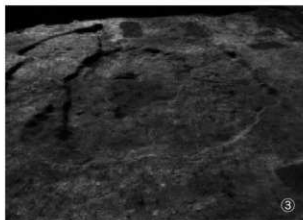
① 3号・4号住居跡遺物出土状況 ② 3号・4号住居跡完掘状況 ③ 3号住居跡土器出土状況 ④ 3号住居跡完掘状況  
⑤ 4号住居跡土器出土状況 ⑥ 4号住居跡完掘状況 ⑦ 5号住居跡土器出土状況 ⑧ 5号住居跡完掘状況



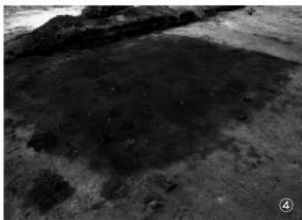
①



②



③



④



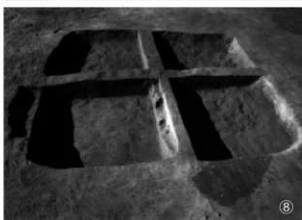
⑤



⑥



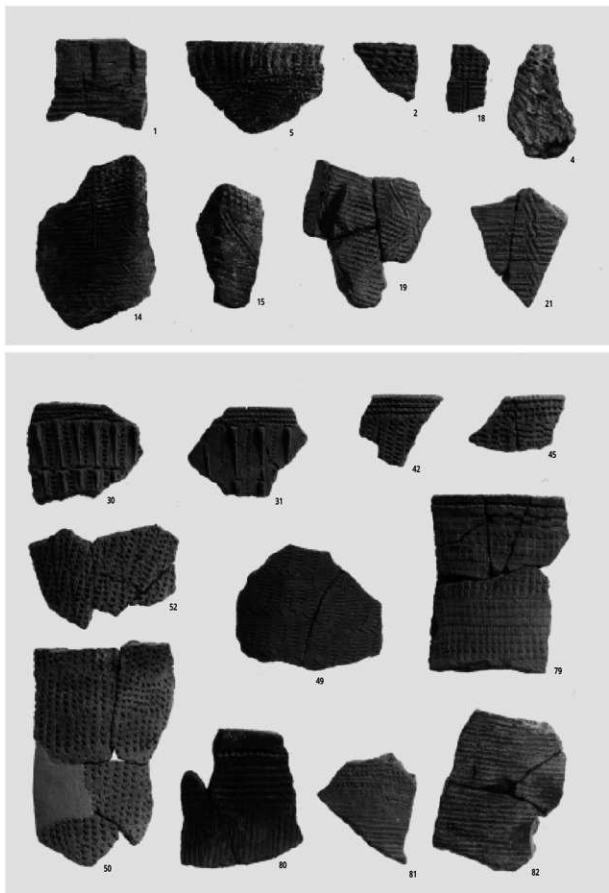
⑦



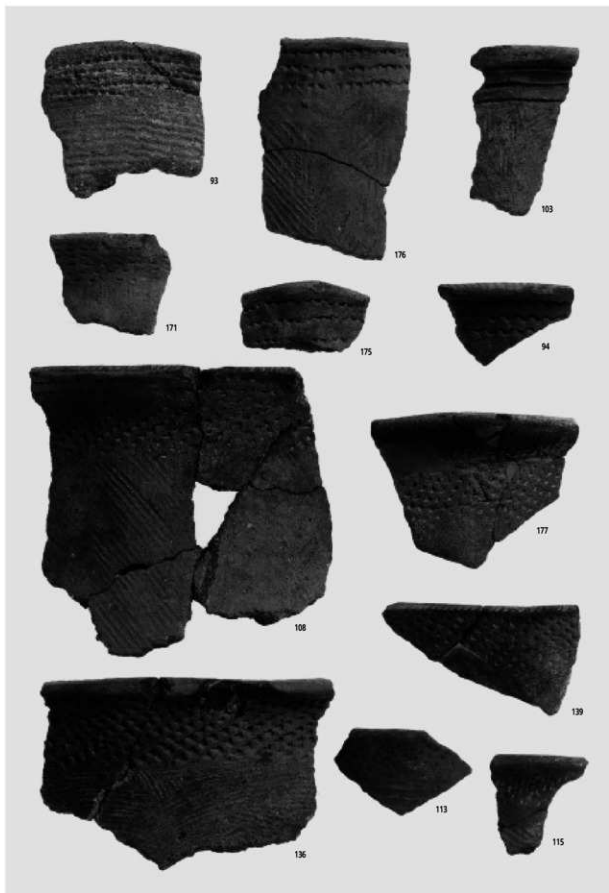
⑧

① 6号住居跡検出状況 ② 6号住居跡遺物出土状況 ③ 6号住居跡完掘状況 ④ 7号住居跡検出状況  
⑤ 7号住居跡土器出土状況 ⑥ 7号住居跡完掘状況 ⑦ 8号住居跡土器出土状況 ⑧ 8号住居跡完掘状況



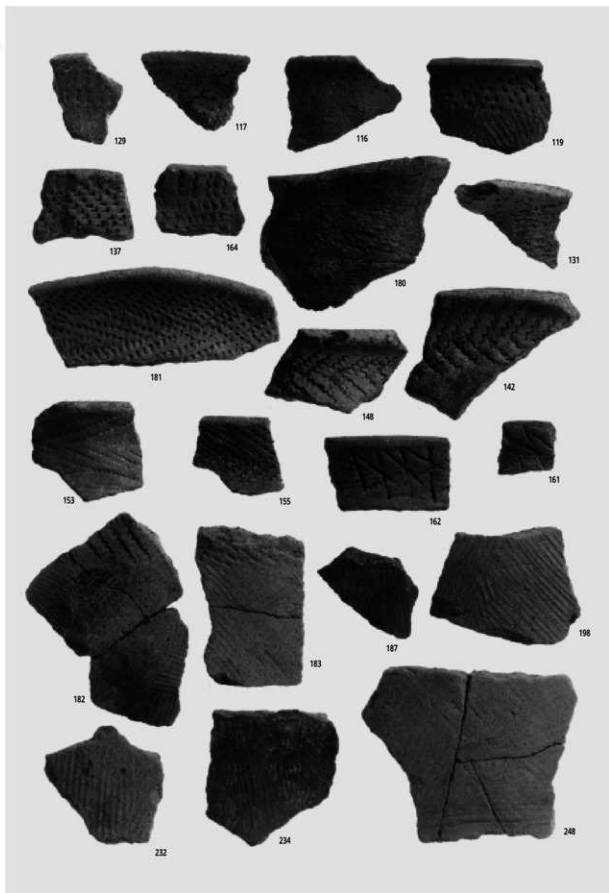


I類・II類・III類土器

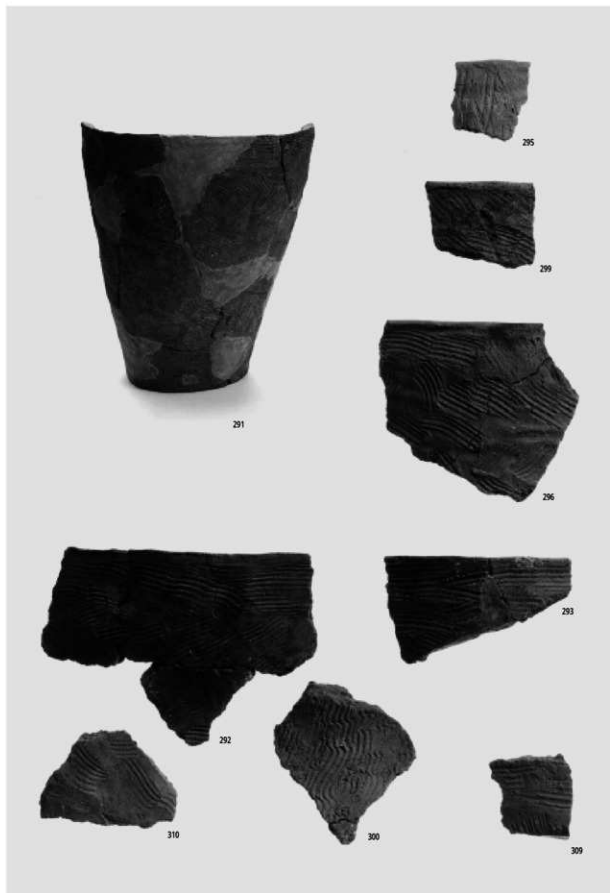


图版 9 IV类土器①

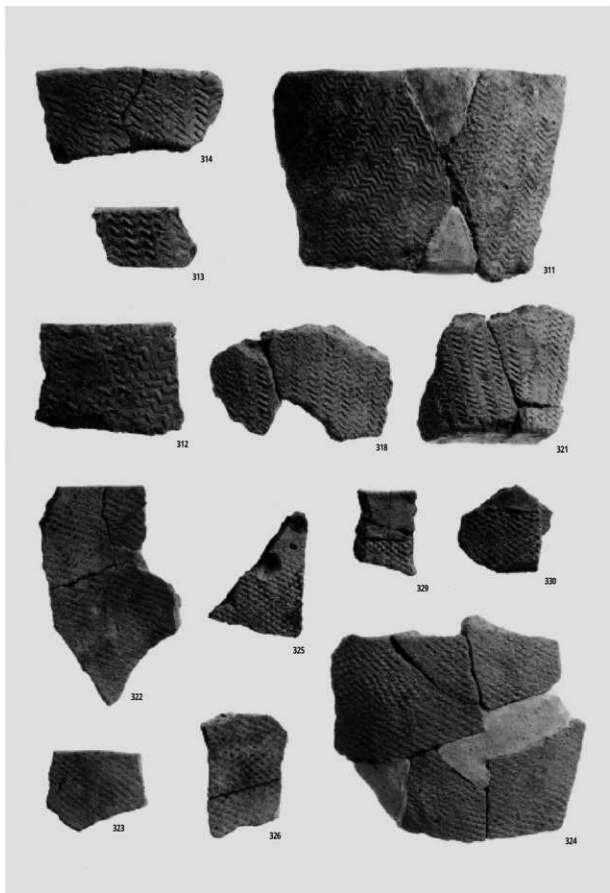
# 写 真 图 版



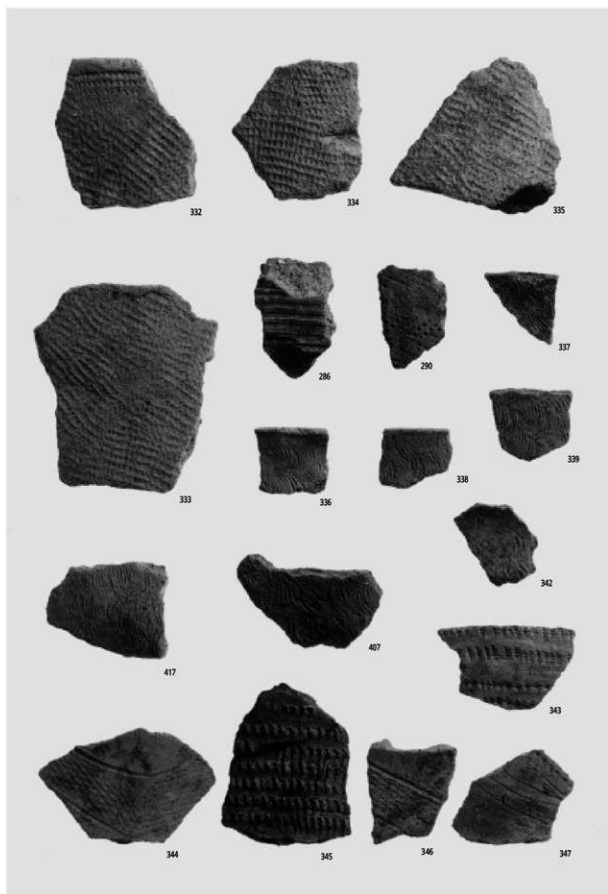
IV类土器②



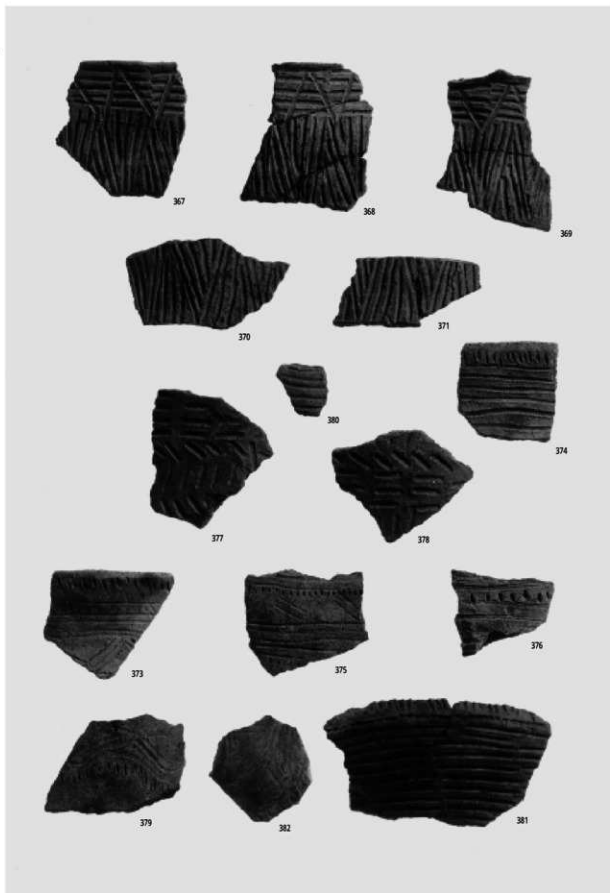
Ⅵ類土器



Ⅳ類土器

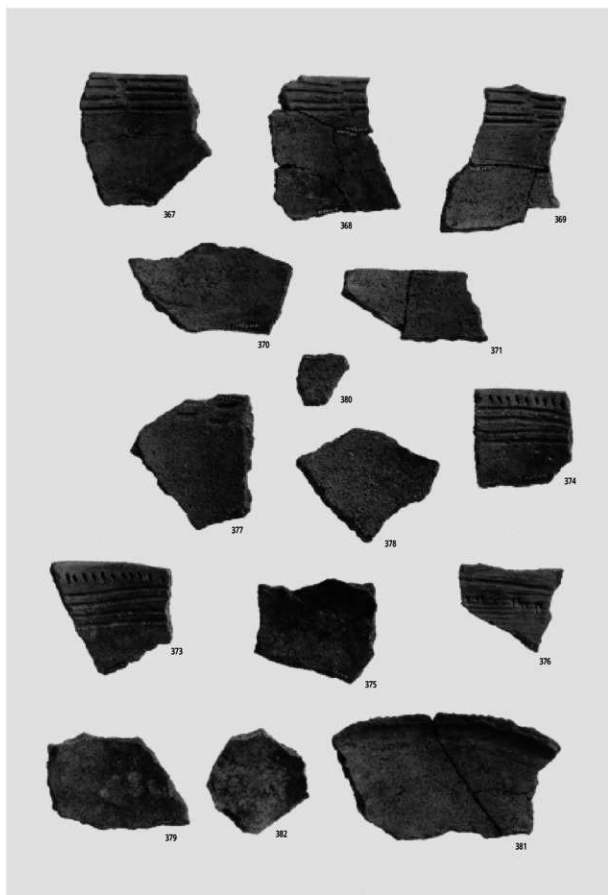


Ⅳ類・Ⅴ類・Ⅵ類・Ⅷ類・Ⅹ類土器

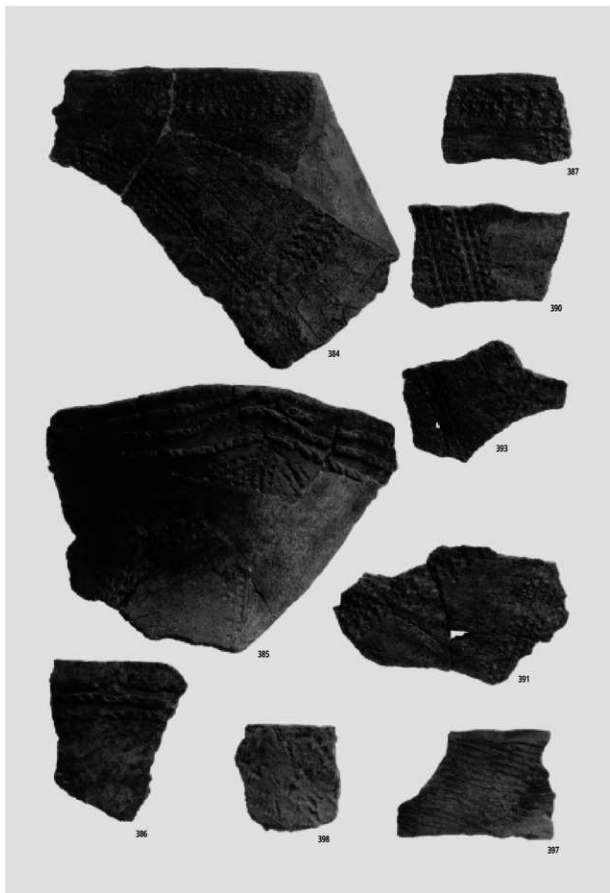


XI 類土器 (表)

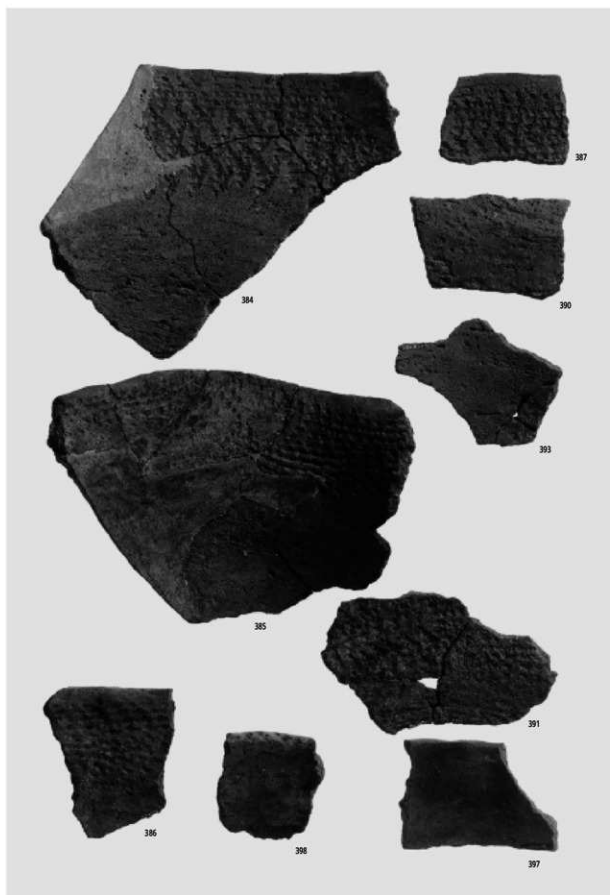




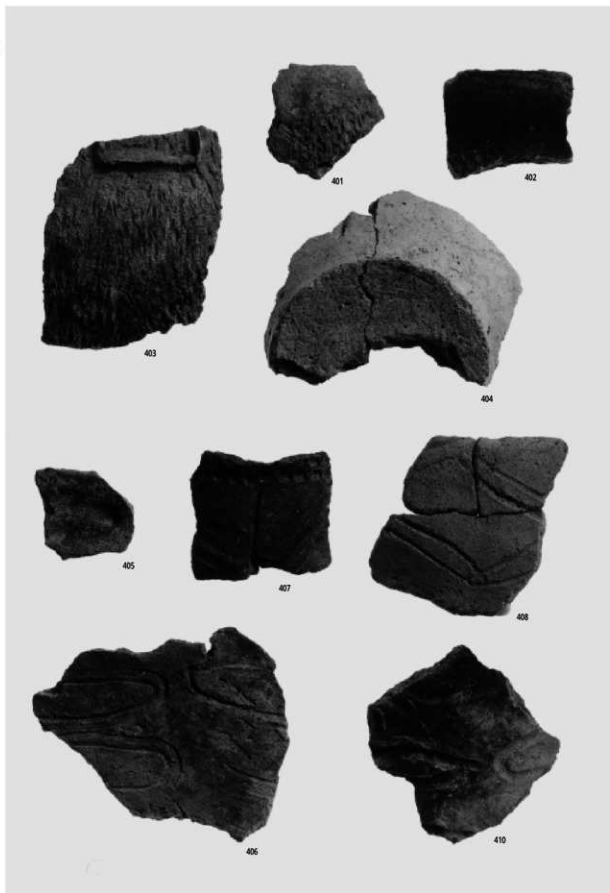
XI類土器（裏）



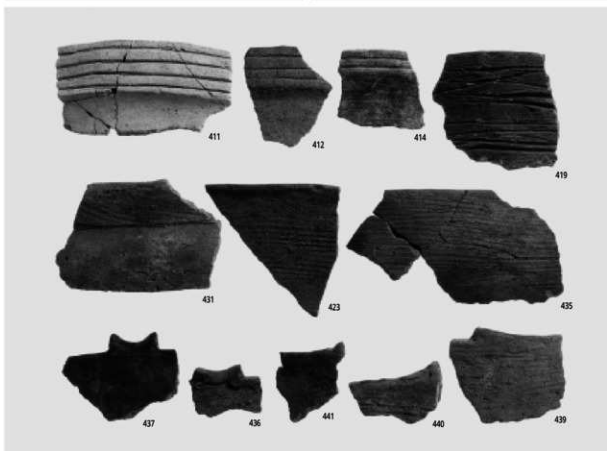
XII類土器（表）



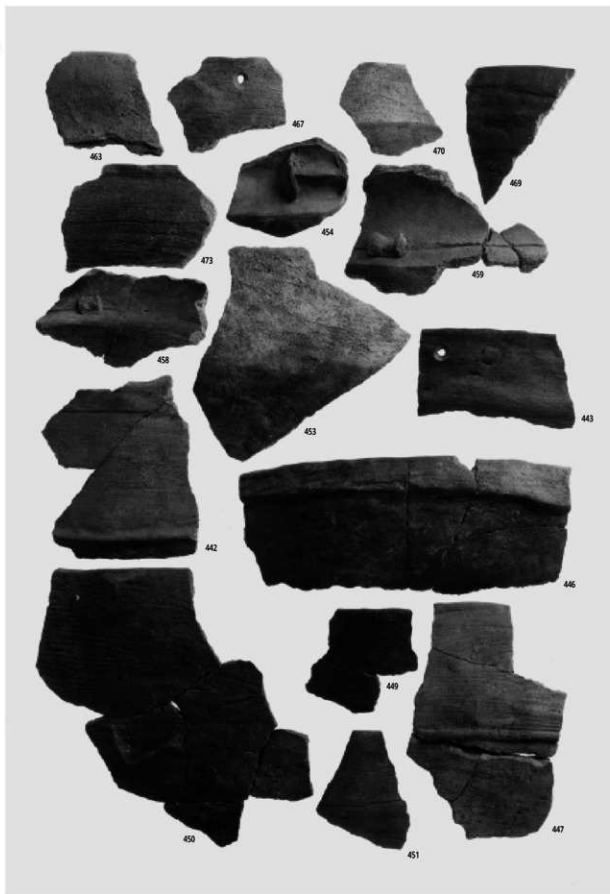
XII類土器（裏）



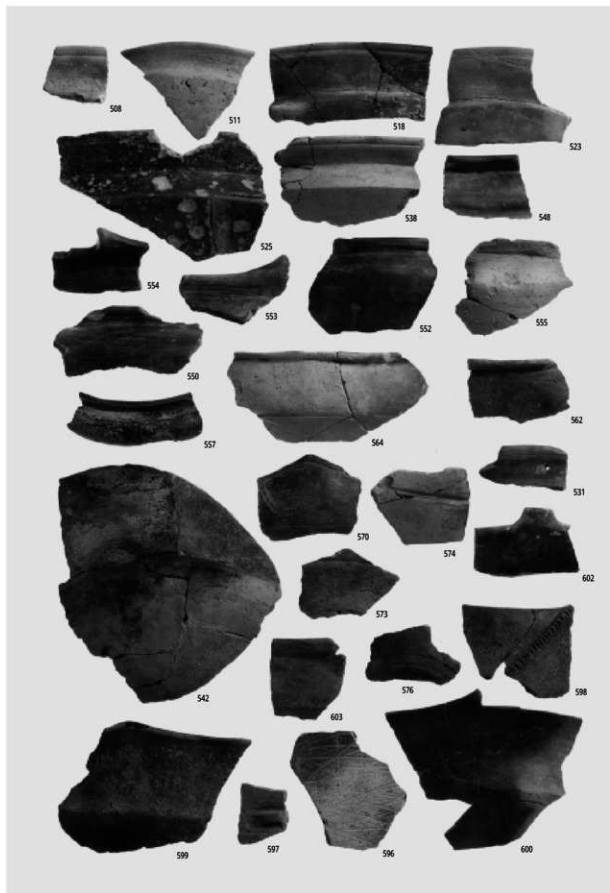
XIII類・XIV類・XV類土器



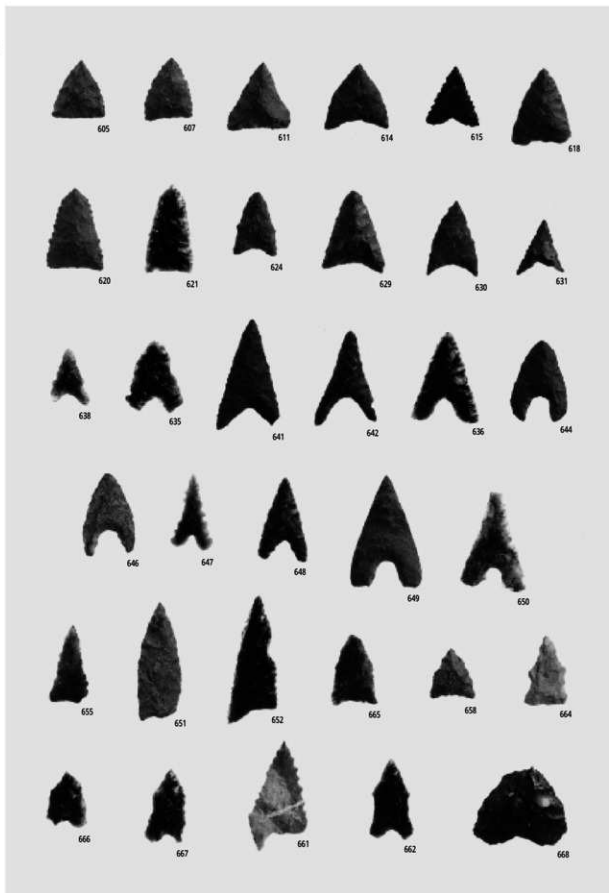
XVI类土器①



XVI類土器②

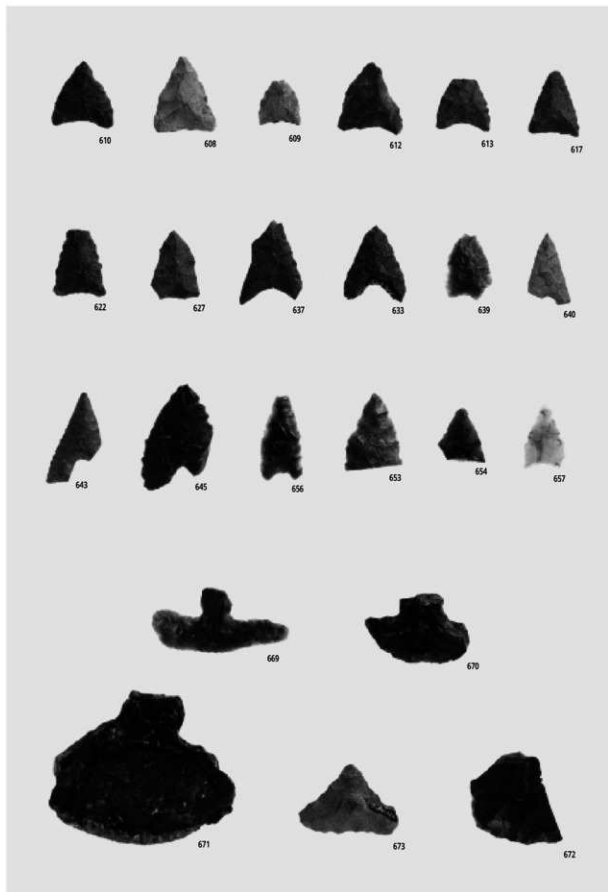


ⅪⅪ类土器③

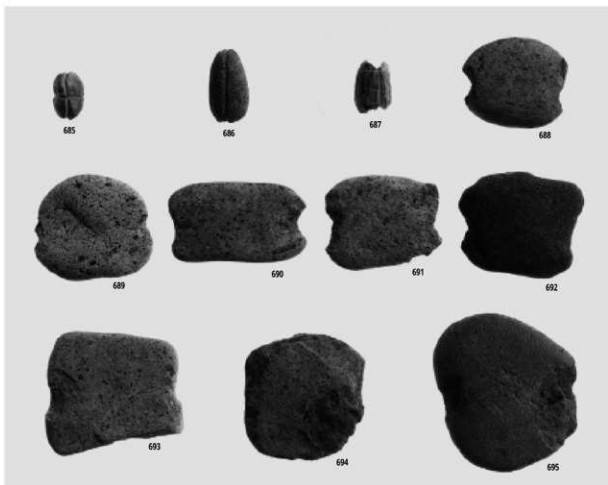
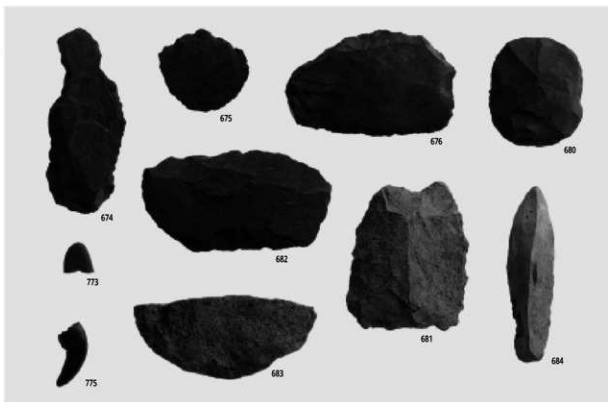


縄文晩期石器①

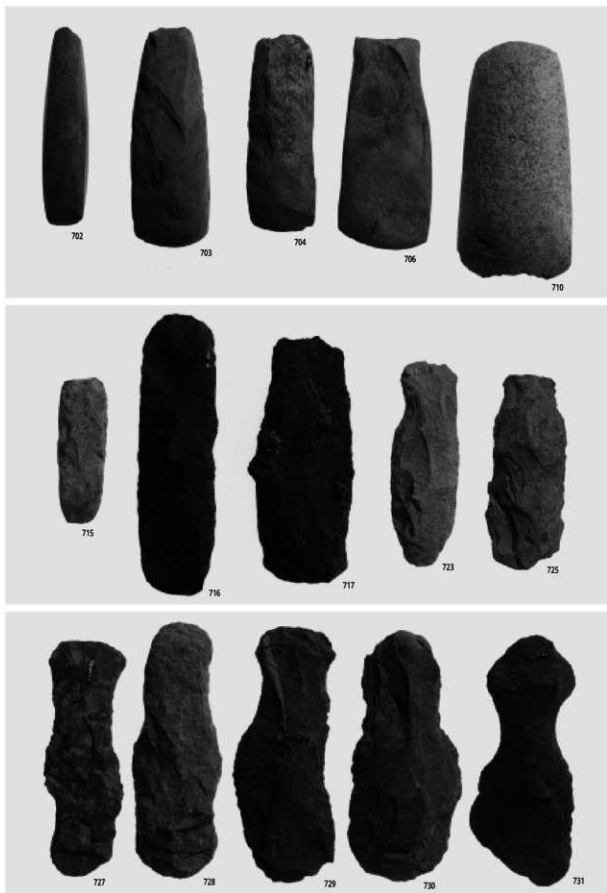




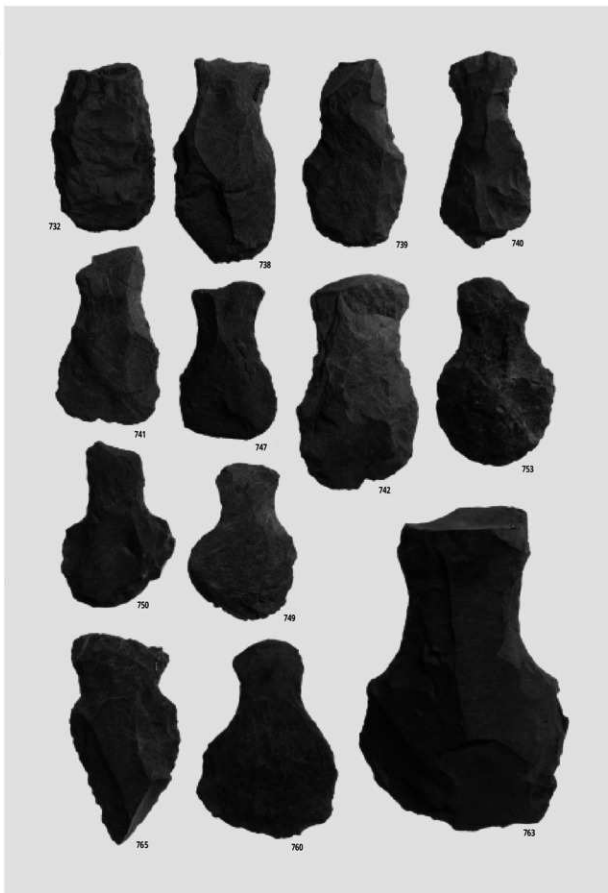
縄文晩期石器②



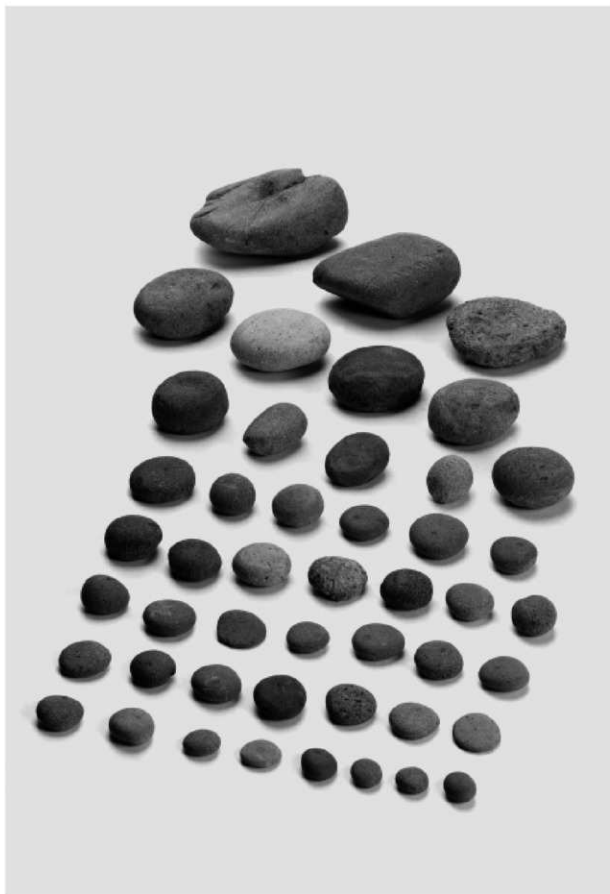
縄文晩期石器③



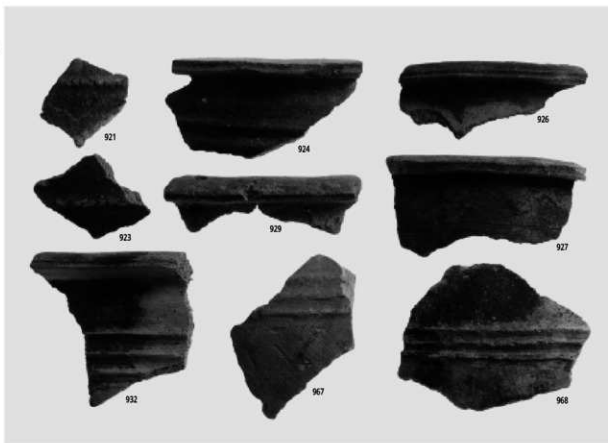
縄文晩期石器④



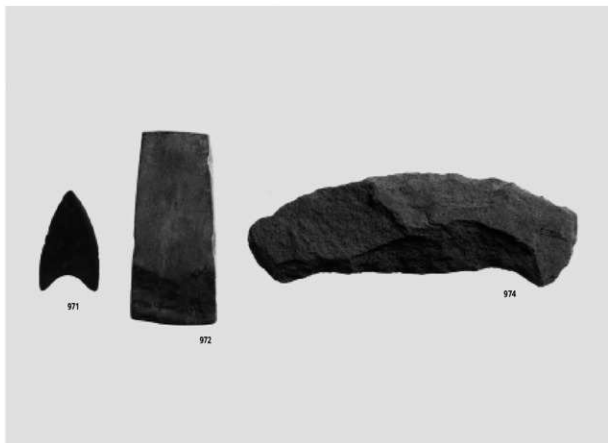
縄文晚期石器⑤



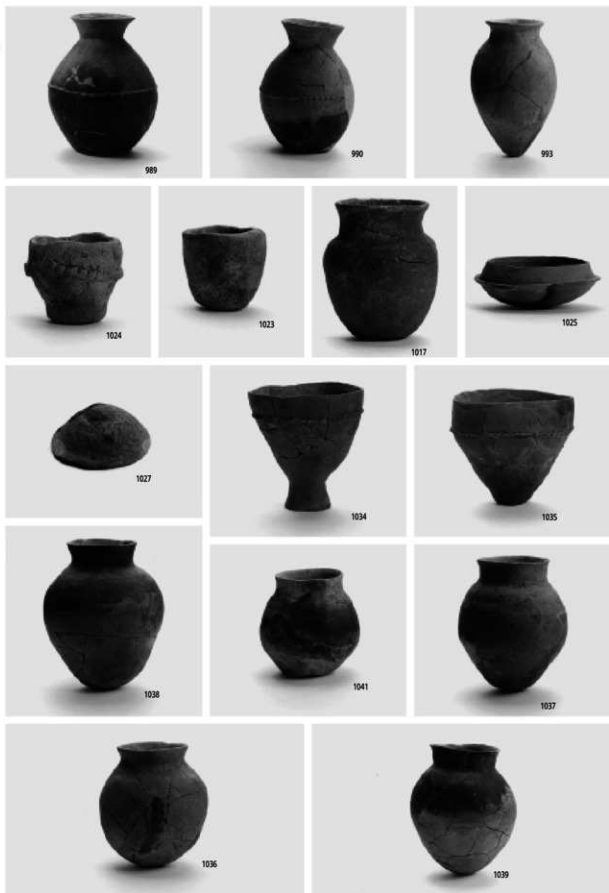
縄文晩期石器⑥



弥生時代土器①



弥生時代土器②・石器



古墳時代住居内出土土器

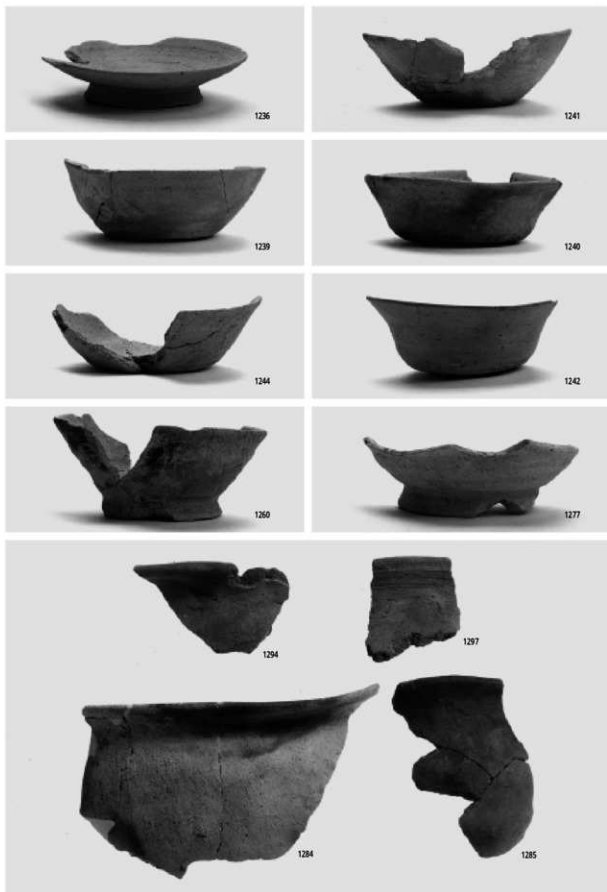




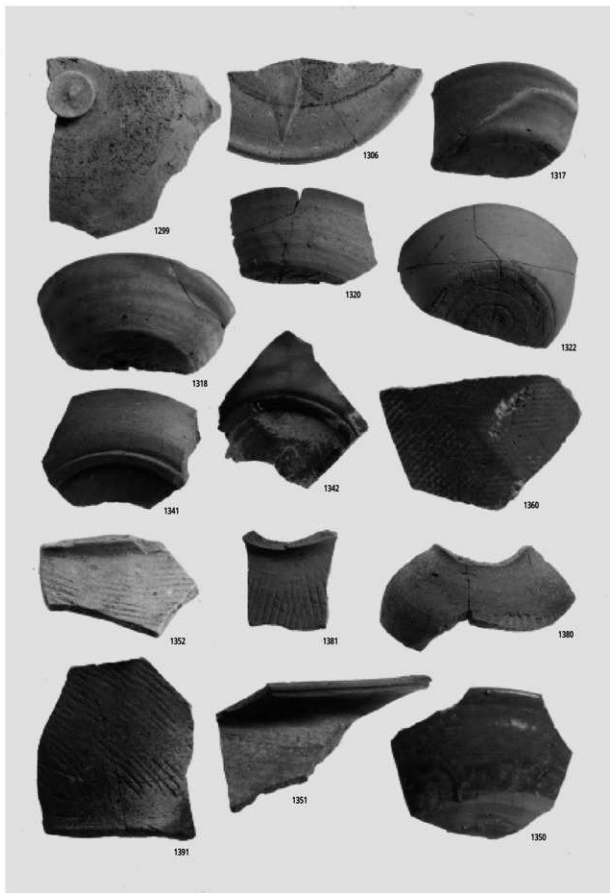
古墳時代住居内出土土器



古墳時代住居内出土土器



古代土師器



古代須惠器

## あ と が き

農業開発総合センター建設に伴う発掘調査報告書も3冊目となりました。今回は、24遺跡の内、南さつま市金峰町にある遺跡の4遺跡目の刊行となりましたが、小児用合口壺棺の出土など注目すべき報告ができたのではないかと思います。調査の成果を十分に報告できていない部分もあるかとは思いますが、この報告書が郷土の歴史を振り返るきっかけになったり研究の端緒となったりすれば幸いです。

最後に、確認調査、本調査等の発掘調査に携わっていただいた南さつま市金峰町、日置市吹上町の多くの皆様、報告書刊行のために整理作業に携わった皆様、執筆に当たり御指導いただきました方々に、深く感謝し御礼申し上げます。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(98)

農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

農業開発総合センター遺跡群

お が はら

尾ヶ原遺跡

発行日 2006年3月

発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒899-4318 霧島市国分上野原縄文の森2番1号  
T E L (0995) 48-5811

印刷所 株式会社あすなる印刷  
〒899-0041 鹿児島市城西2-2-36  
T E L (099) 250-7033